

の うち い せき

野 内 遺 跡 B 地 区

(第1分冊)

2009

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター



調査区遠景（北東から）



平安時代の鍛冶関連遺構（SC18）検出状況（南から）

卷頭図版 2



平安時代の堅穴住居跡・鐵冶関連遺物

序

岐阜県北部の飛騨地方は、縁豊かな自然の恵みを受け、古くから飛騨の匠が築き上げた「木の文化」と、東西文化の影響を受けた「食文化」、「祭り文化」が根付き、独特の文化圏を形成しています。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道建設事業に伴い、高山市上切町に所在する野内遺跡の発掘調査を実施しました。野内遺跡は高山市の市街地から北西方向に位置する、縄文時代から近世までの複合遺跡です。これまで、野内遺跡A地区とD地区の発掘調査報告書が刊行されており、本書は平成14・16・17年度に実施した「野内遺跡B地区」の発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、主に縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴住居跡、奈良時代から平安時代までの竪穴住居跡や鉄鍛冶に関係する遺構などを発見しました。特に平安時代前半には、官衙（公的施設）などが主体となって、当遺跡周辺の窯跡群や条里地割の施工などを含め広域に土地を開発した可能性が高く、とても貴重な発見となりました。本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御指導と御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区的皆様に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人岐阜県教育文化財団
文化財保護センター
所長 梅村 恒男

例言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町野内に所在する野内遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-09624）B 地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターが実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成14・16・17年度に、整理作業は平成18・19年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第1章から第3章を長谷川幸志と小野木学、それ以外を小野木が行った。また、編集は小野木が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観撮影などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 理化学的分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第4章に掲載した。執筆は、株式会社パレオ・ラボによる結果をもとに小野木が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
赤澤徳明、赤塚次郎、井戸誠嗣、牛丸岳彦、加藤万豊、城ヶ谷和宏、下畠五夫、高橋浩二、田中彰、丹羽清吾、早川万年、広瀬和雄、堀木真美子、松本優、山内伸浩、渡邊博人、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。（従来の当遺跡の発掘調査との整合性を考慮し、日本測地系を使用した。）
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2002『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターで保管している。

目次（第1分冊）

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	4
第2章 遺跡の環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	13
第3章 調査の成果	17
第1節 基本層序と調査面	17
第2節 遺構概要	20
第3節 遺物概要	26
第4節 中近世の遺構と遺物	35
第5節 古代の遺構と遺物	43
第6節 古墳時代の遺構と遺物	232
第7節 繩文時代の遺構と遺物	265

報告書抄録

第2分冊 目次

第3章 調査の成果

 遺構全体図分割図、遺構観察表、遺物観察表

第4章 理化学的分析

第5章 総括

参考文献

写真図版

挿図目次

図1 遺跡位置図	2	図45 S B18遺構図	68
図2 野内遺跡の調査地区配置図	2	図46 S B19遺構図（1）	70
図3 調査前現況図及び試掘坑位置図	3	図47 S B19遺構図（2）	71
図4 調査前地形測量図	5	図48 S B20遺構図	72
図5 グリッド設定図	5	図49 S B21遺構図（1）	73
図6 遺跡周辺の地質概略図	11	図50 S B21遺構図（2）	74
図7 遺跡周辺の地形	11	図51 S B21遺構図（3）	75
図8 調査区周辺の地割	12	図52 S B22遺構図	77
図9 周辺遺跡位置図	15	図53 S B23・24遺構図	79
図10 時代別周辺遺跡位置図	16	図54 S B25遺構図	80
図11 基本層序柱状模式図	18	図55 S B26遺構図（1）	82
図12 第2調査面調査範囲	19	図56 S B26遺構図（2）	83
図13 遺構全体図	21	図57 S B27・31遺構図（1）	84
図14 遺構図の表記	24	図58 S B27・31遺構図（2）	85
図15 カマド跡模式図	24	図59 S B27・31遺構図（3）	86
図16 ピット・土坑の形状等分類模式図	25	図60 S B28・32遺構図（1）	88
図17 中近世の主要遺構分布図	35	図61 S B28・32遺構図（2）	89
図18 中近世の遺構	37	図62 S B28・32遺構図（3）	90
図19 出土遺物実測図（中近世：遺構・包含層1）	38	図63 S B28・32遺構図（4）	91
図20 出土遺物実測図（中近世：包含層2）	39	図64 S B29遺構図（1）	92
図21 出土遺物実測図（中近世：包含層3）	40	図65 S B29遺構図（2）	93
図22 出土遺物実測図（中近世：包含層4）	41	図66 S B30遺構図（1）	95
図23 出土遺物実測図（中近世：包含層5）	42	図67 S B30遺構図（2）	96
図24 古代の主要遺構分布図	43	図68 S B30遺構図（3）	97
図25 S B1遺構図（1）	44	図69 S B33遺構図	99
図26 S B1遺構図（2）	45	図70 S B34遺構図	100
図27 S B2・S K289遺構図（1）	46	図71 S B35遺構図（1）	101
図28 S B2・S K289遺構図（2）	47	図72 S B35遺構図（2）	102
図29 S B3・6遺構図（1）	48	図73 S B36遺構図（1）	103
図30 S B3・6遺構図（2）	49	図74 S B36遺構図（2）	104
図31 S B4・12遺構図（1）	51	図75 S B37遺構図（1）	106
図32 S B4・12遺構図（2）	52	図76 S B37遺構図（2）	107
図33 S B5遺構図	53	図77 S B38遺構図	108
図34 S B7遺構図	54	図78 S B39遺構図	109
図35 S B8遺構図	56	図79 S B40遺構図	110
図36 S B9遺構図	57	図80 S B42遺構図	111
図37 S B10・11・S K290・291遺構図（1）	59	図81 S B44遺構図	112
図38 S B10・11・S K290・291遺構図（2）	60	図82 S B45遺構図	114
図39 S B13・S C2遺構図	62	図83 S C1・S U1遺構図	116
図40 S B14遺構図	63	図84 S C3遺構図（1）	118
図41 S B15遺構図（1）	64	図85 S C3遺構図（2）	119
図42 S B15遺構図（2）	65	図86 S C4遺構図	120
図43 S B16遺構図	66	図87 S C5遺構図（1）	121
図44 S B17遺構図	67	図88 S C5遺構図（2）	122
		図89 S C6・7遺構図（1）	123
		図90 S C6・7遺構図（2）	124
		図91 S C8遺構図（1）	125

図92 S C 8 遺構図（2）	126	図138 出土遺物実測図（古代：遺構4）	181
図93 S C 8 遺構図（3）	128	図139 出土遺物実測図（古代：遺構5）	182
図94 S C 9 遺構図（1）	129	図140 出土遺物実測図（古代：遺構6）	183
図95 S C 9 遺構図（2）	130	図141 出土遺物実測図（古代：遺構7）	184
図96 S C 10 遺構図（1）	131	図142 出土遺物実測図（古代：遺構8）	185
図97 S C 10 遺構図（2）	132	図143 出土遺物実測図（古代：遺構9）	186
図98 S C 11 遺構図（1）	133	図144 出土遺物実測図（古代：遺構10）	187
図99 S C 11 遺構図（2）	134	図145 出土遺物実測図（古代：遺構11）	188
図100 S C 12 遺構図	136	図146 出土遺物実測図（古代：遺構12）	189
図101 S C 13 遺構図	137	図147 出土遺物実測図（古代：遺構13）	190
図102 S C 14 遺構図	138	図148 出土遺物実測図（古代：遺構14）	191
図103 S C 15 遺構図	139	図149 出土遺物実測図（古代：遺構15）	192
図104 S C 16 遺構図	140	図150 出土遺物実測図（古代：遺構16）	193
図105 S C 17 遺構図	141	図151 出土遺物実測図（古代：遺構17）	194
図106 S C 18 遺構図	142	図152 出土遺物実測図（古代：遺構18）	195
図107 S C 19 遺構図	144	図153 出土遺物実測図（古代：遺構19）	196
図108 S C 20 遺構図	145	図154 出土遺物実測図（古代：遺構20）	197
図109 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（1）	146	図155 出土遺物実測図（古代：遺構21）	198
図110 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（2）	147	図156 出土遺物実測図（古代：遺構22）	199
図111 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（3）	148	図157 出土遺物実測図（古代：遺構23）	200
図112 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（4）	149	図158 出土遺物実測図（古代：遺構24）	201
図113 溝状造構造構図	150	図159 出土遺物実測図（古代：遺構25）	202
図114 S V 1 遺構図（1）	152	図160 出土遺物実測図（古代：遺構26）	203
図115 S V 1 遺構図（2）	153	図161 出土遺物実測図（古代：遺構27）	204
図116 被熱・焼土堆積遺構（鍛冶炉跡）遺構図（1）	154	図162 出土遺物実測図（古代：遺構28）	205
図117 被熱・焼土堆積遺構（鍛冶炉跡）遺構図（2）	155	図163 出土遺物実測図（古代：遺構29）	206
図118 被熱・焼土堆積遺構（鍛冶炉跡）遺構図（3）	156	図164 出土遺物実測図（古代：遺構30）	207
図119 被熱遺構（焼土）遺構図（1）	157	図165 出土遺物実測図（古代：遺構31）	208
図120 被熱遺構（焼土）遺構図（2）	158	図166 出土遺物実測図（古代：遺構32）	209
図121 土器埋設遺構（P23）	159	図167 出土遺物実測図（古代：遺構33）	210
図122 溝状造構造構図（1）	161	図168 出土遺物実測図（古代：遺構34）	211
図123 溝状造構造構図（2）	162	図169 出土遺物実測図（古代：遺構35）	212
図124 溝状造構造構図（3）	163	図170 出土遺物実測図（古代：遺構36）	213
図125 S K 294 遺構図	165	図171 出土遺物実測図（古代：遺構37）	214
図126 S K 297 遺構図	166	図172 出土遺物実測図（古代：遺構38）	215
図127 S K 298 遺構図（1）	167	図173 出土遺物実測図（古代：遺構39）	216
図128 S K 298 遺構図（2）	168	図174 出土遺物実測図（古代：包含層1）	217
図129 S K 302・303 遺構図	169	図175 出土遺物実測図（古代：包含層2）	218
図130 S K 14 遺構図	171	図176 出土遺物実測図（古代：包含層3）	219
図131 集石・配石土坑遺構図（1）	172	図177 出土遺物実測図（古代：包含層4）	220
図132 集石・配石土坑遺構図（2）	173	図178 出土遺物実測図（古代：包含層5）	221
図133 集石・配石土坑遺構図（3）	174	図179 出土遺物実測図（古代：包含層6）	222
図134 その他の土坑遺構図	175	図180 出土遺物実測図（古代：包含層7）	223
図135 出土遺物実測図（古代：遺構1）	178	図181 出土遺物実測図（古代：包含層8）	224
図136 出土遺物実測図（古代：遺構2）	179	図182 出土遺物実測図（古代：包含層9）	225
図137 出土遺物実測図（古代：遺構3）	180	図183 出土遺物実測図（古代：包含層10）	226
		図184 出土遺物実測図（古代：包含層11）	227
		図185 出土遺物実測図（古代：包含層12）	228
		図186 出土遺物実測図（古代：包含層13）	229

図187 出土遺物実測図（古代：包含層14）	230
図188 出土遺物実測図（古代：包含層15）	231
図189 古墳時代の主要遺構分布図	232
図190 S B46遺構図	233
図191 S B47遺構図	233
図192 S B48遺構図（1）	235
図193 S B48遺構図（2）	236
図194 S B49遺構図（1）	238
図195 S B49遺構図（2）	239
図196 S B50遺構図（1）	240
図197 S B50遺構図（2）	241
図198 S B52遺構図	242
図199 S B53遺構図（1）	243
図200 S B53遺構図（2）	244
図201 S B54遺構図（1）	246
図202 S B54遺構図（2）	247
図203 S B54遺構図（3）	248
図204 S B54遺構図（4）	249
図205 S B55遺構図（1）	250
図206 S B55遺構図（2）	251
図207 S B55遺構図（3）	252
図208 S B56遺構図（1）	253
図209 S B56遺構図（2）	254
図210 S B56遺構図（3）	255
図211 S B57遺構図	256
図212 土坑遺構図	257
図213 出土遺物実測図（古墳：遺構1）	258
図214 出土遺物実測図（古墳：遺構2）	259
図215 出土遺物実測図（古墳：遺構3）	260
図216 出土遺物実測図（古墳：遺構4）	261
図217 出土遺物実測図（古墳：遺構5）	262
図218 出土遺物実測図（古墳：遺構6）	263
図219 出土遺物実測図（古墳：包含層）	264
図220 繩文時代の主要遺構分布図	265
図221 土坑遺構図（1）	266
図222 土坑遺構図（2）	267
図223 土坑遺構図（3）	268
図224 出土遺物実測図（縄文：遺構1）	270
図225 出土遺物実測図（縄文：遺構2）	271
図226 出土遺物実測図（縄文：包含層1）	272
図227 出土遺物実測図（縄文：包含層2）	273
図228 出土遺物実測図（縄文：包含層3）	274

表目次

表1 野内遺跡B地区内及び周辺の試掘確認調査結果	3
表2 調査体制表	9
表3 周辺の遺跡一覧表	14
表4 検出遺構一覧表	20
表5 出土遺物点数一覧表	27
表6 編年対応表	28
表7 須恵器・灰釉陶器等產地別出土点数一覧表	29
表8 石器類器種別出土点数一覧表	30
表9 銅冶関連遺物一覧表（1）	32
表10 銅冶関連遺物一覧表（2）	33

挿入写真目次

写真1 調査前風景	7
写真2 表土掘削風景	7
写真3 包含層掘削風景	7
写真4 遺構掘削風景	7
写真5 測量風景	8
写真6 空中写真撮影風景	8
写真7 水洗選別作業風景	8
写真8 現地説明会風景	8
写真9 調査区周辺の地形と崩積層の範囲	11

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

野内遺跡は高山市上切町に所在する（図1）。今回の発掘調査は、高山市を通過する中部縦貫自動車道建設事業に伴い実施した。

中部縦貫自動車道は、長野県松本市を起点に飛騨・奥美濃・越前地方の山岳地帯を経て、福井県福井市に至る延長約160km（東海北陸自動車道を除く）の自動車専用道路である。全線が開通すると、中央自動車道長野線、東海北陸自動車道、北陸自動車道と連絡して、中部、関東、北陸圏を高速道路で結ぶ広域交通網が整備されることになる。

建設省（現：国土交通省）中部地方整備局は、平成4年から中部縦貫自動車道高山清見道路（丹生川村坊方～清見村夏厩に至る延長約24.7kmの道路）整備事業を開始した。そして、道路建設区域内における埋蔵文化財の有無及び内容等を確認するため、試掘確認調査を岐阜県教育委員会に依頼した。

試掘確認調査は、財團法人岐阜県文化財保護センター（平成15年4月に財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターに改組）が岐阜県から委託されて実施した。試掘確認調査の対象となった範囲は、土師器が表面採集されている与島B地点遺跡や中世城館である三枝城跡に隣接しており、須恵器や灰釉陶器などの遺物が表面採集できる場所である。そのため、調査は古墳時代以降の遺跡の存在を想定し、山裾に広がる平坦地にトレンチを18本設定して実施した（図3）。調査は平成12・13年度の2年間を行い、竪穴住居跡や焼土を多数検出し、須恵器と灰釉陶器を中心とする多数の土器が出土した（表1）。そのうち、トレンチ4出土の須恵器円面鏡や墨書き須恵器、鉄滓等の出土から、当遺跡が古代の一般集落とは異なる様相を呈しているという認識を持った。

以上から、平成13年2月9日及び平成14年2月13日に開催された岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、野内遺跡B地区6,600m²の本発掘調査を行うこととなり、遺跡が広範囲に及ぶため、A地区（3,000m²）、B地区（6,600m²）、C地区（9,000m²）、D地区（5,300m²）に分けて調査を実施することとなった（図2）。このうち、A地区は高山清見道路と交差する一般国道41号高山国府バイパスの建設に伴う調査で、B～D区は中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査である。なお、当遺跡は岐阜県遺跡地図に未登録であったため、岐阜県教育委員会により、野内遺跡（遺跡番号21203-09624）として平成13年6月22日に遺跡地図に登録された。

本書は、平成14・16・17年度に国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受け、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した、野内遺跡B地区6,600m²についての本発掘調査成果の記録である。

2 第1章 調査の経緯

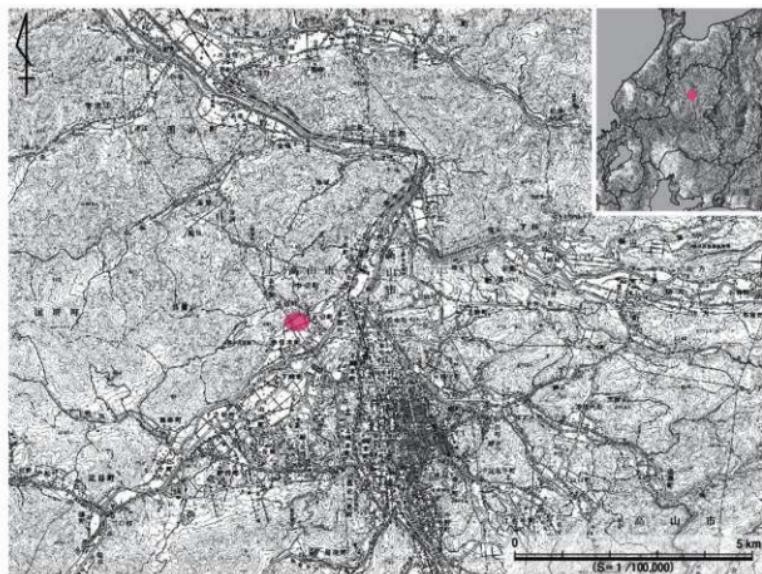


図1 遺跡位置図

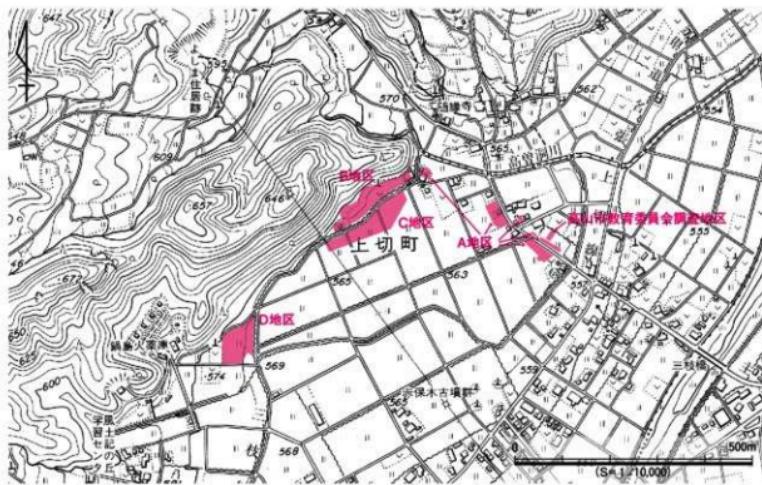


図2 野外遺跡の調査地区配置図

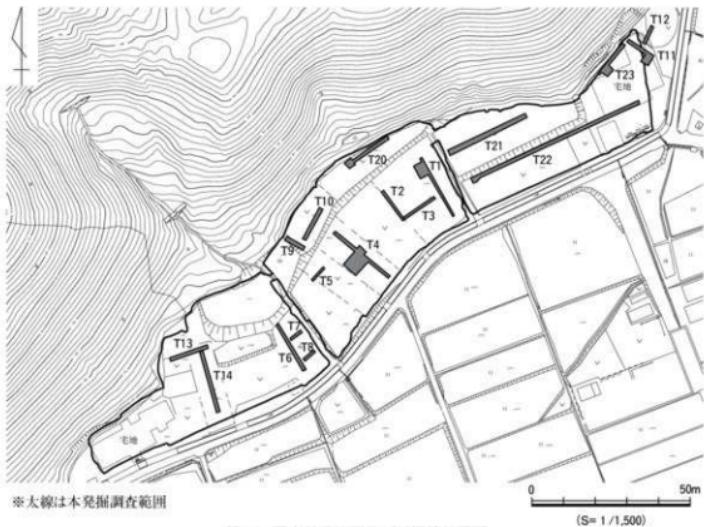


図3 調査前現況図及び試掘坑位置図

表1 野内遺跡B地区内及び周辺の試掘確認調査結果

試掘坑	検出遺構	出土遺物数							
		縄文土器	弥生土師器	須恵器	灰釉陶器	中近世陶磁器	石器	その他	
T1	竪穴住居跡	5	42	187	87	115	9	3	448
T2	—	0	0	17	15	12	1	1	46
T3	焼土	0	3	50	44	20	2	0	119
T4	竪穴住居跡	0	35	317	323	19	0	1	695
T5	—	0	4	46	42	7	0	0	99
T6	—	0	2	32	27	45	0	0	106
T7	—	0	10	33	16	7	0	0	66
T8	—	0	1	9	7	11	0	1	29
T9	—	1	0	5	13	12	0	0	31
T10	—	0	1	30	59	18	0	1	109
T11	—	0	1	1	0	8	0	0	10
T12	—	0	0	1	0	0	0	0	1
T13	焼土、ビット	1	82	80	38	7	1	0	209
T14	竪穴住居跡、焼土	0	57	174	152	15	0	0	398
T20	土坑、ビット	0	0	0	2	0	0	0	2
T21	溝、土坑	0	2	6	1	25	0	0	34
T22	溝、土坑、ビット	0	7	60	2	45	0	0	114
T23	土坑	0	3	6	1	1	0	0	11
合計		7	250	1,054	829	367	13	7	2,527

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本発掘調査は、平成14・16・17年度に行った。調査の基本方針は平成14年度に定め、各年度これを踏襲した。しかし、隨時調査内容の見直しや資料の蓄積による修正を行ったため、年度によっては若干異なる部分もある。

基本方針

今回検出した遺構は複雑に切り合い、検出時と完掘時における形状が大きく変化したため、整理段階で混乱が起きないように遺構の写真記録や平面図作成に時間を要した。また、当遺跡の特徴である被熱・焼土堆積遺構（カマド跡・鍛冶炉跡）等の特殊な遺構の構造や性格を明らかにすることに重点をおいた。

調査地点の設定

本報告では、各年度の調査範囲を地点名で記述し（例：平成14年度調査地点）、平成16年度調査地点については、2箇所の離れた場所を調査したため、それぞれ南地点・北地点と呼称する。

グリッドの設定

野内遺跡調査地全体の位置関係を把握するため、B・C・D地区のすべてに共通した1辺10mのグリッドを設定した。座標は日本測地系第VII系を用いて、B地点の北東に当たるX=18,140、Y=5,990を原点とした。なお、平成14年4月1日に測量法改正が行われ世界測地系が測量の基準となったが、平成14年度調査の段階で日本測地系を使用したため、その後の調査でもこれを踏襲した（本報告書では、注意書きがない場合の数値は日本測地系の座標値を示す）。グリッド名は、南北列を北からア・イ・ウ…、東西列を東から1・2・3…の順に命名し、その組み合わせを名称とした。したがって原点のあるグリッドの名称はア1となる（図5）。

表土掘削

表土掘削は、原則としてバックホーで行った。当地区は現況地形が削平と盛土によって階段状に造成されており（図4）、遺物包含層（以下「包含層」という。）であるⅡ層が残存していない地点も見られた。そのため、Ⅱ層が存在しない場所は、遺構確認面の直上付近までバックホーによる掘削を行った。また範囲が明らかで大規模な搅乱も、遺構確認面を破壊しないよう慎重にバックホーによって掘削した。なお、包含層が遺構確認面上に残った状態で被熱・焼土堆積遺構が確認できる場合があり、当時の生活面が遺構確認面より高い位置にあった可能性がある。

包含層掘削・遺構調査

包含層掘削、遺構検出、遺構掘削はジョレン・ねじり鏝等を用いて人力により行った。遺構掘削は、遺物の出土状況等の記録を写真と図面で作成し、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。記録写真は35mmカメラ、中判カメラ、デジタルカメラで撮影した。遺構番号は検出順の通番とし、二次整理作業時に遺構種別ごとに振り替えた。

遺構平面図・断面図等作成

平成14・16年度は手実測、平成17年度は三次元測量・図化システムによる作図を行ったが、平成17



図4 調査前地形測量図

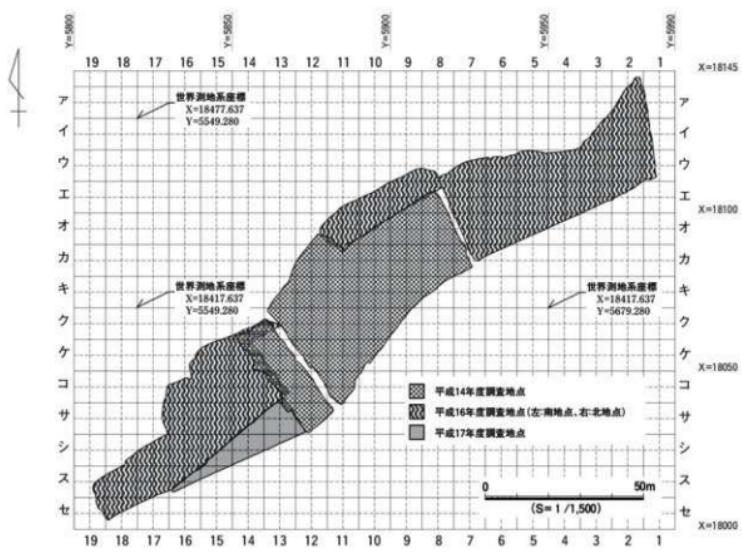


図5 グリッド設定図

年度の断面図はすべて手実測である。断面図は、切り合ひがなく埋土が単層のピットを除いてすべて作図した。図面の縮尺は20分の1を基本とし、図化内容に応じて10～50分の1で作図した。

調査区全体図

平成14・16年度は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量によって図化を行った。平成17年度は、三次元測量・図化システムによって作図し、平成14年度・16年度の図と合成した。なお、平成17年度にもラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行ったが、景観撮影のみである。

遺物取上げ

取上げ方法は、調査精度や作業効率を勘案し、年度によって若干変更を行った。基本的には1辺10mのグリッドを四分割して一辺5mの小グリッドを設定し、北東→NE、北西→NW、南東→SE、南西→SWの名称を与えて（例 A1 NW）、遺物取上げの基準とした。平成14年度は包含層出土遺物の密度が低いグリッドにおいては10mグリッドを用い、それ以外については上記の5mグリッドを基準に取上げた。遺構出土遺物は、遺構ごとに取上げを行い、竪穴状遺構・溝などの大型の遺構については、適宜遺構内を分割し取り上げを行った。また、調査員が重要と判断した遺物のみ、トータルステーションによる三次元座標の測定を行った。平成16年度は、包含層出土遺物について5mグリッドを基準に遺物取上げを行い、遺構出土遺物については、複雑な遺構の切り合ひに対応するため、全出土遺物の三次元座標の測定を行った。平成17年度は、包含層出土遺物について前年度と同様に行つたが、遺構出土遺物については、平成14年度の方法とした。

遺物の取上層位は、包含層は基本層序、遺構内は遺構埋土断面で確認した層序を基本として取り上げた。

2 調査経過

現地での調査経過は以下のとおりである。

平成14年度

第1週（5/10） 表土掘削開始。

第2週（5/13～5/17） 作業員作業開始。表土掘削終了。

第3週（5/20～5/24） 包含層掘削・遺構検出開始。

第4週（5/27～5/31） 8～13列の包含層掘削。須恵器が多数出土。

第5週（6/3～6/7） SB 4 検出。

第6週（6/10～6/14） 略測図作成開始。

第7週（6/17～6/21） SB 2・3・5・6 検出。

第8週（6/24～6/28） 26日：飛驒子供相談センター所長下畠五夫氏による地質に関する指導。

第9週（7/1～7/5） SB 9、SK 290 検出。

第10週（7/8～7/12） SB 5 掘削開始。

第11週（7/15～7/19） SB 2・3 掘削開始。台風により調査区壁面の一部が崩落。

第12週（7/22～7/26） SK 289から鉄製品出土。

第13週（7/29～8/2） SB 2・8 など完掘。

第14週（8/5～8/9） 7日：タイムスリップ探検隊を開催。

第15週（8/12～8/16） 夏季休暇。

第16週（8/19～8/23） 21日：三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導。SC 1 検出。

第17週（8/26～8/30）S B14完掘。包含層から縁釉陶器片出土。

第18週（9/2～9/6）S B1・15床面精査。S K70検出。

第19週（9/9～9/13）S C1・5掘削開始。

第20週（9/16～9/20）S K14掘削開始。灰釉陶器出土。

第21週（9/23～9/27）S K14底面まで掘削終了。

第22週（9/30～10/4）S B6、S C6掘削開始。

第23週（10/7～10/12）S C5から鉄滓が出土。空中写真測量実施。12日：現地説明会開催（参加者120名）。

第24週（10/15～10/18）柱穴の断削り開始。カマド跡の掘削開始。下層面の試掘調査を開始。

第25週（10/21～10/25）S F13断削り作業開始。

第26週（10/28～11/1）S B12から鍛冶関連遺物が出土。

第27週（11/4～11/8）下層面の遺構を確認した箇所周辺（約600m²）の調査開始。

第28週（11/11～11/15）下層面遺構掘削開始。S B2カマド跡調査開始。

第29週（11/18～11/22）西側の埋め戻し開始。熱残留磁気測定のサンプルを採取。下層面遺構調査終了。

第30週（11/25～11/29）水洗選別作業開始。

第31週（12/2～12/6）6日：発掘調査作業終了。

平成16年度

第1週（5/11～5/14）表土掘削開始。焼土等を確認。

第2週（5/17～5/21）南地点表土掘削終了。北地点表土掘削開始。作業員作業開始。

第3週（5/24～5/28）排水溝掘削。調査区西側から遺構検出作業開始。

第4週（5/31～6/4）北地点表土掘削終了。

第5週（6/7～6/11）シ16グリッドで竪穴住居跡検出。

第6週（6/14～6/18）遺構検出が進み、遺構が複雑に切り合うことが判明。

第7週（6/21～6/25）遺構掘削開始。

第8週（6/28～7/2）S K104等の土坑を掘削。



写真1 調査前風景



写真2 表土掘削風景



写真3 包含層掘削風景



写真4 遺構掘削風景

- 第9週（7/5～7/9）鍛冶関連遺構埋土の水洗選別を開始。遺構検出終了。
- 第10週（7/12～7/16）S16・17グリッド付近で弥生～古墳時代の遺物包含層を確認。
- 第11週（7/20～7/23）S B49から炭化材や完形に近い土師器が出土。
- 第12週（7/26～7/30）S C12中央付近から粘土を伴う焼土を検出。
- 第13週（8/2～8/6）一次整理作業開始。6日：三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導。
- 第14週（8/9～8/13）夏季休暇。
- 第15週（8/16～8/20）S C 8 から灰釉陶器や炭化材が出土。
- 第16週（8/23～8/27）北地点調査準備開始。
- 第17週（8/30～9/3）北地点排水溝掘削。調査地点西側から遺構検出作業開始。
- 第18週（9/6～9/10）S B48から磨製石斧出土。
- 第19週（9/13～9/17）S C12、S K18掘削開始。縄文時代の土坑である S K265・266を検出。
- 第20週（9/21～9/24）北地点の掘削作業継続。
- 第21週（9/27～10/1）S B50から弥生時代後期の赤彩高杯出土。
- 第22週（10/4～10/8）S B52にてコの字状の配石をもつ埋跡検出。
- 第23週（10/11～10/15）ウ3グリッドから管玉と陶製紡錘車が出土。S C 8 から灰釉陶器が多数出土。
- 第24週（10/18～10/22）18日：三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導。
- 第25週（10/25～10/29）南地点遺構掘削ほぼ終了。S B31から鉄製の鎌先が出土。
- 第26週（11/1～11/5）S B28周辺に複数の方形遺構が重複することを確認。
- 第27週（11/8～11/13）S C16から鐵滓が出土。S B54埋土から鐵滓が多数出土。
13日：現地説明会開催（参加者148名）。
- 第28週（11/15～11/19）S K162から骨片が出土。



写真5 測量風景



写真6 空中写真撮影風景



写真7 水洗選別作業風景



写真8 現地説明会風景

第29週（11/22～11/26）S B55から石製鍤錘車出土。

第30週（11/29～12/3）空中写真測量（1回目）。

第31週（12/6～12/10）下層遺構面検出開始。地磁気年代測定、AMS測定のサンプル採取。

第32週（12/13～12/17）空中写真測量（2回目）。17日：発掘調査作業終了。

平成17年度

第1週（5/6） 表土掘削開始。

第2週（5/9～5/13）作業員作業開始。

第3週（5/16～5/20）S C20検出。遺構掘削開始。

第4週（5/23～5/27）調査区中央付近の竪穴状遺構群検出開始。

第5週（5/30～6/3）S C21から鐵滓出土。

第6週（6/6～6/10）遺構検出ほぼ終了。

第7週（6/13～6/17）S C21から刀子出土。S B37埋土上層から炭化材出土。

第8週（6/20～6/24）S B57床面付近から高杯等出土。

第9週（6/27～7/1）S B45掘削開始。雨天中止の日が続く。

第10週（7/4～7/8）ラジコンヘリコプターによる景観写真撮影。

第11週（7/11～7/15）S B35カマド跡の作り替え状況を確認。S B38カマド跡の粘土袖、立柱石を確認。

第12週（7/19～7/22）S B48掘削開始。

第13週（7/25～7/29）S B48床面の土坑からほぼ完形の土師器甕が出土。

第14週（8/1～8/5）S B48の床面除去。

第15週（8/8） 8日：発掘調査作業終了。

3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、以下のとおりである。

表2 調査体制表

職名	平成14年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
理事長	服部卓郎	日比治男	日比治男	高木正弘	—
副理事長	—	高橋宏之 平光明彦	高橋宏之 平光明彦	伊藤克己 高橋宏之	伊藤克己（兼 理事長職務 代理者） 岩田重信
専務理事兼事務局長	成戸宏二	—	—	—	—
常務理事兼センター所長	—	福田安昭	田口久之	田口久之	田口久之
常務理事兼経営（総務）部長	福田安昭	—	—	—	—
経営部次長兼経営課長	上原真昭	—	—	—	—
経営（総務）課長	—	川瀬崇敏	川瀬崇敏	後藤 智	加藤美好
調査部長	武藤貞昭	川部 誠	川部 誠	川部 誠	北村厚史
飛騨出張所長（発掘担当）	上原真昭	小谷和彦	小谷和彦	—	—
調査課長（整理担当）	—	—	—	近藤 聰	谷村和男
担当調査員	小瀬忠司 竹本哲行	長谷川幸志 岡崎敏彦	長谷川幸志	長谷川幸志	小野木学
整理作業員	今尾さち子、岩田のり子、浦田日登美、加納加代子、知本俊美、 丹羽 香、林 浩美、萩下賀代子、山下恭子				

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

野内遺跡B地区は高山盆地の北西部にあり、見量山から東に連なる丘陵の南側緩斜面に立地している。この丘陵は通称「古城山」と呼ばれ、その頂部には戦国時代の山城である三枝城跡がある。また、当遺跡の南側には川上川が、東側には高曾洞川がそれぞれ流れ、両河川に囲まれた場所には河岸段丘が広がる（図7）。川上川は高山市の中西にある標高1,000m強の山中から流れ出し、高山盆地を北流する宮川と合流する。一方、高曾洞川は高山市と高山市国府町の境にある寿美峰付近から流れ出し、当遺跡の東側で川上川と合流する。なお、この付近は川上川とほぼ平行する活断層が多く、当遺跡の西側にも牧ヶ洞断層がある（図6）。

野内遺跡B地区付近は小規模な崖錐（急斜面上の風化岩屑が落下し堆積した円錐状の地形）・崩積地であり（図6）、今回の調査でも調査区全体で崩積性堆積物を確認した。この堆積物の供給源は、主に調査区の北側丘陵にある谷地形からである（写真9）。この丘陵は見量山から連続する濃飛流紋岩を基盤とし、遺跡で見られる角礫の多くがこの石である¹⁾。一方、高曾洞川を挟んで東側に位置する三枝山の地層は、疊岩、砂岩、凝灰岩、石灰岩、粘板岩、結晶片岩などから成る飛騨外縁帶の一部を形成し、見量山とは地質が大きく異なっている。なお、近年まで、この付近では石灰岩を石灰の原料として採掘し、耕作地の肥料として使用していた²⁾。

崩積地の南側は川上川のはん濫によって形成された河岸段丘が広がる。川上川周辺の字名には流田、砂田、砂畠、石原、川原など、川のはん濫に起因する地名が多いことから、川上川が頻繁に洪水を繰り返していたことが分かる。その堆積層はほとんどが砂や礫であるが、なかにはシルトや粘土もみられる。現況では、上位面と下位面の河岸段丘が認められ（図7）、その境には段丘崖がある。また、上位段丘の縁辺部に赤保木古墳群や野内遺跡A地区が位置する。

野内遺跡B地区付近の明治年間の地割（図8）をみると、丘陵（地籍図で示した山林）の南側に東西方向に長く延びる地割の乱れが看取できる。この付近の水田は、現代でもトラクターが埋まって動けなくなるほどの沼田であり、平成17・18年度の発掘調査では、水田層の下に泥炭や粘土が幾層にも堆積していることを確認した。そのため、この地割の乱れは、過去に流れている丘陵裾の小河川、川上川の流路変更に伴って生じた沼地、丘陵に降り注いだ雨水が丘陵裾で湧き出すことによって形成された沼地などの可能性が考えられ、上位段丘面上においても湿地性堆積物が広域に展開していたといえる。

1) 本文中の「角礫」と表記した石の大半は濃飛流紋岩である。また、土層の注記で「砂礫」と表記した小粒は、濃飛流紋岩が風化する過程で形成されたものと考えられる。

2) 下畑五夫2000「第1章 上枝村の風土」「上枝村史」



写真9 調査区周辺の地形と崩積層の範囲

図6 遺跡周辺の地質概略図
(下畠五夫2000を一部改変)図7 遺跡周辺の地形
(S=1/25,000 国土地理院発行「飛騨古川」「三日町」)

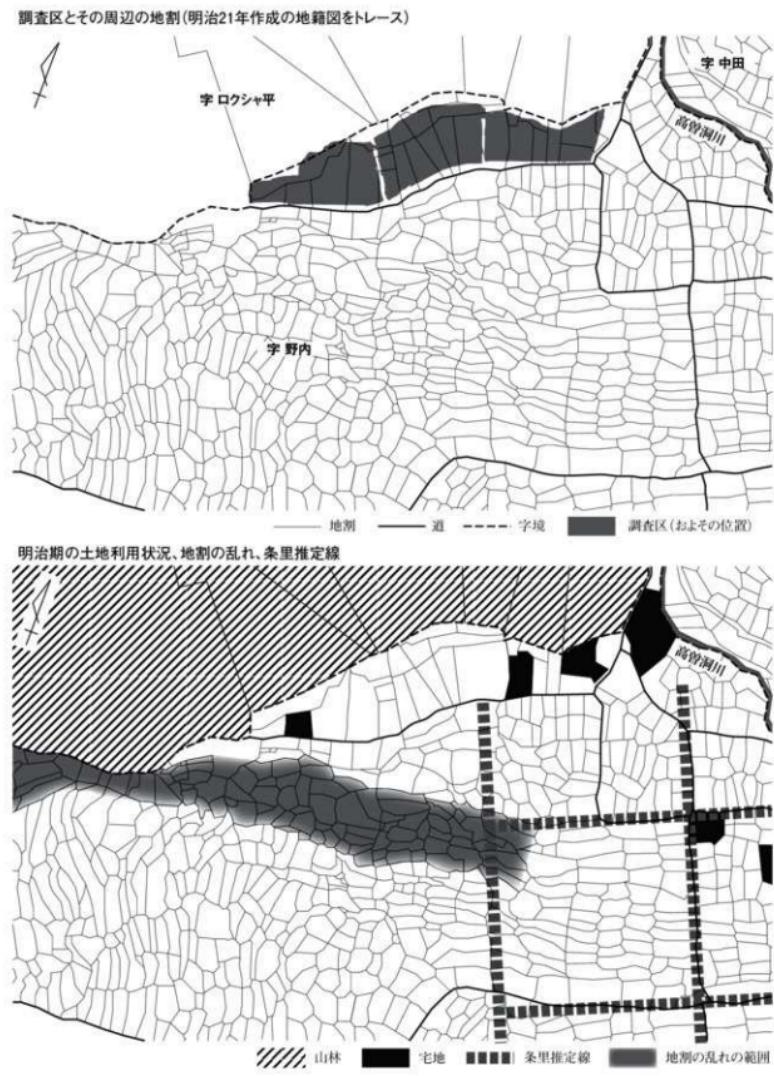


図8 調査区周辺の地割

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には見量山と三枝山の南斜面を中心に多数の遺跡が分布している¹⁾。図9の範囲内で示した時代ごとの遺跡数は、旧石器時代：0、縄文時代：25、弥生時代：12、古墳時代：35、古代：32、中世：8、近世：3であり、縄文時代と古墳時代、古代の遺跡が多い。

以下に、時代ごとに主な遺跡の概要を記す。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表3、図9と一致し、時代ごとの遺跡分布は図10に示した。

縄文時代 縄文時代の遺跡は山頂や山麓を中心に分布する。中切上野遺跡（13）は平成8年度に高市教育委員会（以下、市教育委員会と記載する）が本発掘調査を実施し、早期の集石構2基、前期の竪穴住居跡15軒を検出した。平野遺跡（40）は平成7年度に市教育委員会が範囲確認調査を実施し、中期後半の土器が出土した。赤保木遺跡（51）は平成3年度に市教育委員会が、平成16年度に財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター（以下、県センターと記載する）が本発掘調査を実施し、中期中葉から後葉の竪穴住居跡26軒を検出した。出土遺物は、信州、北陸、東海、関西などの影響を受けた土器があり、土偶やミニチュア土器は住居の廐棄儀礼に関係すると推定されている。前平山稜遺跡（84）は平成2～3年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、晚期の壺棺や異形部分磨製石器、局部磨製石器、石錘等が出土した。中山繩文遺跡（89）は平成7年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、中期の竪穴住居跡2軒と土坑16基を検出した。このように、当遺跡周辺では前期から中期にかけての集落跡が分布している。

弥生時代 弥生時代の遺跡の調査事例は少ない。赤保木遺跡（51）では、中期の竪穴住居跡4軒や掘立柱建物跡を検出し、貝田町式系の横羽状沈線文を有する土器や千曲川系の波状文を有する土器が出土した。

古墳時代 古墳時代には弥生時代に遺跡分布が少ない見量山南東の緩斜面と、宮川と川上川との合流点付近にまとまって遺跡分布が認められる。集落遺跡の調査例は少ないが、赤保木遺跡（51）では前期から中期の竪穴住居跡5軒を検出し、東海系や北陸系の土器が出土した。また、野内遺跡A地区（1）では平成15年度に本発掘調査を実施し、中期の竪穴建物跡を多数検出した。一方、古墳の調査事例は比較的多い。赤保木ほか上古墳群（23）のうち、5号古墳は平成4年度に市教育委員会が範囲確認調査を実施し、埋葬施設が竪穴式石室と箱式石棺であることが判明し、鐵劍などが出土した。与島3・4・6号古墳（31・32・34）は平成9年度に県センターが本発掘調査を実施し、いずれも横穴式石室を有する7世紀中葉の円墳であることが判明した。冬頭王塚古墳（60）は昭和45年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、2段築成の円墳であることが判明した。埋葬施設は川原石積みの竪穴式石室2基で、内部より直刀や素文鏡などが出土した。冬頭山崎2号古墳（63）は平成10年度に県センターが本発掘調査を実施し、竪穴式石室から金銅製の刀装具をもつ鉄劍が出土した。

古代 古代には、古墳時代と同様に見量山と三枝山の南斜面に展開する遺跡群と、宮川流域に展開する遺跡群がある。飛騨国分尼寺跡（78）は昭和63年度に市教育委員会が範囲確認調査を実施し、正面幅110尺（32.78m）、奥行66尺（19.67m）の基壇と、基壇上に桁行7間、梁行4間の礎石建物（金堂）を確認した。飛騨国分寺跡（79）は昭和61年度に市教育委員会が範囲確認調査を実施し、軒丸瓦、軒

表3 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	野内遺跡	集落跡	縄文～近世	45	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳
2	後洞遺跡	散布地	縄文	46	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳
3	恵喜庵寺跡	寺社跡	縄文、室町	47	真言寺敷裏山古墳	古墳	古墳
4	的場遺跡	散布地	古代	48	赤保木8～12号古窯跡	生産遺跡	奈良
5	下切芋谷遺跡	散布地	古墳	49	赤保木本願寺遺跡	散布地	縄文、江戸
6	下切古墳	古墳	古墳	50	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	奈良
7	下切遺跡	散布地	縄文、弥生	51	赤保木遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳
8	宮野B地点遺跡	散布地	縄文、弥生	52	成田正利の墓	墓地	近世
9	中切宮ヶ平遺跡	散布地	縄文、古墳	53	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳
10	中切土塹古墳	古墳	古墳	54	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳
11	日焼(炭焼き)古窯跡	生産遺跡	古代	55	上ヶ見古墳	古墳	古墳
12	中切日焼遺跡	散布地	縄文、古代	56	東田古墳	古墳	古墳
13	中切上野遺跡	散布地	縄文、奈良	57	流れ田古墳	古墳	古墳
	中切上野古墳群	古墳	古墳	58	冬頭遺跡	散布地	縄文
14	中切遺跡	古墳	縄文、弥生、奈良	59	大洞塚古墳	古墳	古墳
15	中切城跡	城郭跡	中世	60	冬頭干塚古墳	古墳	古墳
16	中切前平城跡	城郭跡	中世	61	冬頭城跡	城郭跡	室町
17	寺尾古墳群	古墳	古墳	62	冬頭山崎1号古墳	古墳	古墳
18	上切寺尾6号古墳	古墳	古墳	63	冬頭山崎2号古墳	古墳	古墳
19	上切(桜木)遺跡	散布地	平安	64	冬頭山崎1号横穴	横穴墓	古墳
20	日焼遺跡	生産遺跡	古代	65	下岡本遺跡	散布地	縄文、奈良、平安
21	四十九院発寺	寺社跡	弥生、古代	66	冬頭竹田の湯遺跡	散布地	平安
22	ばた上遺跡	集落跡	奈良	67	下岡本(瀬木)遺跡	散布地	縄文、弥生、平安
23	赤保木ぼた上古墳群	古墳	古墳	68	中山古窯跡	生産遺跡	古墳
24	隨縁寺裏遺跡	散布地	縄文	69	竹ヶ洞A地点遺跡	散布地	奈良、平安
25	与島B地点遺跡	古墳	古墳	70	竹ヶ洞B地点遺跡	散布地	奈良、平安
26	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文～古代	71	下林遺跡	散布地	弥生
27	与島C地点遺跡	散布地	古代	72	山田城跡	城郭跡	室町
28	二枝城跡	城郭跡	中世	73	狐洞遺跡	散布地	縄文、弥生
29	与島1号古墳	古墳	古墳	74	打越遺跡	散布地	縄文、弥生
30	与島2号古墳	古墳	古墳	75	中山城跡	城郭跡	中世
31	与島3号古墳	古墳	古墳	76	下岡本神田遺跡	散布地	平安
32	与島4号古墳	古墳	古墳	77	古前遺跡	散布地	平安
33	与島5号古墳	古墳	古墳	78	飛騨国分尼寺跡	寺社跡	古代
34	与島6号古墳	古墳	古墳	79	飛騨国分寺跡	寺社跡	奈良
35	よしま1号古窯跡	生産遺跡	古代	80	牧ヶ洞古墳	古墳	古墳
36	よしま2号古窯跡	生産遺跡	古代	81	馬場古墳	散布地	縄文
37	よしま3号古窯跡	生産遺跡	古代	82	上畠遺跡	散布地	縄文
38	与島A地点遺跡	散布地	縄文	83	前平遺跡	散布地	縄文、弥生
39	上切平野半古墳群	古墳	古墳	84	前平山陵遺跡	散布地	縄文、弥生
40	平野遺跡	生産遺跡	平安	85	前平古墳	古墳	古墳
41	平野1号古窯跡	生産遺跡	奈良	86	茂谷古墳	古墳	古墳
42	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安	87	松本上野遺跡	散布地	縄文
43	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安	88	三川落合遺跡	散布地	縄文
44	赤保木1～6号古窯跡	生産遺跡	奈良	89	中山纏文遺跡	集落跡	縄文

*種別と時代はすべて岐阜県教育委員会2007に従ったが、中山纏文遺跡(89)のみ追加した。

平瓦、鬼瓦などが出土した。赤保木1～6号古窯跡(44)は昭和48年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、6基の窯を確認した。そのうち1～4号窯は瓦窯であり、飛騨国分寺と飛騨国分尼寺とに瓦を供給していたことが明らかとなっている。なお、5・6号窯は須恵器窯である。赤保木8号古窯跡(48)は平成13年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、窯体に伴う遺構は確認できなかったが、10世紀初頃の灰釉陶器が出土した。平野1号古窯跡(43)は平成15年度に市教育委員会が本発掘調査を実施し、8世紀第1～2四半期の須恵器窯であることが判明した。平野1号古窯跡の調査により、この付近一帯の窯跡は平野1号古窯跡→赤保木3号古窯跡→よしま古窯跡→赤保木5・6号窯跡→赤保木8号窯跡の変遷が想定でき、出土遺物は8世紀中頃の国分寺の造営をきっかけとして、美濃須恵古窯系統のものから猿投古窯系統のものへと変化する点が注目されている³⁾。なお、当遺跡付近には

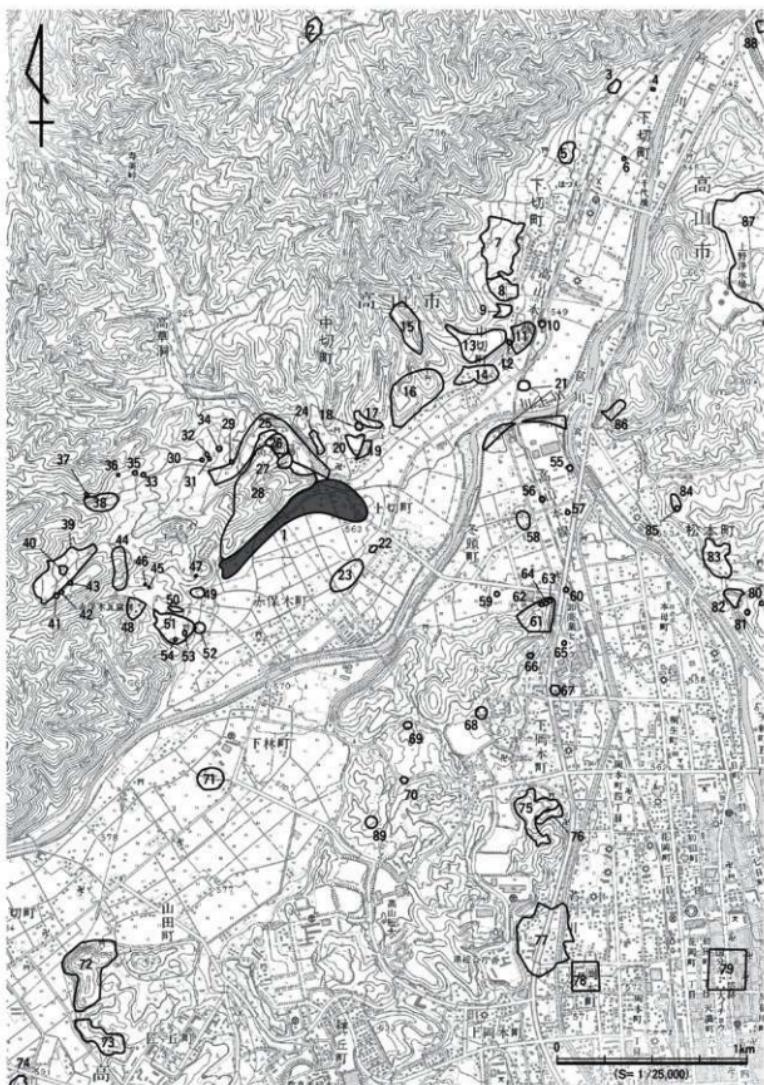


図9 周辺遺跡位置図

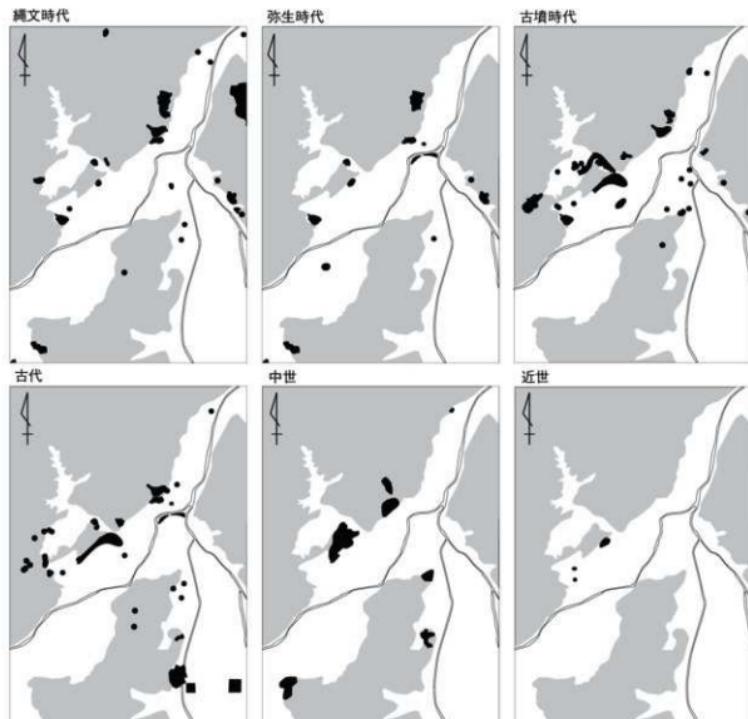


図10 時代別周辺遺跡位置図

近代まで条里型地割が遺存しており、「上枝村史」では明治期の地割から条里線を推定している(図8)³⁾。

中世 中世では平野部を見下ろす尾根上に城館跡が複数分布するのが特徴である。三枝城跡(28)は平成9年度に市教育委員会が、平成18年度に県センターが本発掘調査を実施した。主郭西側に二重の堀切を有する戦国期の山城である。冬頭城跡(61)は平成10年度に県センターが本発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地などの防御施設を有する中世の山城であることが判明した。野内遺跡D地区(1)は平成16・17年度に県センターが本発掘調査を実施し、中世前期の四面庇建物を検出した。建物の柱穴から、著状木製品がまとまって出土している。

近世 近世は見量山山麓に散布地と墓地が分布するが、過去に発掘調査事例はない。

1) 表3、図9の遺跡位置・範囲などは、岐阜県教育委員会2007「改訂版 岐阜県遺跡地図」を参考とした。

2) 高山市教育委員会2005「高山市内遺跡発掘調査報告書」

3) 田中彰2000「第2章第2節 古代」「上枝村史」

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と調査面

今回の調査区は崩積性堆積物から成る緩斜面上に位置し、崩積堆積層が広範囲に展開している。調査区の堆積は調査区中央付近から西側にかけて比較的安定していたが、調査区東側では表土直下に基盤層（V層）が露出しており、縄文時代から近世にかけての遺構を同一遺構面で検出した。

以下に、I層より順に記載する。

I層 現代の表土と宅地造成や畠地の造成に伴う客土、及び造成直前の旧表土を一括してI層とした。

調査区は緩斜面上に立地しており、畠地や宅地の造成によって山側を削平し、掘削した土を平野側に盛っている。したがって盛土の下層には旧表土が見られる。縄文時代から現代までの遺物を含む。

II層 I層下の比較的安定した古代の遺物包含層をII層とした。旧表土と土質が類似しているが、炭化物が多く、ややしまりがよい。前述のように削平されている場所が多いため、調査区全体には広がっていない。古代以前の遺物を含む。

III層 南区のシ15～ス17グリッドにかけて堆積する弥生時代後期～古墳時代中期の遺物包含層をIII層とした。細かい砂礫と炭化物を含み、乾くと白く変色する。シ15グリッドに設定した土層確認トレントでは、この層が存在しておらず、これより西側の標高が低い部分のみに堆積していることを確認した（図11）。ただし非常に堆積が薄いため、遺構の重複が激しい場所では明確に分層することができなかった。

IV層 細かい砂礫を多く含んだ崩落堆積層であり、調査区中央を中心にして広い範囲に堆積している（図11）。この層は、調査区北側の斜面上方の谷からもたらされた崩落土による扇状地性堆積物であり、黒褐色土と黄褐色土が互層堆積している。これは、小規模な崩落と土壤化のくり返しによるもの、あるいは雨水等により斜面上方の土壤化した土が運ばれ、さらにその下の黄褐色土が流出することによる層の逆転現象と考えられる。IV層が堆積する高まりは、もともと谷地形だった場所が山抜けのような大規模な崩落で埋まり、その後小規模な崩落のくり返しで形成されたと思われる（写真9）。IV層を形成する黒褐色土・黄褐色土は、東西方向の断割り調査で確認した結果、レンズ状に堆積している場合が多かった。したがって、IV層上面で確認できる面は、黒褐色土若しくは黄褐色土になる。土層確認トレントや擾乱の壁面から縄文時代の遺物が出土しているが、遺構は一部を除いて確認できなかった。

V層 しまりのよい黄褐色の粘質シルト（V-3）と土壤化により変化した黒褐色土（V-1）、その漸移層である褐色土（V-2）からなる安定した堆積層（基盤層）である。背後の丘陵を形成する堆積、あるいは河岸段丘の堆積と考えられ、表土から約2m程度掘り下げても岩盤や礫層に達しない。IV層に比べ粘質が強く、砂岩粒の混入が少ない。ただし、IV層の堆積が厚い調査区中央部（平成14年度調査地点と平成16年度調査南地点を中心とした範囲）については、V-1～3層が堆積しているかどうか確認できていない。

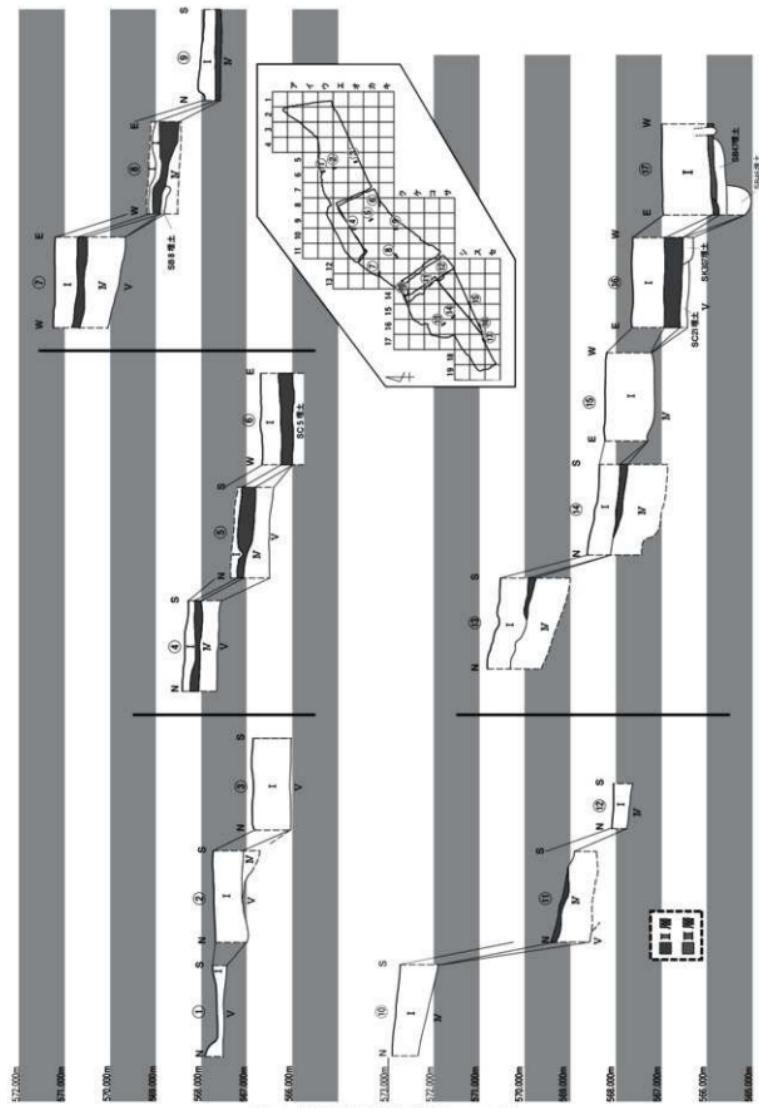


図11 基本層序柱状模式図(S=1/100)

遺構調査面 今回の調査では、第1調査面として調査区全体、第2調査面として遺構や包含層を確認した下層の調査を行った。第1調査面は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層上面から検出し、縄文時代から近世にかけての遺構がある。第2調査面は、下層の試掘確認調査の結果、遺構を確認した場所のみを対象とした。

平成16年度調査南地点はⅢ～Ⅴ層上面を第1調査面とした。第2調査面はⅢ層より下の各層上面とし、遺構の年代は弥生時代後期～古墳時代前期が多かった。ただし、遺物等から時期を確認できた遺構以外は時期不明のものが多く、埋土や遺構の様相から第1調査面で検出できなかった遺構を第2調査面で確認した可能性もある。またⅢ層が存在しない地点からも同時期の遺構を検出しており、本報文中では、一覧表に調査面を明記した以外は第1調査面で検出した遺構と特に区別せず扱っている。

平成14年度調査地點・平成16年度調査北地点は、Ⅳ・Ⅴ層上面を調査面とした。第2調査面はⅣ層及びⅤ-1層の黒色～黒褐色土を断削り調査する過程で、Ⅳ層中の黄褐色土、Ⅴ-2・3層上面から縄文時代の土坑等を確認した面とした。先述したようにⅣ層中から縄文時代の遺物が出土する場合も見られるが、標高の低い場所では、Ⅳ層・Ⅴ-1層上面でもⅤ-2層から検出した土坑と同様の形態・時期の遺構を確認している。Ⅳ層は扇状地性堆積物であるため、縄文時代の遺構はⅣ層中に遺構面があり、Ⅳ層が削平されて堆積が薄くなった場所や元から存在しない場所では、Ⅳ層・Ⅴ-1層上面で遺構を検出した。したがって第2調査面で検出した土坑は、本来の遺構調査面で確認できなかったことになり、平成16年度調査南地点のⅢ層下面の遺構と同様に、第1調査面で検出した遺構と区別せずに扱うこととした。

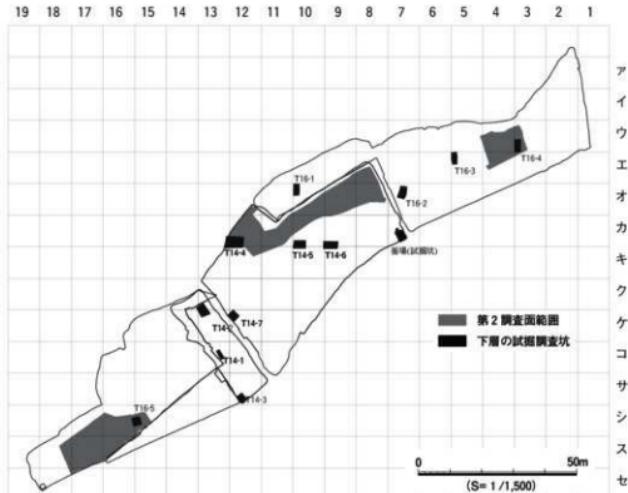


図12 第2調査面調査範囲

第2節 遺構概要

今回の調査では、調査区全域において縄文時代から近世までの遺構を検出した(図13)。本節では、本書における遺構の分類、記載の月例、計測方法、偏屈年代の確定法について述べる。

1 遺構の分類

今回検出した遺構は、地面に掘り込まれた遺構（ピット・土坑等）と上部構造を持つ遺構の残欠（カマド跡等）に分けられる。遺構の種類は、竪穴住居跡、鍛冶関連遺構、掘立柱建物跡、櫛跡、被熱、焼土堆積遺構、溝状遺構、遺物集積、斜面造成跡、ピット、土坑、不明遺構に分け、各遺構の分類は、形状と規模、構造から判断した。それぞれの時代ごとの遺構数は表4のとおりである（時代区分は表6参照）。なお、本書では、竪穴住居跡や鍛冶関連遺構のように複数の遺構の組合せによるものは、SB1-P1のように併記した。

以下に各遺構の分類基準を概述する。

豎穴住居跡（略号SB）

カマド跡などの生活用の炉跡を備える遺構を竪穴住居跡とした。竪穴住居跡の概念には、主柱穴を備え上屋が想定されることを前提とするべきであるが、平安時代以降のカマドを備える竪穴住居跡は主柱穴が判然としないものが多いため、上屋の想定については竪穴住居跡の定義から除外した。また、古墳時代中期以前の遺構については、が跡が調査区外にあるか削平されて残存していないことが多かったため、竪穴状の掘形を持つ大型遺構はすべて竪穴住居跡に含めた。

鐵治閣連遺構（略号 S C）

竪穴内に鍛冶炉と考えられる遺構を備えるものを鍛冶関連遺構とした。鍛冶炉跡であることの判断は主に出土遺物による。今回の調査では遺構埋土の本洗選別により、鍛冶関連微細遺物の抽出を行ったため、この結果も遺構種別を考える上での参考とした（第3章第3節参照）。なお、鍛冶関連遺物が出土していないなくても、炉の構造が鍛冶に関連する可能性のあるものは当遺構に含めた。

掘立柱建物跡・柵跡（略号SH・SA）

規則的に並んだ複数のピットによって構成される遺構を、掘立柱建物跡・柵跡とした。両者の違いは、前者が方形に配置されるもの、後者が線状に配置されるものの違いである。そのため、調査表4「検出遺構一観察」

表4 檢出遺憾一覽表

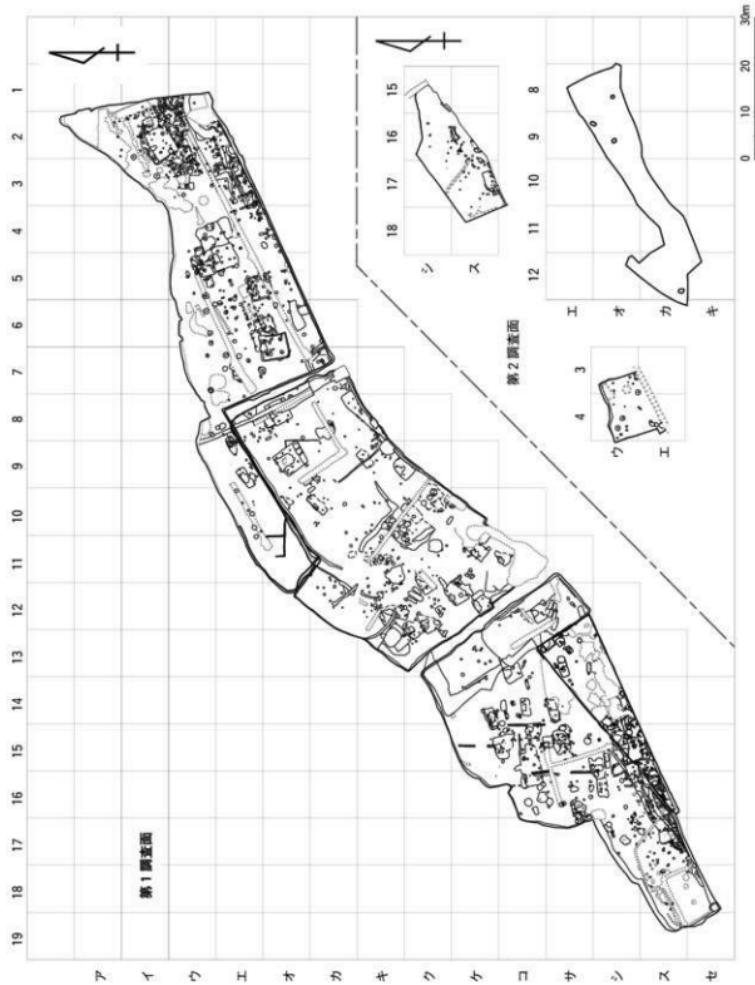


図13 遺構全体図

区外に続く場合は、柵跡としたものも掘立柱建物跡の一部である可能性がある。なお、掘立柱建物跡・柵跡は、いずれも整理作業の段階で確認している。

被熱・焼土堆積遺構（略号S F）

被熱した痕跡のある遺構及び多量に焼土・炭が混入する堆積がある遺構を被熱・焼土堆積遺構とした。この遺構群は、さらに以下のように内容別に分類した。なお、被熱遺構の一部について、地磁気年代測定、放射性炭素年代測定を行い、その結果を第5章に一括して記載した。

カマド跡

粘土や礫を用いて構築された、主に煮炊きに使われる炉の跡をカマド跡とした。今回の調査で検出したカマド跡は、竪穴住居跡の北壁に設置されたものが多い。

炉跡

古墳時代中期以前の竪穴内に設置された、地床炉や石組炉を炉跡とした。

鍛冶炉跡

焼土の中で、鍛冶関連遺物が出土したものについて鍛冶炉跡とした。鍛冶関連遺構の内外で検出した。また、遺物が出土していない場合でも、黄褐色粘土を伴うなど構造上鍛冶炉跡の可能性が高いものもここに含めた。

焼土

上記の分類に含まれない被熱・焼土堆積を焼土とした。竪穴住居跡等の床面にあるものや埋土上面（検出面）で検出したもの、単独で存在するもの等がある。

溝状遺構（略号S D）

地面を掘りくぼめた遺構の内、上端の短軸（幅）に対し長軸（長さ）が3倍以上の長さを有する遺構を溝状遺構とした。この遺構群をさらに以下のように内容別に分類した。

周壁溝

竪穴住居跡の壁に沿うように設置された溝を周壁溝とした。今回の調査では、主に古墳時代以前の竪穴住居跡に見られる。

区画溝

鍛冶関連遺構であるSC18を囲む溝について、区画溝の名称を用いた。

溝

上記の分類に含まれない溝状遺構を溝とした。堆積や規模など様々なものがある。

斜面造成跡（略号S V）

斜面を切り盛りし、平坦面を造成している遺構を斜面造成跡とした。今回の調査では1基のみ確認したが、古代の掘立柱建物跡が位置している面は造成面である可能性が高い。

遺物集積（略号S U）

遺構検出面上において、ほとんど掘り込みを伴わない状態で遺物が集中的に出土する遺構を遺物集積とした。

ピット・土坑（略号P・S K）

地面を掘りくぼめた遺構の内、前述した各分類に当てはまらない比較的規模の小さい遺構群をここに分類した。ピットは、柱穴跡若しくは柱穴状の掘形、柱痕跡を持つ穴、土坑はそれ以外の穴を

示す。まず、上端の長軸が50cm未満の遺構については無条件でピットに分類し、80cmより大きい穴を土坑とした。穴の中でも①柱痕跡・根石・礎盤がある、②柱の加重による底面硬化が見られる、③竪穴住居跡・掘立柱建物跡等の柱穴、のいずれかに該当する遺構については、規模に関わらずピットとした。長軸が50cm以上80cm以下の遺構については柱穴跡と土坑が混在する可能性があるため、次の基準により分類した。

柱穴跡の特徴の一つに深さに対する直径の比率が小さいことがある。そこで柱穴跡に分類できる遺構の上端長軸と深さの比（上端長軸／深さ）を出した結果、極端な例外を除いて、約1.7が最大値となった。この結果に従い、50cm以上80cm以下の遺構について、上端長軸と深さの比が1.7以下のものをピット、1.7より大きいものを土坑に分類した。なお、切り合い等により正確な規模が不明な場合は調査時の判断に従った。

土坑は、意図的に礎を配置した土坑を配石土坑、礎を集中的に埋土内に入れ込んだものを集石土坑と表記した。なお、遺構底面中央に小穴があり、円筒形の掘形を持つ土坑は、V層に酷似した埋土や掘り返しの痕跡が残る堆積状況などに特徴がある。そのうちの1基であるSK280からは、縄文時代中期前葉の土器がまとまって出土しており、掘形の形状がSK280と類似する土坑は、埋土の状況も加味し同時期と判断した。また、底面中央に小穴がない土坑についても、埋土が類似している場合は縄文時代の土坑として分類した。

不明遺構（略号S X）

盛り土遺構、粘土溜まりなど、性格不明の遺構を示す。

2 遺構各部の記述と図化方法

今回検出した遺構については図14のように図化した。本文中における遺構各部の記載も図14の記述に統一し、凡例を省略した。なお、カマド跡の各部名称は、図15に示した用語で記述した。

3 遺構の計測

各遺構の規模は、それぞれ種別ごとに掲載した遺構一覧表に示した。計測を行うに当たり、遺構上面が削平されていることを考慮して、上端・下端ともに規模の計測を行った。また、明らかに搅乱や他遺構によって破壊されている場合は、括弧書きで残存値を示した。

以下に各遺構の計測部位について記述する。

竪穴住居跡

長軸と短軸は、方形遺構の各辺中央に直交する軸を結んだ線の長さを計測した。カマド跡は遺構ごとで残存状態が異なるため、検出した状態のカマド構造材散布範囲の規模を計測した。被熱・焼土堆積遺構については焼土・粘土が散布する範囲若しくは被熱範囲を計測した。主軸方位は、カマド跡又は炉跡に最も近い位置の壁中央とその対辺中央を結んだ線を主軸とし、これが南北の軸から東西に何度ずれているかを計測した。N-30-Wと記載した場合、北(N)から30度西(W)へ傾いていることを示す。

鍛冶関連遺構

平面形が方形を呈する場合は、竪穴住居跡の計測部位に準じた。不定形なものや溝に区画された



図14 遺構図の表記

ものは、その範囲の長軸と短軸を計測した。が跡と考えられる焼土については、その構造にかかわらず遺構に伴う焼土及び粘土が広がる範囲について計測を行った。

被熱・焼土堆積構造

竪穴住居跡と同様に、焼土・粘土が散布する範囲について計測を行った。

溝状遺構

上端と下端の幅は最大幅で計測し、深さはその場所を計測した。

ピット・土坑

方形の遺構については、竪穴住居跡の計測に準じた。それ以外については、長軸と短軸を計測した。深さは底面の形状にかか



図15 カマド跡模式図

わらず最も深い位置で計測を行った。なお、平面形状・埋土堆積状況・断面形状を図16のように分類し、各一覧表に掲載した。

4 遺構の時期判断について

遺構の時期判断は、出土遺物及び遺構の切り合い関係による。今回の調査で遺構から出土した遺物の所属時期は、縄文時代から近世にまであり、さらに遺構の切り合い関係が複雑で出土遺物の混在があったため、出土遺構の性格により、以下のような優先順位で時期判断を行った。

竪穴住居跡・鍛冶関連遺構

- ①カマド跡・炉跡・焼土出土遺物の時期を遺構の存続時期に近い時期とする。
- ②土坑・ピットの埋納・埋設遺物の内、最も新しいものの時期を遺構の存続時期に近い時期とする。
- ③床面直上の出土遺物を廃絶に近い時期の年代とする。
- ④主柱穴・周壁溝の埋土出土遺物の内、最も新しいものの時期を廃絶年代とする。
- ⑤埋土出土遺物の内、最も新しいものの時期を廃絶年代とする。ただし、切り合い関係が複雑で、遺構の誤認や検出ミスが多くあることが予想されるため、主体となる土器の時期をもって遺構の時期とした場合がある。

被熱・焼土堆積遺構

- 竪穴住居跡の①と同じ。

溝状遺構

- 竪穴住居跡の⑤と同じ。

ピット・土坑

- ①埋納・埋設遺物をもって成立時期とする。
- ②集石を伴う場合は、石とともに検出した遺物の内、最も新しいものをもって廃絶（あるいは成立）に近い時期とする。
- ③埋土出土遺物については竪穴住居跡の⑤と同じ。

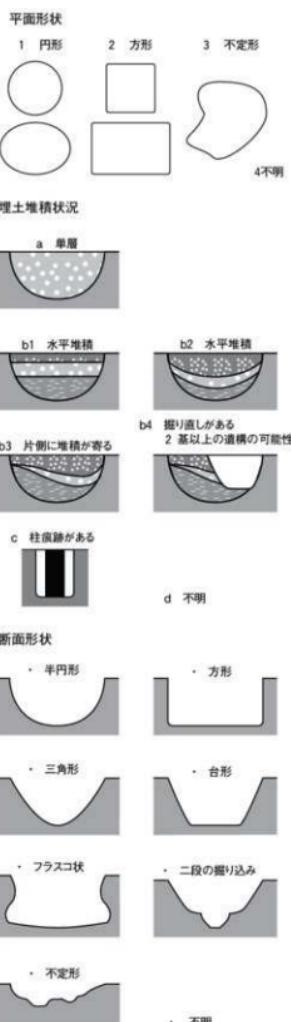


図16 ピット・土坑の形状等分類模式図

第3節 遺物概要

1 出土遺物数

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器、石器・石製品、金属製品などが出土した。その内訳は表5のとおりであり、全体では須恵器が最も多い。また、接合率（接合した比率）は縄文土器が最も高く、陶磁器の中では、縄釉陶器と瓦を除くと須恵器が最も低い。遺構と包含層の接合率を比較すると、縄文土器と弥生土器・土師器は遺構出土遺物の接合率が高いのに対し、灰釉陶器、中世陶磁器、近世以降の陶磁器は包含層出土遺物の接合率の方が高く、須恵器は両者がほぼ同じであった。

2 時期区分

本書における時期区分は、大きく縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世とし、一般的に使用されている土器編年を参考にしつつ、遺構の切り合い関係などから小期を設定した（表6）。このうち縄文、弥生、中世以降の各時期は、検出した遺構数が少ないため小期の設定をしていない。なお、時代呼称は表6で示したように、土器様式に対応させて古墳時代、奈良時代、平安時代などとし、土器様式名と年代観は、以下の文献を参考とした。

弥生土器・土師器：赤塚2002

須恵器・灰釉陶器など：尾野2000a、各務原市教育委員会1984、斎藤1994、藤澤1994

また、縄文時代は縄文土器の新保・新崎式（加藤1988）を中期前葉、中近世は中世陶器の藤澤編年（藤澤1994）山茶碗第3～7型式を中世前期、同第8型式～大窯第4段階を中世後期、近世陶磁器の江戸時代瀬戸窯第1段階を近世前期、同第2段階を近世中期、同第3段階を近世後期（財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター2002）に比定して、それぞれ表記した。

なお、実測図を掲載した遺物について、弥生時代後期から古墳時代前期の土器は愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏、富山大学人文学部高橋浩二氏に、須恵器と灰釉陶器は各務原市役所渡邊博人氏、愛知県埋蔵文化財センター城ヶ谷和宏氏、岐阜県ミュージアムひだ牛丸岳彦氏、多治見市文化財保護センター山内伸浩氏に、それぞれ土器様式名、産地、時期などの指導を得た。しかし、文責はすべて執筆者にある。

3 遺物概要

(1) 縄文土器

縄文土器は、接合前破片数で遺構から167点、包含層から205点、合計372点が出土した。遺構出土の土器は他の時代の遺構に混入していることが多く、縄文土器のみが出土している遺構はSK280のみである。包含層ではI層とIV層からの出土が多い。

縄文時代の遺構（SK279・280）から出土した土器は、いずれも北陸系の新保・新崎式で中期前葉に比定される。その他の遺構出土土器と包含層出土土器は、中期後半から後期末に比定される。

表5 出土遺物点数一覧表

出土位置 方法	集計		縦文 土器	發生 土器	須恵器	縦輪 陶器	灰輪 陶器	瓦	中世 陶器	近世 以降	石器	石製品	金屬 製品	土製品	樹脂 樹脂	不明	統計
	接合面積片数	接合面積率															
遺構	167	7,104	5,740	3	5,529	3	16	180	78	89	13	1,310	0	0	21,902		
口縫部残存率	109	5,998	7,014	3	4,966	3	16	173	77	89	10	1,310	0	0	19,768		
接合面積片数	28.9	313.9	1662.5	0.5	2184.9	-	6.1	16.6	-	-	-	-	0.0	0.0	4213.4		
接合面積片数	73	1,804	5,500	4	1,155	1	65	2,417	27	50	2	10	8	11,116			
I解	67	1,626	5,138	4	1,010	1	59	2,033	27	50	2	10	8	10,205			
口縫部残存率	2.1	32.2	1108.5	0.3	462.0	-	6.1	57.3	-	-	-	-	0.0	0.0	1668.5		
II解	3	4	425	0	131	0	3	548	6	0	1	1	0	1,122			
口縫部残存率	1	4	412	0	111	0	3	385	6	0	1	0	0	924			
接合面積片数	0	0	68.8	0.0	32.5	-	0.0	61.2	-	-	-	-	0.0	0.0	162.5		
III解	0	3	332	0	133	0	0	34	5	0	0	3	0	510			
接合面積片数	0	3	307	0	132	0	0	33	5	0	0	3	0	483			
口縫部残存率	0.0	0.0	36.2	0.0	46.7	-	0.0	0.0	-	-	-	-	0.0	0.0	82.9		
包含層	67	1,621	11,764	0	3,024	4	27	976	40	19	5	18	77	17,642			
接合面積片数	57	1,523	11,189	0	2,619	4	23	909	40	19	4	18	76	16,481			
口縫部残存率	0.3	47.6	2081.7	0.0	1151.3	-	12.4	8.5	-	-	-	-	0.3	3302.1			
接合面積片数	30	160	30	0	4	0	0	2	8	0	0	0	0	0	234		
V解	31	153	27	0	4	0	0	2	8	0	0	0	0	0	225		
口縫部残存率	0.4	2.9	5.0	0.0	2.5	-	0.0	0.0	-	-	-	-	0.0	0.0	10.8		
その他	32	607	2,825	1	702	0	13	627	14	7	1	3	2	4,834			
接合面積片数	21	522	2,718	1	604	0	7	614	14	7	1	3	2	4,514			
口縫部残存率	0.0	16.9	458.7	0.0	234.5	-	2.6	0.0	-	-	-	-	0.0	0.0	712.7		
接合面積片数	205	4,199	20,876	5	5,149	5	108	4,604	100	76	9	35	87	35,458			
接合面積片数	177	3,831	19,791	5	4,480	5	92	4,146	100	76	8	35	86	32,832			
口縫部残存率	2.8	99.6	3758.9	0.3	1929.5	-	21.1	127.0	-	-	-	-	0.3	5939.5			
接合面積片数	372	11,303	28,286	8	10,678	8	124	4,784	178	165	22	1,345	87	57,360			
接合面積片数	286	9,829	26,805	8	9,446	8	108	4,319	177	165	18	1,345	86	52,600			
口縫部残存率	31.7	413.5	5,621.4	0.8	414.4	-	27.2	143.6	-	-	-	-	0.3	10,529			
接合率	34.73	13.66	8.76	5.34	0.00	10.18	0.00	3.89	1.28	0.00	23.08	0.00	-	9.74			
包含率 (%)	全体	23.12	13.04	5.24	0.00	11.54	0.00	12.90	9.72	0.56	0.00	18.18	0.00	1.15	7.41		
															8.30		

※全体破片で、須恵器と灰輪陶器の割合ができないものは、すべて須恵器として集計した。

※口縫部残存率はX/12の数値を示す。

※包含層の層位は基本層名を示し、遺物取上時に複数層にまたがっている場合は上層に含めた。

※包含層その他のことは、試験層名、排水溝、複雑などを示す。

※接合率 (%) の計算方法は、100-(接合面積片数÷接合面積×100) である。つまり、数値が大きいほど接合した比率が高いことを示す。

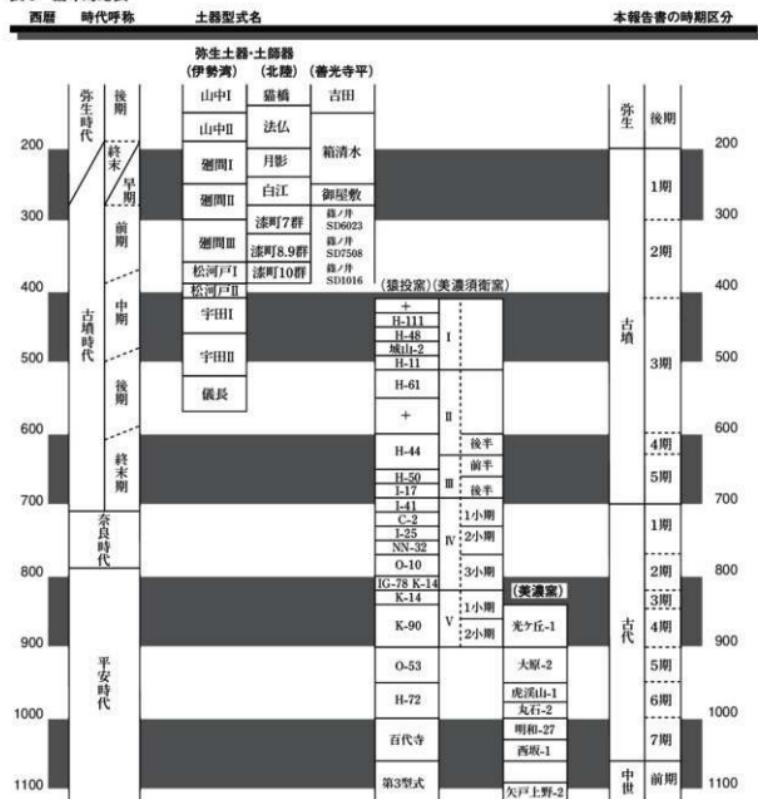
(2) 弁生土器・土師器

本書では、表6の時期区分にある弁生前期から後期に属する土器を弁生土器、古墳I～5期に属する土器を土師器と記載する。また、弁生土器と土師器の識別が細片ではできなかったため、表5の数量は両者をまとめて提示した。

弁生土器・土師器は、接合前破片数で遺構から7,104点、包含層から4,199点、合計11,303点が出土した。遺構からの出土が多く、その大半は土師器である。なお、包含層ではI層とIV層からの出土が多い。器種別では、壺類が多く、破片数では全体の4～5割を占める。特殊な器種として、古代の羽釜や製塩土器などが出土している。

古墳I期の土師器は、在地特有の土器、東海系、北陸系、信州系の土器がある。その多くは法仏式、月影式などの北陸の影響を受けた高環や壺であり、他に東海系のS字壺2点、箱清水式など信州系

表6 編年対応表



の影響を受けた壺や甕などが数点ある。

(3) 須恵器

須恵器の分類は、賛2000、尾野2000bに従った。そのうち、蓋は环蓋、返り蓋、摘み蓋、平頂蓋、高环蓋、壺蓋とし、摘み部分のみの場合は、摘み蓋と表記した。また、体部破片で壺と瓶の識別ができるものは、すべて壺とした。

須恵器の産地は、美濃須衛産、猿投産、畿内系、在地産などに分かれ、在地産が全体の約7割弱を占める（表7）。在地産は高山市周辺のものと、飛騨市古川町周辺のものに分かれるため、本書では前者を「在地t」、後者を「在地h」として表記した。

須恵器は、接合前破片数で遺構から7,410点、包含層から20,876点、合計28,286点が出土した。他の遺物と比較すると、包含層からの出土数が多いことが分かる。包含層ではIV層からの出土が最も多く、全体の約4割を占める。器種別では、無台环、有台环、碗類が多く、特殊な器種として硯類（円面硯、風字硯、転用硯）、火舎、ミニチュア製品、紡錘車などが出土している。

(4) 灰釉陶器・綠釉陶器

灰釉陶器の分類は、斎藤1994を参考とした。そのうち、深碗と折縁皿は器種の特徴となる部位が出土し、器種認定ができた場合のみ、それぞれの名称を記載した。また、灰釉陶器の産地は大半が在地tであり、全体の約9割弱を占める（表7）。また、猿投産、美濃産がわずかに含まれる。

なお、今回出土した灰釉陶器の大半は施釉されていない。灰釉陶器とは、「一般的には、9～11世紀代に植物灰を原料とした灰釉を人工的に施し、主に東海地方において生産された、楕・皿類を中心とする高火度焼成の陶器」（山下1995）とされている。この定義に従うのであれば、施釉がないという点から灰釉陶器という名称を用いるべきではないが、明らかに美濃窯や猿投窯の影響を受けた灰釉陶器の器形を模倣した製品であること、これまでにも灰釉陶器という名称が一般的に使用されていることから、本書でも灰釉陶器の名称を用いる。

灰釉陶器は、接合前破片数で遺構から5,529点、包含層から5,149点、合計10,678点が出土した。遺構と包含層の出土数がほぼ同じであり、包含層ではIV層からの出土が多い。器種別では、碗類が圧倒的に多く、碗と皿の破片数の比率は、碗：皿＝約5：1である。特殊な器種として、耳皿、朱が付着

表7 須恵器・灰釉陶器等産地別出土点数一覧表

上段：点数、下段：比率

産地 種別	在地t	在地h	猿投	美濃須衛	美濃	畿内系	不明	合計
須恵器	318	62	52	57	0	1	61	551
	57.7%	11.3%	9.4%	10.3%	0%	0.2%	11.1%	100%
灰釉陶器	325	4	24	0	7	0	7	367
	88.6%	1.1%	6.5%	0%	1.9%	0%	1.9%	100%
綠釉陶器	0	0	8	0	0	0	0	8
	0%	0%	100%	0%	0%	0%	0%	100%
合計	643	66	84	57	7	1	68	926

※点数は、掲載した須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器の点数を示す。

※須恵器：猿投・猿投とほぼ確定できるものの32点、猿投の可能性が高いものの20点、合計52点。

※須恵器：美濃須衛・美濃須衛とほぼ確定できるものの44点、美濃須衛の可能性が高いものの13点、合計57点。

※灰釉陶器：猿投・猿投とほぼ確定できるものの19点、猿投の可能性が高いものの5点、合計24点

※灰釉陶器：美濃・美濃とほぼ確定できるものの5点、美濃の可能性が高いものの2点、合計7点

した碗、底部穿孔のある碗などが出土している。

绿釉陶器は8点出土し、いずれも猿投壺と思われる。

(5) 中世陶磁器

中世陶磁器は、接合前破片数で造構から16点、包含層から108点、合計124点が出土した。包含層からの出土が多く、包含層ではI層からの出土が多い。

产地別では、大窯製品や中国製品が多く、白瓷系陶器、古瀬戸製品、常滑製品、珠洲製品も少量出土している。器種別では碗・皿類が多く、常滑製品は甕、珠洲製品は擂鉢である。白瓷系陶器は荒肌手と均質手の両者が出土している。

(6) 近世以降の陶磁器

近世以降の陶磁器は、接合前破片数で遺構から180点、包含層から4,604点、合計4,784点が出土した。包含層からの出土が圧倒的に多く、包含層では1層からの出土が多い。

産地別では、瀬戸美濃産若しくは瀬戸美濃系の陶器が多く、肥前産もわずかに出土している。器種別では碗、皿類が多く、他に鉢類、甕類、壺類、瓶類、水注類、箱類、蓋類など、通常の近世集落遺跡から出土する器種の大半が出土している。

表 8 石器類器種別出土点数一覧表

石材 器種	下呂石	チャート	凝灰岩	黒曜石	玉髓	安山岩	流紋岩	緑色片岩	砂岩	蛇紋岩	滑石	泥岩	頁岩	濃飛流紋岩	不明	合計
石鎌	16	4	1													21
石匙		1														1
石錐				1												1
石核	1															1
スクレイパー		2														2
RF	6	12		6	1											25
UF	2															2
フレイク	5	4		1	1											11
打製石斧			3			31	10	4	6							54
磨製石斧											2					2
磨石			3			2	2									7
敲石							8									8
凹み石							1									1
石皿							1									1
石鍤	1															1
石包丁												1				1
管玉		3														3
縄錘車									2							2
巡方																2
砥石		20						2			4	2	1			29
用途不明石器		1														1
不明												1				1
合計	31	24	30	8	2	33	22	4	8	2	2	6	2	1	2	177

(7) 石器・石製品

石器は、接合前破片数で遺構から78点、包含層から100点、合計178点が出土した。遺構より包含層からの出土数がわずかに多く、包含層ではIV層からの出土が多い。

器種別では、石鎌、R F、打製石斧、砥石が多く、なかでも打製石斧の出土数が突出している（表8）。石鎌など押圧剥離を施す剥片石器の石材は、下呂石とチャートが多く、他に黒曜石や玉髓などあり、高山周辺で産する石材と、遠隔地で産する石材の両方が使用されている。一方、直接打撃を施す打製石斧や磨石などの砸石器の石材は安山岩や流紋岩が多く、高山周辺で産する石材が選択されている。

また、巡方と砥石は、古代の当遺跡の性格を検討する上で重要な遺物である。巡方は2点出土しているが、その石材は不明であり、おそらく他地域から搬入されたと思われる。また、砥石の多くは鍛冶に関連すると思われ、荒砥、中砥、仕上砥が出土している。荒砥の石材は安山岩質凝灰岩や砂質凝灰岩などであり、当遺跡の近隣から供給可能な石材である。中砥の石材は、当遺跡の近隣から供給可能な泥質凝灰岩と、福井県周辺で産する凝灰岩に質感が類似する灰緑色の凝灰岩を併用している。仕上砥の石材の大半は、東三河で産する凝灰岩に質感が類似し、濃尾平野で広く流通している白色の凝灰岩を使用している。

(8) 金属製品

金属製品は、接合前破片数で遺構から89点、包含層から76点、合計165点が出土した。遺構と包含層の出土数がほぼ同じであり、包含層ではI層からの出土が多い。

出土した器種は、鎌、鎌の刃、刀子、釘、鋸、鉄鎌、帶金具、鉗具、火打金、紡錘車、鍋である。10点以上確認できたものは、釘又は釘状の製品（66点）と刀子（24点）であり、いずれも鍛冶関連遺構からの出土が目立つ。

(9) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は、接合前破片数で遺構から1,310点、包含層から35点、合計1,345点が出土した。遺構出土点数が多いのは、遺構埋土を水洗選別し、鍛冶関連微細遺物を抽出したためである。なお、水洗選別を実施した遺構は表9・10のとおりであり、すべての鍛冶関連遺構埋土を水洗選別したわけではない。

鍛冶関連遺物の抽出方法と分類基準は、以下のとおりである。

①水洗選別による遺物の抽出方法

ア 発掘現場で採集した遺構埋土から、水洗によりシルト質の細かい土を除去する。

イ 前工程で残った遺構埋土を、十分乾燥させる。

ウ 前工程から強力磁石に反応するものを抽出する。

エ 肉眼観察により、前工程から微細な鉄滓や板状剥片、鉄製品などを選別する。

②鍛冶関連遺物の分類

ア 楠形滓 カ繁に溜まる鉄滓の総称。やや扁平な形状を呈し、片面が丸みを帯びた形状を呈するのに対し、もう一方が窪むか平らな形状になる。

表9 錫冶関連遺物一覧表(1)

遺構名	計量 方法	①楕形 澤	②鉄滓	③鉛滓	④鉄塊	⑤板状 剝片	⑥粒 状澤	⑦微細 鉄製品	⑧輪の 羽口	合計	水洗 選別	備考
SB 4	点数 重量	1 59.6								1 59.6		
SB 6	点数 重量								1 7.9	1 7.9		
SB 7	点数 重量								1 47.2	1 47.2		
SB 9	点数 重量								1 54.3	1 54.3		
SB 10	点数 重量	1 351.0								1 351.0		
SB 11	点数 重量	1 116.8								1 116.8		
SB 15	点数 重量				1 41.0					1 41.0		
SB 19	点数 重量					2 0.1	1 0.1	1 0.1		4 0.3	実施	
SB 20	点数 重量	8 0.4				4 0.1	5 1.4			17 1.9	実施	
SB 21	点数 重量	19 1.3				2 0.2	3 0.1			24 1.6	実施	(2)(5)
SB 22	点数 重量	2 0.2								2 0.2	実施	
SB 30	点数 重量	1 14.5	1 3.3							1 186.0	3 203.8	
SB 33	点数 重量	3 119.3								1 90.0	4 209.3	
SB 37	点数 重量	1 4.6		1 16.8						2 21.4		
SB 40	点数 重量			1 12.5						1 12.5		
SB 41	点数 重量	3 0.1				2 0.1				5 0.2	実施	
SB 42	点数 重量	8 0.5				8 0.2				16 0.7	実施	
SB 45	点数 重量								1 1	28.4	28.4	
SB 46	点数 重量	1 0.2				7 0.1				8 0.3	実施	
SB 49	点数 重量	4 0.2								4 0.2	実施	
SB 51	点数 重量	1 0.1				4 0.1				5 0.1	実施	
SB 54	点数 重量	16 981.9	16 245.6	8 44.0	6 52.3					1 227.3	47 1551.1	
SB 55	点数 重量			1 8.2						1 8.2		
SB 56	点数 重量	1 12.5							2 12.5			
SC 1	点数 重量	1 1.0				3 0.1				4 1.1	実施	
SC 2	点数 重量	2 58.5	84 475.6	1 1.6	39 45.8	25 7.6	3 0.9	1 66.9	155 656.9	実施	(2)(5) (6)	
SC 3	点数 重量	2 90.7	45 95.8	1 113.2	45 1.4	5 1.6		1 25.6	99 328.3	実施		
SC 4	点数 重量					2 0.1				2 0.1	実施	
SC 5	点数 重量	2 7.2	1 2.0	1 339.0	3 0.1			4 71.9	11 420.2	実施		
SC 6	点数 重量	1 23.3	7 9.0			9 0.3				17 32.6	実施	
SC 8	点数 重量	1 151.9	35 2.2			52 2.0		4 0.6	92 156.6	実施	(2)(5) (6)	
SC 9	点数 重量							1 0.1	1 0.1	実施		
SC 10	点数 重量						9 0.2	1 0.1	10 0.3	実施		
SC 11	点数 重量	19 22.9	2 13.9			46 3.1	14 0.6	1 0.1	82 40.6	実施	(2)(5) (6)	
SC 12	点数 重量	15 1.5				24 0.8	5 0.2	2 0.7	46 3.2	実施	(2)(5) (7)	

表10 鋼冶関連遺物一覧表(2)

遺構名	計量 方法	①楕形 鋤	②鉄滓	③銅滓	④鉄塊	⑤板状 鋤片	⑥粒 状滓	⑦微細 鉄製品	⑧輪の 羽口	合計	水洗 選別	備考
S C 13	点数 重量		19 0.6			20	2			41	実施	(5)
S C 14	点数 重量					0.7	0.1			14		
S C 16	点数 重量					0	7		2	16		
S C 19	点数 重量		2 8.0			2.2	0.1		2	106.7	106.7	
S C 20	点数 重量					3		2	13.1	15.4		
S V 1	点数 重量	2 240.7	2 29.8		2 46.7					6		
S F 1	点数 重量								1	1		
S F 2	点数 重量	6 4.9				5				4.7	4.7	
S F 3	点数 重量	1 0.6				0.2				11		
S F 4	点数 重量					2		1	0.1	5.1		
S F 7	点数 重量	1 1.1				0.1		0.1		1		
S F 22	点数 重量	3 0.2				20	1			24	実施	(5)
S F 23	点数 重量	1 0.1				6				7	実施	(5)
S D 4	点数 重量	1 51.7	1 6.2		1 5.2					3		
S D 7	点数 重量				1 7.0					1	2	
S D 15	点数 重量				1 6.0					3.0	10.0	
S D 17	点数 重量					8 0.2	1 0.1			1	6.0	
SU1	点数 重量	1 672.0	2 0.6	1 40.4					1 4.0	4	9	実施
P235	点数 重量			1 2.3							1	
P296	点数 重量		5 1.1			0 1.7	7 0.1	0 2.0		12	実施	(2)(5) (7)
P340	点数 重量	2 104.9								2		
P600	点数 重量	1 81.1								104.9		
S K 14	点数 重量	1 85.7	228 300.1	5 15.0	6 35.1	82 3.1	30 9.3		5 84.3	357	実施	
S K 16	点数 重量		1 13.8							1		
S K 22	点数 重量	1 5.9	2 10.6			4 1.3	12 0.2			13.8		
S K 25	点数 重量		1 25.3							19	実施	(2)(5)
S K 132	点数 重量	1 0.1				2 0.1				17.9		
S K 140	点数 重量	1 3.0	3 21.7			0 1.3	5 0.3	5 0.2		1		
S K 293	点数 重量	9 0.3				5 0.4	5 0.2			48	実施	(5)
S K 294	点数 重量	11 1.9		2 104.5	20 1.6	15 0.6				108.5		
S K 295	点数 重量	4 0.4				3 0.1	1 0.1			8	実施	
包含層	点数 重量	6 722.5	11 177.3	2 6.3	5 172.8				11 158.9	35 1237.8		
合計	点数 重量	43 3926.1	581 1432.1	32 223.2	27 928.2	439 68.3	138 21.0	30 10.3	55 1944.4	1345 8553.6		

※重量の単位は、gである。

※点数が把握できない微細遺物が多数ある場合は、備考にその種類の数字を記載した。

- イ 鉄滓 質感は楕形滓と同じで、楕形を呈さないもの。
- ウ 鉱滓 融解したガラス質の粘土が主成分となる滓を一括した。小礫を取り込んでいるものが多い。
- エ 鉄塊（系遺物） 磁石に強く反応し、内部から銷ぶくれによる放射割れを起こしており、製品の形状を呈していないと判断したものを一括した。
- オ 板状剥片 水洗選別で検出した板状の鉄片であり、通常鍛造剥片と呼ばれることが多い。鍛造剥片と判断しきれないものも含まれるため、板状剥片とした。
- カ 粒状滓 球状の形態を呈する微細遺物。液体中で精製されたとされる。
- キ 微細鉄製品 水洗選別で出土した、肉眼で器種認定が困難なものを一括した。針や釘の先端のような形態を呈するものが多い。
- ク 鞍の羽口 炉内の熱を高めるために使われた送風管。

4 その他

実測図を掲載した遺物は、遺構出土遺物は遺構の性格を反映するものや、遺構の時期決定資料となる床面（底面）直上遺物、炉・カマド内出土遺物等を重視して選択した。包含層出土遺物は遺跡の性格を反映するもの、資料的価値が高いもの、産地や分類別の代表的なもの等を重視して選択した。

また、遺物実測図の詳細について、以下のとおり表現した。

- ・陶磁器類の回転ナデ調整による稜線は2箇所切りの線、回転ヘラケズリ調整による稜線は1箇所切りの線でそれぞれ表現した。
- ・付着物及び赤彩などの彩色については、以下のとおりアミカケで表現した。

赤 版 土師器の赤彩、陶器に付着した朱など。

アミ50% 漆

アミ80% 灯明皿などに付着した煤など（通常の煮沸行為により付着した煤には網掛けしていない）。

- ・高坏の穿孔数が不明な場合は、3箇所あるものとして図化した。その場合は、観察表に「穿孔数不明」と記載した。
- ・土器の削れた面が擬似口縁である場合、その形状をそのまま図化し、復元線を追加した。なお、擬似口縁部分のみトレース線を細くした。

また、遺物観察表（表44～102）の記載内容は、以下のとおりである。

- ・法量のうち、カッコは推定値を示す。また、土錘、陶錘、鞍の羽口の最大径は口径の欄に、長さは器高の欄にそれぞれ記載した。
- ・色調は土器断面の色調を示し、完形の場合は内面の色調を記載した。
- ・成形・調整は、底部外面→体部外面→口縁部外面→口縁部内面→体部内面→底部内面の順に記載した。須恵器甕等の叩きと当て具は、叩きの種類が分かる場合は「平行叩き痕」、「同心円当て具痕」等と記し、不明な場合は「叩き痕」、「当て具痕」と記した。

第4節 中近世の遺構と遺物

中世の遺構として溝状遺構3条、土坑4基、ピット2基、近世の遺構として溝状遺構3条、土坑15基、ピット8基を検出した。遺構の時期は、中世後期と近世後期である。

なお、今回の調査区の北側には中世後期とされる三枝城跡が位置しており、今回の調査区の場所は三枝城の根小屋跡に推定されている（高崎市教育委員会1999）。また、明治21年作成の地籍図を見ると、野内遺跡B地区の範囲内には3箇所の宅地があり、その内の2箇所（B地区の東西両端）は調査直前まで宅地として利用されていた。今回の調査では、近世の遺構はわずかに確認したのみであるが、出土した近世陶磁器の大半は18世紀後半以降であるため、地籍図にある宅地の建設は近世までさかのばる可能性がある。

中近世の主な遺構の分布は図17のとおりであり、いずれも明治21年作成の地籍図にある宅地付近に位置する。以下に、今回検出した中近世の遺構について、遺構ごとに記載する。

1 検出した遺構（図18）

中世の遺構のうち、SK4は古代の掘立柱建物跡群の東側に位置し、平面形が方形に近く、長軸が2m以上、深さが0.7m以上の大型の土坑である。底面は基本層序のV層下で部分的に確認できる硬

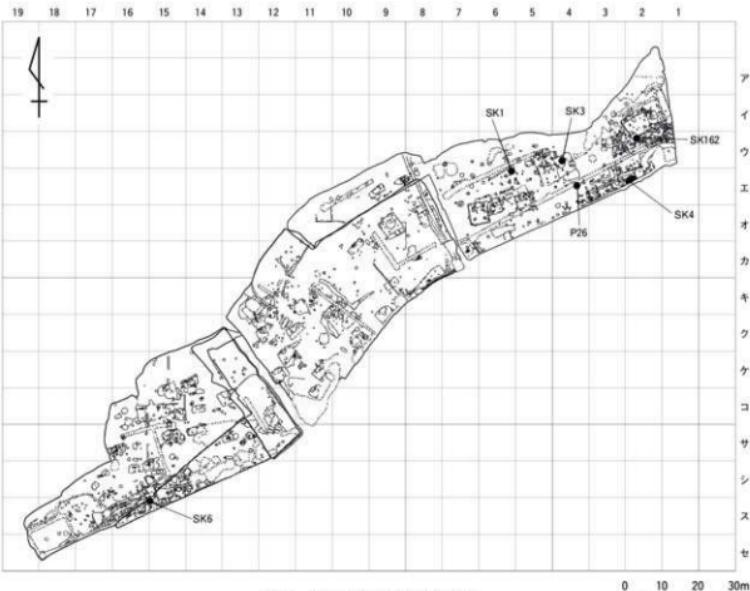


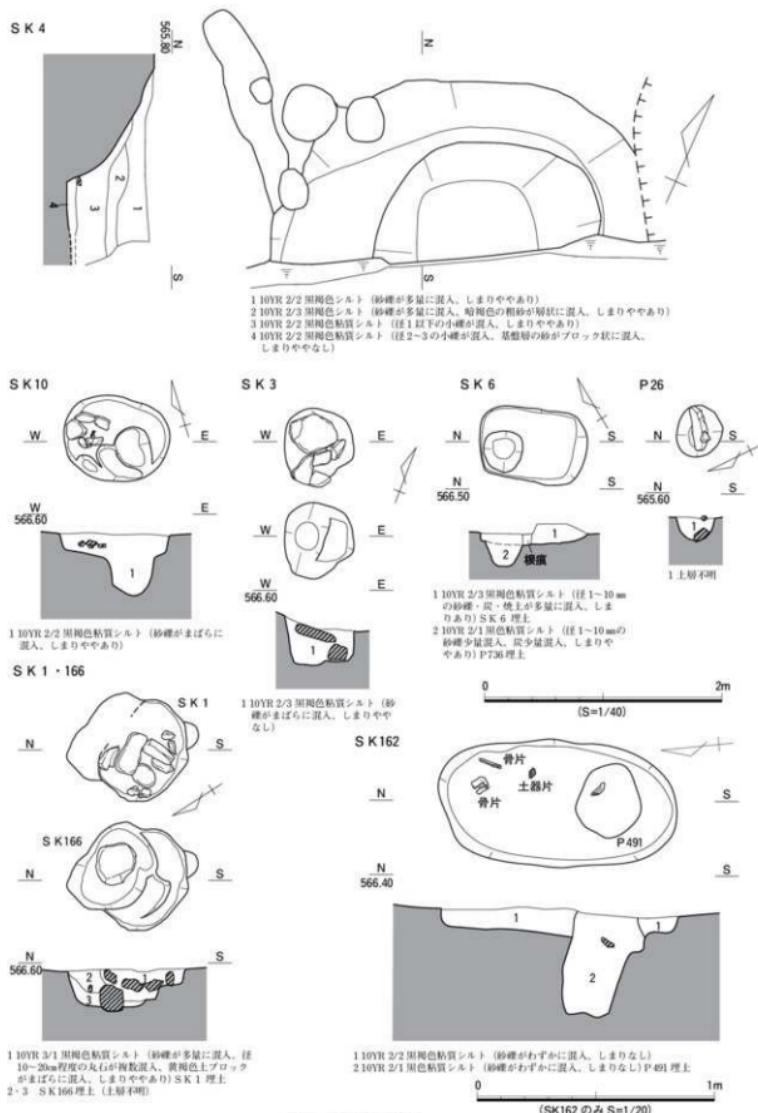
図17 中近世の主要遺構分布図

い砂層まで達していた。底面上には粘質シルトが堆積しており、當時水が溜まっていた状態であったことが想定できるため、本遺構は井戸として使用されていた可能性がある。出土遺物は須恵器と灰釉陶器が多いが、それらとともに白瓷系陶器（明和1号窯式以降の東濃型山茶碗の体部破片2片）や白磁碗片などが出土していることから、遺構の時期は中世後期と考えられる。また、SK162は、平面形が細長い楕円形を呈し、P491に切られる。埋土中より成人人骨が出土し、歯の放射性炭素年代測定の結果、中世後期である可能性が示された。遺体の葬法は、遺構内の入骨の出土位置が浅いこと、SK162周辺の遺構埋土からも人骨が混入して出土していること、人骨が被熱していないことなどから、土葬又は地上葬（遺棄葬）と考えられる。なお、SK162から釘が出土していないため、遺体が木棺に埋葬されていた可能性は低い。

近世の遺構は、すべて近世後期以降に属する。近世の遺構が最も密集する場所はエ5～エ6グリッド付近であり、地籍図で「宅地」として表記されている箇所である。近世以降の遺構埋土は中世以前の遺構埋土よりもが悪く、色調の識別も容易であった。SK1・3は、円礫や角礫を埋土中や底面に人为的に置いた土坑である。土坑の性格として、掘立柱建物跡の礎石や根石の可能性を考えたが、土坑の配置に規則性はなかった。

2 遺構・包含層出土遺物 (図19～23)

出土遺物は56点図示した。4・22は珠洲擂鉢である。4は底部内面に摺目が不定方向に施され、22は体部内面のロクロ目が顯著である。なお、今回の調査で確認できた珠洲産の陶器は擂鉢のみである。7・12・14は白瓷系陶器碗であり、7・12は東濃産、14は尾張産である。7は被熱によるためか、体部内面にあばた状の窪みが多数ある。9は陶器皿であり、体部内面及び口縁部内外面に煤が厚く付着している。また、体部外面には液体が垂下した痕跡が残る。灯明具としての機能が想定され、口縁部がわずかに打ち欠かれているのは、灯心の固定のためと思われる。14の高台は断面三角形を呈し、胎土中に白色粒を多く含む。15・16・18は青磁鏡蓮弁文碗であり、18は蓮弁の幅が狭く、施釉が厚い。19は青磁瓶であり、口縁端部を上方につまみ上げている。20は古瀬戸双耳小壺であり、体部内面のほぼ全面に褐色有機物が付着している。21は白瓷系陶器鉢であり、尾張産である。高台は断面三角形を呈し、体部外面に横から斜め方向のヘラケズリ調整がなされる。37は瀬戸美濃（系）卸皿であり、底部内面に卸目と格子目が左右に分かれて施されている。38は肥前皿であり、底部内面全体に呉須による文様が描かれている。42は底部内面にロクロ目を顯著に残す向付であり、体部外面下方から底部外面を除き緑色の釉薬が漬け掛けされている。45～47は瀬戸美濃（系）擂鉢であり、45・46は底部内面の摩減が顯著で、擂目が見えないほど使い込まれている。50は円孔のある蓋である。土師質であるため火鉢や焜炉などの蓋と思われる。54は瀬戸美濃（系）鉢であり、口縁部の重みが顯著である。底部内面には花文が描かれ、ピン痕が6箇所残る。また、器面の一部に粘土の継ぎ足しがみられ、その内外面には指圧痕が複数残る。57は土師器で器種は不明である。断面形は楕円形を呈し、器面は縱方向の丁寧なナデが施されている。58・59は土製品であり、時期が不明なため本節に含めた。いずれも円形を呈する一枚の粘土板の周縁に幅の広い粘土紐を貼り付けており、器面に赤彩の痕跡が残る。59は粘土紐部分に縦穿孔が施されている。



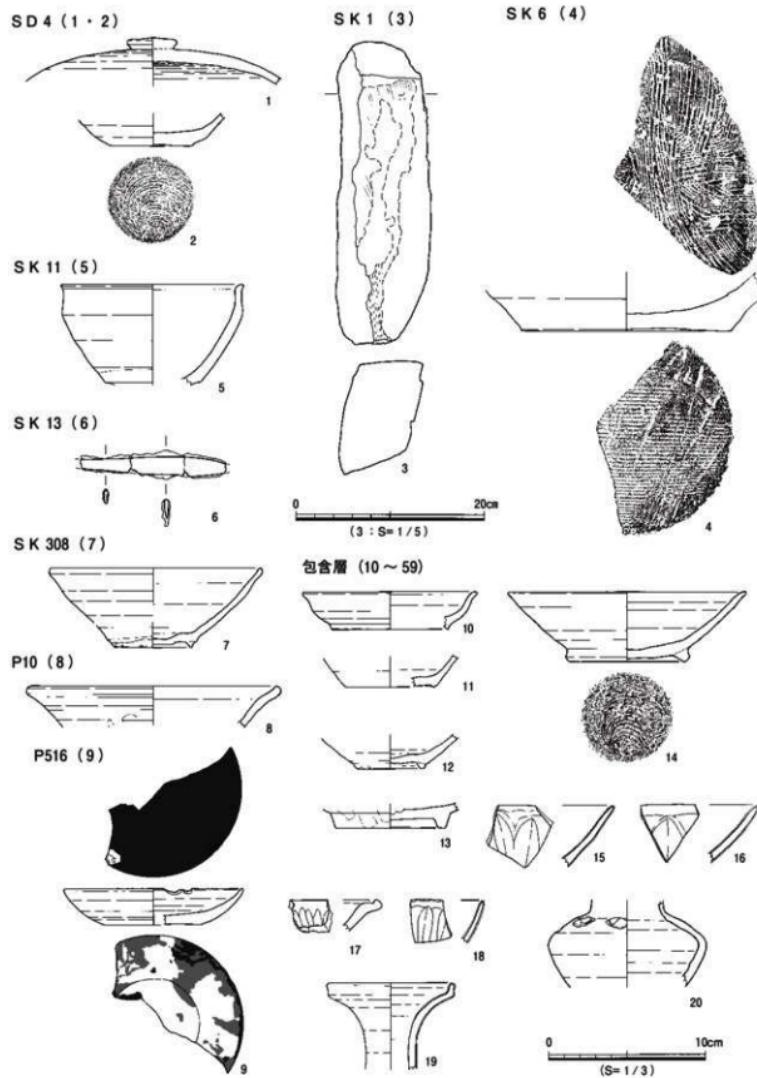


図19 出土遺物実測図（中近世：造構・包含層1）

包含層（10～59）

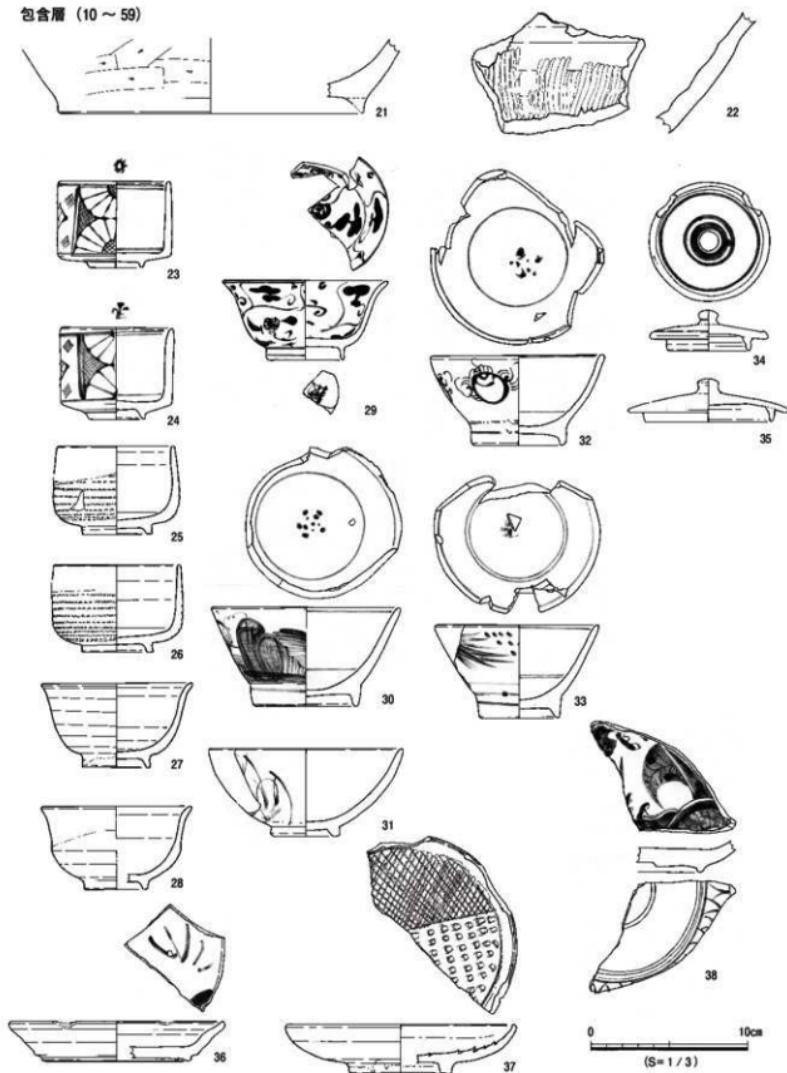


図20 出土遺物実測図（中近世：包含層2）

包含層 (10 ~ 59)

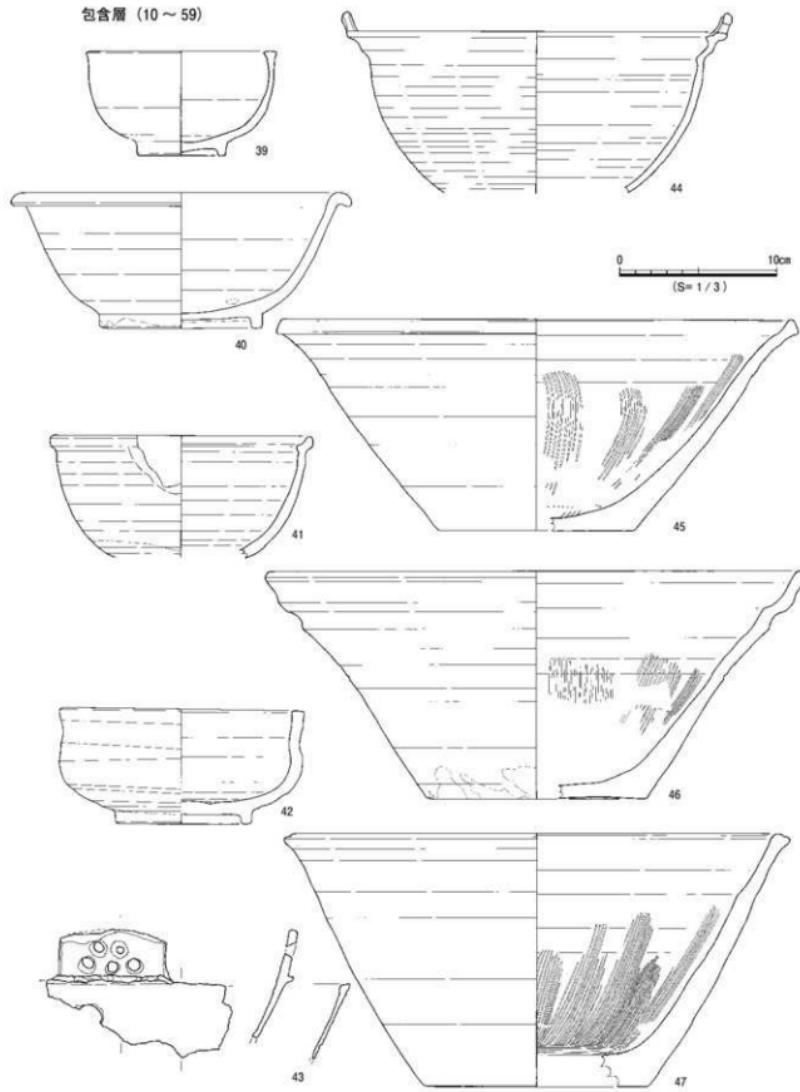


図21 出土遺物実測図（中近世：包含層 3）

包含層（10～59）

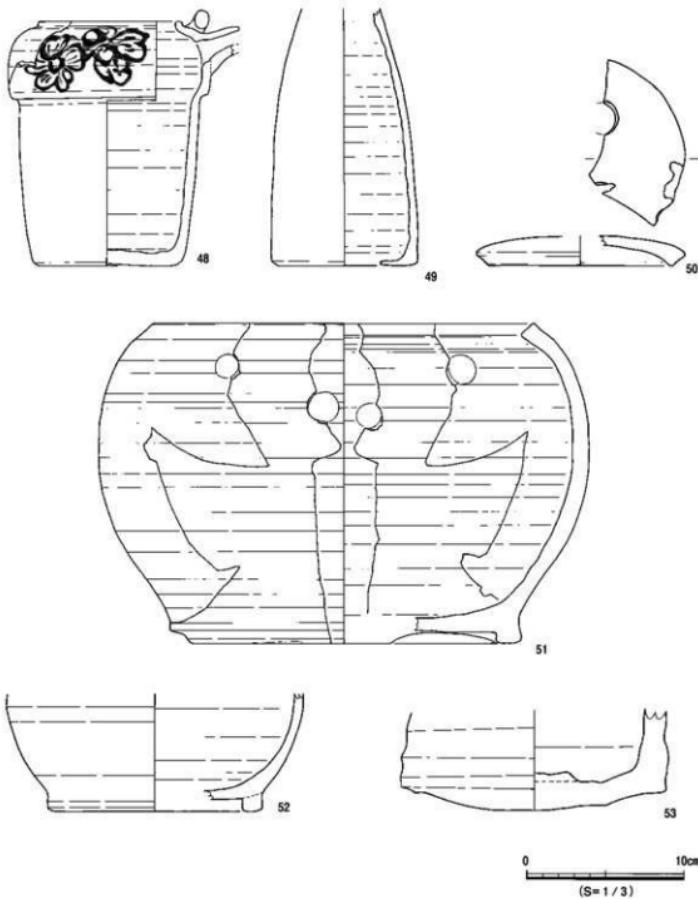


図22 出土遺物実測図（中近世：包含層4）

包含層 (10 ~ 59)

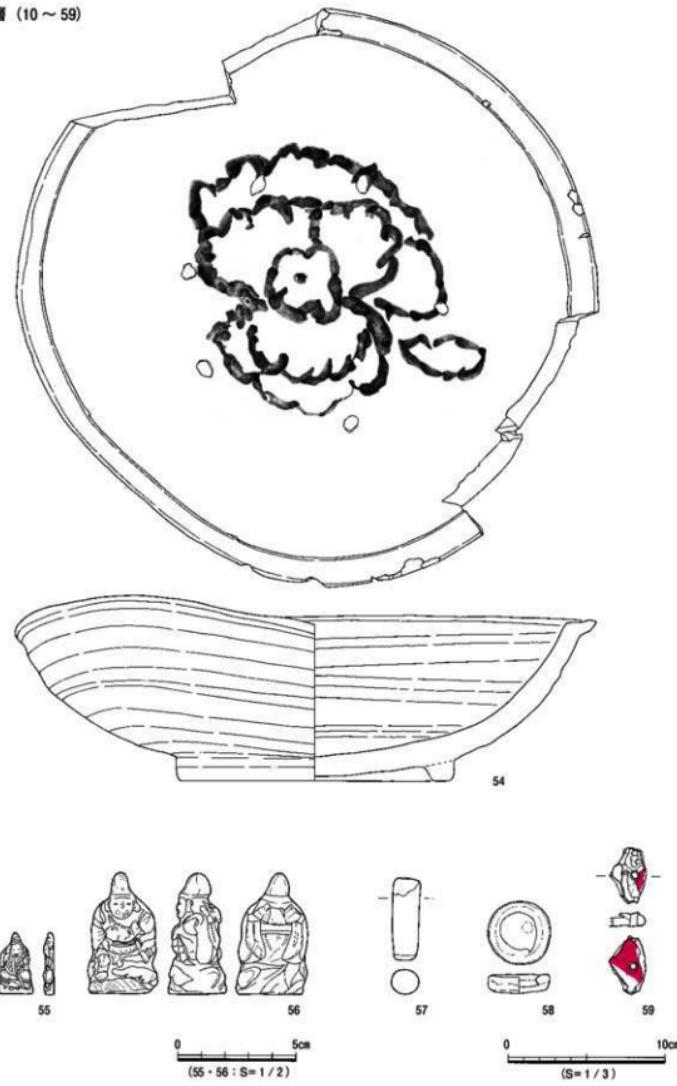


図23 出土遺物実測図（中近世：包含層 5）

第5節 古代の遺構と遺物

古代の遺構として、竪穴住居跡45軒、鍛冶関連遺構20軒、掘立柱建物跡4棟、柵跡1列、被熱・焼土堆積遺構18基、溝状遺構17条、遺物集積1基、土坑43基、ピット4基などを検出した。古代以降の遺構は、すべて第1調査面(Ⅲ～V層上面)で検出したが、第2調査面で検出した時期不明の遺構の中には、上面で検出できなかった古代以降の遺構が含まれている可能性がある。また、今回の調査で検出した遺構の時期は古代であるものが圧倒的に多く、時期不明とした遺構に古代の遺構が含まれる可能性は十分にある。

古代の主な遺構の分布は図24のとおりであり、調査区全域において確認した。以下、遺構種別ごとに、検出した遺構と出土遺物について記載する。

1 竪穴住居跡

S B 1 (遺構: 図25・26、遺構全体図分割図⑨、遺物: 図135)

検出状況 オ8グリッドで検出した。遺構の中央が溝状遺構S D 7によって切られる。本遺構は、平成12年度の試掘確認調査すでに確認していた遺構の一つである。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

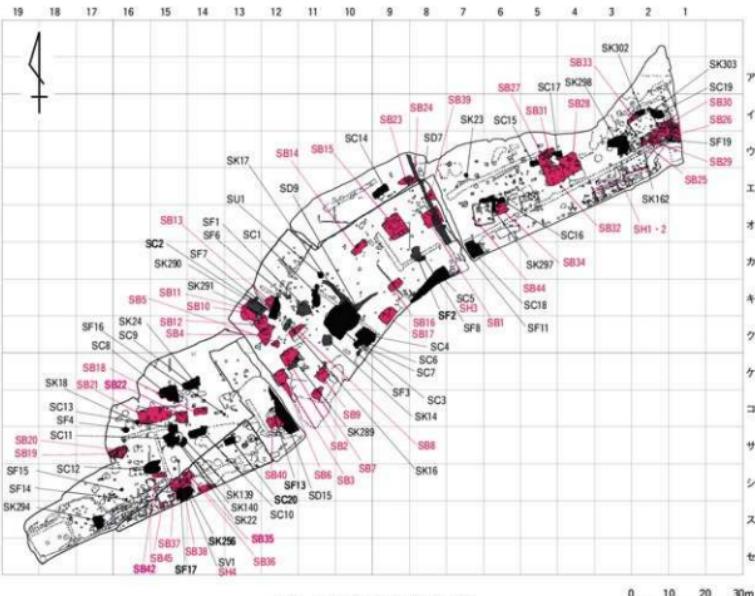


図24 古代の主要遺構分布図

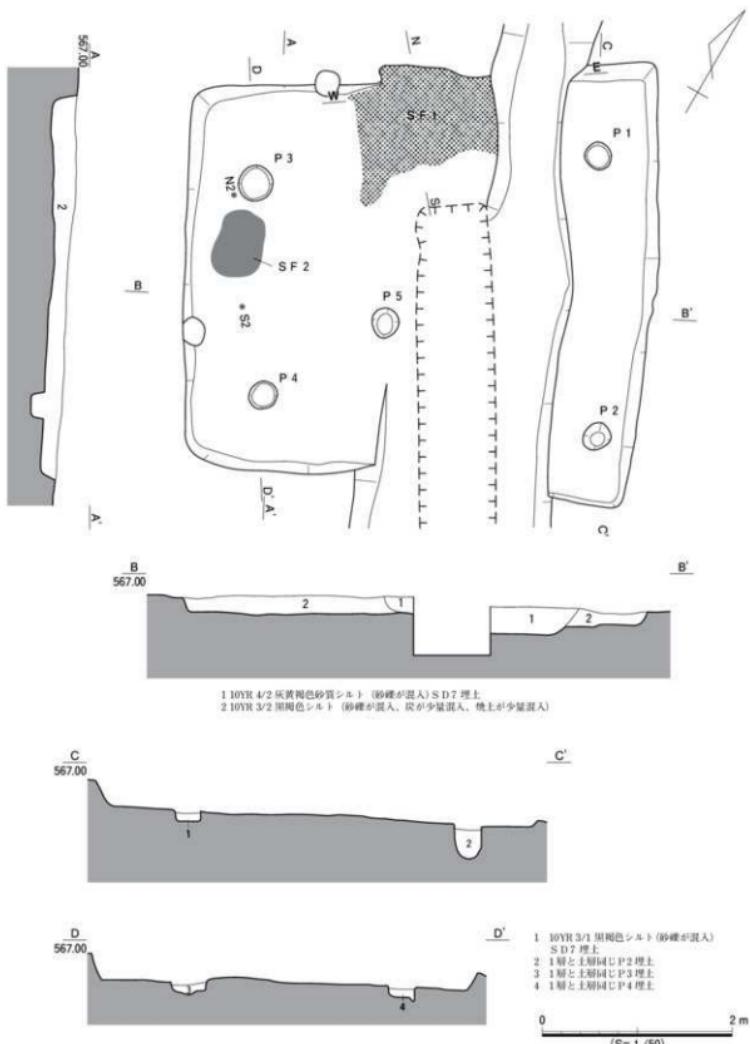


図25 SB 1 遺構図 (1)

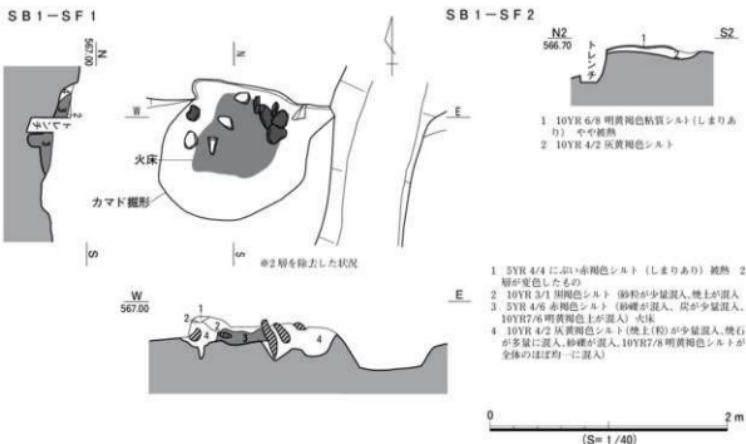


図26 SB 1 遺構図（2）

床面状況 斜面に沿うようにわずかに南側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。SD 7 の東側に位置する床面が一段低くなっているが、掘り過ぎた可能性がある。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。検出時には、床面上に炭・焼土・黄褐色土ブロックなどが混在した堆積（以下「カマド構造材」という）が見られ、これを除去したところ、火床と下部土坑を検出した。袖部は残存していなかったが、袖部の芯材と考えられる被熱した角礫が現位置を保った状態で出土した。カマド跡が接する箇所の竪穴住居跡の掘形は、煙道部構築に伴う張り出しが見られた。

主柱穴 床面から5基のピットを検出した。このうちP 1～4が主柱穴と考えられる。すべての柱穴跡がよく似た埋土であった。

付属遺構 遺構西側中央の床面上に焼土が見られたが、その性格は不明である。

出土遺物 合計117点が出土し、そのうち2点を図示した。いずれも須恵器有台环であり、60は底部内面に不定方向のケズリ調整が施されている。

所属時期 有台环（掲載番号60・61。以下、番号は掲載番号を示す。）の体部の角度から、古代2期と考えられる。

S B 2 (遺構: 図27・28、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図135)

検出状況 クーケ12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。南側はSK 289に切られる。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 わずかに南側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。検出時には、南側にカマド構造材が広がっていた。残

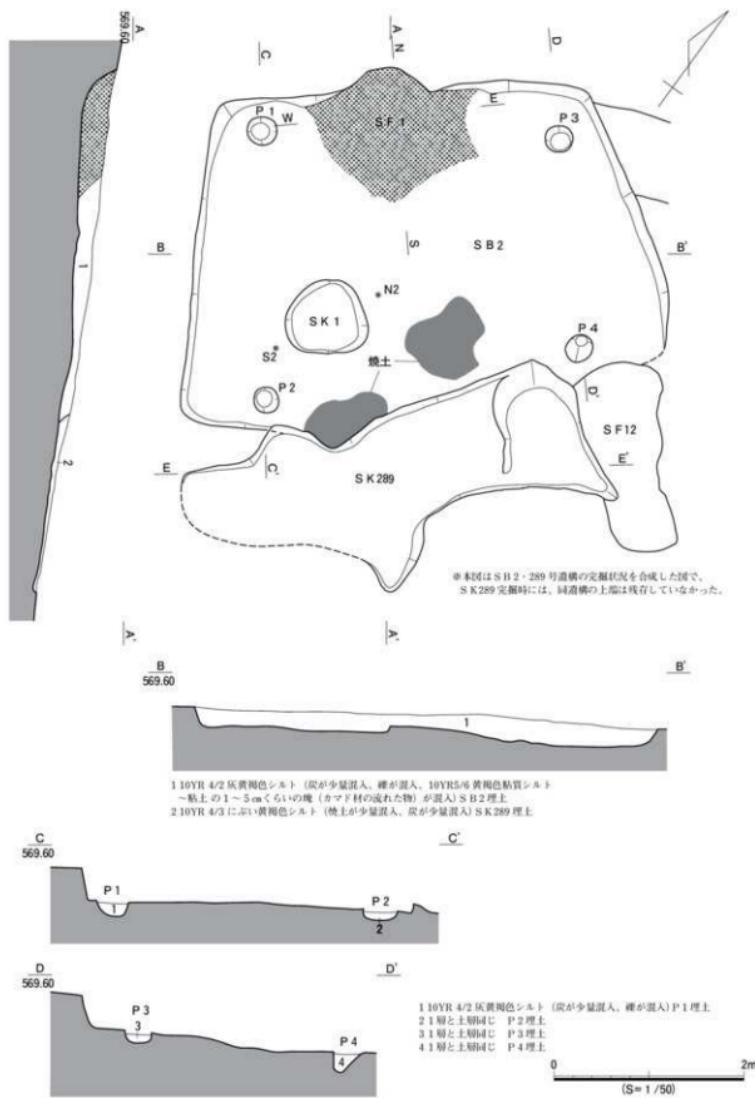


図27 S B 2・S K 289遺構図（1）

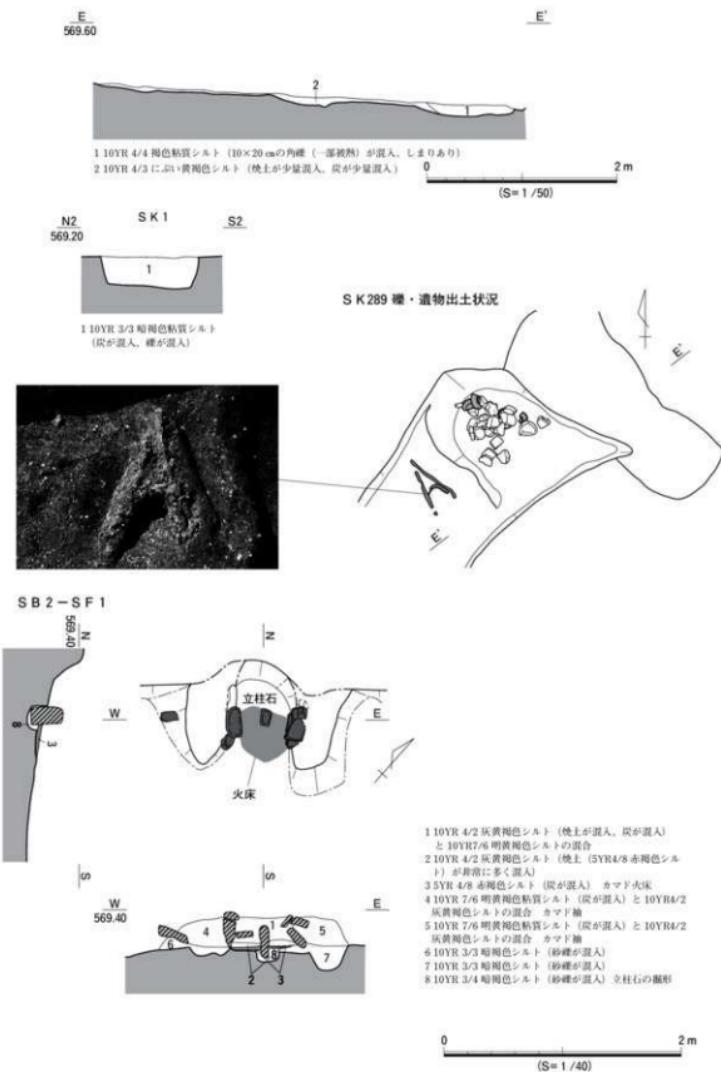


図28 SB 2・SK 289遺構図（2）

存状況が良く、天井部以外の構造がほぼ確認できた。火床は立柱石の南側にあり、その両脇には火床側の袖石がむき出しとなった状態で黄褐色粘土に被覆されていた。このような状況は他のカマド跡でも見られ、袖石がカマドの内壁を兼ねていたと考えられる。石材は砂岩(角礫)で、強く被熱している。立柱石には掘形が伴うが、袖石はカマド下の充填土と考えられる6・7層から浮いた状態であった。なお、両袖部の下は若干掘り込まれた状況が見られ、

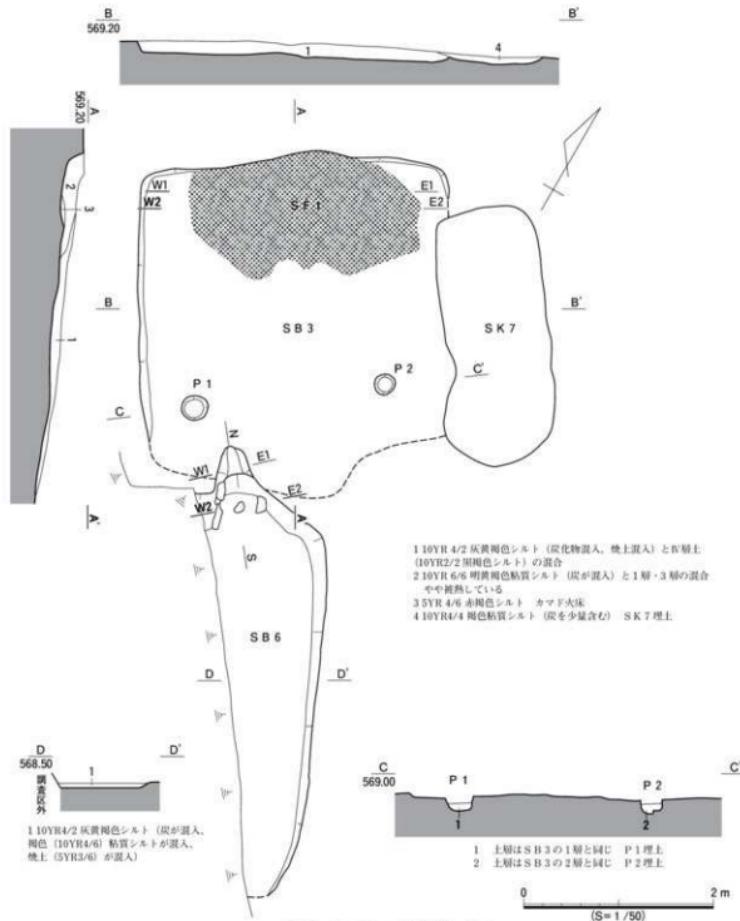


図29 SB 3 · 6 遺構図 (1)

カマド跡が接する竪穴住居跡の掘形には、煙道部構築に伴う張り出しが見られた。

主柱穴 掘形の四隅に近い位置から4基の主柱穴（P1～4）を検出した。

付属遺構 遺構南側のSK289に近い床面で焼土を検出した。また、その焼土に近接した位置から土坑（SK1）を検出したが、性格は不明である。

出土遺物 合計255点が出土した。須恵器と灰釉陶器の比率はほぼ同じで、図示していないが縁釉陶器の細片も出土している。そのうち11点を図示した。64は灰釉陶器碗であり、高台端部に茎状痕が明瞭に残る。66は須恵器碗であり、底部外面のヘラ記号は先端の丸い工具を用いて描かれている。70は須恵器長頸壺であり、高台接地面の摩滅が顕著である。

所属時期 灰釉陶器の形態から古代4期と考えられる。

S B 3 (遺構: 図29・30、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図135・136)

検出状況 ケ12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構の南側は竪穴住居跡であるSB6によって切られる。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南側に向かって傾斜しており、床面南側が特にその傾向が強い。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材は南側に広がっており、その下から火床と立柱石を検出した。また、本来カマドの袖があったと考えられる場所から対になったピットを検出した。このようなカマドの下部構造は、SB38のカマド跡でも確認できた。火床の北側に立柱石があり、この立柱石を固定するための掘形を検出した。カマド跡が接する竪穴

S B 3-S F 1 (カマド用材堆積除去後)

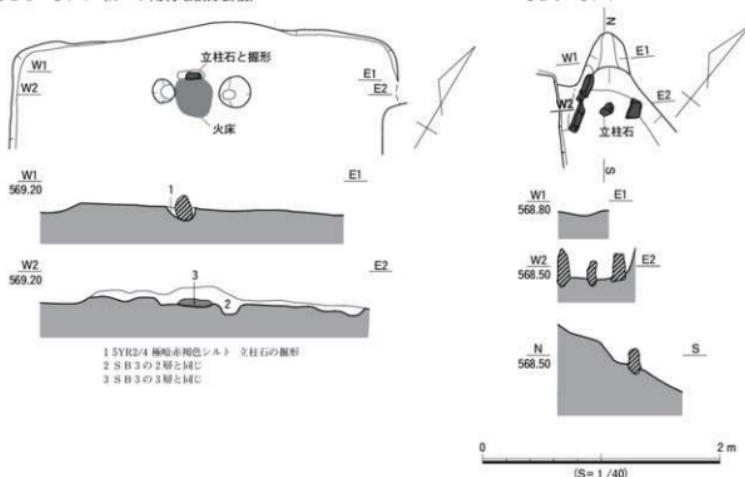


図30 SB 3・6 遺構図(2)

住居跡の掘形は、煙道部構築に伴う緩やかな張り出しが見られた。

主柱穴 遺構床面の南側から2基のビットを検出した。これ以外にビットではなく、2本の主柱穴で支える上屋構造の建物である可能性がある。

出土遺物 合計75点が出土したが、大半は土師器の小片である。そのうち4点を図示した。73は須恵器有台环であり、底部外面はヘラ切り後ナデ調整が施され、「三□」の墨書とヘラ記号が描かれている。74は土師器甕であり、口縁端部を上方につまみ上げている。76は須恵器甕であり、頸部外面と体部内面が施釉されている。

所属時期 出土遺物（73）から古代3期と考えられる。

S B 4（遺構：図31・32、遺構全体図分割図⑯～⑰、遺物：図136・137）

検出状況 ク12～13グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。北側はS B12と切り合っており、S B 4はS B12より新しい。遺構掘形の南・東側は残存しておらず、削平を受けたか斜面側の掘形が流出した可能性がある。

堆積状況 2層は1層より基盤層の土を多く含み、しまりがよい。

床面状況 わざかに南側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出し、検出時にはカマド構造材に覆われていた。このカマド跡は天井部以外の構造がほぼ残存していた。立柱石は火床と考えられる焼土範囲の北側にあり、その両脇の袖部では袖石がむき出しとなった状態で黄褐色粘土に被覆されていた。袖芯材の石材は砂岩（角礫）で、強く被熱している。立柱石には明確な掘形が無かったが、被熱による変色や硬化により識別できなかった可能性もある。袖部の下は袖石を立てるための掘形（5層）が確認できた。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には煙道部構築に伴う張り出しが見られ、その壁面が被熱していた。

主柱穴 検出したビットは1基のみであり、主柱穴であるかどうか判断できない。

出土遺物 合計404点が出土した。特に、カマド跡やその周辺から数個体の灰釉陶器の碗がまとまって出土している。そのうち14点を図示した。77～87は灰釉陶器碗である。78は口縁部が歪み、一部分が片口状に突出している。81は底部内面にナデ抜き痕が残り、84の体部外縁のロクロ目は細かい。82は体部内面全面に漆が付着している。

所属時期 カマド跡出土遺物（77～79）から、古代5期と考えられる。

S B 5（遺構：図33、遺構全体図分割図⑯）

検出状況 ク12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。削平により北側の一部のみ残存していた。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 緩やかに南側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。埋土除去後に火床とカマドの痕跡と考えられる堆積土を検出したものの残存状況は良くない。カマド跡が接する竪穴住居跡の掘形には煙道部構築に伴う大きな張り出しが見られた。

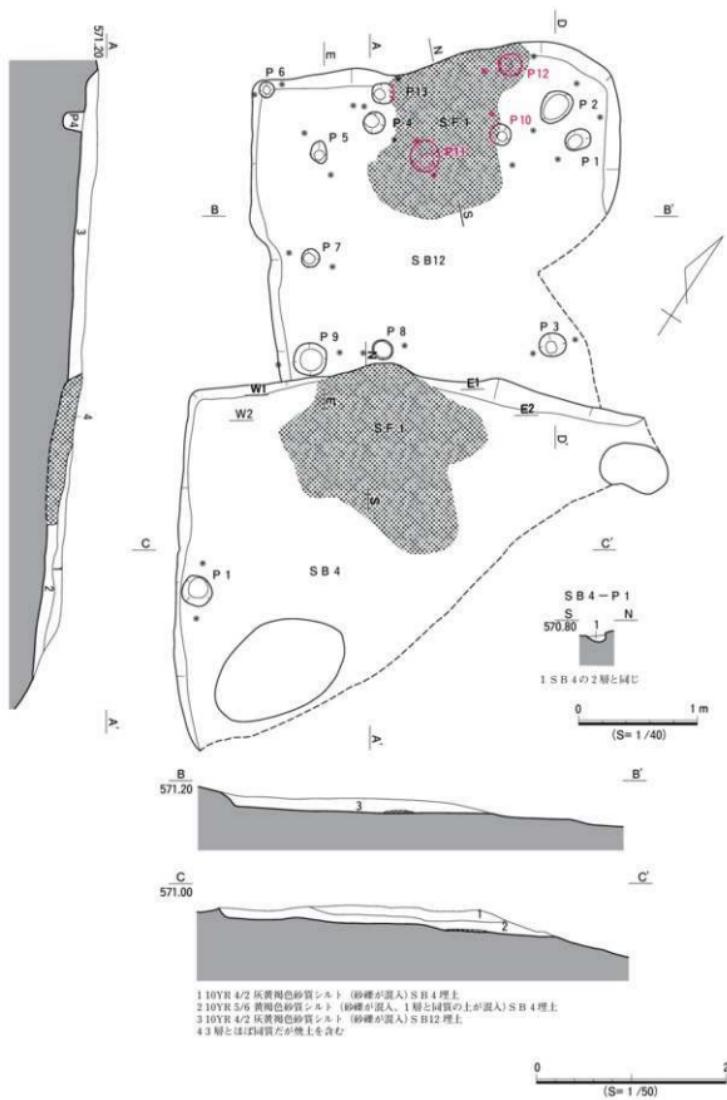


図31 SB 4・12遺構図（1）

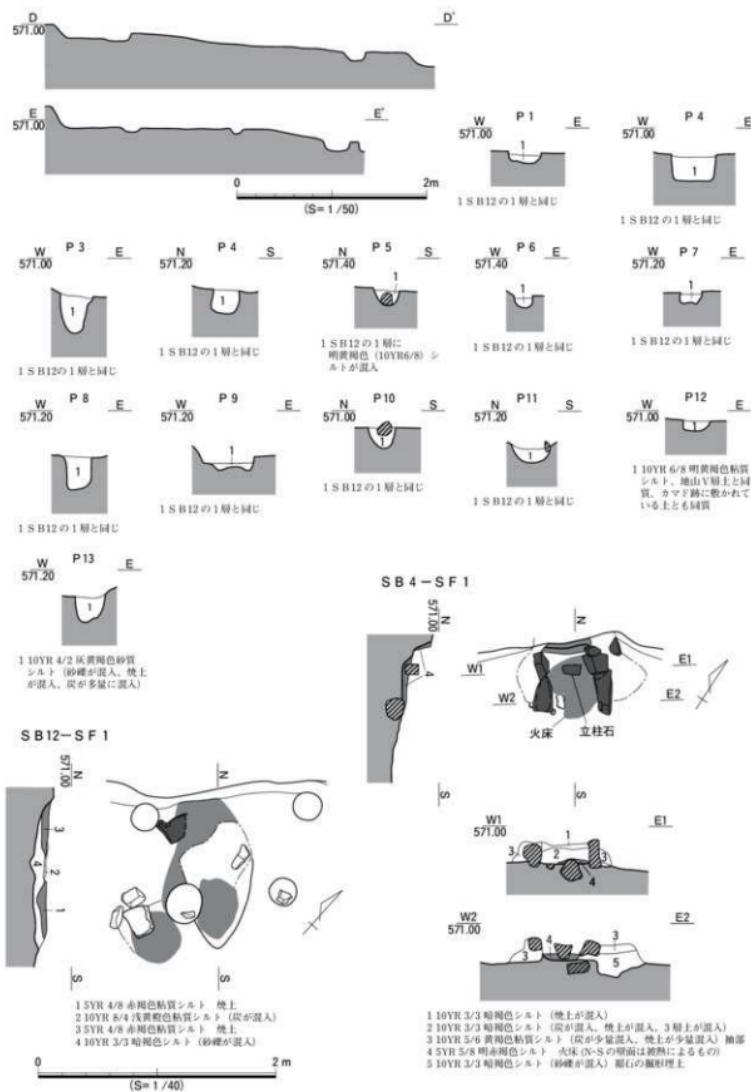


図32 S B 4・12遺構図(2)

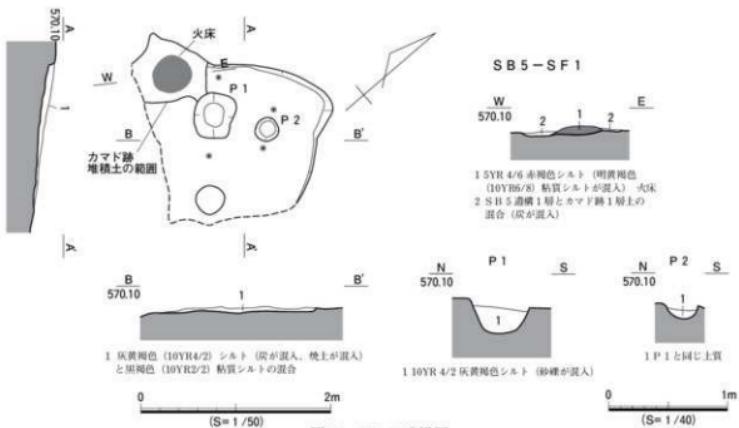


図33 SB 5 遺構図

主柱穴 床面から2基のピットを検出したが、主柱穴は確認できなかった。

出土遺物 合計5点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S B 6 (遺構: 図29・30、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図137)

検出状況 ケーラー12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構の北側は竪穴住居跡であるSB 3と切り合っており、SB 6の方が新しい。遺構の西側は調査区外になるため、全容は不明である。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 わざかに南側に向かって傾斜しているようであるが、詳細は不明である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。遺構の形状から考えると方形の掘形の北東隅に当たる。なお、今回の調査区では、SC 10で同様な位置にカマドが設置されている。湧水が激しかつたためにカマド跡の埋土の観察はできなかつたが、立柱石と袖石を確認し、西側の袖石は黄褐色粘土で被覆した痕跡が見られた。袖石の状況から、SB 2のようにカマド内側に袖石がむき出しになっていた可能性が高い。袖石は基盤層にめり込むように立てられており、明確な掘形は確認できなかつた。カマド跡が接する竪穴住居跡の掘形は、煙道部構築に伴う緩やかで大きな張り出しが見られた。

主柱穴 調査した範囲内では、ピットを確認することができなかつた。

出土遺物 合計88点が出土し、そのうち3点を図示した。92は須恵器有台环であり、口縁部が尖り気味に成形されている。

所属時期 カマド跡出土遺物(93)から、古代3期と考えられる。

S B 7 (遺構: 図34、遺構全体図分割図⑯~⑰、遺物: 図137)

検出状況 ケヘコ11グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構の南側は残存しておらず、

斜面側の掘形が流出した可能性がある。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 ほぼ水平を呈する。貼床は確認できなかった。

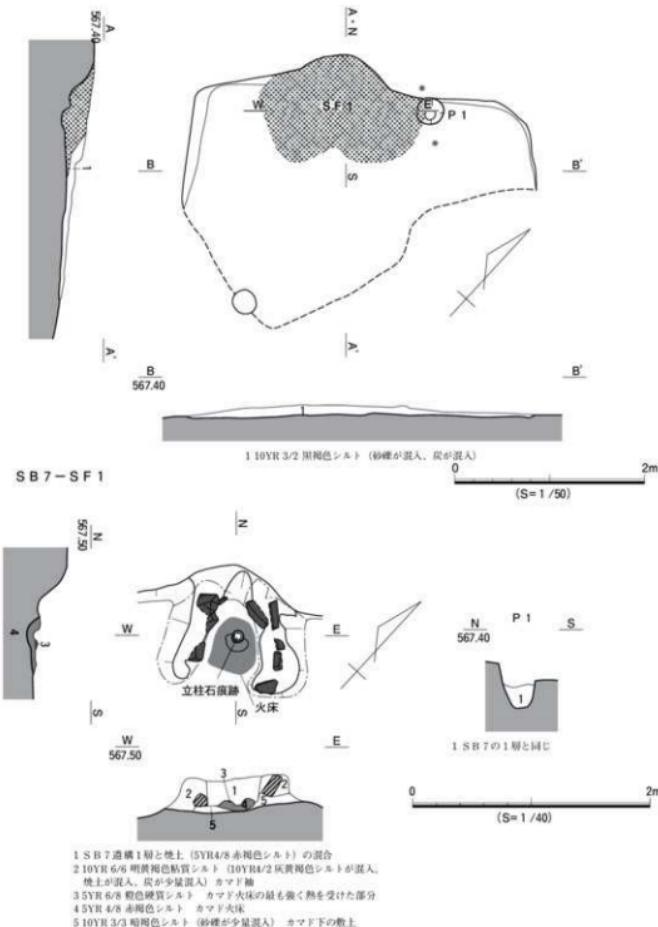


図34 S B 7 遺構図

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出し、検出時にはカマド構造材に覆われていた。立柱石は残存していないなかったが、火床と考えられる焼土範囲の中央南寄りからその掘形と思われる痕跡を検出した。火床は、その立柱石痕跡周辺の最も強く被熱していた部分と思われる。袖石はほぼ完存しており、黄褐色粘土に被覆されていた。袖芯材に使われた石材は砂岩（角礫）で、被熱していた。カマド跡の下部は若干窪んだ状況で暗褐色シルトが敷かれており、火床の焼土はこの土が被熱して変化したものである。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には煙道部構築に伴う張り出しが見られた。

主柱穴 床面上からビットは検出できなかった。

出土遺物 合計95点が出土し、そのうち7点を図示した。97は灰釉陶器碗であり、高台端部に板状圧痕が顕著に残る。100は須恵器甕であり、体部内面に釉薬が垂下している。

所属時期 埋土中から出土した灰釉陶器の形態から、古代5期と考えられる。

S B 8 (遺構: 図35、遺構全体図分割図⑯～⑰、遺物: 図138)

検出状況 ケ11～12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。南側は平成12年度に行った試掘確認調査のトレーンチで切られている。

埋土状況 西壁際に自然堆積と考えられる三角堆積が見られる。

床面状況 東側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。埋土除去後に焼土、袖部の粘土、カマド下の敷土を確認し、火床と思われる位置に焼土の堆積を認めた。その両脇に袖部に使われたと思われる粘土が堆積しており、廃棄の際に袖石を抜き取った可能性がある。なお、3層に3cmほどめり込んだ状態で、袖石と考えられる礫を1個検出した。

主柱穴 床面上から3基のビットを検出したが、それぞれ対応する位置にないため、主柱穴になるか不明である。

出土遺物 合計47点が出土し、そのうち5点を図示した。104は須恵器横瓶であり、体部外面に線刻が施されている。

所属時期 埋土中から出土した須恵器の形態(102・103)から、古代3期と考えられる。

S B 9 (遺構: 図36、遺構全体図分割図⑯、遺物: 図138)

検出状況 ケ11グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構掘形南側は残存しているが、西側が搅乱によって削平されていた。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南側に向かって緩やかに傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接し、黄褐色粘質シルト(1層)の堆積を床面上に盛り上がった状態で検出した。この堆積の除去後、火床と考えられる焼土を検出した。また火床の北東側にはカマドを構築する際に作られた下部土坑があり、土が充填されていた。火床の焼土は、この充填土が被熱したものと考えられる。なお、遺構から北西に延びるSK96は、カマドの煙道部である可能性もある。

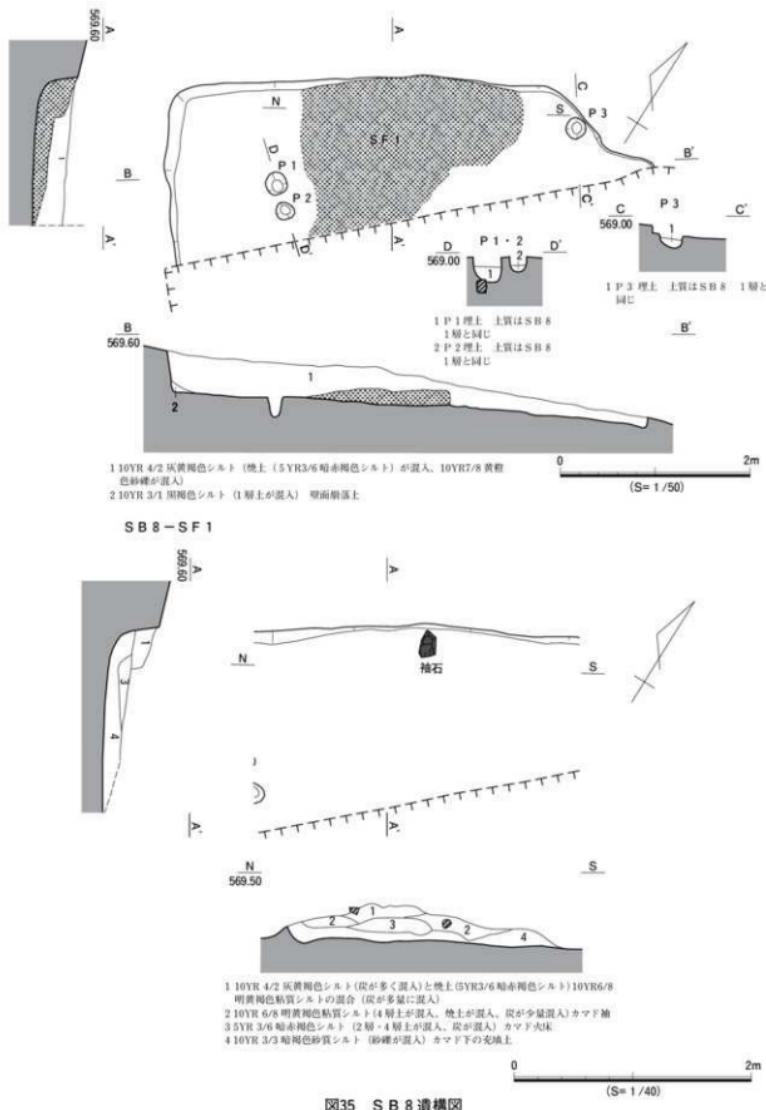


図35 SB 8構造図

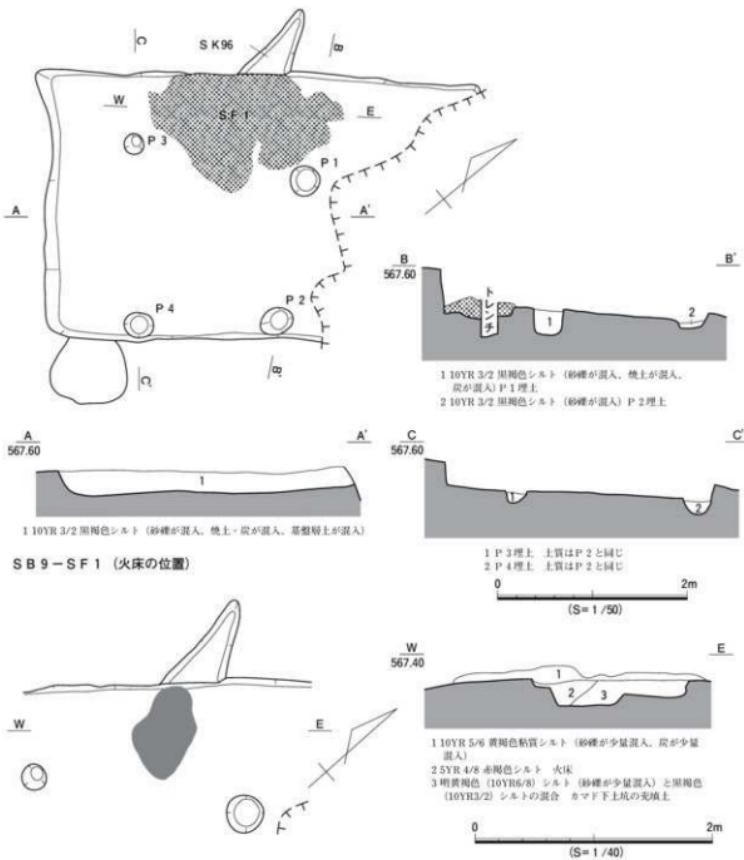


図36 SB 9 遺構図

主柱穴 床面から4基のピットを検出した。これらが主柱穴と考えられるが、それぞれが対応した位置にないため、搅乱を受けた部分に本来の主柱穴が存在する可能性がある。

出土遺物 合計126点が出土し、そのうち6点を図示した。106は須恵器無台壺であり、底部外面はヘラ切り未調整で板状压痕が残る。108は須恵器無台碗で、胎土中に長さ約10mmの石英が含まれている。

所属時期 埋土中の遺物（106・109）から、古代3期と考えられる。

S B10 (遺構: 図37・38、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図138)

検出状況 キュウ13グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。切り合う4基の遺構の内、S K290に切られ、S B11を切る。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南西側に向かって緩やかに傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材ではなく、火床と敷土あるいは袖部と考えられる層が残存していた。この堆積の除去後火床と考えられる被熱部分を検出した。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には、煙道部構築に伴う緩い張り出しが見られた。

主柱穴 床面から3基のピットを検出した。それぞれが対応する位置にないため、どのピットが主柱穴になるかどうかは不明である。

出土遺物 合計283点が出土し、そのうち7点を図示した。114は灰釉陶器深碗であり、体部外面下方に回転ヘラケズリ調整が施されている。115は灰釉陶器碗の転用硯であり、高台端部の摩滅が顕著である。117は須恵器甌であり、頸部と体部内面の境が内側に突出している。118は土師器甌であるが、器面の摩滅が顕著で調整が不明である。

所属時期 床面直上から出土した灰釉陶器（115）の高台が低く丸みを帯びていることから、古代6期と考えられる。

S B11 (遺構: 図37・38、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図139)

検出状況 キュウ13グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。切り合う4基の遺構の中で最も古い。平面形は不定形だが、壁際で焼土を検出したため竪穴住居跡とした。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はないが、床面の一部に鉄分沈着により褐色に変化した層を確認した。水の浸透に起因するものだとすれば、この部分が水の浸透を鈍らせるほど硬化していた可能性もある。

床面状況 北東・南西の床面が緩やかに低くなり、床面南東部がほぼ水平になる。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁付近から被熱部分を検出した。この焼土は完掘するとピット状になっており、埋土の表面のみ被熱していた。

主柱穴 床面上からピットは検出できなかった。

出土遺物 合計398点が出土し、そのうち16点を図示した。121は腰部に張りのある小型の灰釉陶器碗で、口縁部に四方輪花が施されている。122は灰釉陶器碗であり、高台は体部外面下方に貼り付けられている。131は須恵器風字硯であり、側面は手づくね成形、底部外面には不定方向のナデ調整が施されている。134は石製遙方である。潜り穴が四方に穿たれ、裏面左側は二次的に斜めに研磨されている。

所属時期 埋土出土遺物のうち須恵器は古い様相があるものの、灰釉陶器全体の様相から古代5期と考えられる。

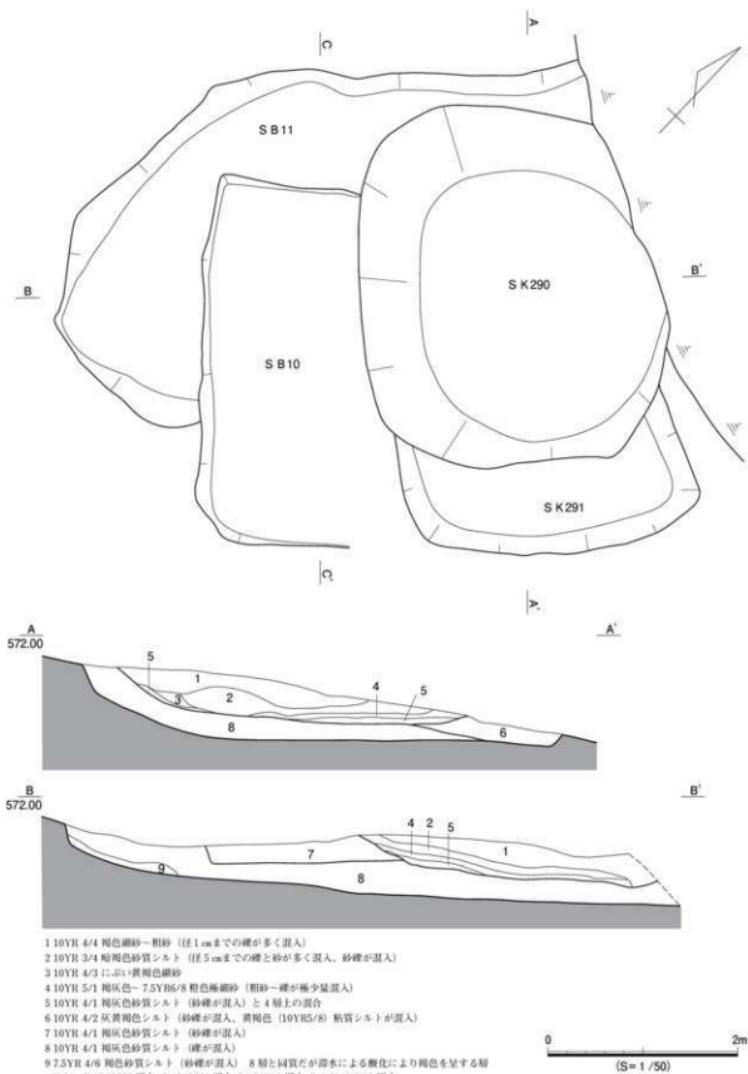


図37 SB10・11、SK290・291遺構図(1)

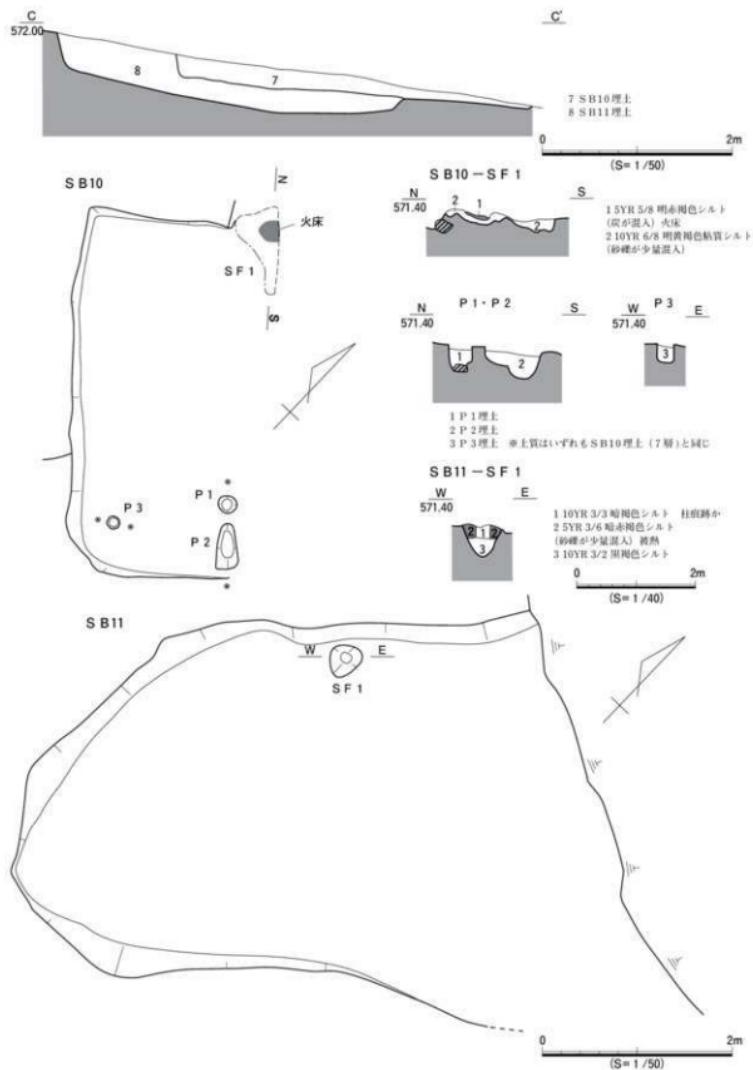


図38 SB10・11、SK290・291造構図（2）

S B 12 (遺構: 図31・32、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図139)

検出状況 ク12～13グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。南側はS B 4と切り合っており、S B 4の方が新しい。なお、東側の一部は、削平あるいは流出により残存していなかった。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 緩やかに南側に向かって傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出し、焼土とカマド構造材を確認した。火床と考えられる焼土は3箇所に見られ、カマドの作り替えが行われた可能性がある。この焼土下には浅い掘り込みがあり、その充填土の上面が被熱していた。立柱石や袖石などは検出できなかったが、図32の網掛けで示した礫は焼土にめり込むようにして検出したため、現位置を留めている可能性がある。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀中頃から後半の年代が推定された（第4章第5節参照）。また、特徴的な焼土の状況から鍛冶関連遺構の可能性を考え、埋土の水洗選別を行ったが、鍛冶関連遺物は検出できなかった。

主柱穴 床面から13基のピットを検出した。そのうち3基（P11～13）は、カマド構造材の堆積下で検出し、そのうちP11は焼土を切っていた。残りの10基の内、P 2・3・5・9が主柱穴の可能性がある。

出土遺物 合計31点が出土し、そのうち4点を図示した。136は須恵器有台盤の転用鏡である。胎土が粗雑で他の須恵器より軽い印象があり、底部内面が平滑で黒色有機物が付着している。138は砥石であり、穿孔が2箇所に施されている。

所属時期 床面直上の出土遺物（135）から、古代5期と考えられる。

S B 13 (遺構: 図39、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図140)

検出状況 キ12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。南側はS C 2と切り合っており、S C 2の方が新しい。また、北側の一部が平成12年度に行った試掘確認調査のトレンチで切られている。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存する部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。埋土中に袖部などを構築している黄褐色土が多く混入していたことから、廃棄の際に袖石を抜き取った可能性が高い。断割り調査の結果、袖部の痕跡（西側）と火床を確認した。なお、この火床を切るピットを1基（P 2）検出したが、カマドの構造との関係は不明である。

主柱穴 床面上から2基のピットを検出し、そのうちP 1は主柱穴の可能性がある。その他の主柱穴は確認できなかった。

出土遺物 合計37点が出土し、そのうち4点を図示した。140は灰釉陶器皿であり、被熱によるためか器面にあばた状の小さな窪みが多くある。142は灰釉陶器碗であり、角高台を有し、内面に灰釉が刷毛塗りされている。

所属時期 床面直上の出土遺物（142）から、古代4期と考えられる。

SB14(遺構:図40、遺構全体図分割図②)

検出状況 オ～カ10グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構掘形南側は残存していない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南側に向かって緩やかに傾斜している。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド袖部と考えられる堆積(1層)やわずかな被熱

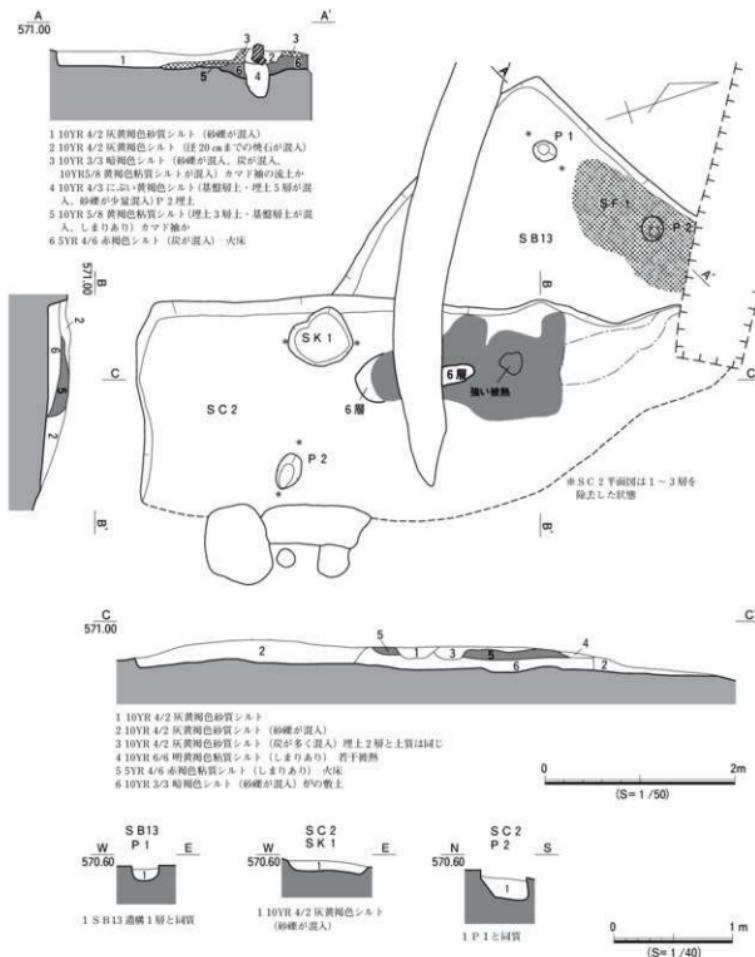


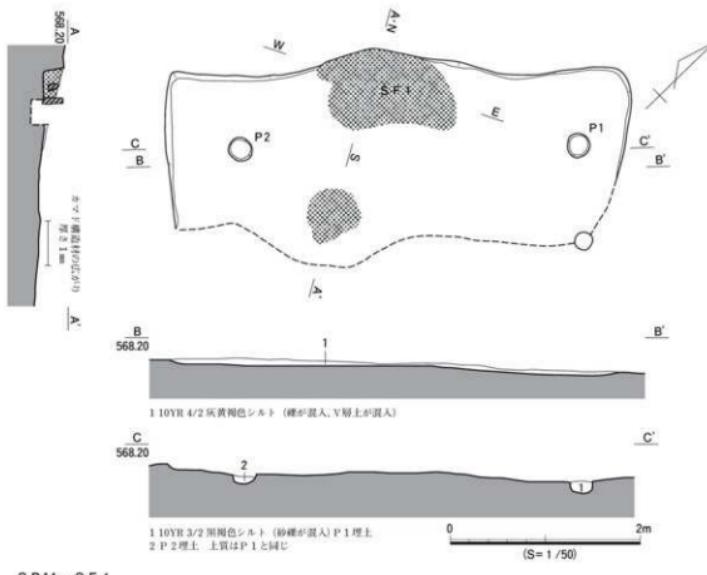
図39 SB13・SC2 遺構図

部分（2層）を確認し、立柱石が残存していた。また、袖石は検出時に露出していたが、いくつかは現位置を保っていると思われる。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には、煙道部構築に伴う緩い張り出しが見られた。

主柱穴 床面の2基のピット（P1・2）は主柱穴と考えられる。

出土遺物 合計8点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。



SB14 - SF1

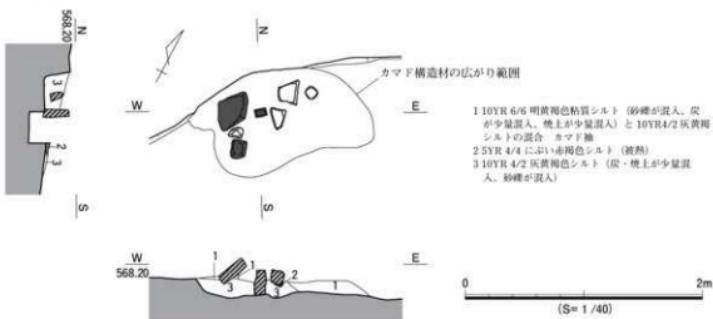


図40 SB14遺構図

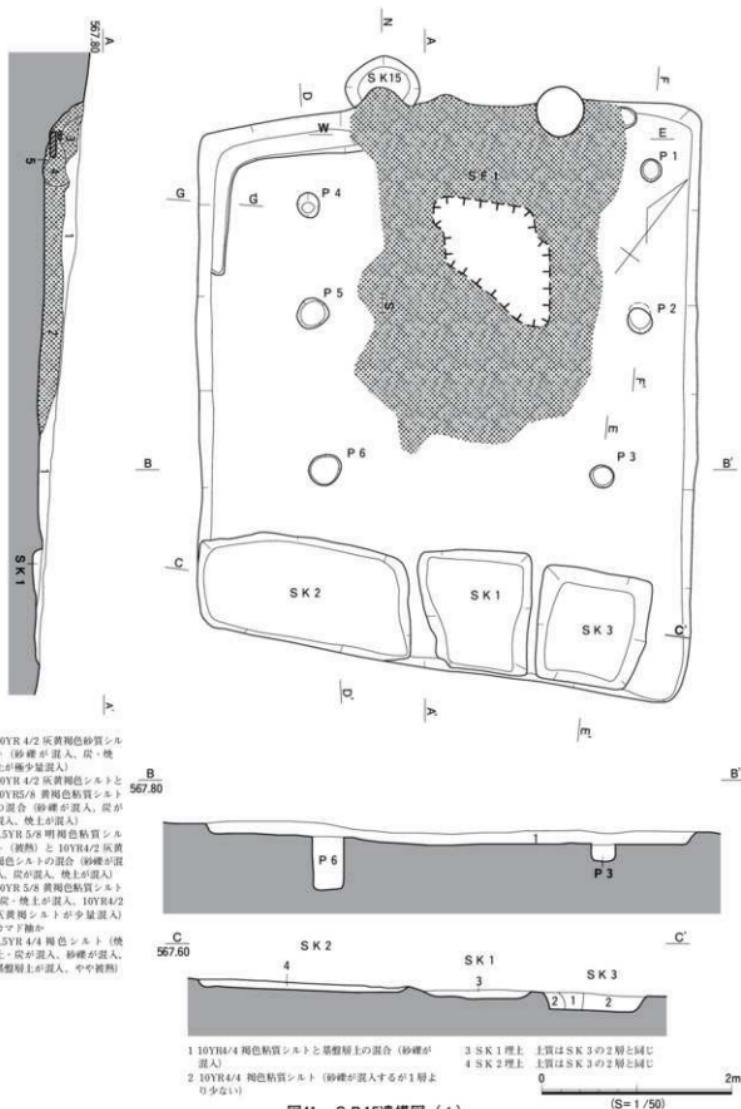


図41 S B15構造図 (1)

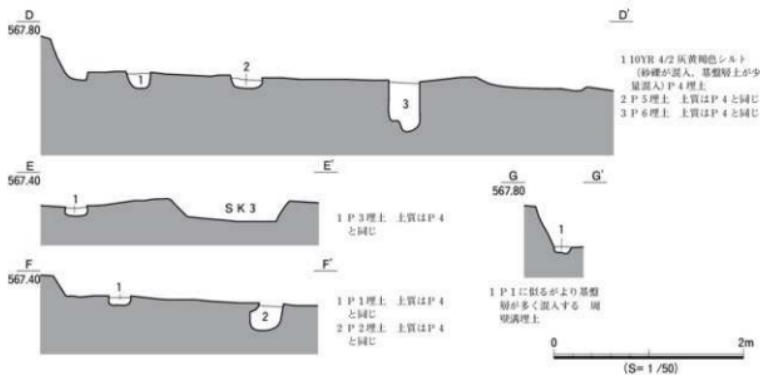
S B 15 (遺構: 図41・42、遺構全体図分割図⑪～⑫、遺物: 図140)

検出状況 オ9グリッドの、山側の斜面上で検出した。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 ほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 カマド構造材を北壁から中央にかけて検出し、北壁付近の床面直上には火床である焼土や焼磚が残存していた。火床西側にあるSK 15は、基盤層に似た均質な土で人為的に埋められており、埋土が硬化していたため、S B15のカマドに伴う施設の可能性がある。



S B 15 - S F 1

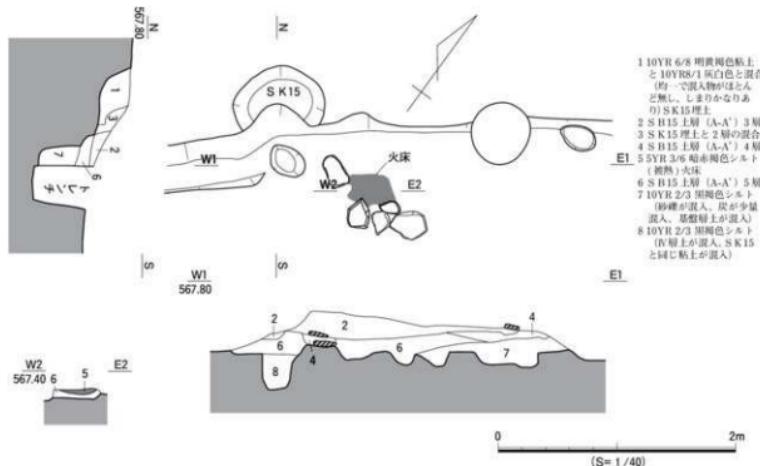


図42 S B 15遺構図 (2)

主柱穴 床面の3基ずつ南北に並んだ6基のビット（P 1～6）が主柱穴である。このような配列の主柱穴をもつ竪穴住居跡は、今回の調査では他に事例がない。

付属遺構 遺構南端の床面上で方形土坑を3基検出した。断面観察からS K 1は本遺構に伴うか、それ以前の遺構であることを確認したが、S K 3から近世陶器が出土するなど、すべてがS B 15に伴う遺構ではない可能性がある。その他、東隅の角のみ周壁溝が巡る。

出土遺物 合計82点が出土し、そのうち8点を図示した。150は板状の金属製品であり、体部が約90度ねじれている。

所属時期 カマド跡の出土遺物（143・146・147）から、古代3期と考えられる。

S B 16（遺構：図43、遺構全体図分割図⑫）

検出状況 カヘキ9グリッドの、比較的緩やかな斜面上で検出した。S D 12に切られ、遺構の南側は流出により残存していない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 ほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の堆積はなく、埋土除去後にカマドの基

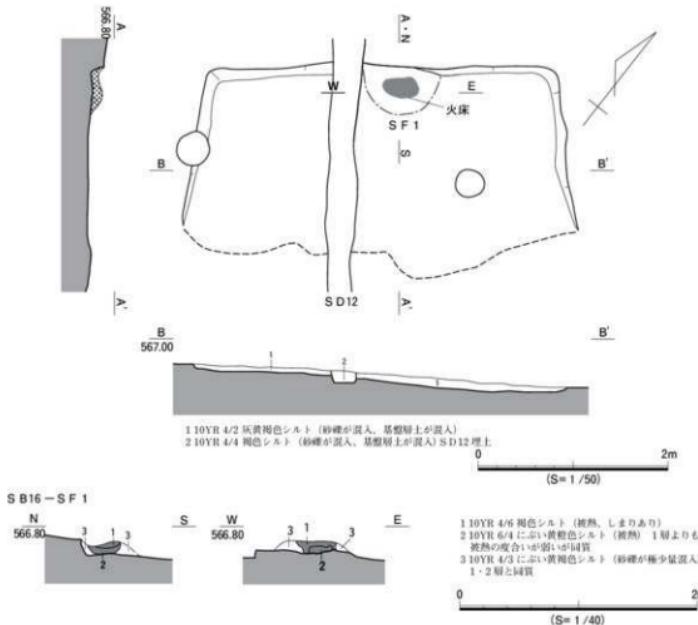


図43 S B 16遺構図

底部である黄褐色土と火床と考えられる被熱部分を確認した。

主柱穴 床面上からピットは検出できなかった。

出土遺物 合計3点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S B17 (遺構: 図44、遺構全体図分割図13、遺物: 図140)

検出状況 キーク9グリッドの、調査区南壁に接して検出した。この付近は、比較的傾斜が緩やかで

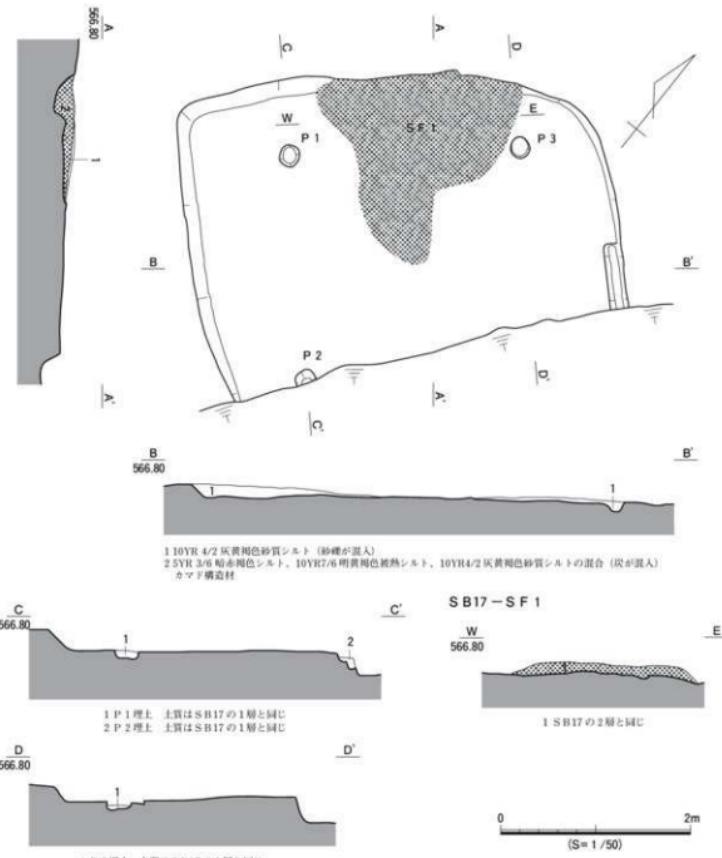


図44 SB17遺構図

ある。遺構掘形南側は調査区外であり確認することができなかった。また、この付近は湧水があるため、やむを得ず遺構の一部を排水溝によって破壊した。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

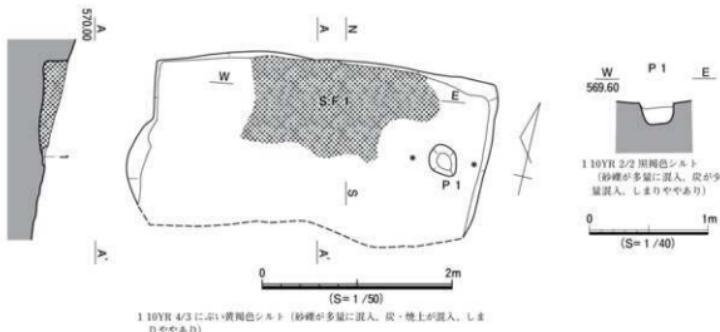
床面状況 ほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の堆積土のみを検出し、その他の構造材は残存していないかった。

主柱穴 床面上で検出した3基のビット（P1～3）が主柱穴と考えられる。

付属遺構 遺構の東側隅に周壁溝を確認した。

出土遺物 合計58点が出土し、そのうち7点を図示した。152・153・155・156は灰釉陶器碗であり、



SB18-SF1 検出状況

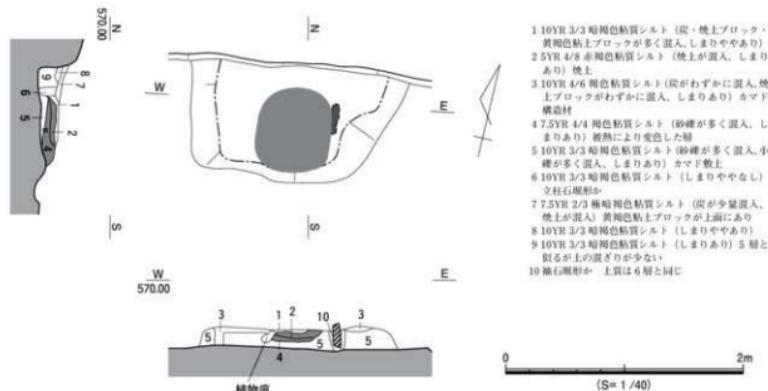


図45 SB18遺構図

152の体部内面には板状工具による回転ナデ調整が施され、153は高台は丸みを帯び、底部外面は回転糸切り後ナデ調整が施されている。

所属時期 埋土中の出土遺物のうち、最新の土器（153）の形態から、古代5期と考えられる。

S B 18（遺構：図45、遺構全体図分割図②、遺物：図140）

検出状況 コ14グリッドの、傾斜がやや強い斜面上で検出した。遺構掘形南側は流出により残存していない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部はほぼ水平である。断割り調査を行ったが、貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド下の盛土と考えられる5層の上面に、袖部の基底部が残存していた。盛土上面中央に火床と立柱石の痕跡と考えられる小穴、袖石を確認した。この袖石は火床との関係から、直接被熱するカマドの内壁になっていたと考えられる。断割り調査の結果、袖石は5層を掘り込んで設置されていた。

主柱穴 床面上から1基のピット（P 1）を検出したが、主柱穴か否かは不明である。

出土遺物 合計23点が出土し、そのうち5点を図示した。158・159は須恵器有台坏である。158は底部外面に「東」の墨書が小さく記されており、体部の傾斜が強い。159は底部外面が下方に張り出し、ヘラ切り後不定方向のケズリ調整が施されている。また、口縁部はナデ調整によりわずかに凹む。

所属時期 出土遺物（158・159）から、古代2期と考えられる。

S B 19（遺構：図46・47、遺構全体図分割図③、遺物：図141・142）

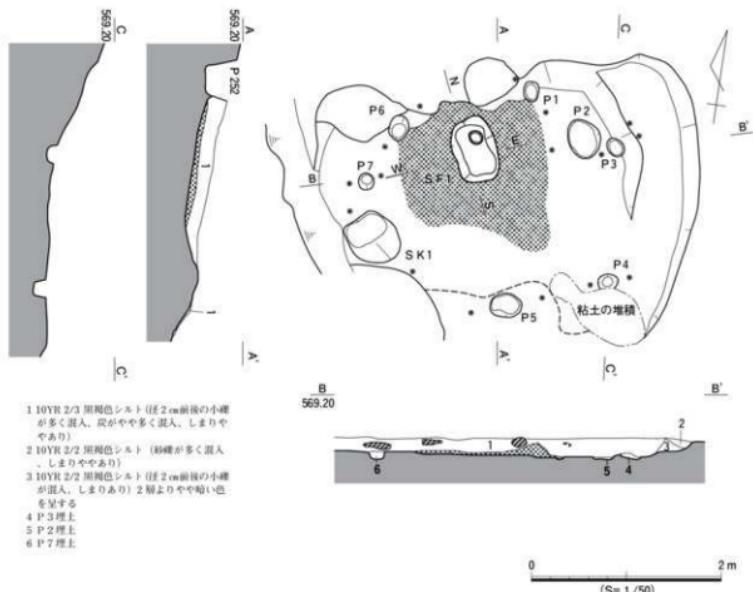
検出状況 サ16～17グリッドの、傾斜がかなり強い斜面上で検出した。東側はS B 20を切っており、南側は流出により残存していない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部はほぼ水平であるが、カマド跡の南側が若干盛り上がっている。また主柱穴と推定したP 4の南側には貼床状の硬化した粘土が堆積している。なお、遺構西側にテラス状の段があるが、S B 20の床面を認めた可能性がある。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材は薄く、床面中央部まで広がっていた。この堆積を除去する過程で本住居跡より新しい方形の土坑を確認したが、詳細な記録を残すことはできなかった。カマド構造材の除去後、西側の袖石とその掘形、火床を確認した。袖石の石材はいずれも砂岩（角礫）で、被熱していた。火床は袖石に接しており、袖石自体が燃焼室の壁になっていた可能性が高い。袖石の掘形は床面を掘り込んでおり、東側の袖石や立柱石は前述した土坑によって滅失したと考えられる。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には、煙道部構築に伴う張り出しがあり、被熱が見られた。

主柱穴 床面上で7基のピットを検出した。このうち、P 3・4・7が主柱穴と思われるが、いずれも非常に浅く断定はできない。また、カマドの両脇にあるピットP 1・6は、カマドと何らかの関わりがあった可能性がある。なお、P 1の上面から羽釜（185）が内面を上にして



S B19 - S F 1 完掘状況

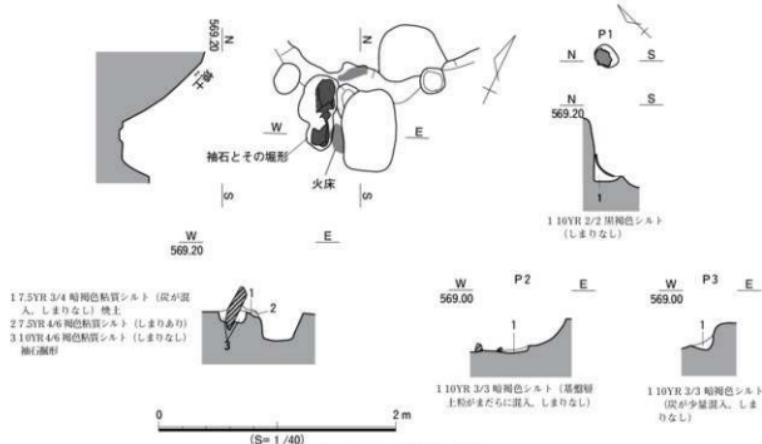


図46 S B19遺構図 (1)

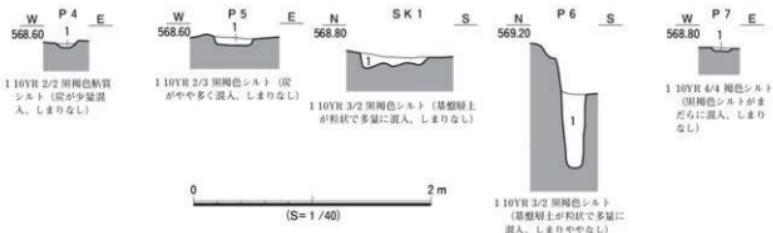


図47 S B19遺構図（2）

出土した。

出土遺物 合計237点が出土し、そのうち27点を図示した。163～170は須恵器無台碗であり、その底部外面調整は167のみ回転ヘラケズリで、他はすべて回転糸切りである。174・179は灰釉陶器碗であり、いずれも体部外面及び底部内面に灰釉が刷毛塗りされているが、塗り方が粗雑である。182は灰釉陶器壺であり、器壁が薄く、青みのかかった透明な灰釉が施されている。185は土師器羽釜であり、189と同一個体である可能性が高い。体部から口縁部外面に煤が付着しているが、内面には煤は見られない。鉢は断面三角形を呈し、口縁部には一箇所片口を有する。カマド跡出土遺物は、165・168・169・173・177・178・180の7点であり、須恵器無台碗と灰釉陶器が複数まとまっている。いずれも在地産の土器であるが、その共伴関係は注目できる。なお、当遺構の出土遺物には、猿投窯製品（172・174・179・181・182）や美濃窯製品（183）など、他地域で生産された土器が多く、羽釜の形態も特異であり、他遺構の出土遺物と様相が大きく異なる。

所属時期 カマド跡の出土遺物（177・178）から古代4期と考えられる。

S B20（遺構：図48、遺構全体図分割図②、遺物：図142）

検出状況 サ16グリッドの、傾斜がかなり強い斜面上で検出した。遺構掘形の西側はS B19によって削平され、残存していない。

堆積状況 ほぼ単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南側に傾斜する。貼床は確認できなかった。

カマド跡 S B19に切られた被熱部分のみを検出した。

主柱穴 床面上から2基のピットを検出した。P 1は柱痕跡を確認できなかったが、径が大きく深いことから、主柱穴であると思われる。

出土遺物 合計22点が出土し、そのうち2点を図示した。190は須恵器無台碗であり、底部と体部の境が明瞭で、体部下端が強いナデ調整により凹む。191は灰釉陶器碗で、高台が細くて高い特徴を有する。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代4期と考えられる。

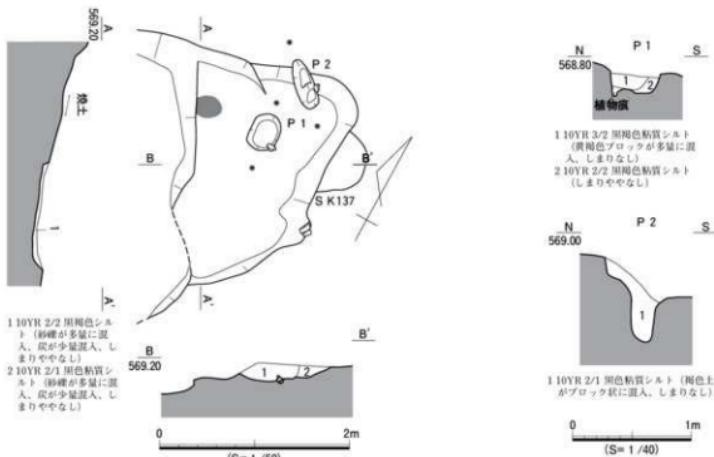


図48 S B20遺構図

S B21（遺構：図49～51、遺構全体図分割図②、遺物：図142・143）

検出状況 コ15グリッドの、傾斜がやや強い斜面上で検出した。検出時は、東西約10mの大型遺構と考えて掘削を進めたが、埋土上面では鍛冶跡であるS F22・23を確認し、断面観察や完掘後の状況から5基の遺構が切り合うことが判明した。図49に示したA～Eが、仮定した遺構の切り合い関係である。このうち、Cが竪穴住居跡で、その他は大型の土坑である。B～B'の土層断面図から、CはBに切られており、遺物の分布もCのカマド跡周辺に集中し、Bとの境から南は遺物出土密度が低い。以上から、AからEまでの遺構は独立して記載するが、あくまで仮定であるため、それぞれに遺構名を付せず、「S B21A」などとする。

S B21Cは斜面に構築されているにも関わらず、南側の掘形が明瞭に残る。S B21Bの西壁の掘形はSD38に沿って存在していたと思われる。また、南側も検出が不明瞭であるため、図に示した破線よりさらに南に広がる可能性が高い。

堆積状況 それぞれの遺構は単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 S B21Cを除いて、全体的に南へ向かって緩やかに傾斜している。なお、B及びCの床面には、平面で確認できなかったが貼床が存在した可能性がある（図50のS B21の土層断面図5・6層）。

カマド跡 S B21C掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の除去後、焼土が混入した堆積土とこれを取り巻くように黄褐色土を確認した。カマド跡の底面では、溝状に掘られた石油の掘形を確認した。また、煙道部が竪穴住居の壁面から外に向かって延びており、そこから炭化した板材と土師器片が出土した。

主柱穴 床面上から5基のピットを検出した。いずれも対応する位置ではなく、主柱穴か否かは判断

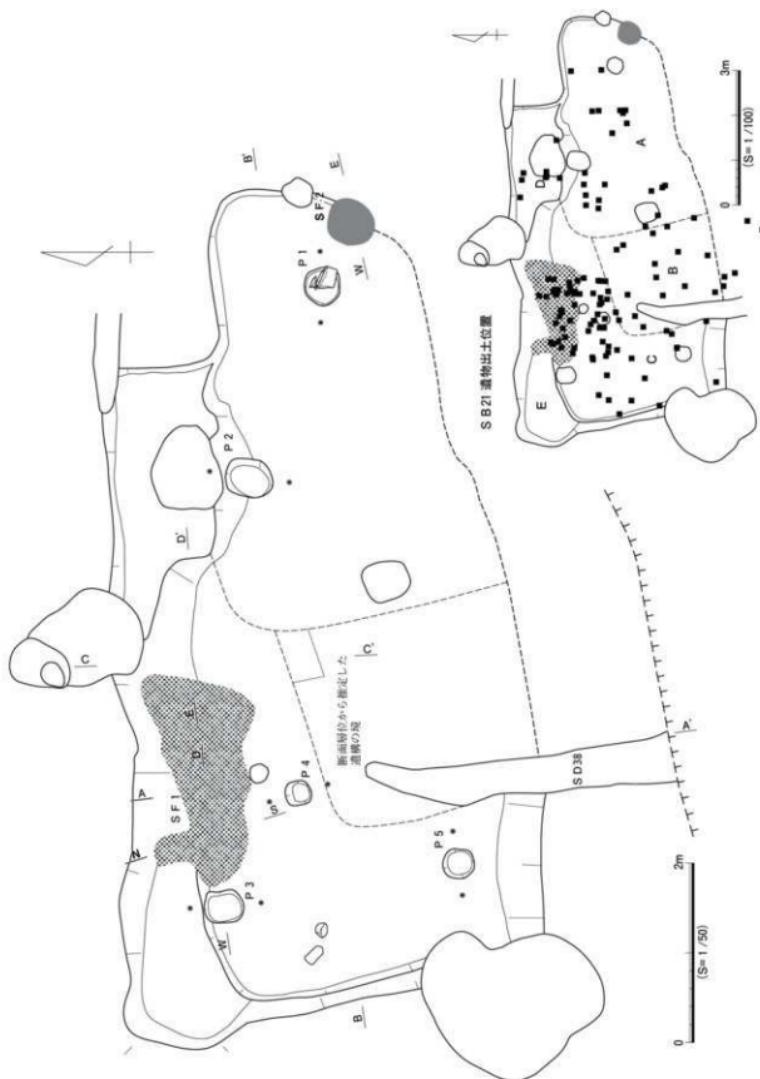


図49 SB21遺構図(1)

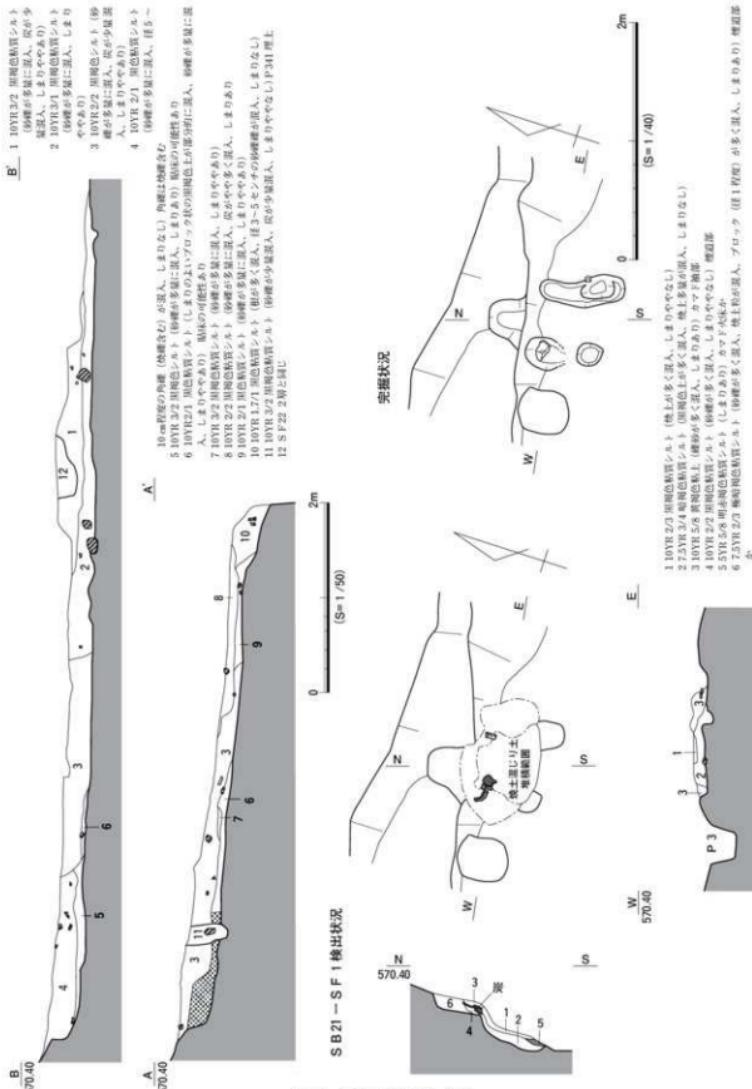


図50 SB21構造図 (2)

S B21 埋土上面で検出した鍛冶炉跡 (S F22・S F23)

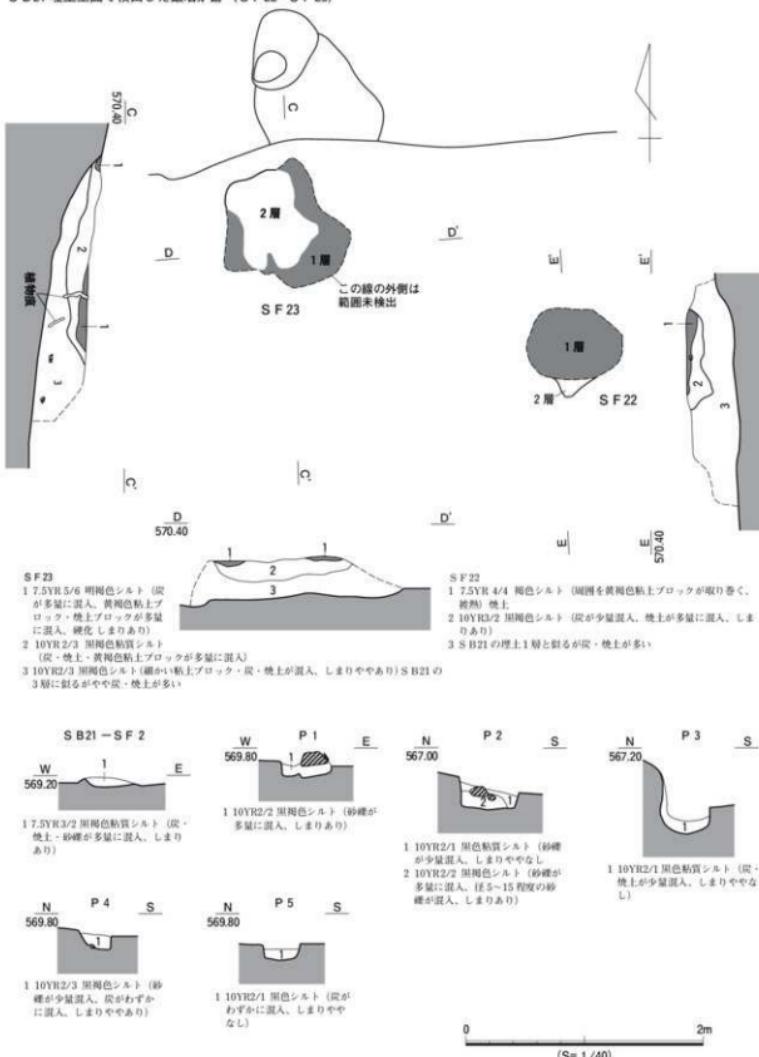


図51 S B21遺構図 (3)

できない。

付属遺構 SB21Aの床面上から焼土（S F 2）を検出したが、被熱により生じたものではなく、炭と焼土が混在した堆積物であった。また、埋土上面で検出したS F 22・23は、検出面が硬化するほど強く被熱している。S F 22は焼土の周りを黄褐色ブロックが取り巻く特殊な堆積が見られた。また、S F 23は充填土である2層が表面に露出していたが、これは削平を受けていたためで、本来は焼土が上面にあったと考えられる。S F 22・23及びSB21の埋土中からは鍛冶関連微細遺物が多数出土しており、S F 22・23が鍛冶跡である可能性が高い。

出土遺物 合計297点が出土し、そのうち13点を図示した。192は須恵器無台碗であり、口縁部は外反気味に仕上げられる。また、底部外面には、「令」あるいは「今」の墨書きが一文字のみ大きく記されている。194は須恵器有台环であり、体部の傾斜が強い。195は須恵器摘み蓋であり、天井部の器壁が厚い。196は灰釉陶器皿であり、底部内面が極めて平滑である。198は須恵器横瓶であり、側面に焼成時の落着遺物が3点ある。200～203は土師器甕であり、200と201の内面には煤が付着している。

所属時期 須恵器は若干古い様相を呈するが、灰釉陶器の年代から、S F 22・23も含めて古代5期と考えられる。

S B 22（遺構：図52、遺構全体図分割図②、遺物：図143）

検出状況 コ15グリッドの、傾斜がテラス状に緩やかになった場所で検出した。そのためか、遺構掘形の南側が残存していた。

堆積状況 2層に分層したが、1層はカマド跡の影響で炭が多く含まれる堆積と考えられるため、目立った特徴はないといえる。埋土は非常に薄い。

床面状況 緩やかに南に向かって傾斜する。明確な貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材はそれほど広がっておらず、ほぼ現位置を留めていると考えられる。天井部崩落土の可能性がある黄褐色土などを確認したが、火床や袖部などは明確に残っていないかった。なお、断面図には残せなかったが、竪穴住居跡の掘形北側に張り出した煙道部の痕跡が見られた。また、断削り調査を行った際、カマド跡下の基盤層を掘り残したような盛り上がりが見られたが、周囲を若干掘り過ぎた可能性が高い。

主柱穴 床面上から5基のピットを検出した。このうち、P 1・3・4が主柱穴になる可能性があるが、それぞれの深さや大きさが異なる上に、北東部分のピットが確認できなかったため、断定はできない。

付属遺構 カマド跡の西側に、掘形に立てかけるように板状の角礫を検出した。性格は不明であるが、人為的なものと思われる。

出土遺物 合計40点が出土し、そのうち5点を図示した。206は須恵器摘み蓋の転用硯であり、天井部内面が平滑で、黒色有機物がしみ込んでいる。209は陶錘であり、端部は面取りされている。

所属時期 出土遺物（205）から古代1期と考えられる。

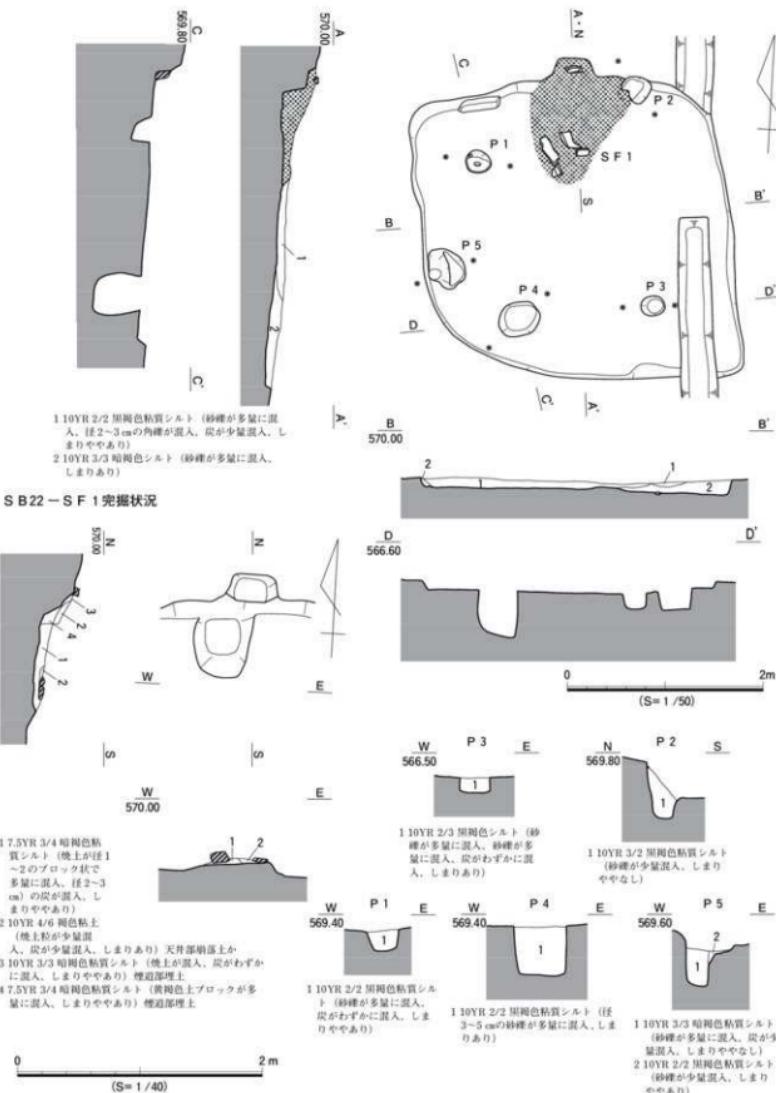


図52 SB22遺構図

S B23・24 (遺構: 図53、遺構全体図分割図⑨・⑩、遺物: 図143)

検出状況 エ8～9グリッドの、やや傾斜の強い斜面で検出した。遺構の掘形南側は流出により残存していない。

堆積状況 S B23掘形の北側に、自然堆積と考えられる三角堆積を確認した。

床面状況 S B23・24ともに残存部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 S B23・24ともに、遺構掘形の北壁に接して検出した。S B23のカマド跡は、立柱石と火床を断面観察で確認した結果、立柱石に掘形ではなく、敷土（5層）を充填すると同時に立てられたことが判明した。火床は立柱石の手前にあるが、平面的な広がりは記録することができなかった。S B24のカマド跡は検出した時点では火床と思われる焼土が露出していた。また、袖部の基底部と考えられる黄褐色土の堆積を確認した。S B23と同様にカマド下部に充填土が見られ、火床はその表面が被熱したものである。なお、完掘後に立柱石の痕跡を確認した。

主柱穴 床面上ではピットを検出できなかった。

出土遺物 S B23からは合計11点が出土し、そのうち1点を図示。S B24からは合計22点が出土し、そのうち2点を図示した。212は土師器甕であり、頸部の器壁が厚く、口縁部は短く外反する。

所属時期 S B23・24ともに出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S B25 (遺構: 図54、遺構全体図分割図②、遺物: 図143)

検出状況 ウ2～3グリッドの、かなり緩やかな斜面上で検出した。古墳時代の竪穴住居跡であるS B56を切っており、同遺構の貼床を削って床面が作られている。遺構の南側は流出により残存していない。

堆積状況 検出段階ではほぼすべての埋土を掘削してしまったため、土層記録を残すことができなかった。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。カマド跡の周間に貼床状のしまりの良い土が残存していた。

カマド跡 検出段階で、カマド跡の形状を確認することができ、立柱石・袖部などが完存していた。立柱石は残存する袖部のやや西側に寄った位置にあり、その周間に焼土が広がっていた。ただし、これらの焼土は火床そのものではなく、炉内に堆積した焼土の広がりを検出したものと思われる。範囲は明確でないが、南側の強く被熱していた部分が火床と思われる。袖石は、板状の角礫を両袖に1枚ずつ使っている。この礫はカマド内の壁を兼ねており、直に被熱したと思われる。また、この袖石には掘形があるが、一部基盤層に食い込むような状況が確認できた。

主柱穴 床面上から6基のピットを検出した。その位置からP1・4が主柱穴と思われるが、掘形の深さや大きさが異なるため断定はできない。

出土遺物 合計54点が出土し、そのうち5点を図示した。214は無台坏、215・216是有台坏であり、底部外面の調整は214がヘラ切り未調整、215・216が回転ヘラケズリである。

所属時期 カマド跡の出土遺物（215・216）から、古代3期と考えられる。

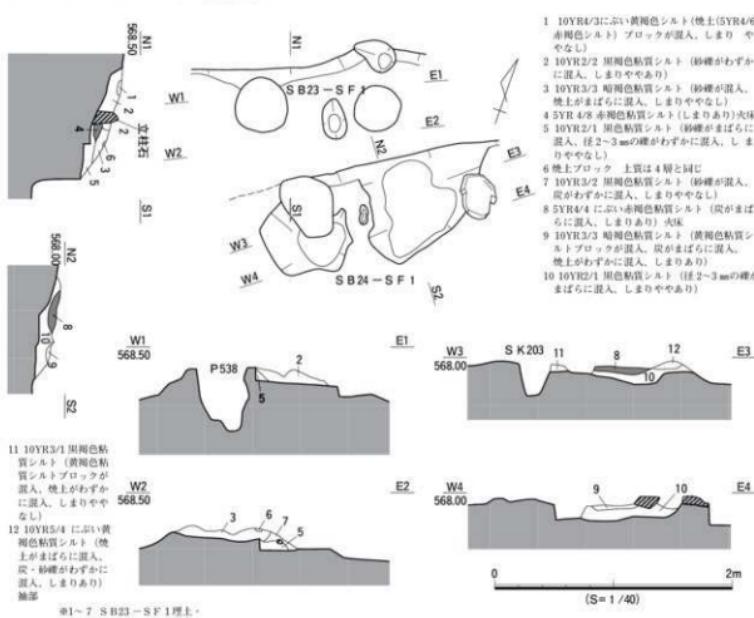
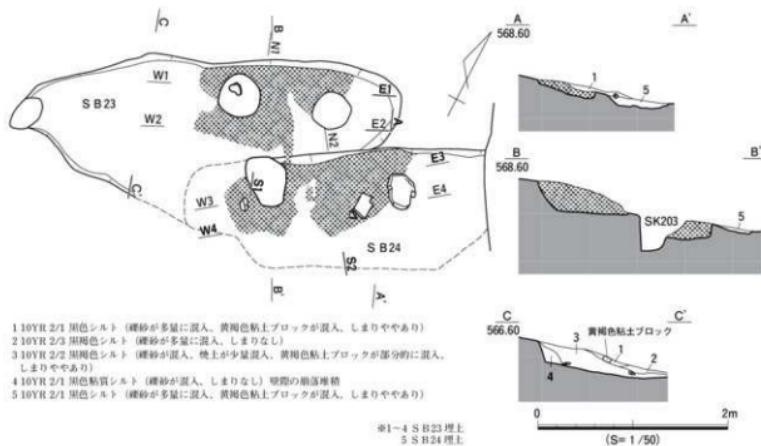


図53 SB23・SB24遺構図

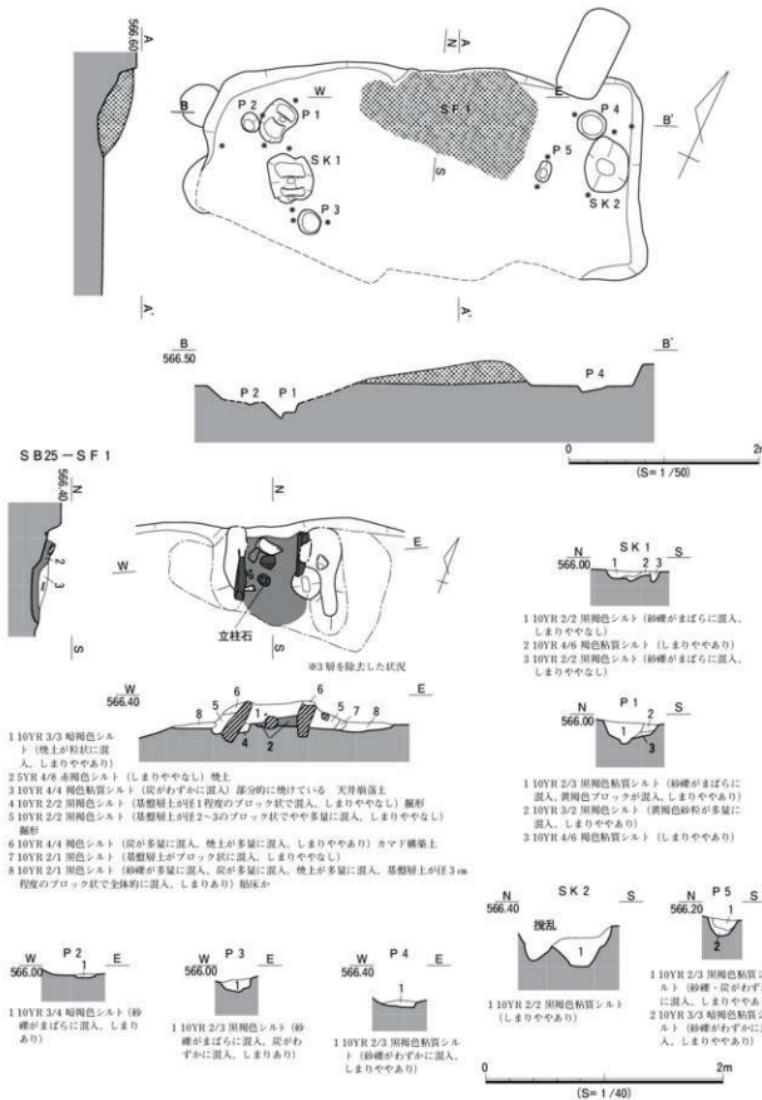


図54 SB 25遺構図

S B26 (遺構: 図55・56、遺構全体図分割図②、遺物: 図144)

検出状況 イーウ1グリッドの、かなり緩やかな斜面上で検出した。S B30と西側で切り合っており、S B26の方が新しい。遺構掘形の南側を溝状遺構であるS D5、西側の一部を大型土坑であるSK299によって切られている。

堆積状況 SK299と切り合っていたため東西方向の土層畦を残すことができず、南北方向の土層を調査区壁面で観察した。埋土は単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。断面観察では硬化した貼床と考えられる層を確認したが、平面では確認することができなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材は大きく広がっておらず、カマドに伴う堆積は現位置を留めていると思われる。検出段階において、堆積の表面に複数の被熱した角礫が見られたが、現位置を留めていない。断削り調査の結果、火床と考えられる焼土層(7層)の上に、炭や焼土、黄褐色粘土ブロックが混入する堆積を複数確認した。なお、完掘後は深い土坑状の窪みとなった。

主柱穴 床面上で17基のピットと土坑を検出した。そのうち、SK4とP11は主柱穴の可能性があるが、遺構の複雑な切り合いを考慮すると断定することはできない。

付属遺構 5基の土坑を検出した。ただし、すべてがS B26に伴うものか否か判断できなかった。なお、床面中央で検出したSK1は、埋土中に炭と焼土が多量に含まれており、S B26によって削平された竪穴住居跡のカマド跡の痕跡かもしれない。

出土遺物 合計130点が出土し、そのうち9点を図示した。218～220は須恵器摘み蓋であり、218と219の天井部内面中央付近は摩滅している。226は大型の須恵器有台环であり、底部が中央に向かって下がり、体部内外面にはロクロ目が顕著に残る。

所属時期 カマド跡の出土遺物(218・223)は古代2期に属するが、S B26に切られるS B30の時期が古代3期であるため、本遺構の時期も古代3期とする。

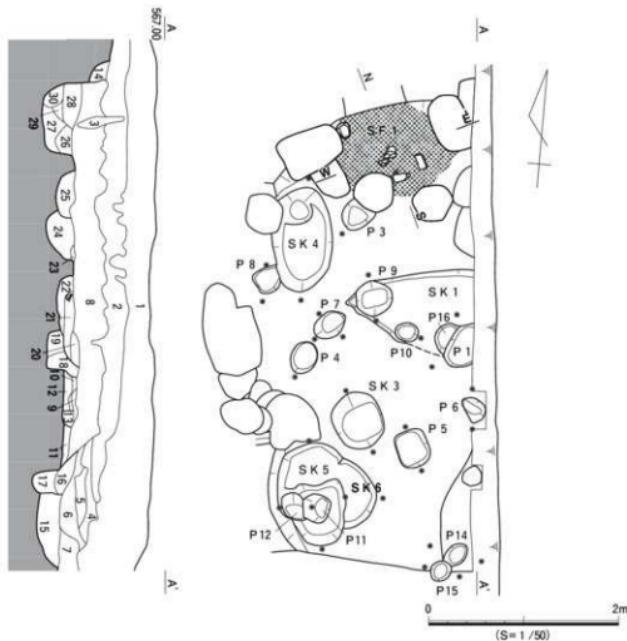
S B27・31 (遺構: 図57～59、遺構全体図分割図③上、遺物: 図144・145・147)

検出状況 ウ5グリッドの、緩やかな斜面上で検出した。この付近の北側は山裾部分が削平されV-3層が露出しており、本遺構はそのすぐ南側で検出した。S B28・32と切り合っており、その中でS B27が最も新しい。S B31はS B27によって掘形の南側が削平されていた。その残存部分から、1辺が3mに満たない小型の竪穴住居跡と考えられる。

堆積状況 両遺構とともに単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 両遺構とともに、残存部分はほぼ水平である。S B27は床面の中央に黄褐色粘土ブロックが混入する貼床(7層)がある。また、この層がカマド東側で盛り上がり、堤状になっている部分を確認した。S B31も断面観察で貼床の堆積が確認できたが、平面では確認することができなかった。

カマド跡 両遺構とともに遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の広がりは無く、カマドに伴う堆積は現位置を留めていると思われる。S B27のカマド跡は検出状況が土饅頭状であり、S B26に類似している。断削り調査の結果、黄褐色粘土(シルト)や炭、焼土が混入する堆



1 号土

- 2 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (径2~5ミリの砂礫が多量に混入。炭がわずかに混入。しまりややなし) 葉上
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫・炭・黄褐色シルトがわずかに混入。しまりややなし) 葉根
- 4 10YR2/1 黒褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫・炭がわずかに混入。しまりややなし) 葉茎
- 5 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト (径3ミリの砂礫がまばらに混入。しまりややなし)
- 6 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫がまばらに混入。炭がわずかに混入。3の角礁・円礁がわずかに混入。しまりややあり)
- 7 10YR2/2 黒褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫がまばらに混入。炭がわずかに混入。しまりややあり)
- 8 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト (径3~5ミリの砂礫・黄褐色シルトがまばらに混入。炭がわずかに混入。しまりややあり)
- 9 10YR2/3 黑褐色粘質シルト (径3~5ミリの砂礫・黄褐色シルト・炭・焼土がわずかに混入。しまりややあり) 葉体
- 10 10YR 3/2 黑褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫がわずかに混入。黄褐色シルトがわずかに混入。炭がわずかに混入。しまりややあり) 葉体
- 11 10YR2/2 黑褐色粘質シルト (径3~5ミリの砂礫が混入。炭がわずかに混入。黄褐色シルトがまばらに混入。しまりややあり) 葉体
- 12 10YR 2/3 黑褐色粘質シルト (黄褐色粘土が多量に混入。炭がわずかに混入。しまりややなし) 葉体
- 13 10YR 3/2 黑褐色粘質シルト (砂礫・炭がわずかに混入。しまりややあり)
- 14 10YR 3/3 黑褐色粘質シルト (黄褐色粘質シルトブロックが混入。しまりややあり) SK2 墓埋土
- 15 10YR 2/1 黑褐色粘質シルト (径2~3ミリの砂礫が多量に混入。しまりややあり)
- 16 10YR 3/3 黑褐色粘質シルト (砂礫がわずかに混入。黄褐色シルトブロックがまばらに混入。しまりややなし)
- 17 10YR 3/1 黑褐色粘質シルト (径3~5ミリの砂礫が混入。黄褐色シルトがわずかに混入。しまりややなし)
- 18 10YR 2/3 黑褐色粘質シルト 砂礫・炭・焼土がわずかに混入。しまりややなし)
- 19 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト (砂礫・炭・焼土がわずかに混入。黄褐色粘質シルトがまばらに混入。しまりややなし)

※4~7 墓埋土 9~12 S B26 墓上 13 P 6 墓上 14 SK235 墓上 15 SD47 墓上
16~17 P 596 墓上 18 P 1 墓上 20~22 SK 1 墓上 23~24 SK 2 墓上
25 P 2 墓上 26~27 P 666 墓上 28~30 P 697 墓上

図55 S B26遺構図(1)

S B26-S F 1 完整状況

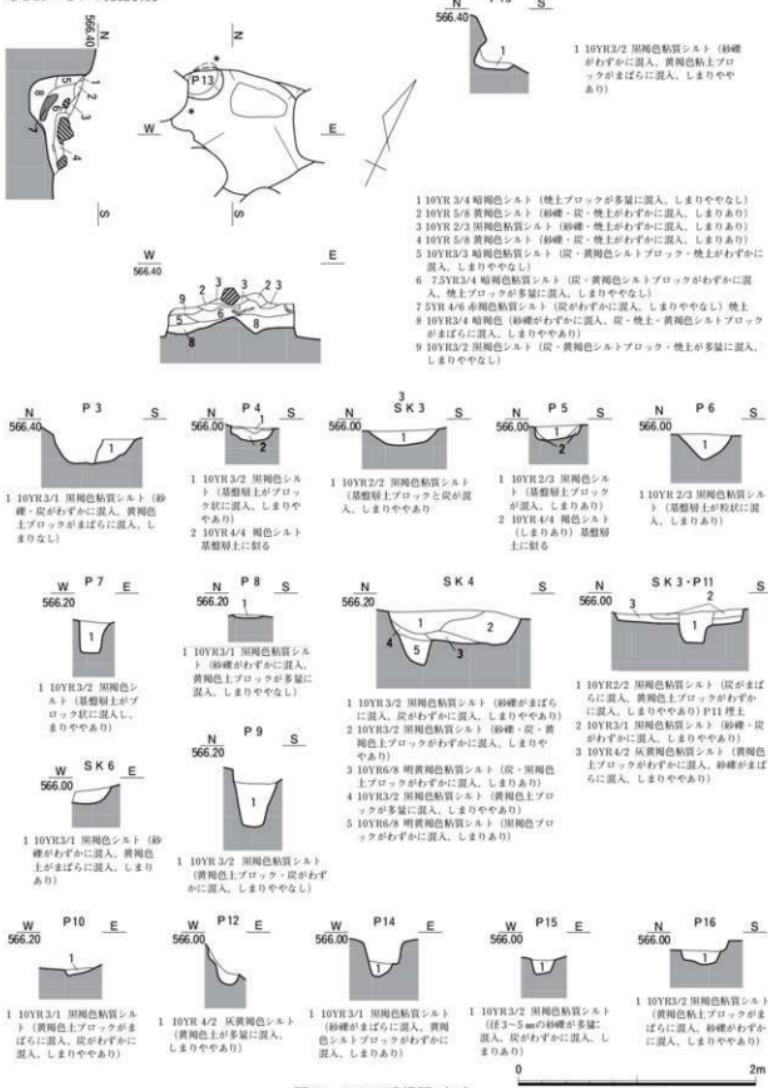


図56 S B26遺構図(2)

(S=1/40)

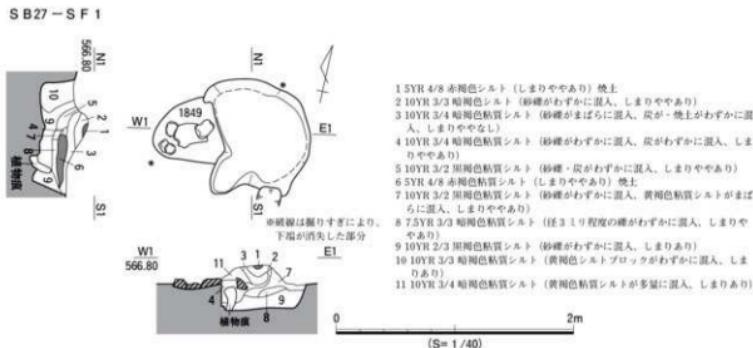
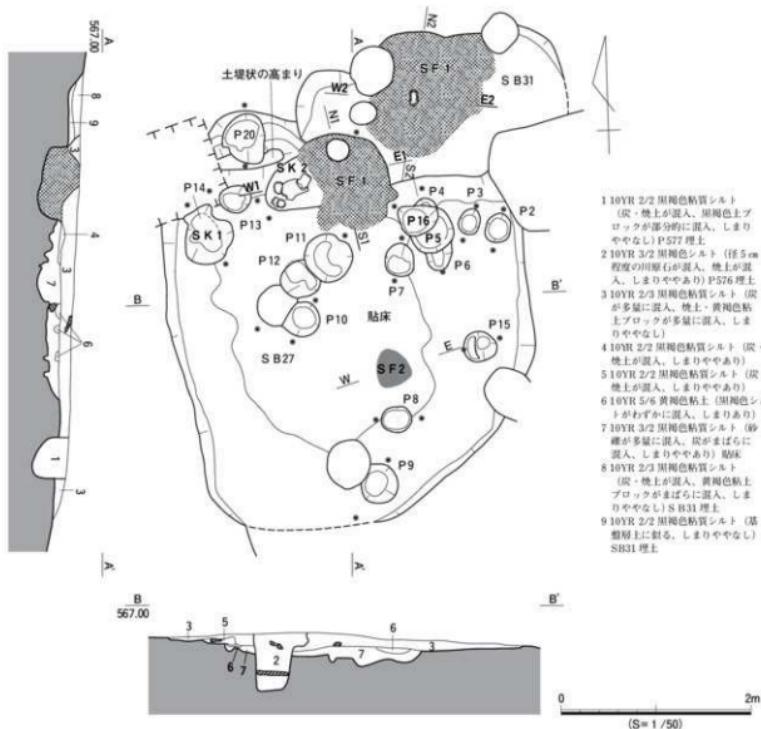


図57 SB27・31構造図(1)

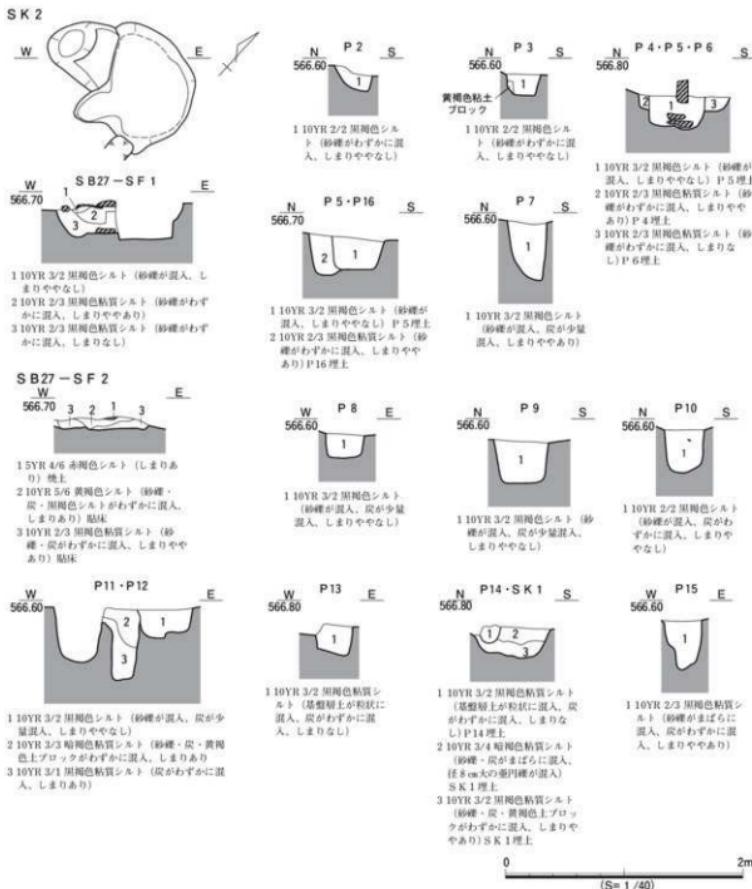


図58 S B27・31遺構図（2）

積であり、明瞭なカマドの構造は残存していなかったが、一部に火床の可能性がある被熱部分（6層）を確認した。カマド跡の西側に隣接して、埋土上面に円窓を含む複数の窓がある土坑を検出したが、土層から考えるとカマド跡と一体の遺構である可能性が高い。S B31のカマド跡も検出時には土饅頭状であった。S B27と同様に明瞭なカマドの構造は残存しておらず、黄褐色粘土と焼土プロックが混在する堆積のみであった。なお、完掘後は浅い土坑状となった。

主柱穴 SB27の床面では、16基のビットを検出し、掘形が深いものが多い。ただし、土層堆に見られるP577やカマド跡に掘り込まれたビットのように、竪穴住居跡より新しい遺構を上面で検出できなかった可能性もある。また、そのことを考慮しない場合でも規則的に配置されるビットがないため、どのビットが主柱穴になるのか不明である。なお、SB31は床面上でビットを検出することができなかった。

付属遺構 SB27の貼床の一角に強く被熱した箇所を確認した。P5の底面付近には扁平な角礫が据えられ、検出面では立石状に出土した。

出土遺物 SB27から合計201点が出土し、そのうち14点を図示し、SB31から合計11点が出土し、そのうち1点を図示した。229は須恵器摘み蓋の転用硯であり、天井部内面が平滑で、黒色有機物がしみ込んでいる。230は灰釉陶器皿の転用硯で、高台は体部外面下方に貼り付けられている。231・233は灰釉陶器碗、234は灰釉陶器深碗であり、いずれも体部外面に灰釉が漬け掛けされている。236は土師器鉢としたが、口縁端部は擬似口縁の可能性もある。237は刀子である。柄部は端部に向かって細くなり、明瞭な傾斜闊を有する。238・239は須恵器甕であり、同一個体の可能性が高い。肩部下方に粘土紐による横耳が貼り付けられ、胎土はセピア色を呈する。240は凹み石であり、穴の数は2~3個で2面にある。穴の輪郭は明瞭で、深さ3~4mm程度のものが最も深い。なお、二次的な被熱により剥離している。293はSB31の床面上から出土した完形の鋸先（鉄製）であり、鋸本体との接点部分は断面V字状を呈する。

所属時期 SB27は埋土の出土遺物（233・234）から古代6期と考えられる。SB31は、出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

SB31-SF1

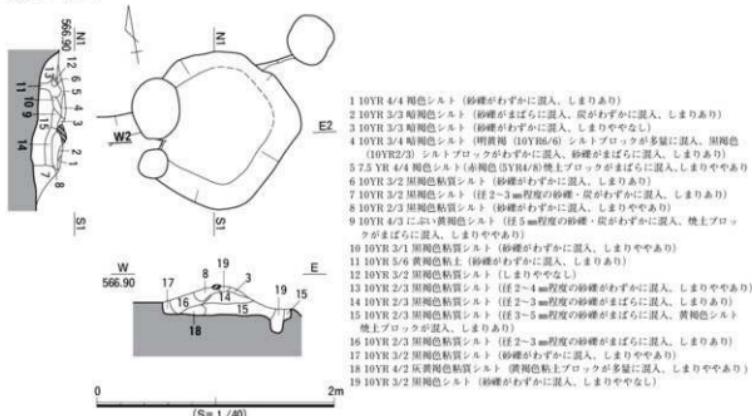


図59 SB27・SB31構造図（3）

S B28・32 (遺構: 図60～63、遺構全体図分割図⑤上～⑥)、遺物: 図145・146・148)

検出状況 ウ4～エ5グリッドの、緩やかな斜面上で検出した。この付近の北側は山裾部分が削平されており、VI層が露出している。本遺構はそのすぐ南側で検出した。S B27と切り合っており、S B27が最も新しく、S B32が最も古い。本来はS B28を先に掘削し記録を取るべきであったが、切り合いを検出面で確認することができず、土層畦を残して、両遺構を同時に掘削したため、S B28の西側床面の一部を確認することができなかった。また、S B32の埋土から近世から近代の遺物が出土しており、上面で近世以降の遺構を見逃した可能性が高い。

堆積状況 両遺構とともに単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 両遺構とともに残存部分はほぼ水平である。S B28はカマドの南側で貼床を確認した。

カマド跡 両遺構とともに遺構掘形の北壁に接して検出した。S B28のカマド跡 (S B28-S F 1) は、床面の広い範囲にカマド構造材の散布が見られる。敷土と考えられる6層の上に黄褐色粘土や炭と焼土混じりの土、焼礫などが散在していた。S B28は、東西の幅が6m以上ある大型の豊穴住居跡であるが、カマド構造材がこれほど広い範囲に散在する理由は不明である。また、これは別に掘形の東壁に接して焼土混じり土の堆積 (S B28-S F 2) を確認し、表面には配置されたような礫があった。S F 1・2ともにカマド跡の可能性があるが、いずれも明瞭なカマドの構造は残存していなかった。S B32のカマド跡も明確な構造は残っていないかったが、カマド構造材の散在状況からカマド廃絶時に袖石を抜き取ったと考えられる。検出段階で表面に焼礫や遺物が散在しており、完掘後は浅い土坑状となった。

主柱穴 S B28の床面では4基のピットを確認したが、そのうちの2基 (P 3・4) はカマド構造材の下で検出しているため、主柱穴ではない。他の2基 (P 1・2) も対応する位置になく、主柱穴と断定できない。それに対してS B32は、床面のやや中心に寄った位置に配置された4基 (P 1・2・4・5) が主柱穴と考えられ、ほぼ同じ埋土であった。

付属遺構 S B32の北西角にテラス状の張り出しを確認した。ただし、上面での検出が十分でない点を考慮すると、別遺構の可能性もある。

出土遺物 S B28から合計585点が出土し、そのうち20点を図示し、S B32から合計210点が出土し、そのうち16点を図示した。241は土師器皿であり、口縁端部がわずかに外反する。243・244・248は灰釉陶器碗であり、243の底部内面周縁に窯冀が多く付着し、244は底部外面に「又」248は底部外面に「萬」の墨書がある。253は土師器鉢である。無高台で体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を丸く收める。口縁部内面には長さ約4cm、幅約5mmの粘土紐を貼り付けている。254は須恵器皿とした。体部外面は回転ヘラケズリ調整が施され、口縁端部は丸く收める。260は土師器皿であり、口縁端部が面取りされている。297は須恵器無台環であり、底部外面にヘラ抜き痕が明瞭に残る。299は須恵器碗であり、体部が大きく開く器形である。303は須恵器盤の転用鏡であり、口縁端部が意図的に打ち欠かれている。なお、S B32からは灰釉陶器・須恵器とともに出土しているが、貼床内やカマド跡から出土した遺物は須恵器のみである。

所属時期 S B28はカマド跡やS K 1出土遺物 (249・250など) から古代5期、S B32はカマド跡出土遺物 (298・301) から古代3期と考えられる。

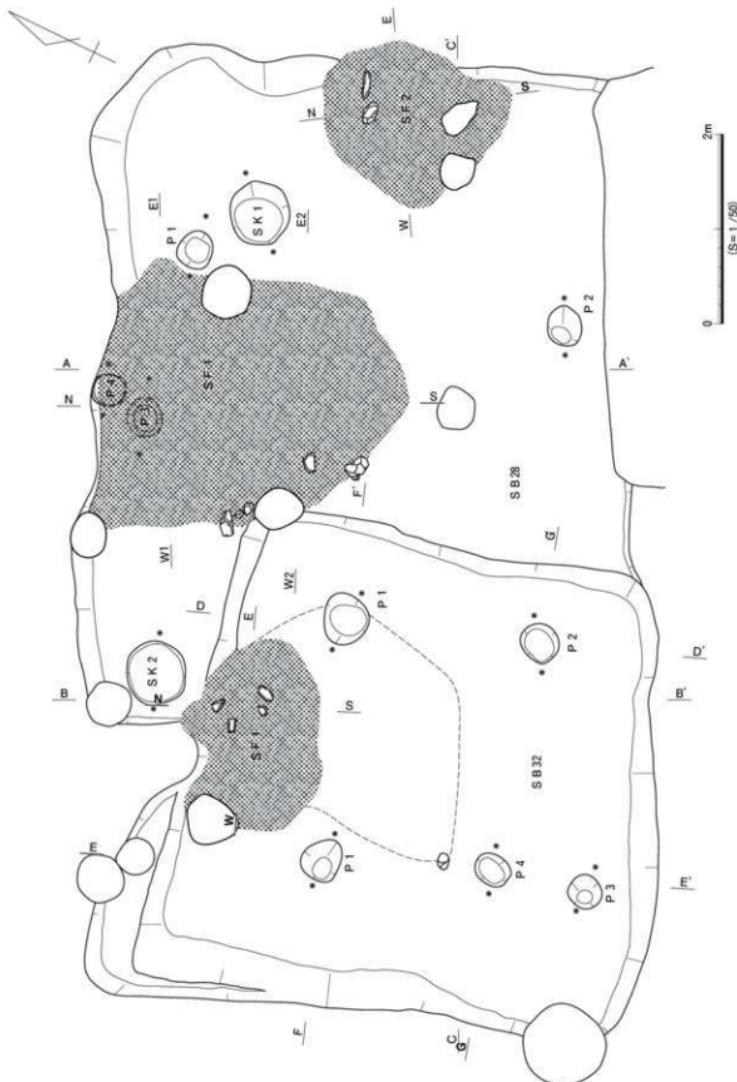
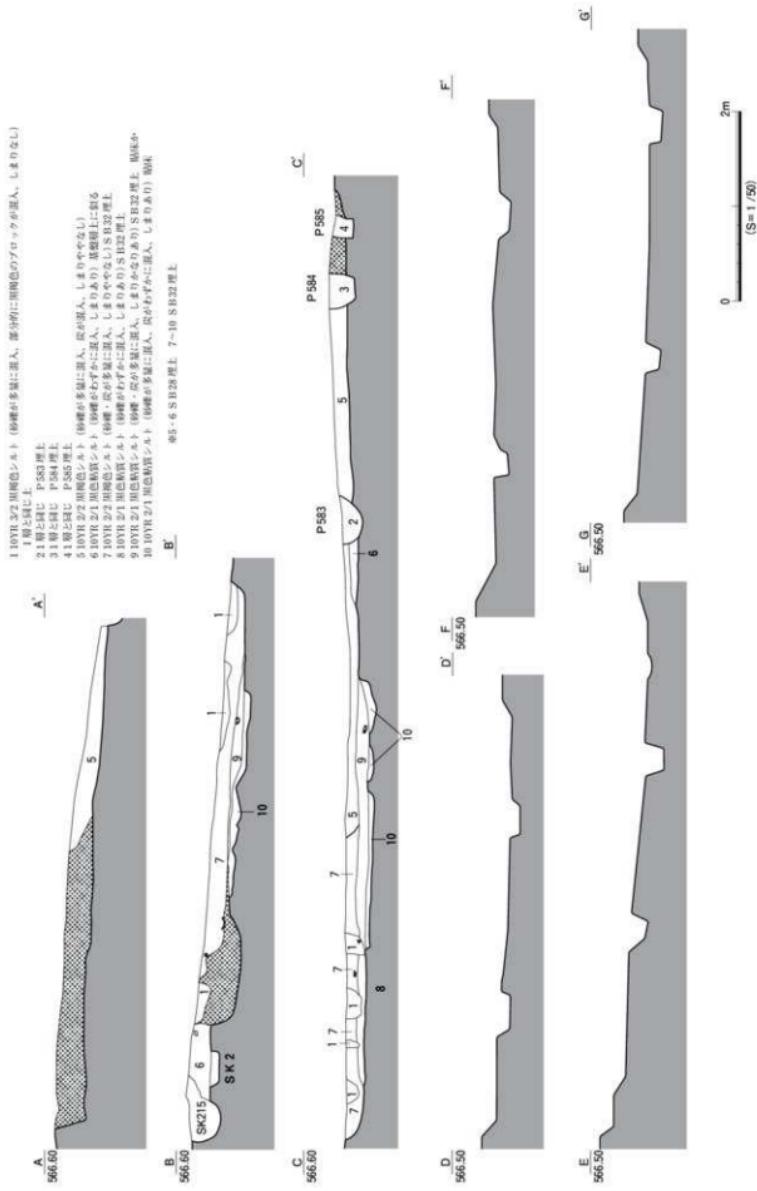
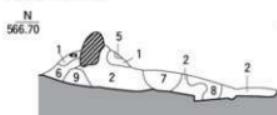


図60 S B 28・32遺構図（1）



SB28-SF2

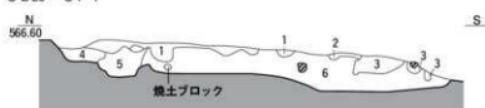


- S 1 10YR 3/3 周褐色シルト (焼土) (2SYR4/6赤褐色シルト) が混入、しまりややあり)
2 10YR 3/2 周褐色粘質シルト (10YR3/3 周褐色シルト) がブロック状に混入、砂礫が混入、しまりややなし
3 10YR 3/3 周褐色シルト (焼土) (2SYR4/6赤褐色シルト) が混入、しまりややあり
4 10YR 4/4 周褐色シルト (しまりなし) 植物の根痕
5 2SYR 5/6 明黄色粘土 (焼土) (プロックが混入、しまりややあり)
6 10YR 3/2 周褐色粘質シルト (10YR3/3 周褐色シルト) がブロック状に混入、砂礫が混入、しまりややなし) 2層より褐色色上の混入がない
7 10YR 3/3 周褐色粘質シルト (砂礫が少量混入、しまりややなし)
8 10YR 4/4 周褐色シルト (しまりややあり)
9 10YR 2/2 周褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)



- 1 10YR 2/1 黒褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)
2 10YR 2/3 周褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)

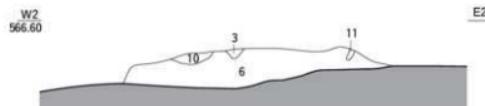
SB28-SF1



- 1 10YR 2/3 周褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)



- 1 10YR 3/2 黒褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、灰がわずかに混入、しまりややあり)



- 1 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、灰がわずかに混入、しまりややあり)

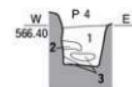
- 1 10YR 3/2 周褐色シルト (焼土) (5YR4/8赤褐色シルト) がまばらに混入、砂礫・炭がわずかに混入、しまりややなし
2 10YR 6/6 明黄色粘土 (砂礫・周褐色シルトブロックがわずかに混入、しまりややなし)
3 10YR 3/2 周褐色シルト (砂礫がまばらに混入、しまりややあり)
4 10YR 2/2 周褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、しまりややあり)
5 10YR 3/2 周褐色シルト (砂礫がまばらに混入、焼土) (5YR4/8赤褐色シルト) がわずかに混入、しまりややあり)
6 10YR 2/1 黒褐色粘土 (砂礫がわずかに混入、周褐色粘土とわずかに混入、しまりややあり)
7 10YR 3/4 周褐色シルト (砂礫がまばらに混入、黄褐色粘土とわずかに混入、しまりややあり)
8 10YR 2/1 黑褐色シルト (砂礫・周褐色シルトブロックがわずかに混入、しまりややあり)
9 10YR 3/3 周褐色シルト (砂礫・黄褐色粘土とブロックがまばらに混入、灰がわずかに混入、しまりややなし)
10 10YR 3/2 周褐色シルト (砂礫がわずかに混入、しまりややなし)
11 10YR 3/1 周褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、しまりややなし)

- 1 10YR 3/2 黒褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、灰がわずかに混入、しまりややあり)

- 2 10YR 2/3 周褐色粘質シルト (砂礫がわずかに混入、しまりややあり)

- 3 10YR 2/2 周褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、しまりややあり)

- 1 10YR 2/3 周褐色シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)



- 1 10YR 2/3 周褐色シルト (砂礫がわずかに混入、しまりややなし)
2 10YR 2/2 周褐色シルト (砂礫がわずかに混入、しまりややなし)
3 10YR 2/1 周褐色粘質シルト (砂礫がまばらに混入、しまりややなし)

- 1 10YR 2/2 周褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりややあり)

- 0 2m (S=1/40)

図62 SB28・32遺構図(3)

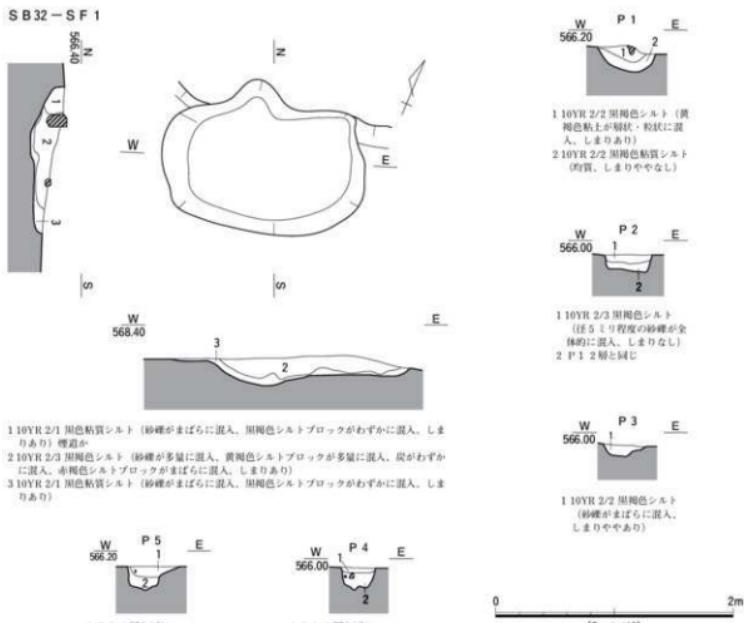


図63 S B 28・32遺構図(4)

S B 29 (遺構: 図64・65、遺構全体図分割図②、遺物: 図146)

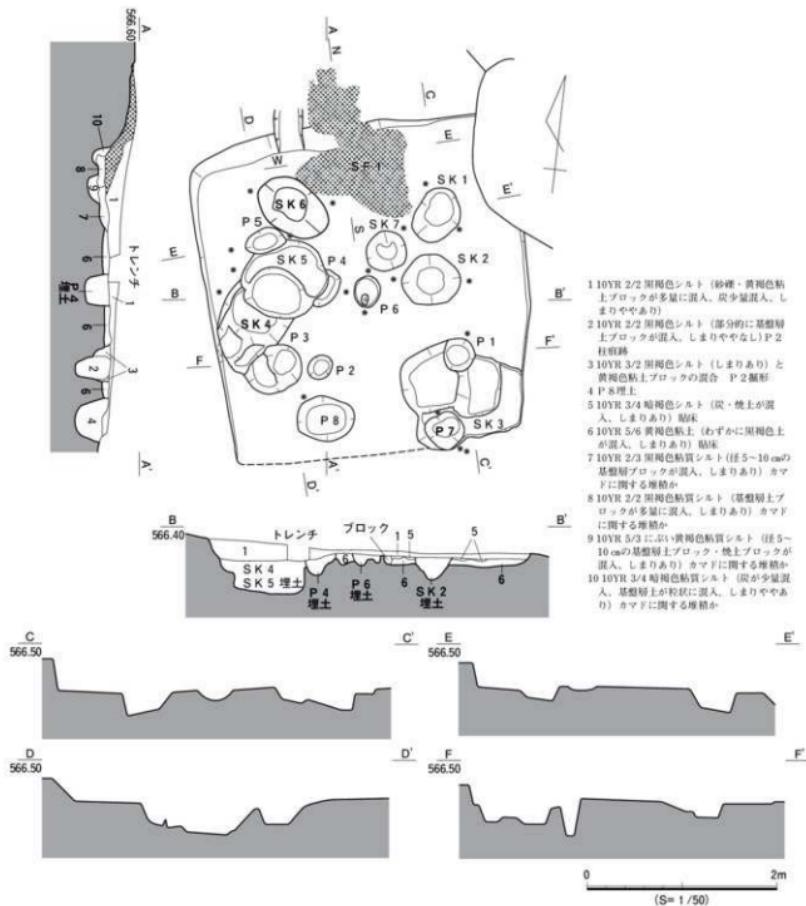
検出状況 ウ2グリッドの、かなり緩やかな斜面上で検出した。S B 54を切っている。掘形東側の一部が大型土坑SK299によって一部削平されている。また、遺構掘形南側は、削平のため壁が残存していないが、ほぼ本来の竪穴住居跡の形状は残存していると思われる。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

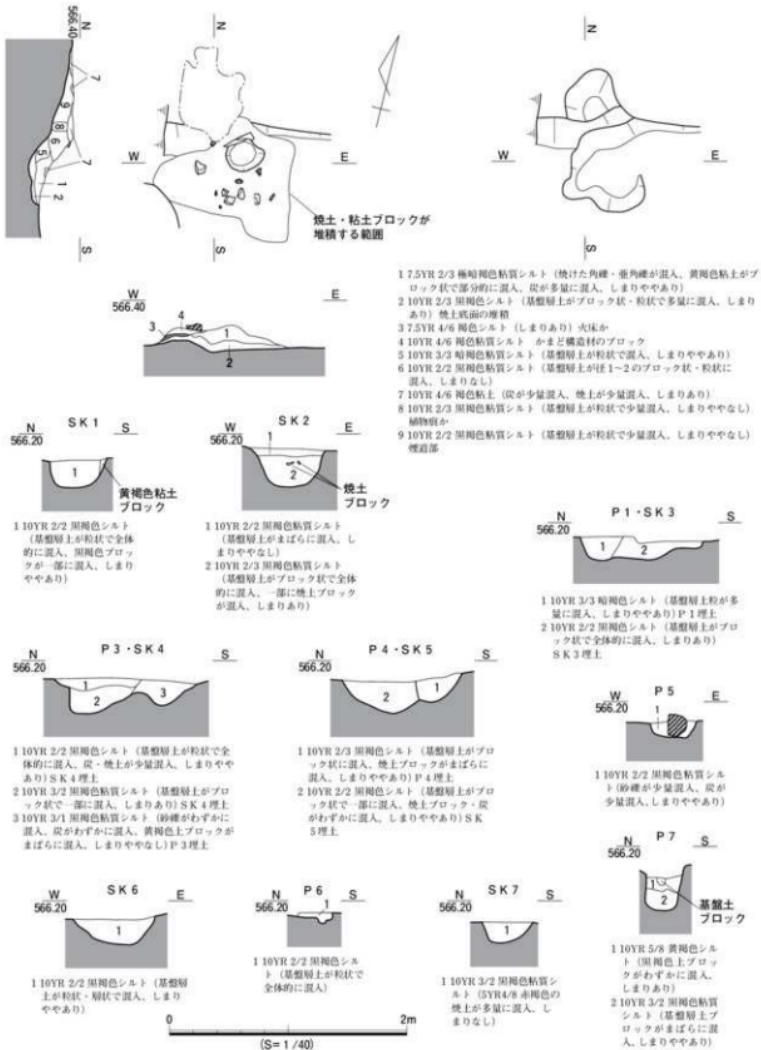
床面状況 残存部分はほぼ水平である。床面のほぼ全面に硬化した貼床が見られる(6層)。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマドに伴う堆積は現位置を留めていると思われ、廃絶時に袖石が抜き取られている。検出時に複数の被熱した角礫があったが、現位置は留めていない。焼土と粘土が混在した堆積層上面に、カマドを構築していたと思われる黄褐色粘土のブロックが散在し、煙道部の上面にも同じ粘土が薄く敷かれていた(7層)。断削り調査の結果、火床と考えられる被熱部分(2層)を確認し、完掘後は竪穴住居跡床面が深い窪みとなった。カマド跡の北側が接する竪穴住居跡の掘形には、煙道部構築に伴う張り出しが見られた。

主柱穴 床面上から8基のピットを検出した。P 1・3・5とSK 1が主柱穴と考えられる。



S B29 - S F 1



S B30 (遺構: 図66～68、遺構全体図分割図②、遺物: 図146・147)

検出状況 イ1～ウ2グリッドの、緩やかな斜面上で検出した。掘形の北側は残存状況が良いが、南側は現代の削平を受けている。また、掘形の南側の一部が大型土坑S K299・S B26により削平されている。この他、北西の角がS B54を切っている。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。床面やカマド跡の周囲に貼床土である黄褐色粘土の分布が確認できた。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の大きな広がりはなく、カマドに関する堆積は現位置を留めていると思われる。検出時で粘土袖や袖石等を確認できる状態であり、今回の調査では最も残存状況が良いカマド跡の一つといえる。火床は、袖の端部に設置された袖石の間にあり、硬く焼きしまっていた。この袖石は角柱状に加工した砂岩で、他の袖石からやや離れた位置に設置されていることから、燃焼部の入口として据えられた石と考えられる。この袖石から立柱石付近の両袖部内側が、強く被熱し、赤変していた。火床の奥には立柱石があり、さらに奥には煙道部を遮るような向きで扁平な角礫が立てられていた。煙の当たる奥壁部分は被熱しており、ここが煙出しと考えると、掘形外への煙道の張り出しはなかったと思われる。ただし、カマド跡の北側には、黒褐色土が堆積した浅い窪みが見られた。袖石を被覆した粘土は、天井部を除いて完存していた。この粘土を除去する段階でカマド跡内部から輪の羽口が出土した。袖部の下からは、袖石と溝状、ビット状に掘られた掘形を検出した。掘形は貼床の一部を切っていることから、貼床敷設後にカマドが構築されたことが分かる。なお、火床の南側には複数の被熱礫が集積していたが、その性格は不明である。また、カマド跡の西側にも焼土を確認した。

主柱穴 床面上で21基のビットを検出したが、適当な位置に配置できるビットがないため、主柱穴を推定することができなかった。

付属遺構 床面上で土坑を15基、溝状遺構を1条、焼土を2箇所検出した。特殊な遺構としては、下層に焼土が多く混入する埋土が見られたS K8、基盤層が直接被熱した焼土であるS F2がある。S F2はS B30構築以前の竪穴住居跡のカマド火床の可能性もある。

出土遺物 合計283点が出土し、そのうち23点を図示した。当遺構出土遺物は、S F19と遺構間接合がある。278は須恵器有台盤である。内面の底部と体部の境には段があり、底部内面の摩滅が著しい。279は須恵器脚台盤である。脚部外面に2本1組の平行線が縱方向に一定間隔で描かれ、方形孔が3方向に穿たれている。283は須恵器盤である。推定口径20.5cmの大型品であり、底部外面に墨書きがある。284は須恵器瓶である。底部には楕円形孔が4箇所あり、体部は直線的に開く。291は須恵器壺であり、とても重量感がある。292は敲石である。棒状材で、下端に敲打痕、表面に擦痕がある。当遺構出土遺物には、美濃須衛窯で生産された土器が多く(270・276・278・279・284・285)、また、口縁部を直截する盤が2点あるなど、他の遺構と様相が異なっている。

所属時期 カマド跡の出土遺物(271・277・284)から、古代3期と考えられる。

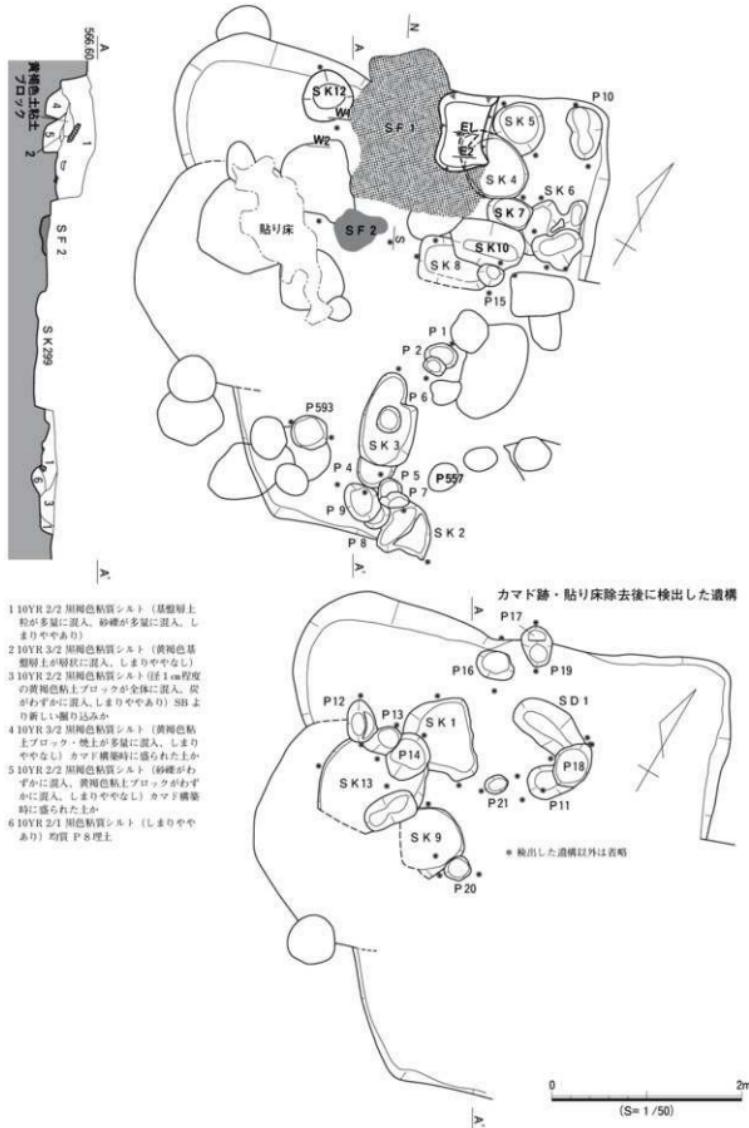


図66 S B30遺構図 (1)

S B 30 - S F 1

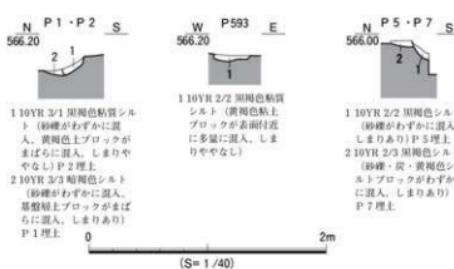
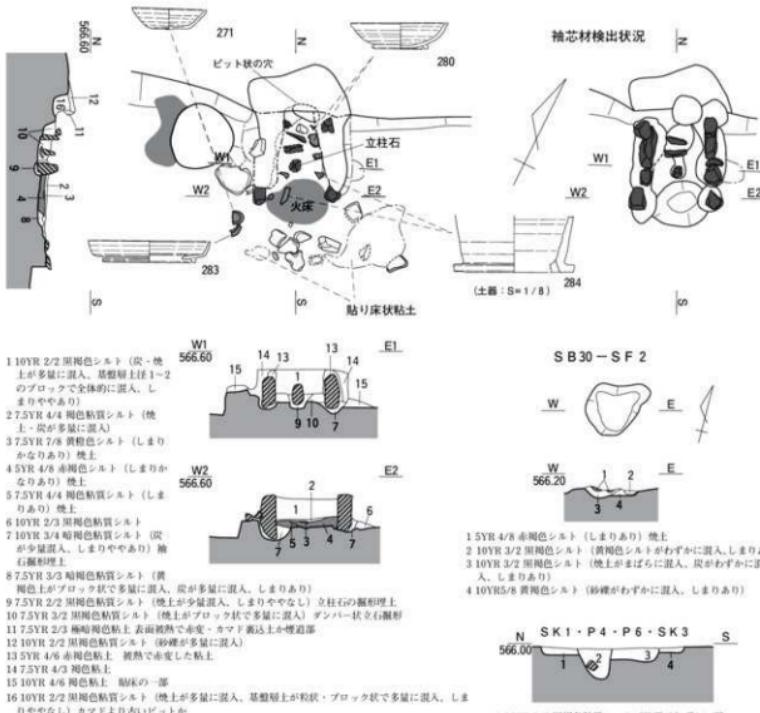


図67 S B 30構造図(2)



図68 B 30構造図（3）

S B33 (遺構：図69、遺構全体図分割図②・③、遺物：図148・149)

検出状況 イ 2～3 グリッドの、かなり綏やかな斜面上で検出した。この遺構から北側は宅地造成等の影響で山際が削平されており、搅乱が多い。S B54と南側で切り合っているが、検出当初にその関係を誤認したため、掘形の南側を残すことができなかつた。本来は S B54より新しい遺構である。

堆積状況 堆積の状況から、1層は別遺構の可能性がある。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。床面の西側に、炭と焼土混じりの硬化した貼床を確認した(3層)。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の広がりはほとんどなく、カマドに伴う堆積は現位置を留めていると思われる。明確な袖石の掘形はなく、完掘後は浅い窪みとなつた。カマド跡が接する掘形は、煙道部構築に伴う張り出しが見られた。

主柱穴 床面上から2基のビットを検出した。しかし、適当な位置に配置できるビットが存在しないため主柱穴を推定できなかつた。

付属遺構 床面上から土坑(S K1)を1基検出した。掘形の北西隅に位置し、褐色粘土や層状に堆積した焼土を確認した。S B33埋土からは鉄滓や鞴の羽口が出土しており、鍛冶に関する遺構が併設されていた可能性もある。

出土遺物 合計90点が出土し、そのうち6点を図示した。314は灰釉陶器壺である。底部外面にヘラ記号があり、肩部は丸みを帯びている。315は須恵器横瓶である。外面には格子叩き、内面には長細い窪みのある當て具痕が残る。

所属時期 カマド跡の出土遺物(312)から、古代2期と考えられる。

S B34 (遺構：図70、遺構全体図分割図⑦・⑧、遺物：図149)

検出状況 エ～オ 6 グリッドの、緩い斜面上で検出した。遺構の北側は S C16 の床面で検出し、カマド跡を含めて掘形が削平されていた。一方、遺構の北西側では S K297 を切っていた。このように他遺構と切り合いがあるものの、掘形が深いため、方形を呈する平面形は残存していた。

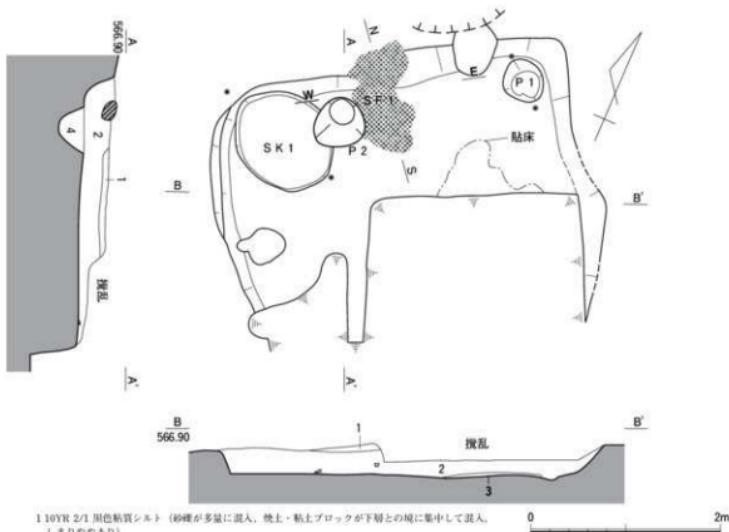
堆積状況 本来の遺構埋土は3層であるが、褐色粘土を底面に敷いた土坑状の堆積を竪穴住居跡検出面で確認した。この堆積は、S B34と切り合う S C16 に伴う可能性が高い。なお、埋土中から人頭大の礫が複数出土した。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかつた。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。上面は S C16 によって削平されているが、それ以前に構造が残らないほど破壊されていた可能性が高い。検出面では3個の礫を確認したが、被熱していないためカマドに伴うものではない。断割り調査の結果、盛土上にカマドを構築しており、火床と思われる被熱部分(6層)が残存していることが判明した。

主柱穴 床面上で6基のビットを確認した。このうち、P 1～3 は主柱穴の可能性が高いが、P 1 が浅いため断定はできない。

出土遺物 合計43点が出土し、そのうち5点を図示した。319は大型の須恵器有台盤であり、底部内



S B33 - SF 1 実掘状況

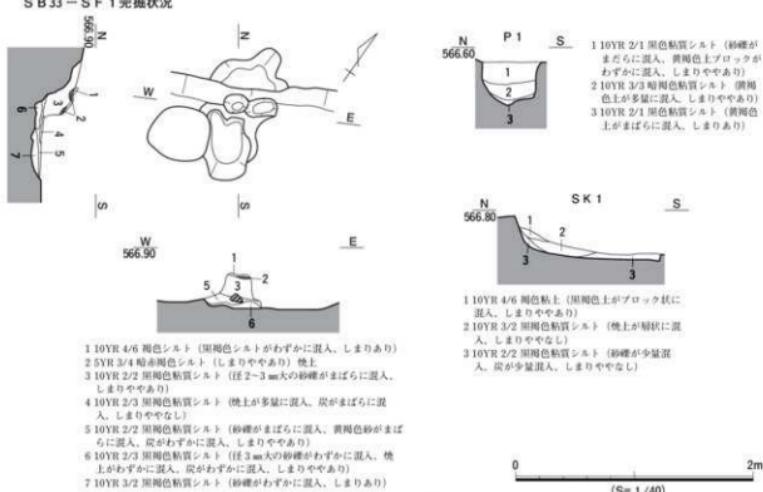


図69 S B33遺構図

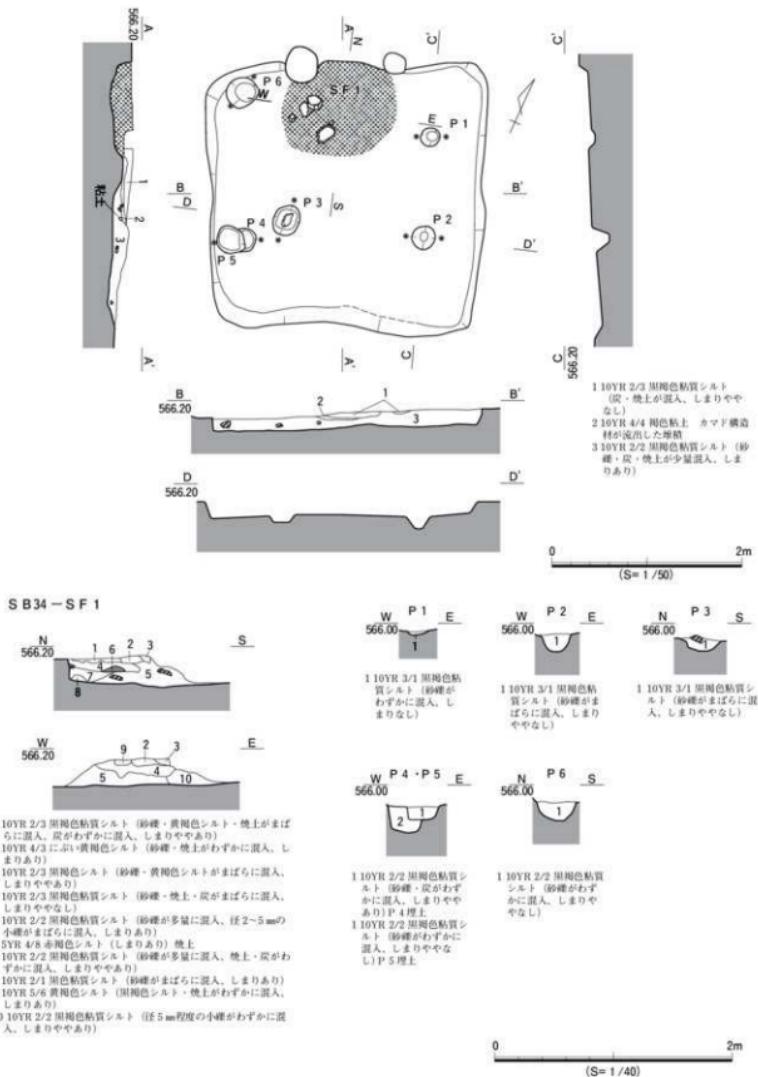


図70 SB34遺構

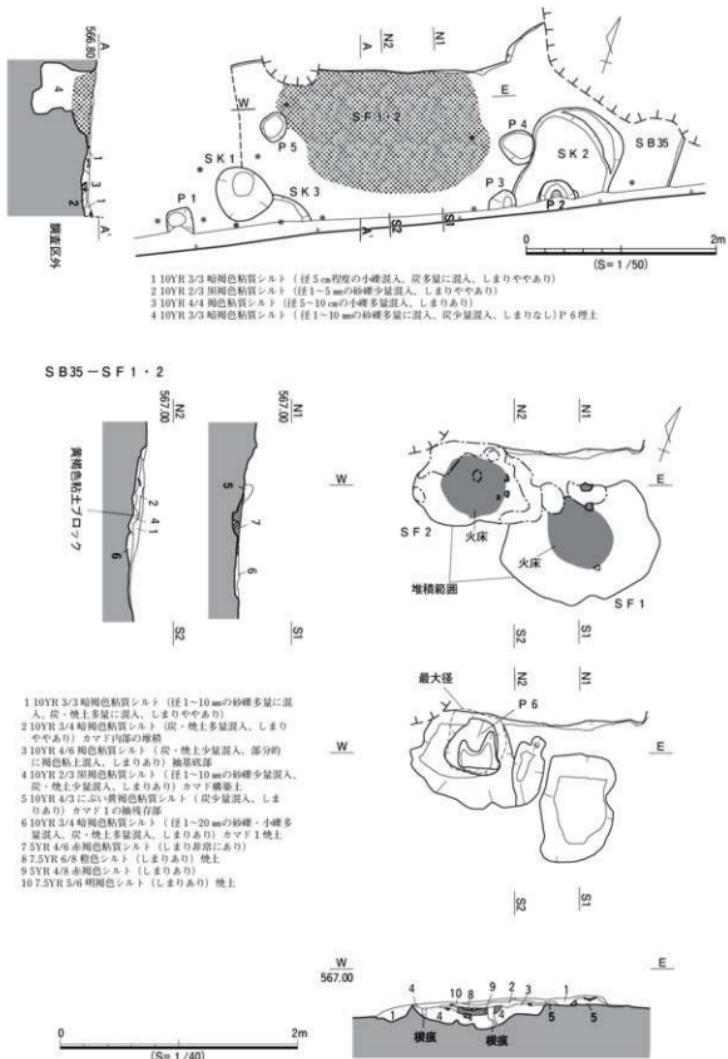


図71 SB35遺構図（1）

面は手持ちヘラケズリ調整がなされる。

所属時期 カマド跡の出土遺物（318）と埋土出土遺物の全体の様相から、古代3期と考えられる。

S B 35（遺構：図71・72、遺構全体図分割図②、遺物：図149）

検出状況 シ14グリッドで検出した。遺構全体が搅乱によって削平されており、大半の埋土は残存していない。

堆積状況 搾乱により、ほとんど観察することができなかった。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の除去後、2箇所で火床を検出した（東側をS F 1、西側をS F 2とする）。火床の周囲には袖部に使用されていたと思われる褐色粘土が残存しており、その切り合い関係からS F 2の方が新しいことを確認した。完掘後はS F 1・2とともに浅い窪みとなったが、S F 2の底面から底面径より壁面径が大きい袋状の穴（P 6）を検出した。S F 1に伴う、いわゆる貯藏穴と呼ばれる遺構の可能性があるが、今回の調査において土坑がカマド跡に隣接して検出した事例は、他にない（焚き口の手前のものは除く）。

主柱穴 建て替えがあると仮定した場合、P 2とSK 1がS F 1に、P 1とP 3がS F 2にそれぞれ対応すると思われる。

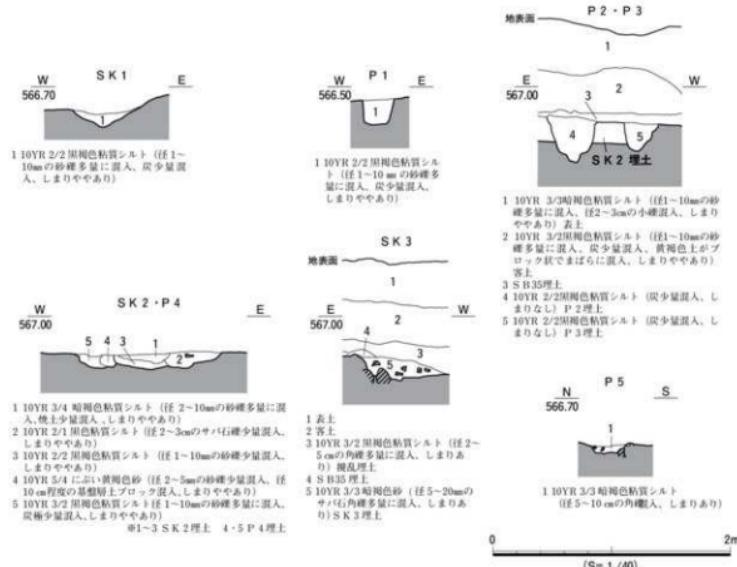
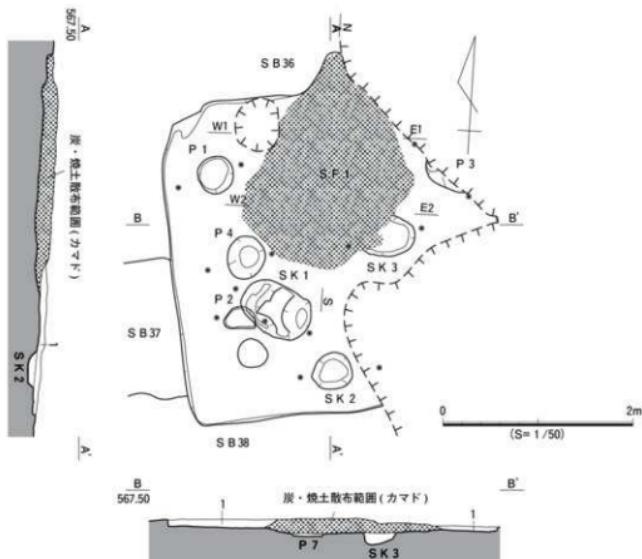


図72 S B 35遺構図（2）



1 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト (径1~10 mmの砂礫多量に混入、炭・焼土・焼けた砂礫やや多く混入、しまりあり)

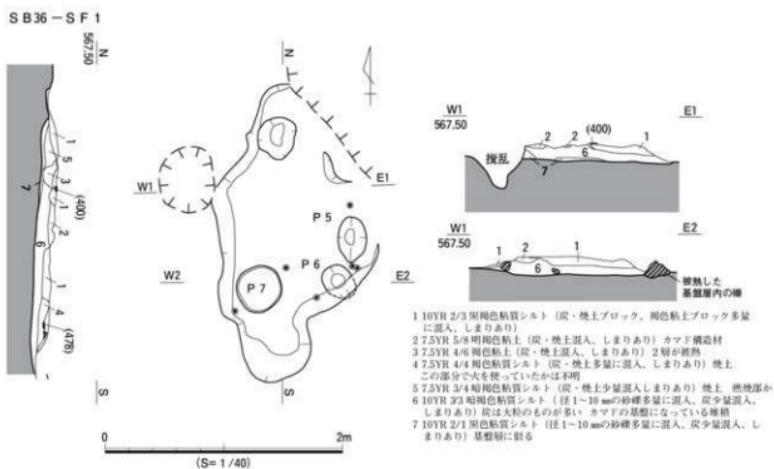


図73 SB 36遺構図 (1)

付属遺構 床面上で検出したSK2は、複数層に分層できた。これは、主柱穴であるP2との関係から、主柱穴の周囲を固めるために整地された痕跡と思われる。なお、P2と対をなすSK1に隣接するSK3でも同様な堆積を確認した。

出土遺物 合計41点が出土し、そのうち6点を図示した。325は灰釉陶器碗であり、口縁端部は外に短く折り返され、玉縁を呈する。326は須恵器甕であり、口縁端部は内傾面を有する。

所属時期 カマド跡等の出土遺物(323・324)から、古代5期と考えられる。

S B36 (遺構: 図73・74、遺構全体図分割図②・③、遺物: 図149)

検出状況 シ14～15グリッドの、緩い斜面上で検出した。遺構の東側が搅乱によって削平され残存していない。

堆積状況 上面が削平されており、ほとんど埋土が残存していない。

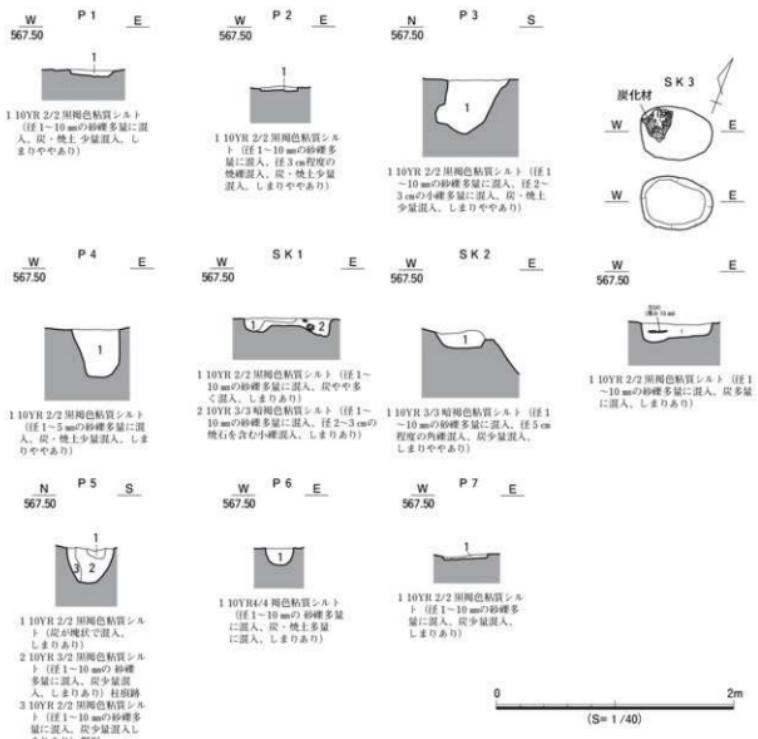


図74 S B36遺構図 (2)

床面状況 残存部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材が遺構の中央近くまで広がっているが、カマドの明確な構造は残存していなかった。完掘後は浅い窪みとなり、そこからピットを3基検出したが、カマドとの関係は不明である。カマド跡が接する竪穴住居跡の掘形は、煙道部構築に伴う大きな張り出しが見られた。

主柱穴 床面上から7基のピットを検出したが、掘形の規模が不揃いで主柱穴の位置に対応しないため、主柱穴を推定することができなかった。

付属遺構 カマド構造材に一部覆われた状態で検出したSK3の埋土中から、薄い板状の炭化材が出土した。カマドとの関係は不明である。

出土遺物 合計57点が出土し、そのうち3点を図示した。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S B 37（遺構：図75・76、遺構全体図分割図②、遺物：図149・150）

検出状況 シ15グリッドの、緩い斜面上で検出した。古墳時代の遺構であるSB49とほとんど重なっており、これを削平している。また、東側のSB36、南側のSV1に切られている。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。埋土上面付近から棒状の炭化材を複数検出したが、床面からかなり離れていることや埋土の一部のみであることから、本遺構に伴うものか否かは不明である。

床面状況 継やかに南に向かって傾斜する。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材が床面の中央近くまで広がっており、これを除去したところ、被熱した礫、カマド袖の基底部、それに取り囲まれるように堆積した炭・焼土混じり土、天井部の崩落土と思われる黄褐色シルト混じりの堆積土などを検出した。これらの堆積を断割り調査した結果、火床と思われる焼土を確認した。堆積土の除去後は浅い土坑状の窪みとなった。この窪みに12・16層といった土を充填して盛り上げ、その上にカマドを築いたと考えられる。

主柱穴 床面上から8基のピットを検出した。そのうち、P2・5が主柱穴と考えられる。

付属遺構 カマド跡の底面で検出したP8は、基盤層内に含まれる扁平な角礫（石材は砂岩）を打ち欠いて掘っている。

出土遺物 合計255点が出土し、そのうち9点を図示した。334は須恵器甕の底部破片であり、接地面には直径4cmほどの平坦面がある。335は陶錠であり、両端部は面取りされている。336～338は土師器甕であり、頸部がほぼ直立し、口縁部はわずかに外反する。また、いずれも内面に煤は付着していない。

所属時期 カマド跡の出土遺物（331・332）から古代1期と考えられる。

S B 38（遺構：図77、遺構全体図分割図③・④、遺物：図150）

検出状況 シ14～15グリッドで検出した。周囲の遺構に削平されて、カマド跡周辺のみ残存している。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。

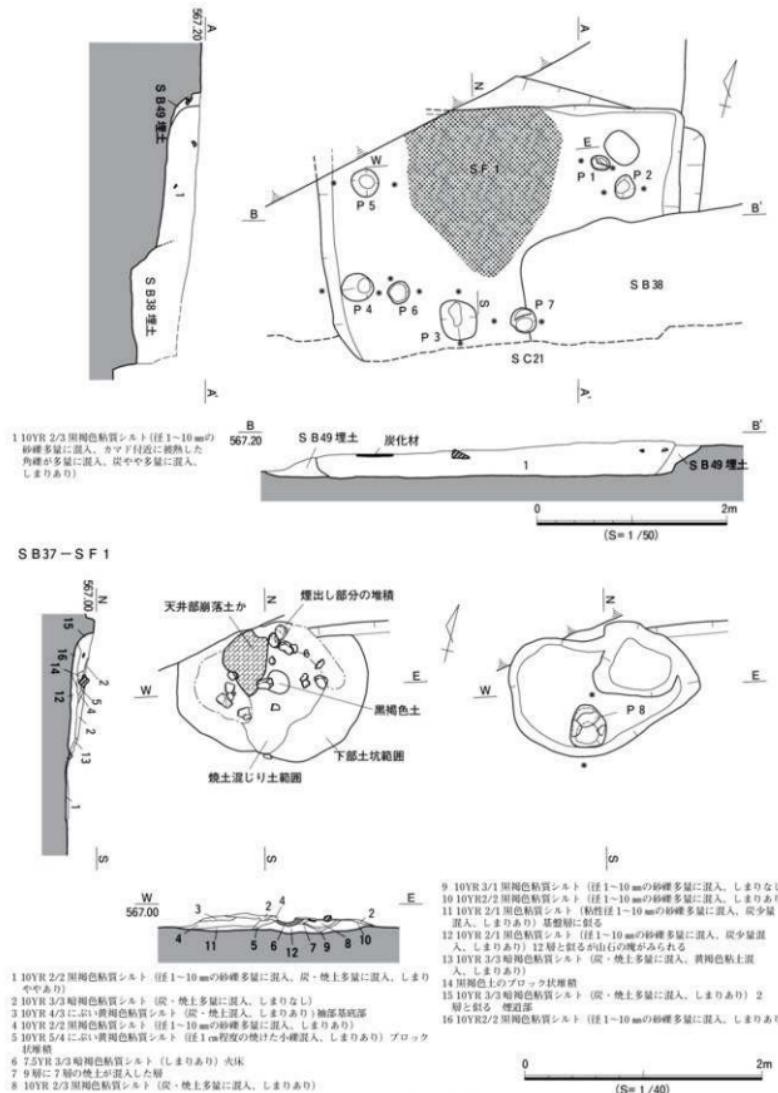


図75 S B37遺構図 (1)

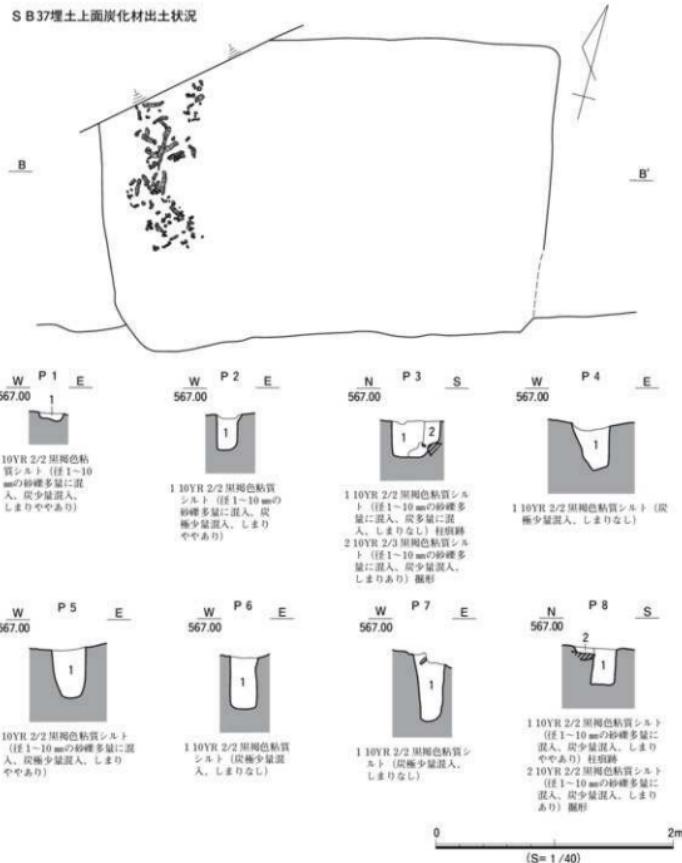


図76 S B37遺構図（2）

床面状況 残存部分はほぼ水平である。カマド周辺には貼床状の敷土が見られた。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。袖部はほぼ基底部のみであり、袖芯材と考えられる礫は現位置を留めていなかった。カマド内では袖部や天井部が崩落したと考えられる黄褐色土混じりの堆積土を確認し、その除去後に火床と立柱石を検出した。立柱石は扁平な角礫が用いられ、これを立てるための掘形を確認した。この他、煙道部の横架部分が残存しており、カマド跡が接する掘形は、煙道部構築に伴うわずかな張り出しが見られた。また、袖部の下から袖石の掘形と考えられる複雑な凹凸を検出したが、その中には立柱石を挟むよう設置さ

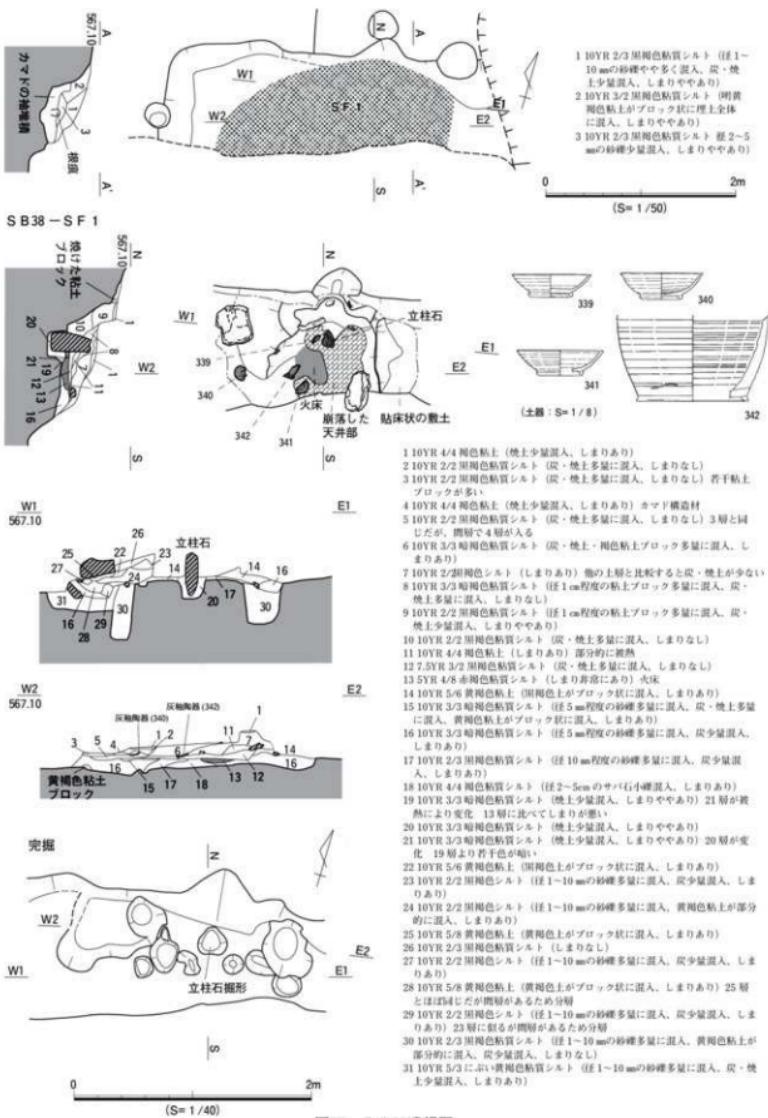


図77 S B38遺構図

れたピット状の掘り込みも確認できた。

主柱穴 遺構の大半が削平されているため、床面上からピットを検出することができなかった。

出土遺物 合計31点が出土し、そのうち4点を図示した。339～341は灰釉陶器碗であり、いずれも口縁端部が鋭く外反する。

所属時期 カマド跡の出土遺物(339～341)から、古代4期と考えられる。

S B39 (遺構:図78、遺構全体図分割図⑨、遺物:図150)

検出状況 エ8グリッドで検出した。カマド跡の様相や主柱穴がはっきりしないため、竪穴住居跡とするには若干疑問が残る。

堆積状況 南北方向の土層断面から、2基の遺構が切り合っている可能性がある。カマドの基底部と考えられる土坑の位置が、北壁から離れていることもこのことを裏付ける。なお、3層の下には風倒木痕が見られた。

床面状況 埋土の堆積は、ほぼ水平である。埋土の2層は基盤層の土が混じるが、しまりが弱いため貼床ではない。

カマド跡 検出した礫は全て角礫で被熱しており、北側3個の礫は立柱石か袖石である可能性もあるが、火床が検出できなかつたため判断できなかった。

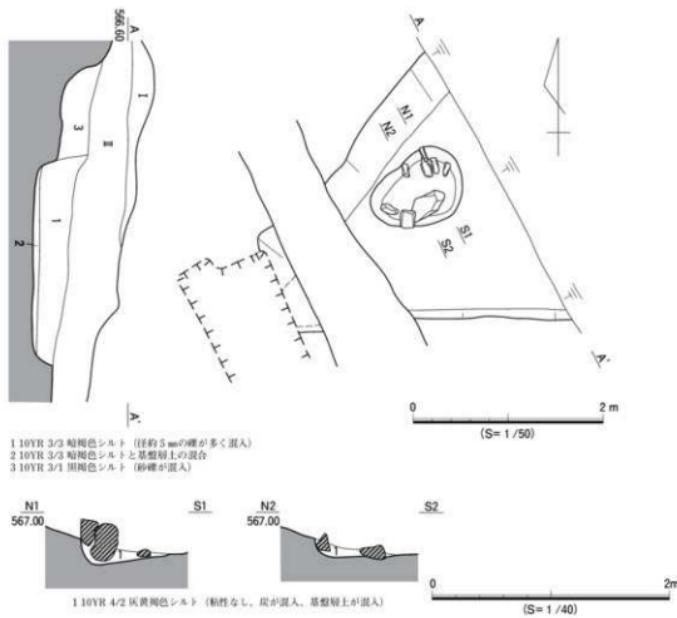


図78 S B39 遺構図

主柱穴 調査した範囲内では、床面からピットを確認することができなかった。

出土遺物 合計29点が出土し、そのうち4点を図示した。343は摘み蓋の転用硯であり、天井部内面が平滑で全面に黒色有機物が付着している。

所属時期 埋土中の出土遺物（343など）全体の様相から古代2期と考えられる。

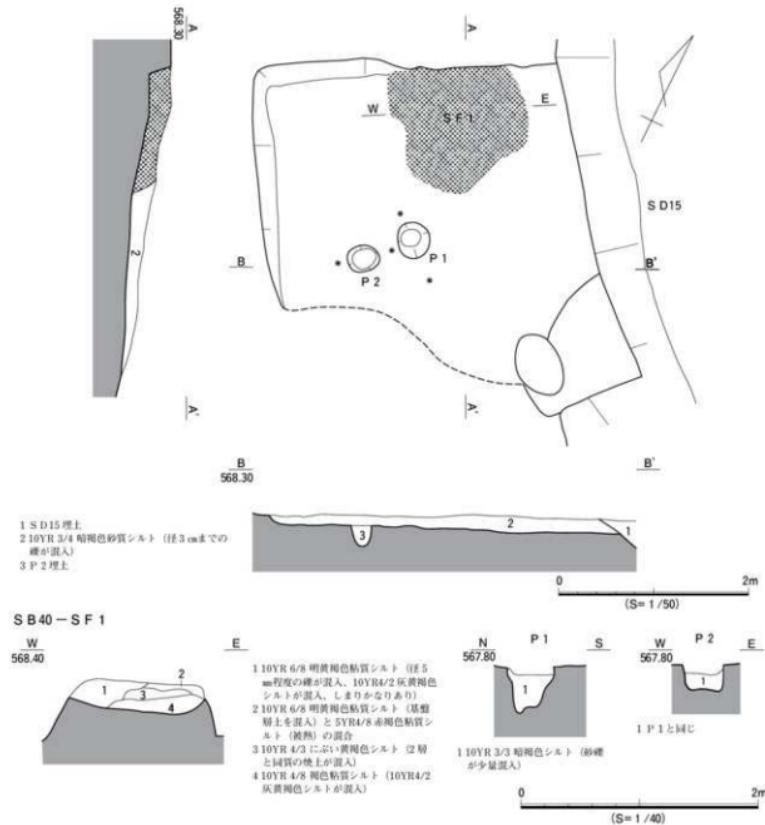


図79 S B 40遺構図

S B 40 (遺構: 図79、遺構全体図分割図20、遺物: 図150・151)

検出状況 コーサ12グリッドの、傾斜がやや強い斜面上で検出した。S D15により東側の掘形が削平されており、遺構掘形南側は流出により残存していない。

検出状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 南に向かって緩やかに傾斜する。貼床は確認できなかった。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の堆積土のみを検出しており、その他の構造材は残存していないかった。一つの特徴としては、カマド構造材が基盤層を掘り残した上で確認できたことがある。なお、埋土中から鉄滓が1点出土しており鍛冶跡の可能性も考えられるが、それ以外に鉄鍛冶に関わる遺物が出土していないため、竪穴住跡のカマド跡とした。

主柱穴 床面上から2基のピット (P 1・2) を検出したが、主柱穴か否かは不明である。

出土遺物 合計175点が出土し、そのうち13点を図示した。347は灰陶器皿であり、底部内面が平滑で、口縁部内面に明瞭な稜を有する。348は灰陶器皿の転用碗であり、口縁端部内面が褐色に変色している。355は製埴土器とした。体部の器壁は薄く、口縁端部は内側に折り返されている。356は須恵器円面鏡の脚部片であり、沈線と方形孔がある。357は口径の小さな蓋である。

所属時期 埋土中の出土遺物 (350) から、古代5期と考えられる。

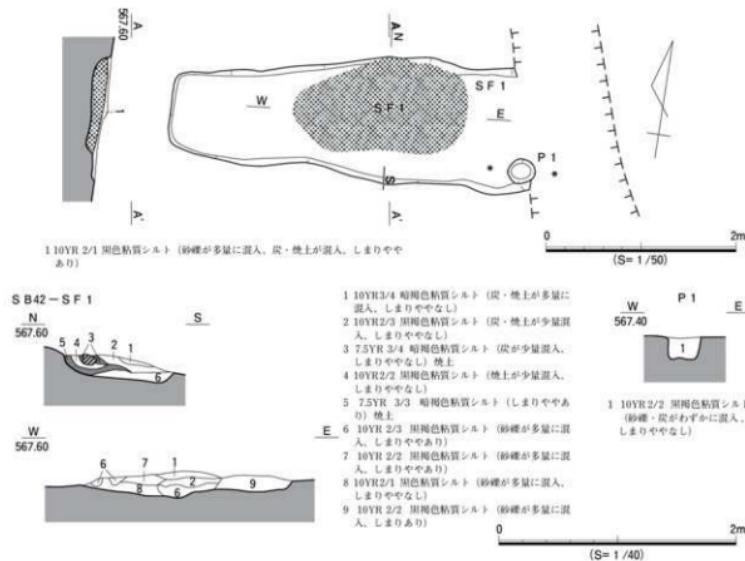


図80 S B 42遺構図

S B42 (遺構: 図80、遺構全体図分割図②、遺物: 図151)

検出状況 シ15グリッドの、傾斜がやや強い斜面上で検出した。遺構の掘形が図面上東西方向に長い長方形になっているが、実際は南側が流出して残存していないと考えられる。なお、東側の一部が平成12年度に行なった試掘確認調査のトレーニチで切られている。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。また、上面が削平され、埋土が非常に薄い。

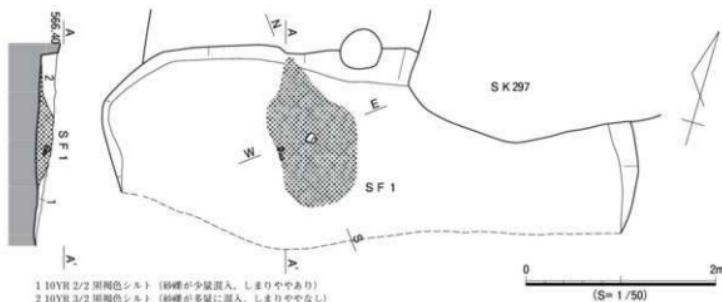
床面状況 緩やかに南に向かって傾斜する。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材は床面上にやや盛り上がった状態で検出されたが、下部土坑の範囲内であるため、ほぼ原位置を留めていると考えられる。大きな特徴は、北壁側で2層になった焼土が確認できたことである。掘形に近い位置で検出された点も、他の竪穴住居跡のカマド跡と異なる特徴といえる。全体の堆積状況としてはSC8に近い状況であり、わずかであるが鍛冶関連微細遺物も出土しているため、本遺構は鍛冶関連遺構の可能性もある。しかし、その他の証拠が乏しいため、竪穴住居跡とした。

主柱穴 P1は主柱穴である可能性があるが、その他のビットが検出できなかったため、断定はできない。

出土遺物 合計50点が出土し、そのうち8点を図示した。364は大型の須恵器有台盤である。底部内面は平滑で、無数の細かい線状痕が残る。

所属時期 カマド跡の出土遺物(362・363・365)から、古代3期と考えられる。



S B44 - SF 1



図81 S B44遺構図

S B44 (遺構：図81、遺構全体図分割図⑧、遺物：図151)

検出状況 オ6～7グリッドの、かなり緩やかな斜面上で検出した。S K297によって北東の掘形が削平されている。また遺構の掘形南側は、流出により残存していない。

堆積状況 2層に分層したが、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部はほぼ水平である。

カマド跡 遺構掘形の北壁に近い位置の床面上で検出した。炭や焼土が混入する土の堆積であり、明確な火床は残存していなかった。カマド跡がこのような状況であるため、本遺構を竪穴住居跡と断定することはできない。なお、この焼土の下には基盤となっているS B53の埋土が、盛り上がった状態で残存していた。

主柱穴 床面上からピットは検出できなかった。

出土遺物 合計24点が出土し、そのうち1点を図示した。370は須恵器甕であり、頸部外面に叩き具の角をあてて文様を施している。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S B45 (遺構：図82、遺構全体図分割図⑨、遺物：図152)

検出状況 ス15グリッドの、調査区南壁に接して検出した。S V1に切られている。また、遺構の西側半分がS B48の上に構築されており、その埋土が床面となっている。その他、壁際で検出した大型土坑S K309・310と切り合い、S K310は明らかにS B45より古いが、S K309との新旧関係は壁際の搅乱によって確認できなかった。

堆積状況 ほぼ単層であり、目立った特徴はない。

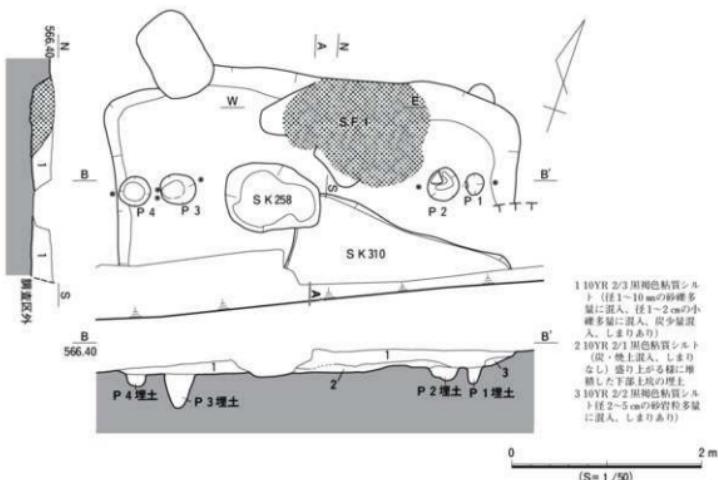
床面状況 残存部分はほぼ水平である。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。被熱部分は堆積土の頂部に見られ、埋土全体に炭と焼土が多量に混入していた。また、堆積の内部から灰釉陶器が散在して数個体出土した。下部土坑の埋土は若干盛り上がり、土坑底面周縁に炭が集中するような状況を確認した。遺構内から鴉の羽口が出土しているため鋳治炉の可能性も考えられるが、微細遺物の確認は行っていない。

主柱穴 床面上から4基のピットを検出した。このうちP2・3は、その位置から主柱穴の可能性がある。

出土遺物 合計313点が出土し、そのうち7点を図示した。371・372は灰釉陶器皿であり、いずれも口縁部が肥厚する。また、372の底部内面は極めて平滑で、底部外面中央付近にわずかに回転糸切り痕が残る。373は灰釉陶器碗であり、口縁部が外反し、底部中央付近の器壁が薄い。376は灰釉陶器壺である。高台は方形を呈し、底部外面周縁に貼り付けられている。また、在地産の土器であるが、体部外面に灰釉を刷毛塗りしている。377は不明の金属製品としたが、厚みや縁辺部が波状を呈する形態から火打金の可能性もある。

所属時期 カマド跡の出土遺物(374・375)から、古代5期と考えられる。



S B45 - S F 1 実掘状況

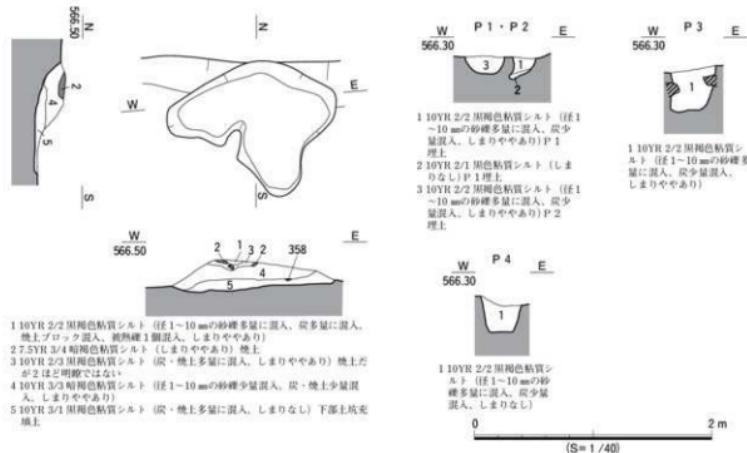


図82 S B45構造図

2 錫治関連遺構

S C 1・S U 1 (遺構: 図83、遺構全体図分割図⑯、遺物: 図152・172)

検出状況 S C 1は、カヘキ11グリッドの緩い斜面上で検出した。不定形を呈する図面上の平面形は、覆土の堆積範囲を示したもので、明確な下端は存在しない。S C 1の北に位置するS U 1は、轆の羽口などの錫治関連遺物がまとまって出土した、錫治関連遺物集積である。

堆積状況 埋土全体に焼土や炭、黄褐色粘質シルトが混入している。

床面状況 残存する部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

錫治炉跡 錫治炉の火床と思われる焼土は3箇所（南からS F 1～3）確認した。S F 1・2は浅い下部土坑があり、火床は充填土が被熱したものである。S F 3は基盤層が被熱していた。焼土の周りでは被熱した礫を複数検出したが、大半は砂岩の角礫であった。S F 2の南側にある礫は表面に凹凸が目立ち、金床石の可能性がある。S F 1北側の礫はコの字形に配置され、いずれも掘形がなく、わずかに床面にめり込んだ状況で出土した。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀代の年代が推定された（第4章第3節参照）。

出土遺物 S C 1から合計159点が出土し、そのうち8点を図示し、S U 1から合計16点が出土し、そのうち3点を図示した。381は須恵器摘み蓋であり、天井部が丸みを帯びている。384は土師器甕であり、体部内外面のハケの単位が極めて細かい。788～790は轆の羽口である。通風口は直径約2cmで、通風口の粘土板の周囲に、さらに別の粘土板を巻いて成形している。

所属時期 遺構床面の出土遺物（380）から、古代3期と考えられる。

S C 2 (遺構: 図39、遺構全体図分割図⑰、遺物: 図152)

検出状況 キヘク12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。遺構の北側にはS B13があり、これを切っている。西側は流出あるいは削平により残存していないかった。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存する部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

錫治炉跡 遺構掘形の北壁に近接して検出した。検出時に炭混じりの堆積土が表面で確認でき、火床も一部露出していた。火床は暗褐色シルトの敷土上面が被熱したもので、火床の東側では黄褐色シルトを検出した。本遺構の火床の範囲は、竪穴住居跡のカマド跡より広い。ところで、カマド跡と同様な位置に設置される火床の例は、今回の調査区ではS C 9・10・14などがあるが、いずれもカマド跡よりも規模が大きく、これらはS C 1・18などの火床と比較しても規模が大きいため、別の錫治工程に使われた可能性もある。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀中頃の年代が推定された（第4章第3節参照）。

付属遺構 錫治ガ跡の南側にS K 1を検出したが、ガ跡との関係は不明である。

出土遺物 合計481点が出土し、そのうち4点を図示した。出土遺物の大半は多量の錫治関連微細遺物であり、鉄滓は錫治滓の中でも精錬錫治滓の可能性が高く、楕円形滓は鍛錬錫治滓の可能性がある。また、鍛造剥片も出土している（第4章第2節参照）。386は灰釉陶器碗であり、口縁端部が鋭く外反する。

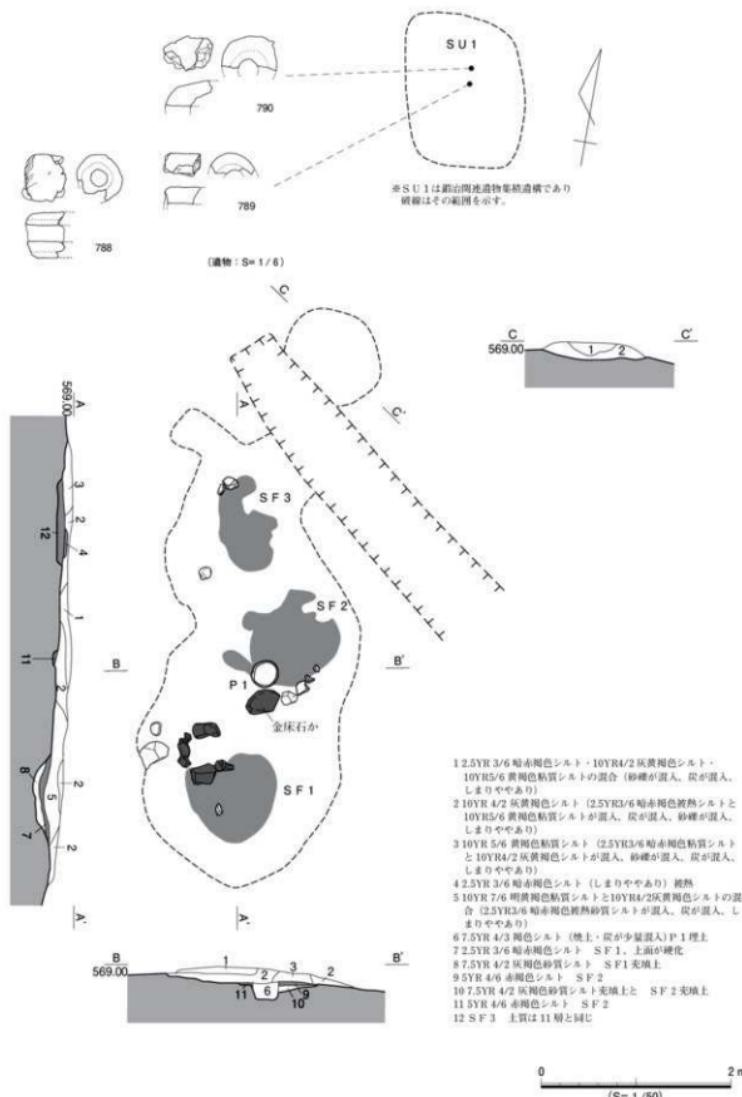


図83 S C 1 - S U 1 造構図

所属時期 埋土中の出土遺物（386）から古代4期と考えられる。

S C 3（遺構：図84・85、遺構全体図分割図⑯～⑰、遺物：図152～154）

検出状況 キ10～ク11グリッドの、緩い斜面上で検出した。平面形は方形を呈するが、掘形の南側は流出あるいは削平により残存していなかった。遺構の南側はS C 4と切り合っており、S C 3の鍛冶跡の一つであるS F 5が、S C 4の埋土上面で確認した。遺構の北側にはS C 1、南側はS C 6といった鍛冶関連遺構に囲まれている。なお、掘形の東側が平成12年度の試掘確認調査で設置したトレーナーにかかっていたが、本遺構に関する記録は残っていない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 地形に合わせるように、緩やかに南に向かって傾斜する。貼床は確認できなかったが、鍛冶跡がある東側床面全体に充填土を入れた大型の下部土坑が存在する。

鍛冶炉跡・カマド跡 焼土は全部で6箇所確認した。そのうち、やや西に外れた床面上にあるS F 1は下部土坑が無く、他の焼土と比較すると被熱が弱い。床面東側に位置する5基の焼土は掘形の長軸に沿って一列に配置されており、S F 3を除いて黄褐色粘質シルトを作う。この中で一番南にあるS F 5はやや被熱が弱く、下部土坑を持たない。S F 2～4・6は、前述した下部の大型土坑上に設置されており、火床はこの土坑の充填土が被熱したものである。北側のS F 6は位置や黄褐色粘質シルト、袖石の可能性がある疊の配置からカマド跡の可能性があるが、埋土から鍛冶関連微細遺物を検出しており、S C 8・14のような掘形北壁に接した鍛冶炉跡の可能性もある。S F 2～4はいずれも強く被熱している。S F 2は火床が2面あり、下面の火床の方が広い。またS F 2下面の火床よりS F 4の方が新しい。S F 3は他の2基と比較すると火床の規模がやや小さい。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、7世紀後半から8世紀前半の年代が推定された（第4章第3節参照）。

付属遺構 床面上で溝状遺構、ピット、土坑などを検出したが、どのような性格を持つのが不明である。なお、S K 2は東側の焼土群に伴う堆積土で埋没しており、遺構が使用されていた時期に開口していた可能性がある。

出土遺物 合計1485点が出土し、そのうち43点を図示した。当遺構からは灰釉陶器段皿が数点出土しており、他遺構と様相が異なる。392は須恵器無台环であり、底径に比べて器高が高い。395は須恵器脚台盤であり、底部内面は平滑で、高台は体部外面下方に貼り付けられている。401・402は灰釉陶器段皿であり、401は底部から体部外面下方を除き灰釉が刷毛塗りされている。402は底部に亀裂が入っており、底部内面中央に1条の園線が巡る。403～405、407～415は灰釉陶器碗である。404は体部が丸みを帯びて立ち上がり、角高台の接地面は外側である。405は底部外面に「定主」の墨書がある。411は底部外面のみ暗灰色に変色している。415は大型の碗であり、底部と体部の色調が異なる。406は灰釉陶器錐形碗であり、体部は中程で屈曲し、口縁部は内傾する。417は須恵器短頭壺であり、口縁部は外反し、端部を丸く収める。422は小型の須恵器平瓶であり、水滴としての用途が想定される。423は須恵器甕であり、底部外面に窯窓が付着している。431は用途不明石器である。素材は横長剥片で、剥離の際に生じた鋭い縁辺部を刃部とし、その摩滅は顕著である。

所属時期 鍛冶炉跡などの出土遺物（403・404・408など）から、古代4期と考えられる。

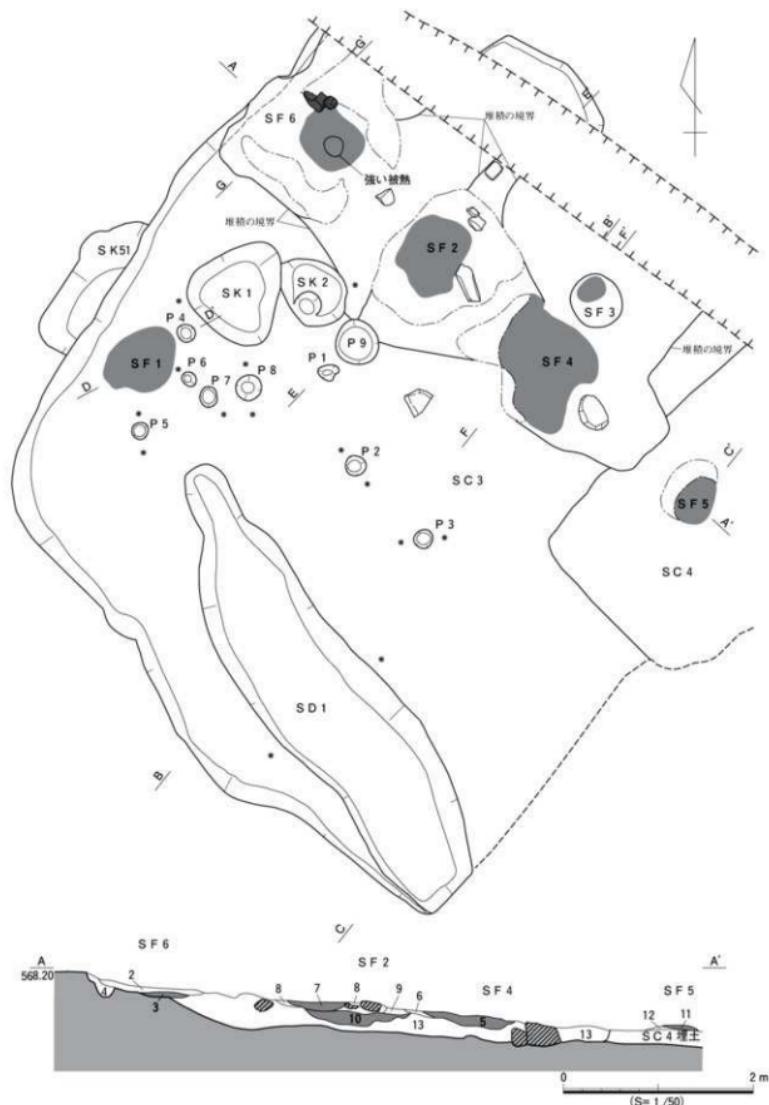


図84 SC 3造構図 (1)

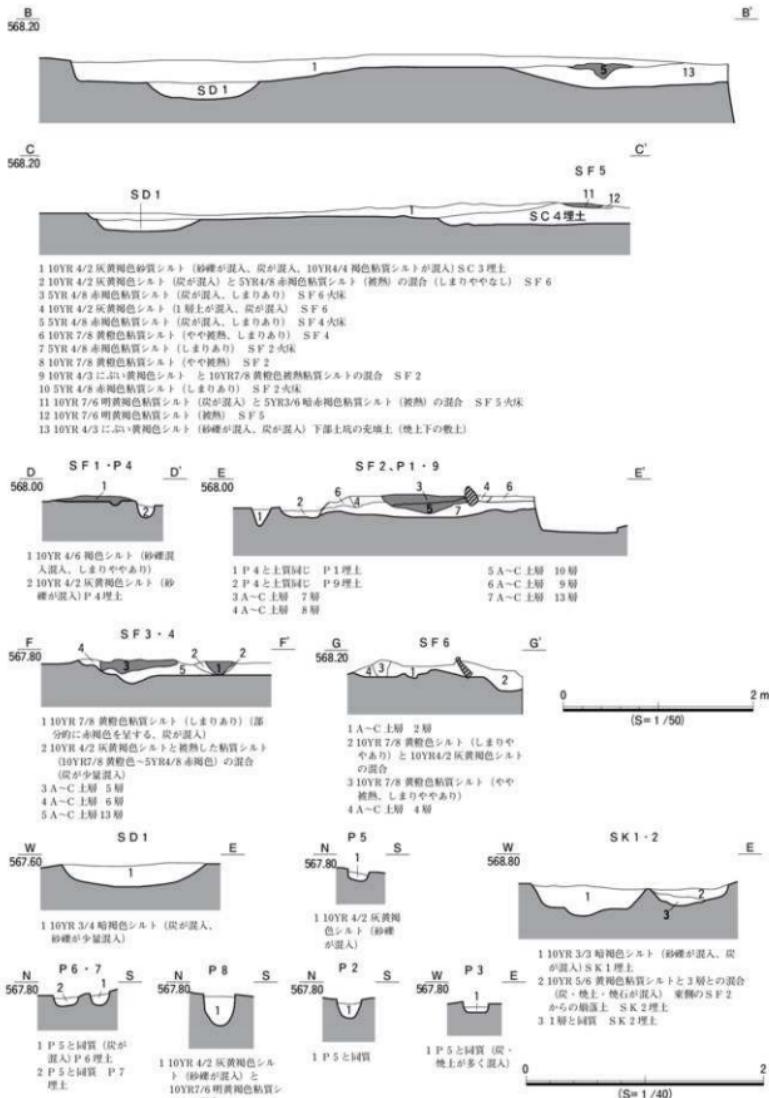


図85 SC 3 遺構図 (2)

S C 4 (遺構: 図86、遺構全体図分割図⑬・⑯、遺物: 図154・155)

検出状況 キーク10グリッドの、緩い斜面上で検出した。平面形は方形を呈するが、掘形の南側は流出し、遺構の北側でS C 3に切られている。掘形のほぼ中央が平成12年度の試掘確認調査で設置したトレンチにかかっていたが、本遺構に関する記録は残っていない。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存する部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

鐵冶炉跡 焼土を2箇所で確認した。S F 2は明確な火床が無く、焼土混じり土の堆積である。鐵冶炉である可能性は低い。S F 1は基盤層上面に明確な被熱が見られた。

出土遺物 合計143点が出土し、そのうち5点を図示した。437は須恵器壺であり、内面全面に降灰による自然釉があるため、口縁部が大きく開く器形と思われる。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

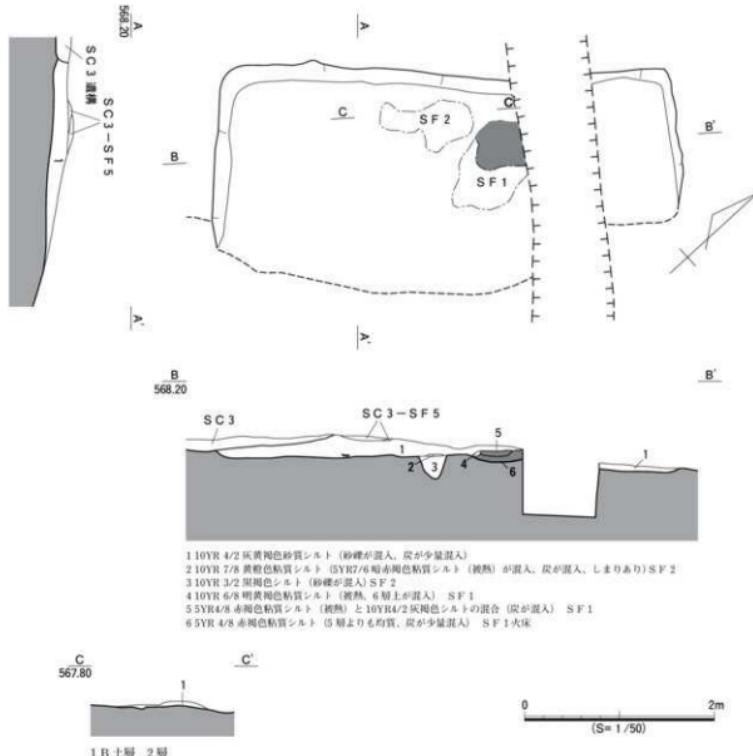


図86 S C 4 遺構図

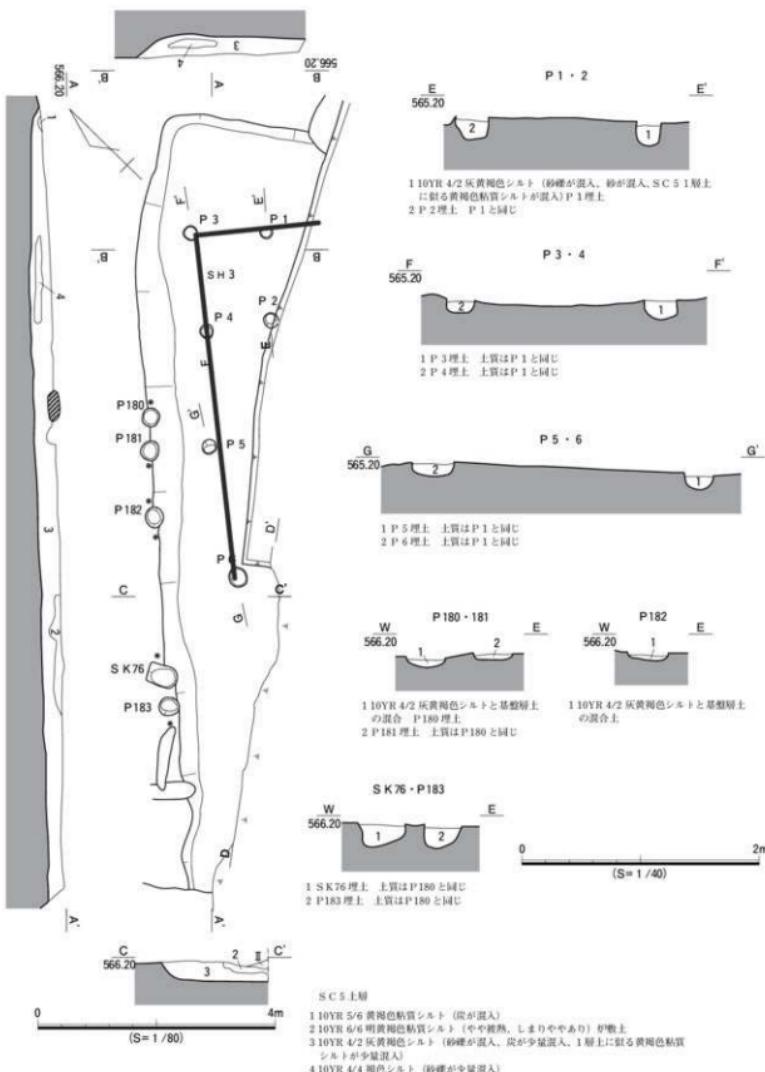


図87 SC 5 遺構図 (1)

S C 5 (遺構: 図87・88、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図155 ~ 157)

検出状況 カ7 ~ キ8グリッドで検出した。東西の長さが残存部分で約13mあり、今回の調査では最大規模の竪穴状遺構である。掘形の西側はSK77によって切られている。鍛冶炉跡と思われる焼土はこの遺構の埋土上面に位置し、S C 5と直接関係があるか否かは不明である。

堆積状況 ほぼ単層であるが、部分的に褐色シルトブロックが混入する。

床面状況 西から東に向かって緩やかに傾斜する。貼床は確認できなかった。

鍛冶炉跡 鍛冶炉跡はS C 5埋土上面の西寄りで検出した。今回検出した鍛冶炉跡には、本遺構のように竪穴状遺構が埋没した跡地に設置されたものが存在する。この理由として、下部土坑と同じ防湿効果を見込んでいる可能性を検討すべきかもしれない。遺構東側のSF1は火床が2面あり、上面の火床周囲では明黄褐色粘質シルトの敷土を確認したが、SF2では敷土を確認できなかった。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀中頃の年代が推定された(第4章第3節参照)。

付属遺構 底面で検出したピットは、3間×1間以上の掘立柱建物跡(SH3)とした。なお、本遺構の掘形上端に沿うようにP180~183を検出したが、すべてS C 5の埋没後に設置された遺構である。

出土遺物 合計846点が出土し、そのうち48点を図示した。446・485は加工円盤であり、446は須恵器有台盤、485は須恵器無台盤の底部周辺を意図的に打ち欠いている。485は胎土が白く、器面が暗灰色を呈し、他の須恵器と様相が異なる。441は須恵器無台碗であり、体部外面に墨書き

S C 5 埋土上面の鍛冶炉跡

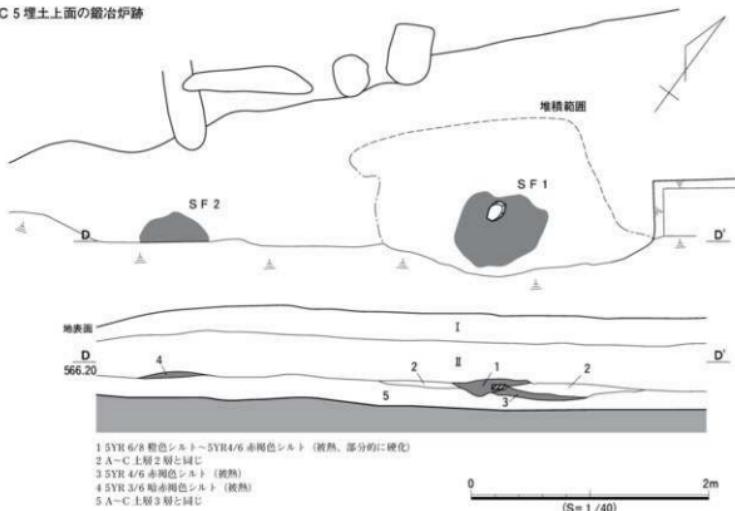
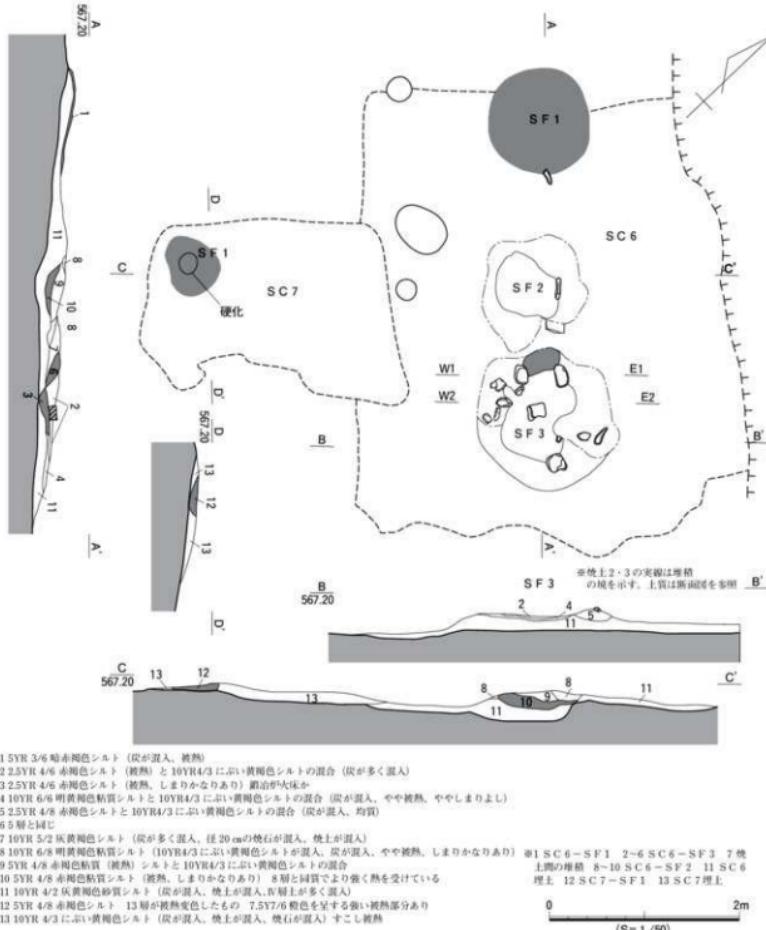


図88 S C 5 遺構図(2)

で縦棒が4本記されており、「冊」の可能性が高い。448・449は灰釉陶器皿であり、448は体部外面中程に明瞭な稜を有する。449は底部外面に「丁」(よばろ)の墨書が記されている。453は緑釉陶器碗であり、口縁部がわずかに外反する。458は灰釉陶器碗であり、口縁部の一箇所に煤が付着していることから、灯明具としての機能が想定できる。469は灰釉陶器碗であり、口縁部外面を強くなすことにより、口縁端部が鋭く外反する。471は須恵器壺であり、体部は円筒形を呈し、口縁部は短く直立する。484は須恵器風字鏡である。側面は外傾し、



端部を丸く收める。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代4期と考えられる。

SC 6・7 (遺構: 図89・90、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図157・158)

検出状況 ク10グリッドの、緩やかな斜面上で検出した。両遺構とも方形に近い形状で炭と焼土が混じる堆積土が広がっていたが、検出時にすでに焼土が確認できる状態であった。鍛冶炉は図面上において破線で囲った範囲に広がる11層の上面で検出しており、検出した範囲は炉下層の充填土と考えられる。

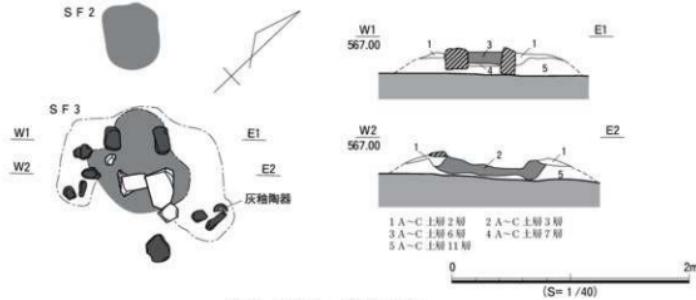
堆積状況 遺構を被覆する埋土は存在しない。

床面状況 充填土の上面、掘形床面ともにSC 6-SF 1部分が若干高くなる。

鍛冶炉跡 焼土はSC 6で3箇所、SC 7で1箇所確認した。SC 6の焼土は遺構掘形の長軸に沿って一列に3基が配置されている。SC 6-SF 1は遺構の西側に位置している。被熱部分が薄く広がっており、鍛冶炉とは考えにくい。SF 2、SF 3はSF 3方が新しく、明黄褐色粘質シルトの敷土や炉に伴うと考えられる被熱繙が残存していた。形状だけ見るとカマド跡のように見えるが、被熱した火床の範囲が広く厚い。SC 7-SF 1は遺構の南西隅に位置している。黄褐色粘土は伴わず、火床の中心付近で被熱による硬化を確認した。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀中頃から末の年代が推定された(第4章第3節参照)。

出土遺物 SC 6から合計403点が出土し、そのうち19点を図示し、SC 7から合計118点が出土し、そのうち6点を図示した。494・497は灰釉陶器碗である。494は口縁部の一箇所に煤が付着していることから、灯明具として使用されたと思われる。底部外面に「西□」の墨書がある。497は焼成不良であり、全体に灰白色を呈する。高台が体部外面下端に貼り付けられている状況がよく分かる資料である。500は土師器甕である。体部外面下方に煤が付着しているが、体部内面には煤は見られない。501は須恵器火舎の脚部片であり、焼成があまく白色を呈する。507は須恵器円面鏡である。陸部は中央に向かって緩やかに傾斜し、海部は外傾する。堤部

SC 6-SF 2・3 上面の堆積を除去した状況

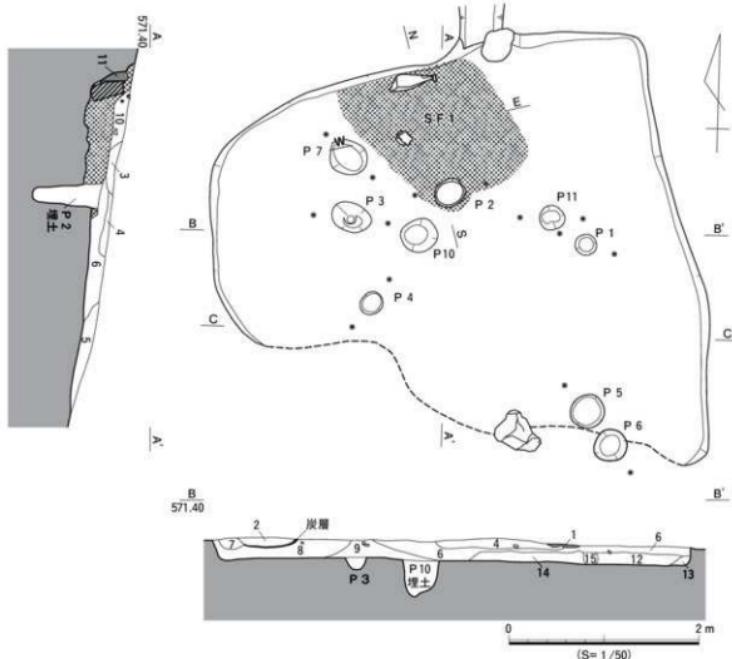


は外傾し、端部はほぼ水平に面取りされている。509は須恵器甕である。頸部外面に軸葉が刷毛塗りされており、体部内面に釉が数条垂下している。

所属時期 SC 6は鋳冶炉跡の出土遺物から、SC 7は遺物全体の様相から、いずれも古代5期と考えられる。

SC 8 (遺構: 図91~93、遺構全体図分割図◎・◎、遺物: 図158・159)

検出状況 ケ～コ15グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。平面形は方形に近い形状を呈す



1 LOYR 3/3 塗褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭が多量に混入、しまりあり) 槌上

2 LOYR 3/2 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭・焼土ブロックが混入、しまりややあり)

3 LOYR 2/2 黒褐色粘質シルト (砂礫が少量混入、炭が混入、しまりややなし)

4 LOYR 2/2 黒褐色シルト (砂礫が少量混入、大粒の炭が多量に混入、しまりややなし)

5 LOYR 2/3 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭が少量混入、しまりややなし)

6 LOYR 2/2 黒褐色シルト (大粒の砂礫が多量に混入、炭・焼土ブロックが少量混入、しまりややあり)

7 LOYR 2/2 黒褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、炭・焼土ブロックが少量混入、しまりややあり)

8 LOYR 2/2 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭・焼土ブロックが多量に混入、しまりなし)

9 LOYR 2/2 黒褐色粘質シルト (大粒の砂礫が多量に混入、しまりなし)

10 LOYR 2/2 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、大粒の炭が多量に混入、しまりややあり)

11 LOYR 2/2 黒褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入、しまりなし)

12 LOYR 2/2 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭が混入、しまりややなし)

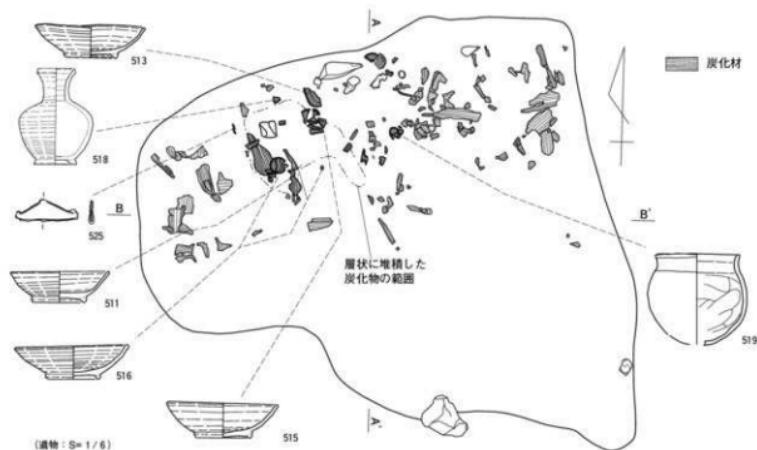
13 LOYR 2/2 黒褐色粘質シルト (砂礫が混入、しまりなし) 墓際の崩落堆積

14 LOYR 2/2 黒褐色シルト (砂礫が多量に混入、しまりあり)

15 LOYR 3/3 塗褐色シルト (砂礫が多量に混入、炭がわずかに混入、しまりややなし)

図91 SC 8 遺構図 (1)

炭化材・遺物出土状況



炭化材・遺物の散布状況

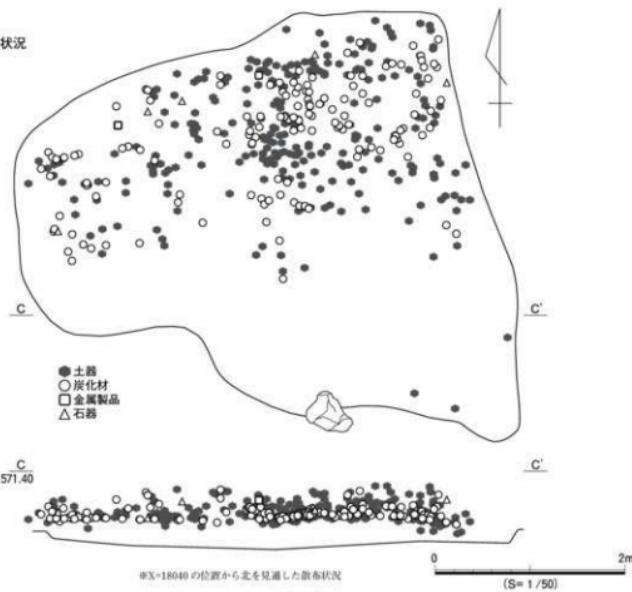


図92 SC 8 遺構図 (2)

るが、遺構掘形の南側は流出あるいは削平により残存していなかった。調査終了時点では豎穴住居跡と認識していたが、埋土や炉跡埋土の水洗選別によって多量の鍛冶関連遺物を検出したため、鍛冶関連遺構とした。

堆積状況 埋土中より多量の炭化材が出土しており、上屋が焼失した可能性が高い。埋土は炭化物や焼土の混入状況によって複数に分けられる。

床面状況 地形に合わせるように南に向かって緩やかに傾斜する。

鍛冶炉跡 鍛冶炉跡と考えられる遺構は掘形北壁に接して検出した。火床は豎穴住居跡の掘形北側に接した位置で検出し、そこには板状の角礫が立てかけられていた。火床は12・13層といった充填土が被熱硬化したものと思われるが、さらにその下の8層まで被熱痕を確認した。また火床の上面には炭が堆積していた。鍛冶炉跡の完掘後は、すり鉢状の土坑になった。これらの特徴は豎穴住居跡のカマド跡にはみられない構造であり、この遺構を鍛冶炉跡とした根拠の一つである。

付属遺構 遺構床面や炉跡内から11基のピットを検出したが、規則的な配置は見られず、その性格は不明である。

炭化材 本遺構の埋土中から多量の炭化材を検出した。これらは遺物とともにほぼ同じ標高から上で検出しており、土層断面図の2～4層や10層上面、つまり遺構の北側半分に集中していることが特徴である。この炭化材が上屋に伴うものとすれば、遺構掘形の半分程度を覆うものだった可能性があるが、一定のレベルに分布していることを考えると、削平や流出によって南側の炭化材や遺物が失われた可能性もある。なお、炭化材は埋土中に堆積していることから、焼失が起こった時期は本遺構が操業している時期ではない。炭化材は棒状材と板状材の2種があり、棒状材は遺構の主軸に対して平行な方向を向いているものが多い。また、掘形北壁際の炭化材は北側が高くなっているものが多く見られた。なお、炭化材以外に炉跡の西側から薄い炭の堆積を面的に検出した。

出土遺物 合計544点が出土し、そのうち17点を図示した。526は須恵器甕である。他の須恵器甕と比較して頭部の立ち上がりが短く、口縁端部はほぼ垂直に面取りされる。518は須恵器長頸壺である。なで肩で、頭部下方はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は面取りされている。器高が12.0cmで、通常の長頸壺よりも小型といえる。519は土師器甕であり、体部外面はハケ調整でなく、布状のもので丁寧にナデ調整がなされる。内面には黒斑が残る。521は器種不明の土製品である。形状は土錘に近いが長さ2.4cmと短く、上方に向かって直径が小さくなる。520は鉄製の紡錘車であり、中央に直径約2mmの円孔が穿たれている。524は須恵器ミニチュア製品である。手づくね成形であり、内面には横方向の板ナデ痕、外面上には指圧痕が残る。外面上には2条の縦沈線が幅約1cmの間隔で描かれ、それが外面上を3つに区画していると思われる。区画内には四角錐状の突起が縦に2～3個の単位で2列貼り付けられ、突起はヘラ状工具で面取りされている。なお、本遺構の埋土中から、多量の鍛冶関連微細遺物を検出し、楕円形滓も1点出土している。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代5期と考えられる。

SC 8-SF 1 実掘状況

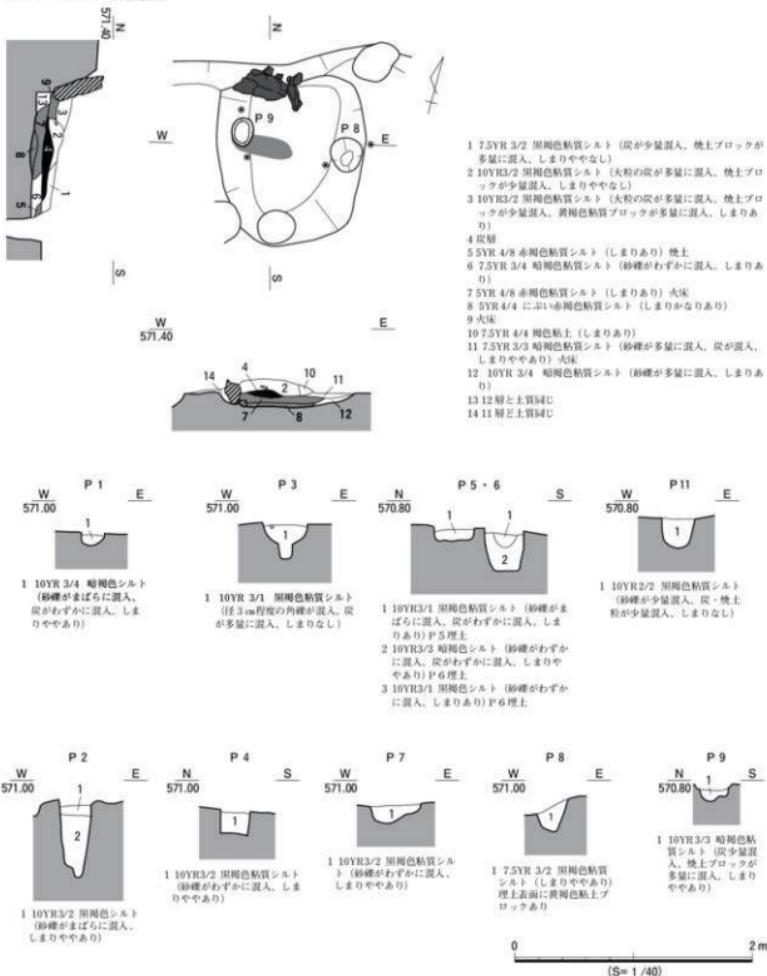
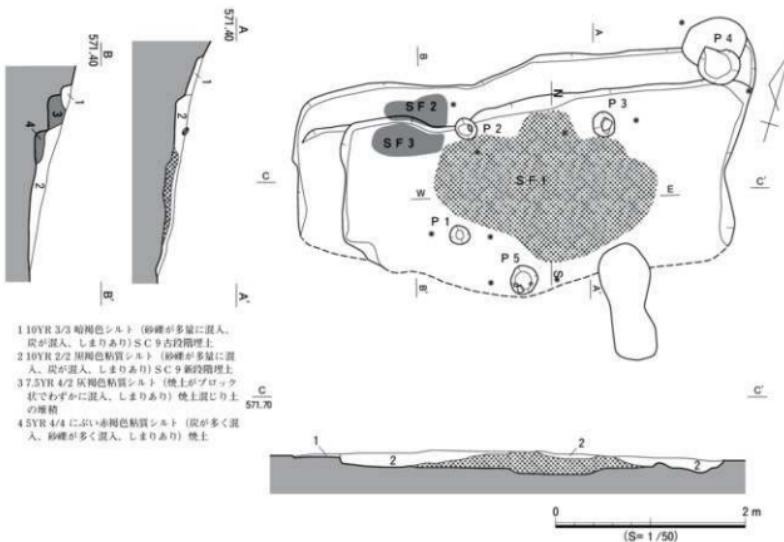
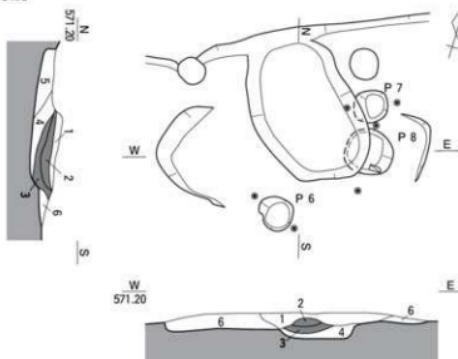


図93 SC 8 遺構図 (3)



SC 9-SF 1 実掘状況



- 1 10YR 3/2 黒褐色粘質シルト (炭2~3cmの被熱した小砾が少量混入。地表が粉粒・ブロック状で混入。
しまりややあり)
2 5YR 4/4 赤褐色粘質シルト (粗砂が多く混入。しまりあり) 次床
3 7.5YR 2/2 黒褐色粘質シルト (炭が混入。しまりややなし) 被熱により変色した層
4 10YR 3/3 黒褐色粘質シルト (砂礫が多く混入。しまりややあり)
5 10YR 3/2 黒褐色粘質シルト (砂礫が多く混入。黒褐色土上がブロック状で混入。しまりなし)
6 5YR 3/3 黒褐色粘質シルト (炭が少量混入、砂礫が多量に混入。しまりあり)

図94 SC 9 遺構図 (1)

SC 9 (造構: 図94・95、造構全体図分割図②・③、遺物: 図159)

検出状況 ケ14～コ15グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。本造構のすぐ西側にSC 8が位置する。平面形は方形に近い形状を呈するが、造構掘形の南側は流出あるいは削平により残存していなかった。当初は1基の造構と考えていたが、掘削を進める過程で2基が切り合った状況であることが判明した。なお、本造構からは鍛冶関連遺物が出土していないが、検出した造構の様相から推測し、鍛冶関連造構に分類した。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。

鍛冶炉跡 鍛冶が跡と考えられる造構は、新しい方の竪穴状造構の床面上で検出した。堆積物の中心が掘形の北壁から離れている点がカマド跡と異なる。また、炉跡に伴う堆積物が、床面の半分程度を占める範囲に広がっていた。この堆積物の断削り調査によって、火床と考えられる被熱部分を検出した。下部土坑の充填土である4層が被熱したと考えられる。この造構の西側に2箇所の焼土(SF 2・3)を確認したが、SF 2は古い方の竪穴状造構に伴うものである。明確な被熱ではなく、焼土混じり土の堆積である。

付属遺構 造構床面や炉跡内から8基のピットを検出したが、規則的な配置は見られず、その性格は不明である。

出土遺物 合計71点が出土し、そのうち6点を図示した。532は土師器甕であり、口縁端部を外側に折り返している。

所属時期 埋土出土遺物(529)から、古代5期と考えられる。

SC 10 (造構: 図96・97、造構全体図分割図②・遺物: 図160)

検出状況 サ14グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。西側に鍛冶関連造構であるSC 11が近接する。平面形は方形に近い形状を呈するが、造構掘形の南側と東側は流出あるいは削平によ

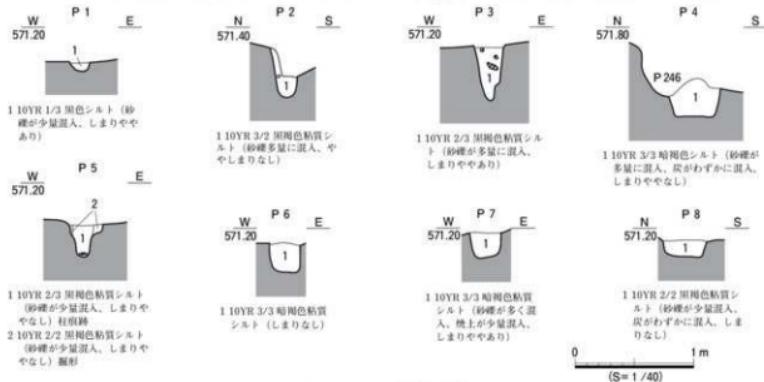


図95 SC 9 造構図 (2)

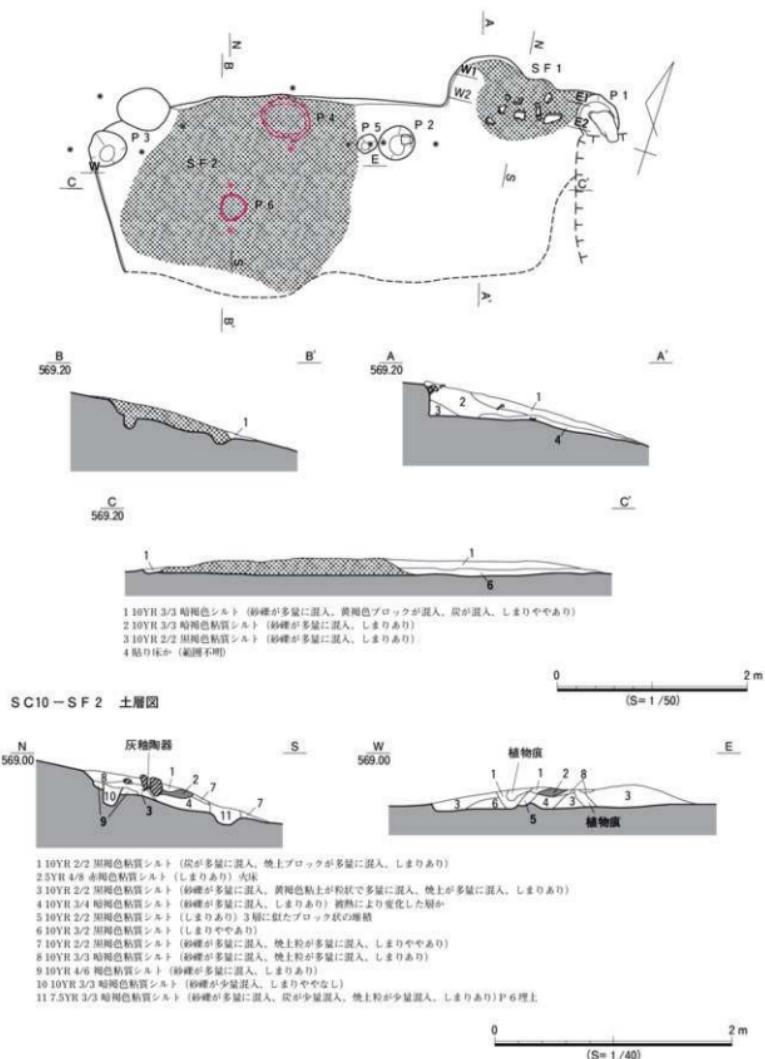
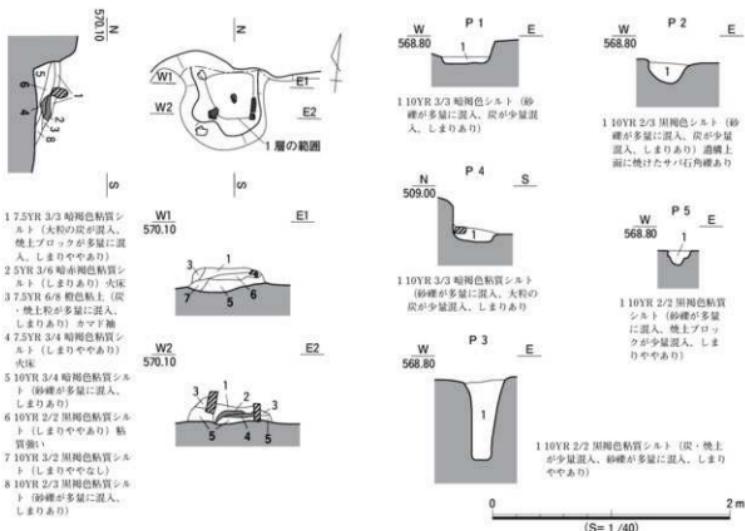


図96 SC10遺構図(1)

SC10-SF1



り残存していなかった。この遺構の掘形北東隅に張り出しがあり、そこからカマド跡を検出した。鍛冶関連遺構にカマドが設置される事例はSC3でも確認したが、SC3は鍛冶炉跡の可能性もある。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。上面の削平が激しく、検出段階すでに鍛冶炉跡が露出していった。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって傾斜する。

鍛冶炉跡・カマド跡 鍛冶炉跡と考えられる遺構(SF2)は、掘形の西寄りの床面上で検出した。

堆植物の広がりは検出した床面の約半分を占める。火床は充填土の上に築かれており、焼土は充填土が被熱変化したもので、その下層も被熱していた(4層)。一方、カマド跡(SF1)も充填土の上に火床を確認した。立柱石と袖石と考えられる砾が現位置を保っており、断削り調査により袖石・立柱石に囲まれた範囲内が火床であることを確認した。竪穴住居跡のカマド跡に比べ規模が小さく、SC10で作業を行った人々が鍛冶作業の補助的な目的で使用したものと考えられる。

付属遺構 遺構床面から6基のピットを検出した。規則的な配置は見られず、その性格は不明である。

出土遺物 合計64点が出土し、そのうち6点を図示した。535は須恵器蓋であり、天井部内面に焼成時に生じたヒビがある。

所属時期 図示していないが、灰釉陶器碗が出土しており、その高台形態から古代4期と考えられる。

SC11(遺構:図98・99、遺構全体図分割図②、遺物:図160・161)

検出状況 サ15グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。東側に鍛冶関連遺構であるSC10が近接しており、この位置関係はSC8とSC9に類似している。北側で鍛冶関連遺構であるSC13と切り合っている。平面形は方形に近い形状を呈し、遺構掘形南側は流出あるいは削平により残存していなかった。

堆積状況 埋土自体は単層であり特に目立った特徴はないが、埋土上面が複数の遺構によって切られている。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。床面上に黄褐色粘土ブロックが混入する堆積層(6・7層)が広がっており、南側(7層)の方が粘土の量が多い。埋土中には長さ20~30cmの被熱した角礫が含まれており、その中には直立しているようなものもあった。この堆積の断割り調査中に、焼土を2箇所で確認した。この他、掘形の北東隅に硬

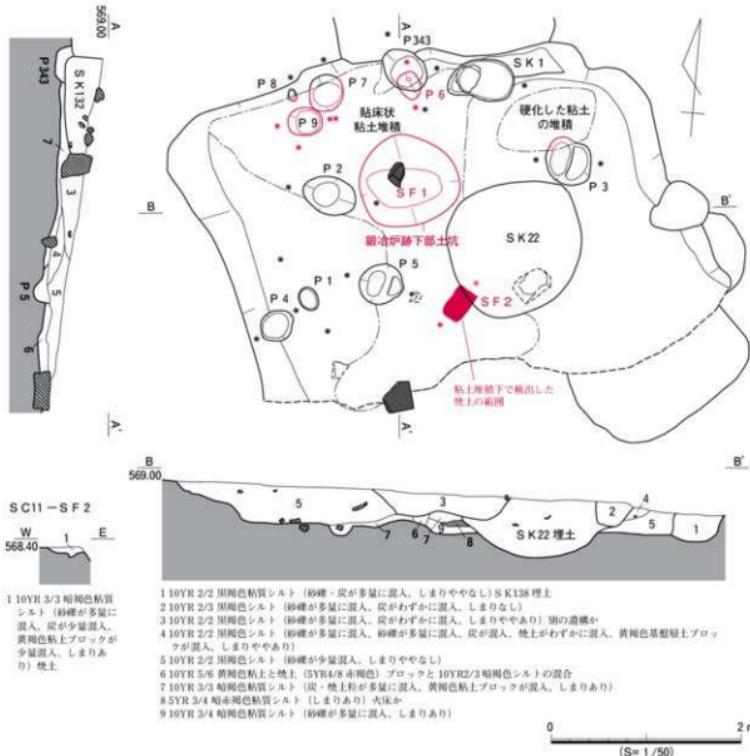


図98 SC11遺構図(1)

化した粘土の堆積を検出した。

鐵冶炉跡 鐵冶炉跡と考えられる遺構は、堆積土の断削り調査中に確認した。S F 1は、遺構のほぼ中央に位置する。火床の範囲は確認できなかったが、床面堆積の除去後、火床を検出した付近が浅い窪みとなった。S F 2はやや南寄りに位置し、堆積土の除去後に検出した。明確な被熱痕はないが、この焼土堆積の上面に火床があった可能性がある。

付属遺構 9基のピットと1基の土坑を検出した。P 2・3が主柱穴の可能性があるが、P 2が火床に近いため、若干疑問が残る。その他の遺構は、性格不明である。

出土遺物 合計1,238点が出土し、そのうち36点を図示した。545・540は須恵器無台碗であり、540は体部内面上方に明瞭な稜があり、545は底部外面に「仁万」の墨書きがある。547は須恵器無台碗であり、底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリ調整がなされる。569は灰釉陶器小瓶である。最大径を体部下方にもち、肩部の張りは弱く、頸部は細い。571・573は須恵器甕である。571は口頭部内外面を施釉し、573は器面が黒色、断面はセビア色を呈する。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代5期と考えられる。

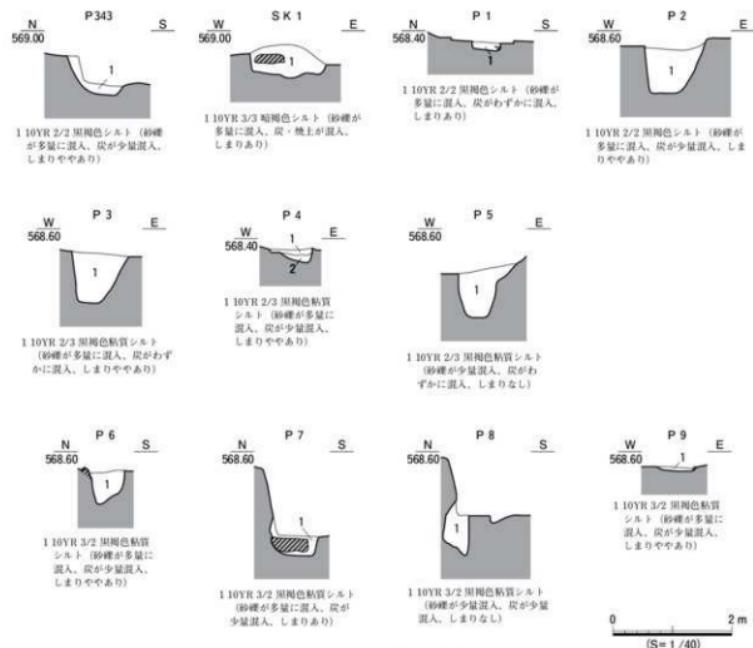


図99 SC11遺構図(2)

S C 12 (遺構: 図100、遺構全体図分割図㊂・㊃、遺物: 図162)

検出状況 サ15～シ16グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。検出段階で、すでに三次炉の火床が露出していた。平面形は不定形であるが、流出や削平の影響で本来の形状を留めていない可能性がある。

堆積状況 埋土は単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。

鍛冶炉跡 遺構中央に粘土を伴う炉が設けられている。3回の作り替えが行われており、それぞれの長軸は50～120cmである。一次炉は竪穴の床面上に作られており、盛土と焼土を取り巻く黄褐色粘土によって盛り上がっている。東西にある焼土の新旧関係は不明だが、焼土を囲むように被熱礫を作うことや、その後の変遷を考えると東側の方が新しいと考えられる。二次炉は東側の一次炉を粘土で覆い、そのやや南側に火床を築いている。この段階で床面から15cmほど盛り上がっているが、断割り調査により、東西南の盛り土の裾がさらに広がっており、掘削段階で削ってしまったことが分かった。なお、遺構の西側に並んだ2列の礫の内側が二次炉に伴うと考えられ、この礫は他の礫と比較すると被熱による変色が明瞭であった。三次炉は最も南側に位置する。黄褐色粘土はこの焼土を取り巻くように残存しているが、南側は残っていない。また、三次炉に伴う礫は1個のみを確認したが、本来全周するものなのか否かは不明である。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀前半から9世紀前半の年代が推定された（第4章第3節参照）。

付属遺構 床面上と鍛冶炉跡の下から2基のピットを検出したが、その性格は不明である。

出土遺物 合計340点が出土し、そのうち13点を図示した。578は須恵器摘み蓋の転用硯である。582は灰釉陶器碗であり、底部内面中央が円形に窪む。585は須恵器有台碗であり、高台の貼り付けが粗雑である。

所属時期 鍛冶炉跡の出土遺物（579～581）から、古代4期と考えられる。

S C 13 (遺構: 図101、遺構全体図分割図㊂・㊃、遺物: 図161)

検出状況 コ～サ15グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。平面形はほぼ方形で、1辺2m程度の小型遺構である。南側でS C 11を切っている。

堆積状況 埋土は単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。

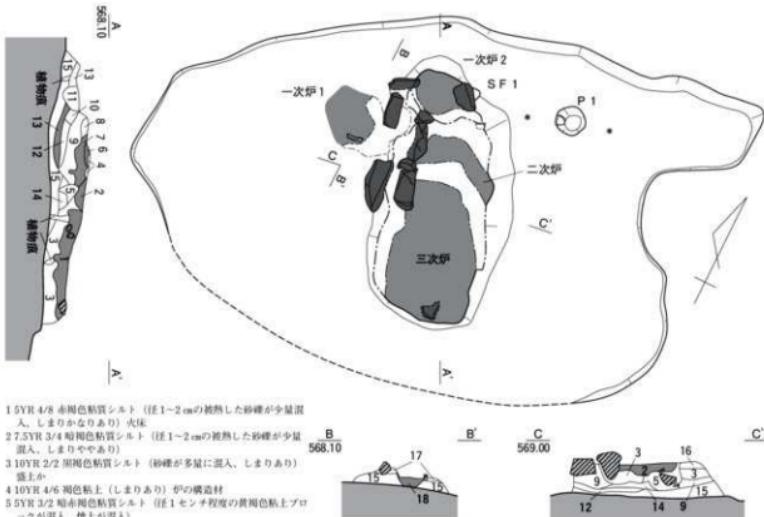
鍛冶炉跡 遺構北西隅の床面上に被熱した粘土を伴う焼土を検出した。掘形の規模が小さいため、火床が床面の約4分の1を占める。基盤層が被熱しているが、他の鍛冶関連遺構ほど明確な変色は確認できなかった。なお、本遺構からは鍛冶関連遺物が出土していないため、鍛冶炉跡である証明はできない。

付属遺構 床面の北壁際から1基ピットを検出した。断面形は南側に向かって傾いている。

出土遺物 合計127点が出土し、そのうち3点を図示した。577は土師器甕であり、底部は丸底で、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は短く外反する。体部内外面に煤は付着していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

SC12-SF1 検出状況



SC12-SF1 一次炉

※東側は断ち切削により消失。

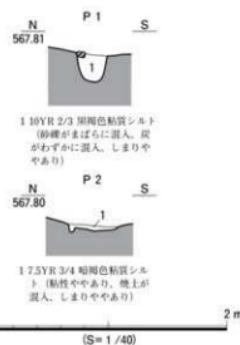


図100 SC12構造図

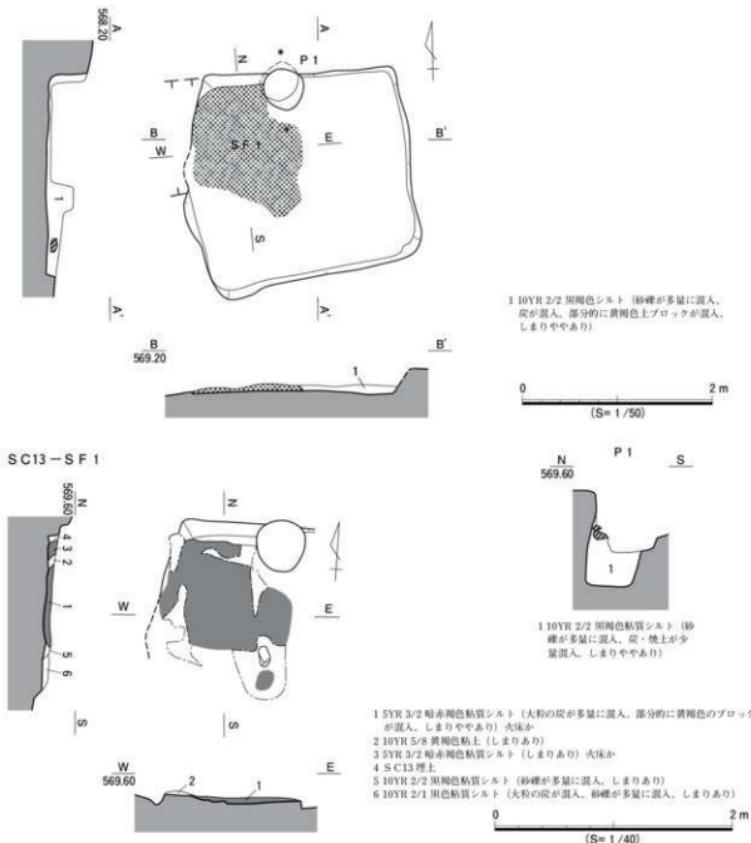


図101 SC13遺構図

SC14 (遺構: 図102、遺構全体図分割図①、遺物: 図162)

検出状況 エ9グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。平面形は方形を呈し、遺構掘形の南側は流出あるいは削平により残存していなかった。

堆積状況 表面の薄い堆積層（1層）下から、溝状に堆積した砂層（3層）を検出した。遺構の構造との関係は不明である。壁際には自然堆積と思われる三角堆積（6層）を確認した。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。炉跡の周囲には硬化面が広がっていた。

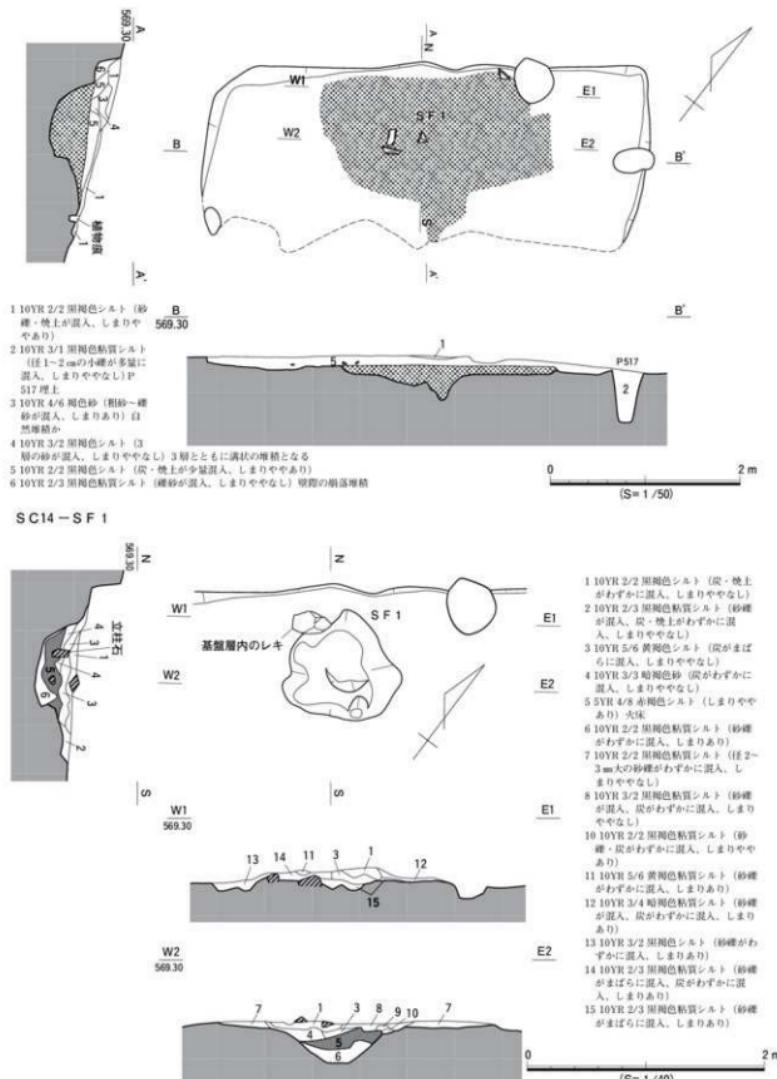


図102 S C14構造図

鐵冶炉跡 遺構掘形の北壁際で検出した。北壁には接していない。硬化した黒褐色シルトの床面上に黄褐色シルトが広がっていた。断割り調査の結果、縮まりの弱い黄褐色シルト（3層）が、窪みに落ち込むような状態で堆積しており、その下層から明瞭な火床を検出した。この火床（5層）は土坑充填土（6層）が被熱したもので、カマド跡の被熱範囲と比較すると、非常に厚く、広いことが特徴といえる。この被熱範囲付近には、被熱により変色した砂岩の角礫が混入していたが、その中の1個が立柱石のように立てられていた。この礫は掘形が無く、下部土坑に土を充填する際に設置されたと思われる。この立柱石の存在から、本遺構をカマド跡と考えていたため、水洗選別による鍛冶関連遺物の採取は行わなかった。火床の上面を覆う黄褐色シルトは、が跡の構造に関わる堆積にしては縮まりが無く、被熱していない。

出土遺物 合計21点が出土し、そのうち4点を図示した。593・594は金属製品で器種は不明である。いずれも円筒を縦方向に半分に切った形状を呈する。

所属時期 鍛冶炉跡の出土遺物（591）から、古代3期と考えられる。

SC15（遺構：図103、遺構全体図分割図⑤上、遺物：図163）

検出状況 ウ5グリッドの、緩い斜面上で検出した。SB27が東側に隣接する。平面形は長方形に近い不定形を呈し、検出した段階で埋土中の人頭大の角礫や川原石、黄褐色粘土が見られた。

堆積状況 埋土中には、黄褐色粘土ブロックや焼土、炭が多量に混入していた。また、SK1の周囲に多くの焼土堆積と人頭大の礫を検出したが、礫に明瞭な被熱痕は見られなかった。

床面状況 ほぼ水平であり、貼床等は確認できなかった。

付属遺構 床面の北東隅で検出したSK1の埋土上面に、扁平で細長い角礫が立った状態で出土した。検出前の本遺構の上面には焼土が多く分布しており、何らかの施設と考えられるが、礫に明

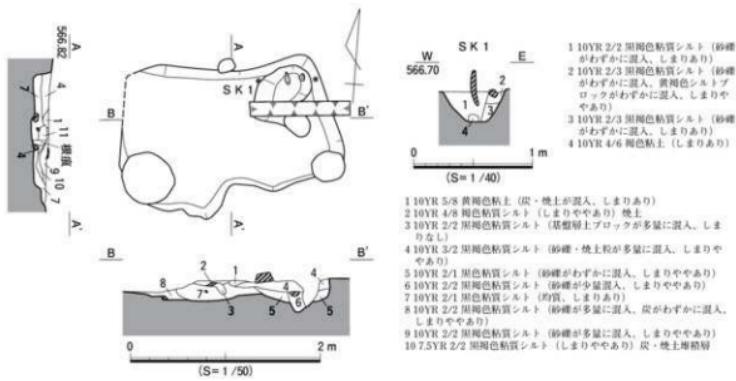


図103 SC15遺構図

瞭な被熱痕は見られなかった。

出土遺物 合計13点が出土し、そのうち2点を図示した。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

SC 16 (造構: 図104、造構全体図分割図⑦、遺物: 図163)

検出状況 エ～オ6グリッドの、なだらかな斜面上で検出した。この付近は複数の造構が切り合うが、その中で最も新しい。平面形は東西に長い長方形を呈するが、検出時にS B34との切り合いを誤認し、南壁の一部を破壊してしまったため、記録を残すことができなかった。

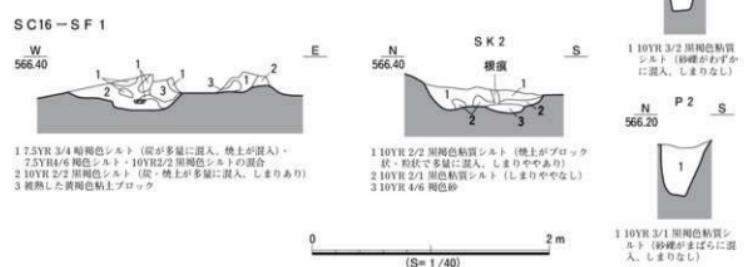
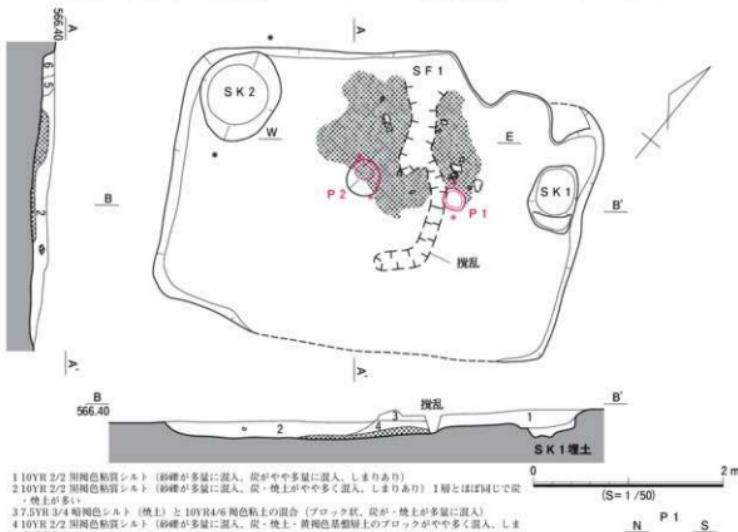


図104 SC 16造構図

堆積状況 ほぼ単層であり目立った特徴はないが、炉跡の上層の土には炭・焼土・黄褐色粘土ブロックが多量に混入していた。

床面状況 水平であり傾斜は見られない。床面上にはS B34のカマド跡が露出していた。

鐵冶炉跡 遺構掘形の北壁際で検出したが、北壁には接していない。また、明確な火床は確認できなかったが、多量の焼土や被熱した黄褐色粘土ブロックが堆積していた。なお、完掘後に焼土下の西側が浅い土坑状の窪みとなった。

付属遺構 床面上から土坑を2基、鐵冶炉跡下からピットを2基検出した。そのうち、SK 1の埋土中には多量の焼土が混入していた。

出土遺物 掘形や鐵冶炉跡の埋土中から、鐵冶関連微細遺物を検出した。また、鞆の羽口の破片が出土した。合計207点が出土し、そのうち10点を図示した。598は須恵器有台杯であり、底部外面に「海」の墨書がある。607は有溝砥石である。研磨面は2面で、研磨溝は断面V字形を呈する。なお、研磨面は平滑ではない。

所属時期 鐵冶炉跡の出土遺物(600)から、古代3期と考えられる。

SC 17 (遺構: 図105、遺構全体図分割図⑤上)

検出状況 ウ4~5グリッドの、緩やかな斜面上で検出した。S B31を切っている。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模や遺構の状況がSC 15と類似している。

堆積状況 埋土は非常に薄く、上面に炭と焼土が混じる土や黄褐色粘土ブロックの広がりを確認した。

床面状況 水平であり傾斜は見られない。

付属遺構 堆積土上面から掘り込まれた遺構を確認したが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物 合計2点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

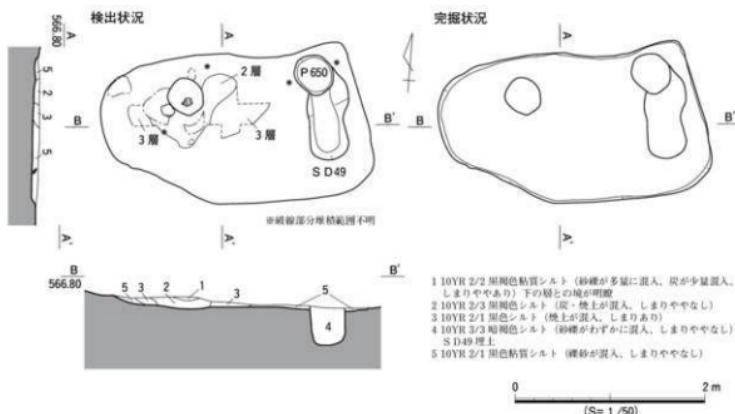


図105 SC 17遺構図

SC18 (遺構: 図106、遺構全体図分割図⑧)、遺物: 図163・164)

検出状況 カ7グリッドの、緩い斜面上で検出した。明確な掘り込みは無く、炉跡と黄褐色シルトを含む貼床の広がりを検出し、SD1により囲まれていることを確認した。

堆積状況 遺構を被覆する埋土は確認できなかった。

床面状況 検出した貼床の上面は水平である。なお、貼床は炉を中心とした範囲に広がっており、区画内全域には展開していなかった。

鐵冶炉跡 鐵冶炉は、区画のほぼ中央で検出した。浅い土坑の充填土（3層）が被熱し、硬化している。なお、本遺構の火床について熱残留磁化測定を行った結果、8世紀中頃から9世紀中頃の年代が推定された（第4章第3節参照）。

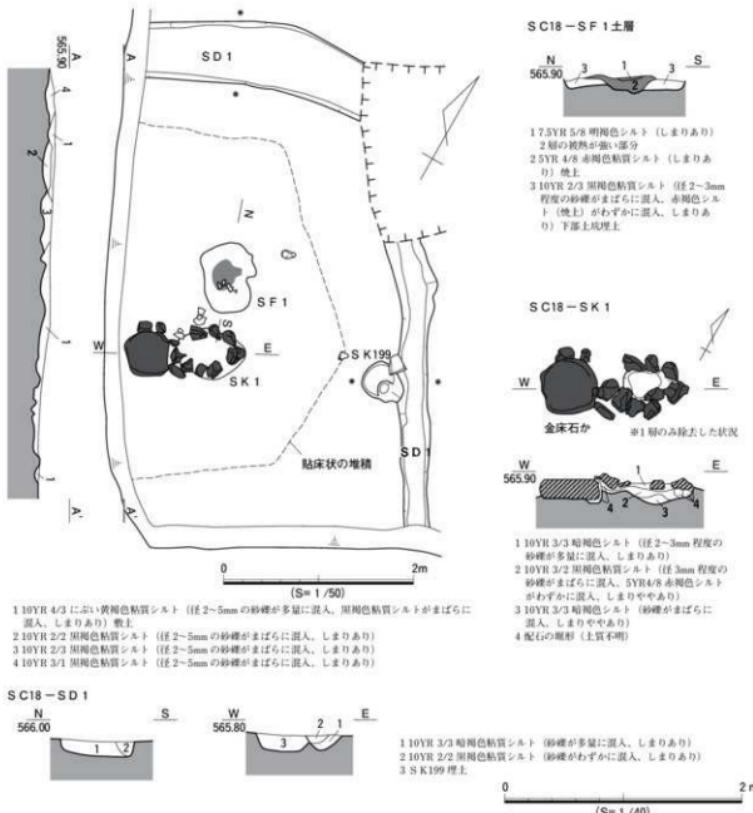


図106 SC18遺構

付属遺構 炉跡の南側から砂岩の角礫が円形に配置された土坑（S K 1）と扁平な円礫を検出した。

いずれも掘形を有し、円礫は金床石の可能性もある。

出土遺物 合計54点が出土し、そのうち5点を図示した。609は須恵器甕であり、口縁端部は下方に垂下する。610は須恵器無蓋高环であり、環部外面に一条の突帯を有する。612は須恵器鉢である。体部は緩やかに丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外側に屈曲し、端部はほぼ垂直に面取りする。器壁は体部中程でわずかに内側に湾曲しており、その部分の外面には湿台痕と思われる粘土のしわが見られる。

所属時期 遺構床面の出土遺物（608）から、古代3期と考えられる。

S C 19 (遺構: 図107、遺構全体図分割図②、遺物: 図164)

検出状況 イ2グリッドの、かなり緩やかな斜面上で検出した。この遺構から北側は宅地造成等の影響で山際が削平されており、搅乱が多い。本遺構もまた削平の影響を受けており、埋土が浅く南側の掘形が残存していない。S B 54を切っている。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。貼床は確認できなかった。

鐵治炉跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。本遺構の埋土は浅く、遺構検出の段階ですでに焼土が露出していた。鐵治炉は竪穴の掘形から大きく張り出した部分にあり、とても焼き締まり、黄褐色粘土を伴っていた。当初、この焼土をカマド跡の一部と考えていたが、整理作業中に炉跡内から鉄滓や鉄滓が付着した須恵器片が出土していることが判明し、鐵治炉跡と判断した。この炉跡下層から、基盤層に近い黄褐色粘土が混入した堆積層や被熱した礫を検出した。さらに、この堆積の下から焼土を検出したが、強い被熱の痕跡は確認できなかった。なお、遺構内から土師器の小型甕2点（掲載番号613・614）がほぼ完形で出土した。

付属遺構 遺構床面や炉跡内から8基ピットを検出したが、規則的な配置は見られず、その性格は不明である。

出土遺物 合計155点が出土し、そのうち7点を図示した。613・614は小型の土師器甕である。最大径が体部下方にあり、口縁部はわずかに外反する。また、いずれも内面に煤が付着している。615は須恵器蓋であり、天井部はほぼ水平で、返り部はわずかに内傾する。617は須恵器有台環であり、金桶器写しの器形で、体部外面上方に沈線が3条巡る。618は灰釉陶器甕であり、口縁端部を鋭く上方につまみ上げている。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代3期と考えられる。

S C 20 (遺構: 図108、遺構全体図分割図③)

検出状況 サ13グリッドの、緩い斜面上で検出した。この遺構の周辺は遺構密度が低い。平面形は東西に長い長方形を呈しており、S C 15・17などと規模や遺構の様相が類似している。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。

床面状況 地形に合わせるように、南に向かって緩やかに傾斜する。

鐵治炉跡 鐵治炉の可能性がある焼土は、床面のほぼ中央で検出した。焼土は床面から盛り上がって

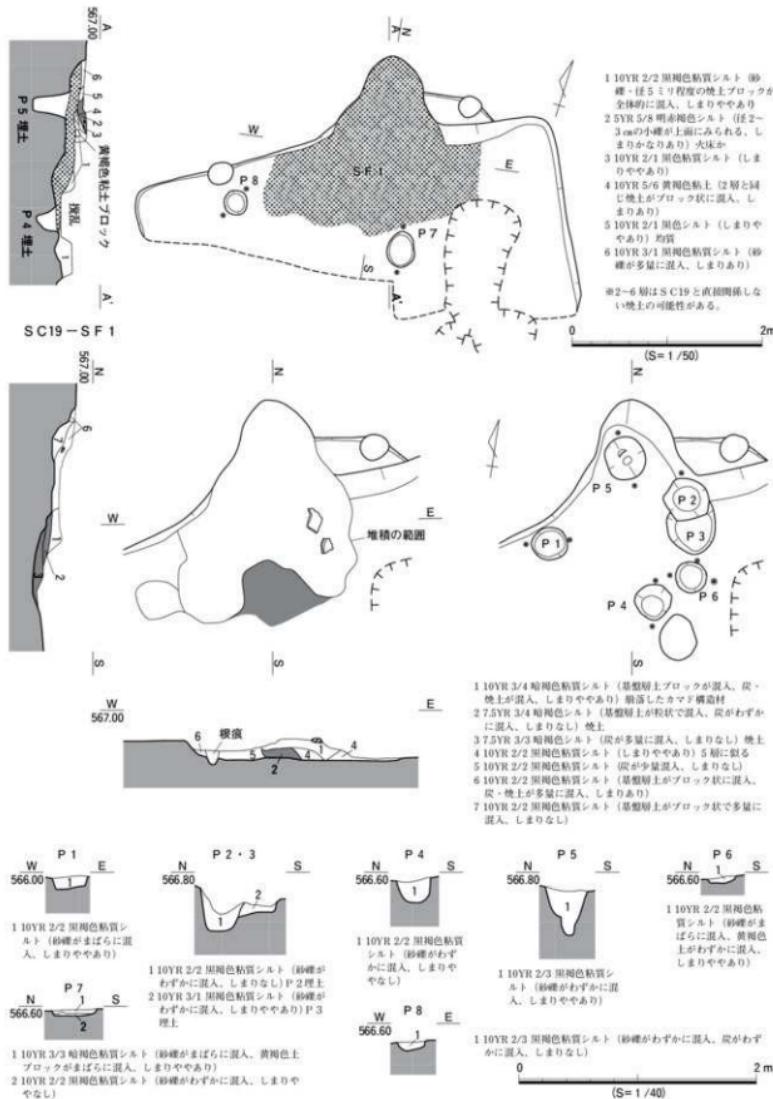


図107 SC19構造図

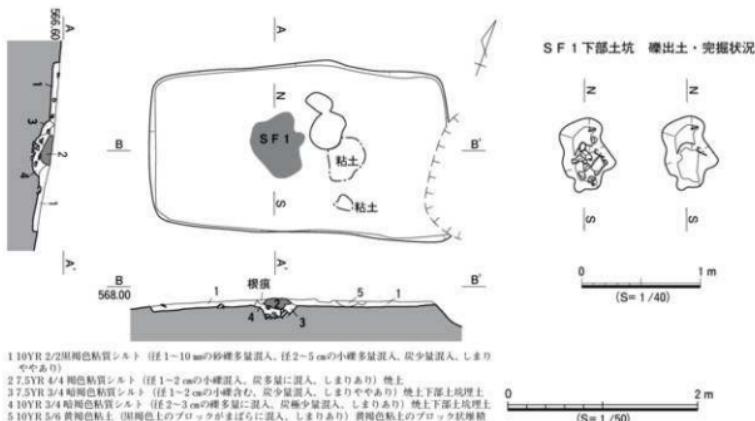


図108 S C20遺構図

おり、その下の土坑状の窪みの充填土が被熱している。土坑内には砂岩の角礫が含まれていたが、被熱した痕跡は見られなかった。また、この窪の下から炭化物がまとまって出土した。

出土遺物 合計56点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

3 挖立柱建物跡・柵跡

S H 1・2 (遺構: 図109~113、遺構全体図分割図②・④)

検出状況 エ3~オ4グリッドで検出した。

規 模 S H 1は、梁行3間×桁行2間以上の側柱建物跡で、梁行の柱穴跡は深く柱間は等間隔であるが、桁行は柱穴の深さや柱間が均一でない。S H 2は梁行3間×桁行2間以上の側柱建物跡で、梁行の柱間がS H 1よりわずかに短い。S H 1・2は主軸方位が同一であり、柱配置も類似するため、同時期に存在していたと思われる。

付属構造 S D 1はS H 1の主軸とほぼ同一方位と一致し、S H 1の桁行付近でほぼ直角に屈折する。この溝は、掘削中にほぼ同じ規模の2条の溝が切り合うことを確認しており、S D 1-1がS D 1-2を切っている。両者の規模と形態が類似するため、同一目的で造り替えられた溝状遺構の可能性が高い。なお、底面の標高は西側が浅く、埋土に流水痕跡は見られなかった。S D 2・3は浅い溝状遺構であり、S D 2がS D 3を切る。また、両遺構よりS D 1の方が新しい。

所属時期 出土遺物に中近世陶磁器がわずかに混入しているが、埋土の状態から古代の掘立柱建物跡といえる。しかし、古代のうち時期の細分はできない。

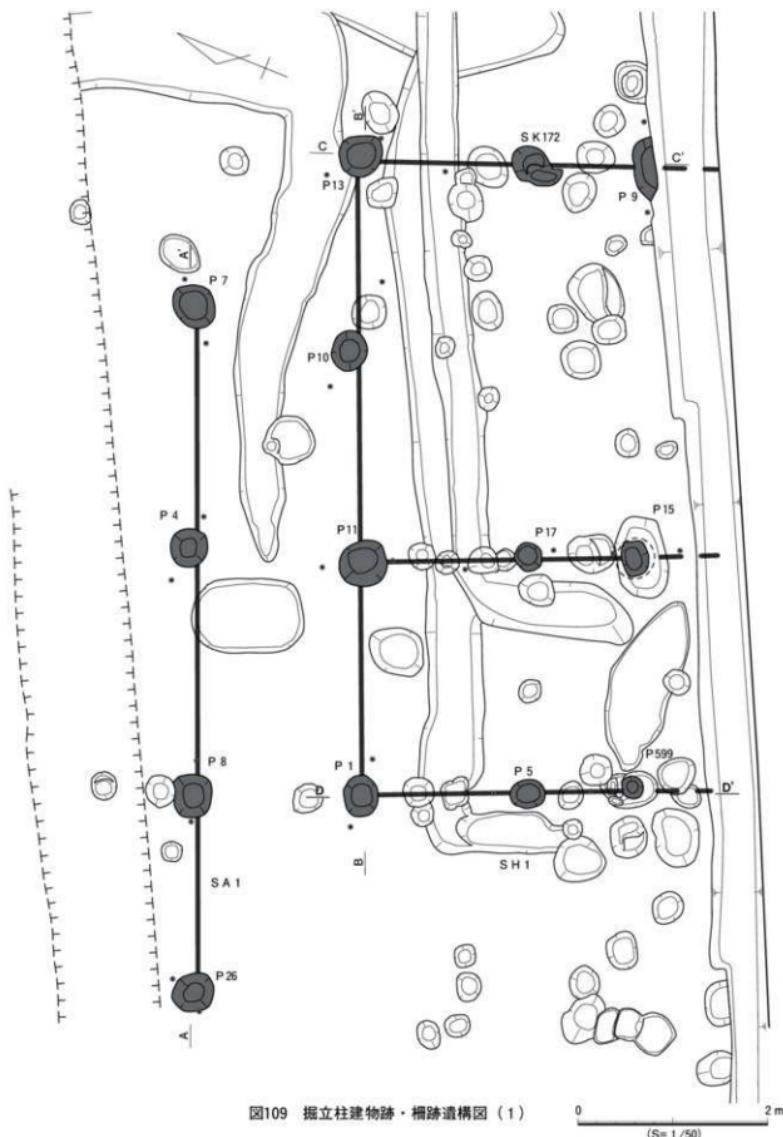


図109 据立柱建物跡・柵跡遺構図（1）

0 2m
(S=1/50)

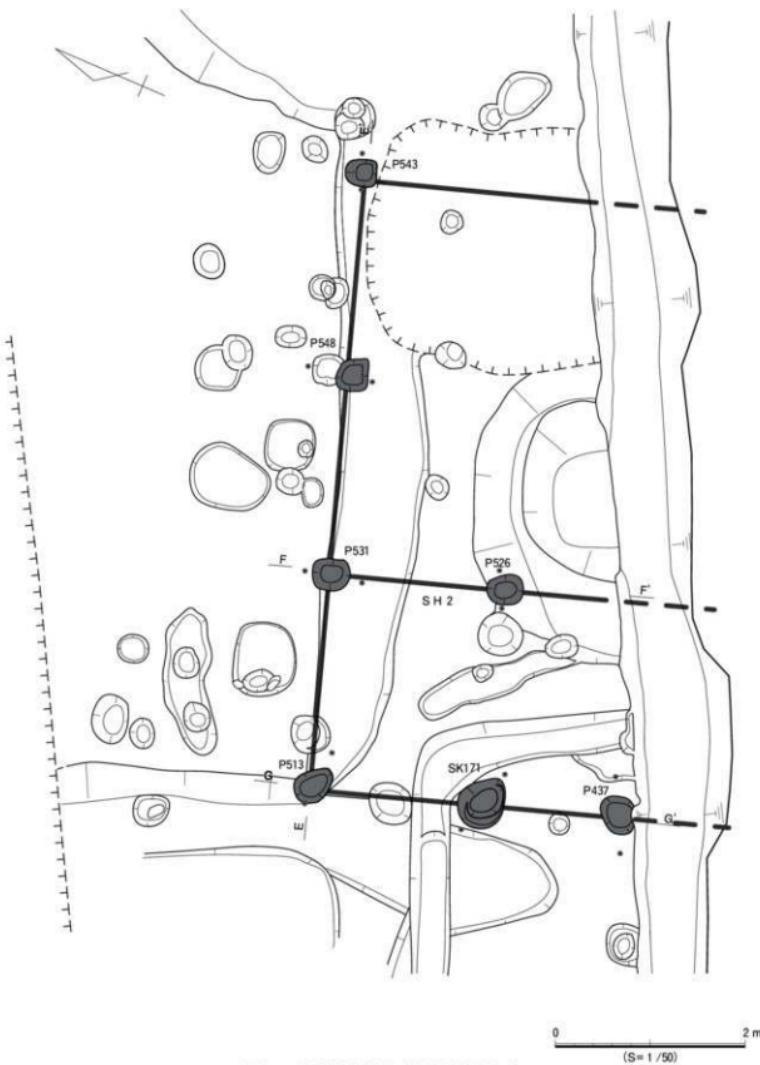


図110 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（2）

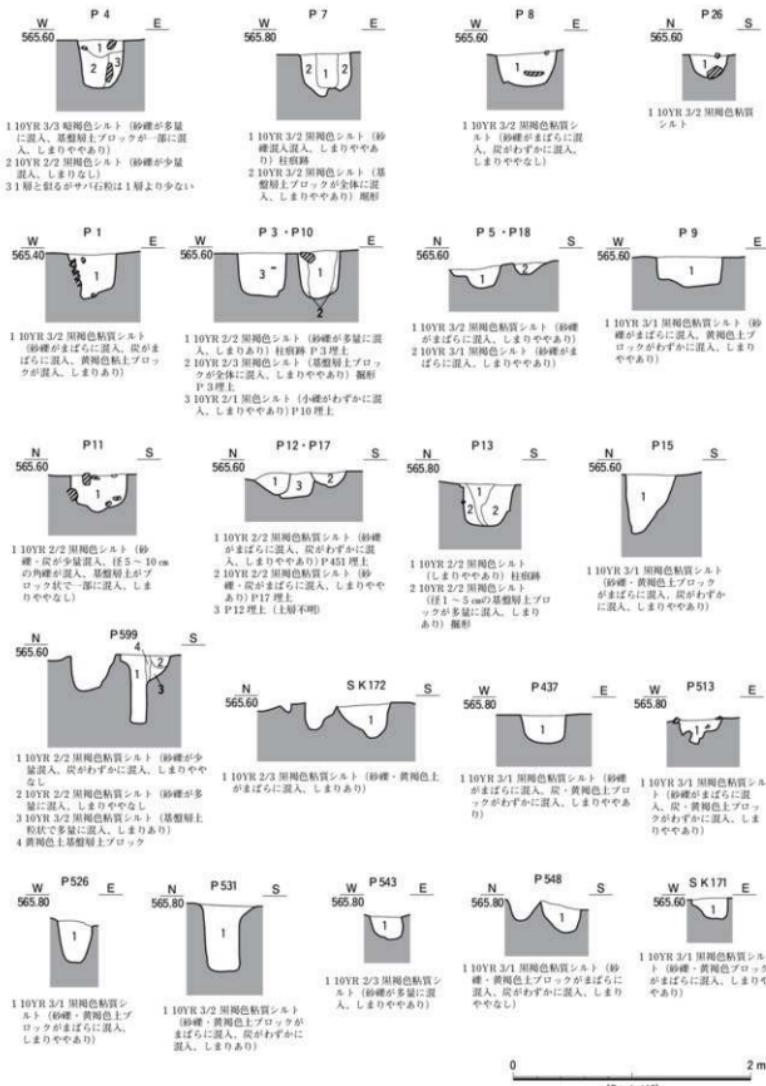


図111 挖立柱建物跡・槽遺構図(3)

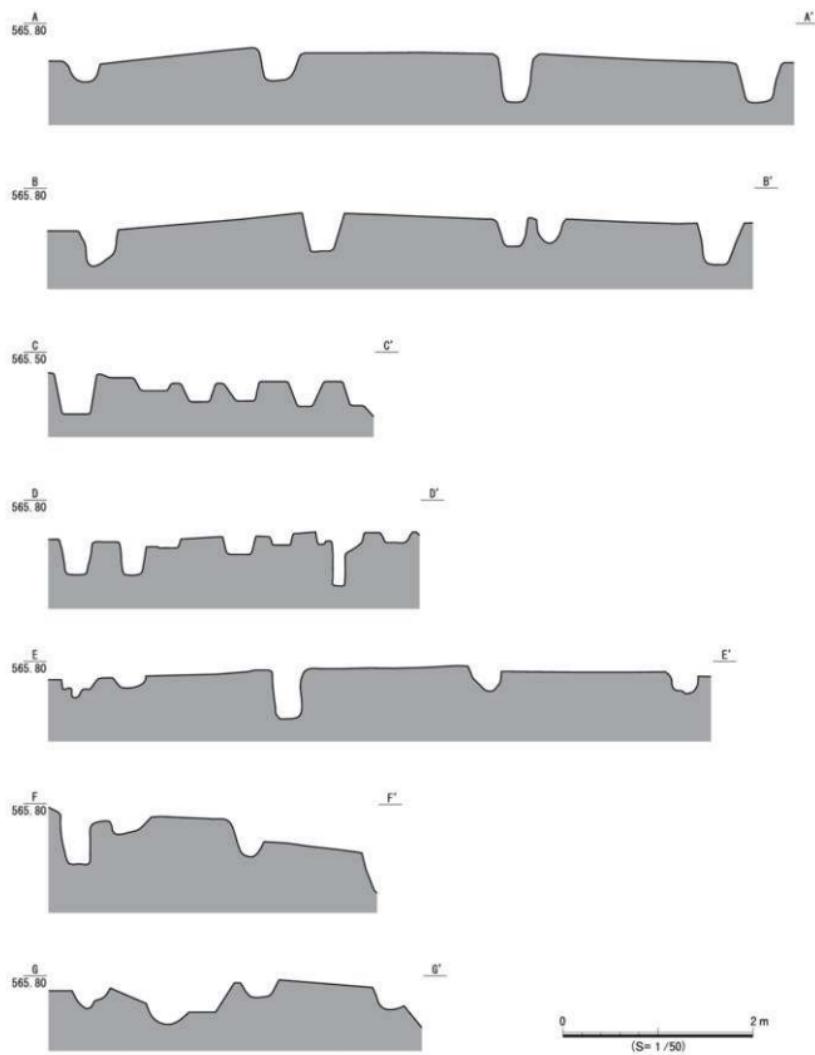


図112 挖立柱建物跡・柵跡遺構図（4）

SH 3 (遺構: 図87、遺構全体図分割図⑩)

検出状況 カ7～キ8グリッドにて、SC5除去後に検出した。斜面を切り盛りして平坦地を造成した面で柱穴群を確認した。

規 模 梁行1間×桁行3間以上の側柱建物跡で、柱間は梁行が約1.20m、桁行が1.60～2.00mである。柱穴の掘形は浅い。P2を柱穴の一部とみなすと総柱建物跡となる。

所属時期 SC5の埋土を除去した後に柱穴群を検出したことや、埋土の状態から、古代の遺構といえる。しかし、古代のうち時期の細分はできない。

SH 4 (遺構: 図114、遺構全体図分割図26)

検出状況 シ14～15グリッドにて、SV1の底面で検出した。

規 模 梁行1間×桁行2間以上の縦柱建物跡であり、柱間は梁行が約1.80m、桁行が約2.15mである。

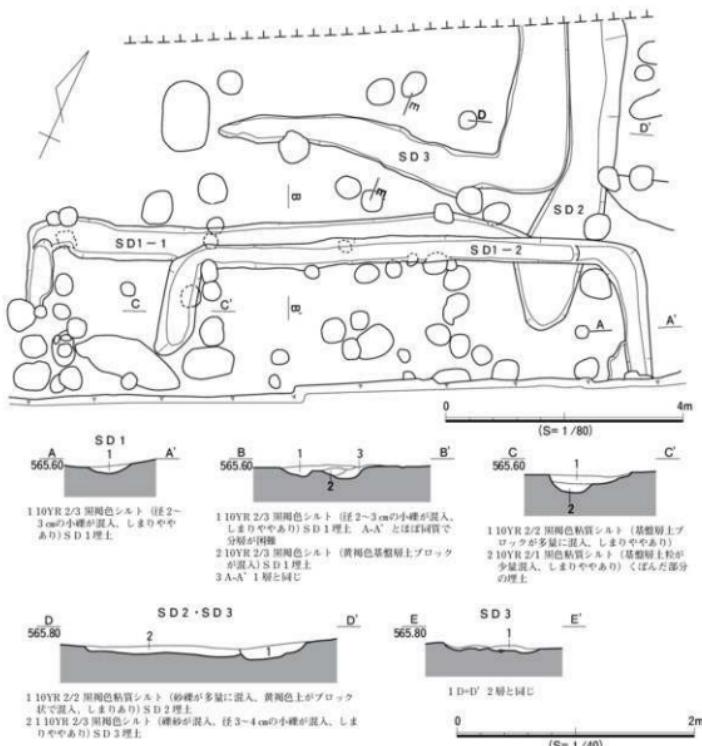


図113 溝状遺構遺構図

ある。ピットの掘形は深く、P13のように明確な柱痕跡を残すものもある。

付属遺構 SD1は建物の周縁を巡る溝であり、建物と何らかの関連があると思われる。なお、建物の西側には空白地が広がる。

所属時期 SV1より古いため古代5期以前で、埋土の状態から、古代の遺構といえる。しかし、古代のうち時期の細分はできない。

S A 1（遺構：図109・111・112、遺構全体図分割図④）

SH1と同じくエ3～オ4グリッドで検出した。SH1の梁行とほぼ平行し、柱穴掘形が深い。また、SD3が屈折する箇所にSA1が存在するため、SA1はSD3とともに存在した区画施設の可能性もある。

4 斜面造成跡

SV1（遺構：図114・115、遺構全体図分割図②・③、遺物：図164）

検出状況 シ14～15グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。この周辺に存在する大半の豊穴状遺構と切り合っており、その中で最も新しい遺構である。遺構の東側は搅乱によって削平されており、南側は調査区外である。

堆積状況 二層に分けられ、遺構の西半分には1層がない。

付属遺構 床面上で掘立柱建物跡1棟、ピット21基、土坑3基、溝状遺構2条を検出した。掘立柱建物跡（SH4）は1間×2間以上の総柱建物跡である。SD1・2はともに鉤形に曲がる溝状遺構である。SD1は掘形の一部がSV1の掘形北壁に沿っており、埋土中に扁平な円碟を含んでいた。SK2は掘形が深く埋土内に礫が多量に含まれているが、SK1・3は非常に浅い遺構であり、床面の起伏をならすための充填土の可能性がある。

出土遺物 合計1,588点が出土し、そのうち12点を図示した。620は灰釉陶器皿であり、口縁部が鏡く外反している。624は須恵器蓋とした。口縁部と天井部の境がわずかに突出する。626は須恵器甕であり、口縁部内外面が施釉される。630は幅0.3cmの精緻な管玉、631は無茎凹基の石鎌であるが、いずれも他からの流入と思われる。

所属時期 SK2及び遺構埋土出土遺物から古代5期と考えられる。

5 被熱・焼土堆積遺構

ここでは、豊穴住居跡、鍛冶関連遺構などに付属しない被熱・焼土堆積遺構について記載する。今回の調査では遺構面に単独で「火」を扱った痕跡の残る遺構が多く、ほとんどが古代に属すると考えられる。そのなかには、構造的にカマド跡と考えられる遺構もあり、検出面が削平されている箇所が多いことを考えると、本来は豊穴住居跡などに設置されていた可能性もある。また、鍛冶関連遺構に隣接して被熱・焼土堆積遺構を検出する例もあり、これらを含めて一つの作業場と考えることが妥当と考える。

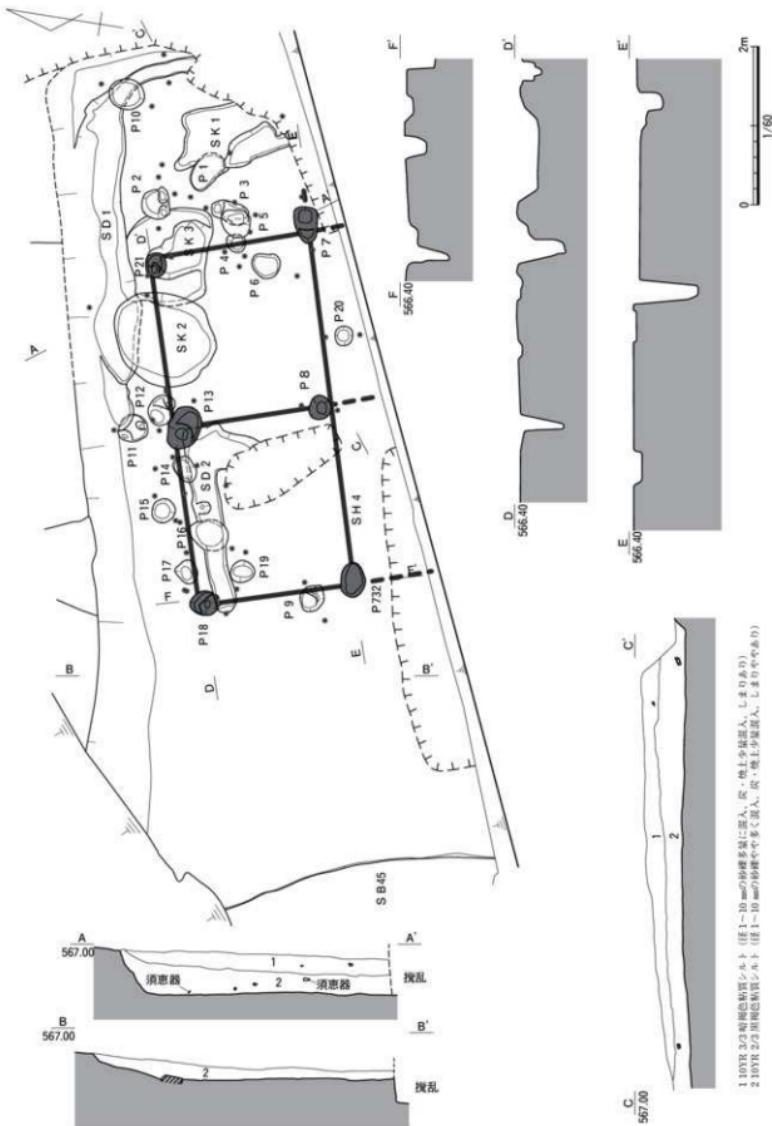


図114 SV1 遺構図 (1)

1 10yr 3/3割れ目岩
2 10yr 2/3割れ目岩

1 (E1-E10) m²砂質多孔岩
2 (E1-E10) m²砂質含水層

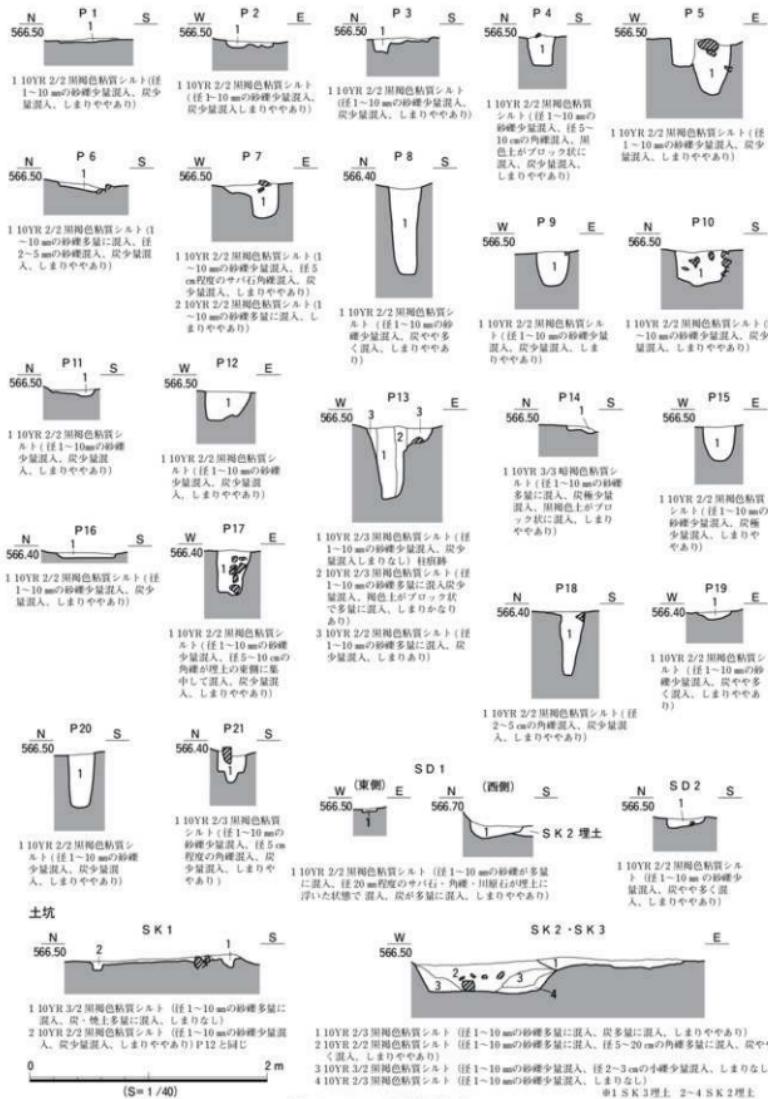


図115 SV1 遺構図 (2)

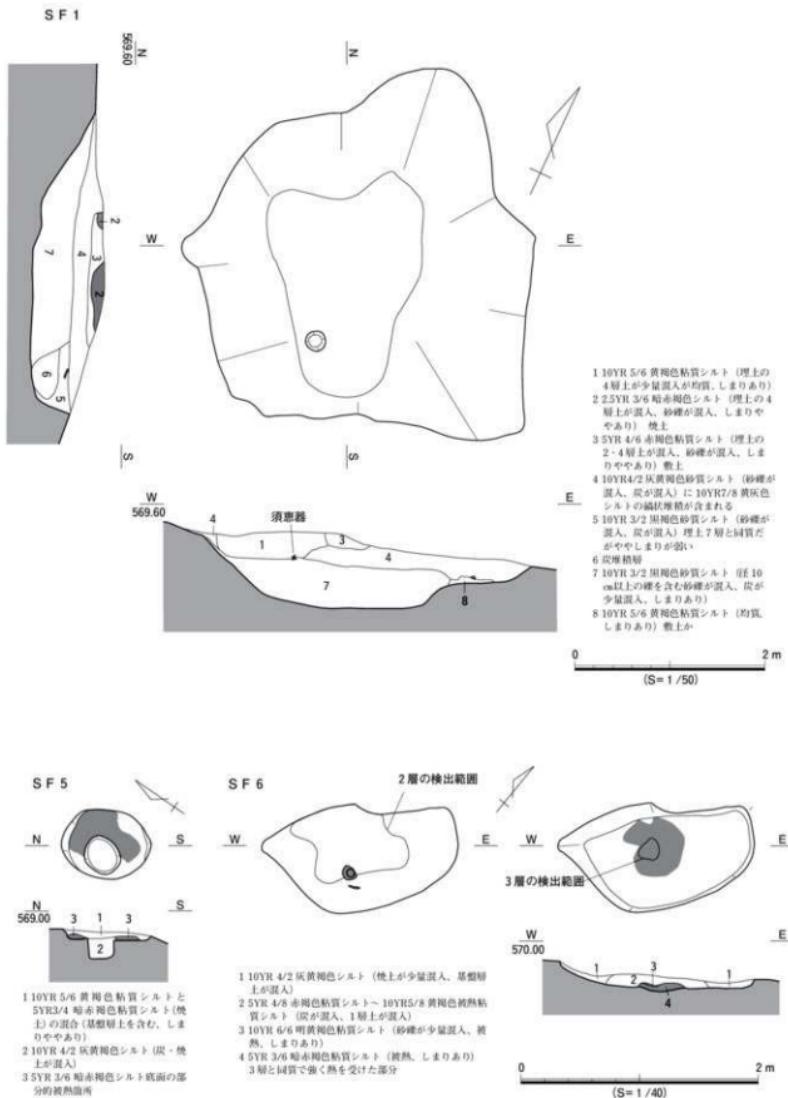


図116 被熱・焼土堆積遺構（銀冶炉跡）遺構図（1）

(1) 錫冶炉跡（遺構：図116～118）

掘削の過程及び水洗選別により錫冶炉関連遺物を検出し、遺構面に単独で被熱痕を確認した遺構を錫冶炉跡とした。また、遺構の特徴を以下のように分類した。

火床の位置

A 下層に充填した土の表面が被熱するもの。

B 基盤となっている層が被熱するもの。

黄褐色土

a 基盤層に似た黄褐色シルト・粘土が堆積土に混入する。あるいは敷土として用いられるなど、錫冶炉構造に関わる。

b 黄褐色シルト・粘土を作わない。

下部遺構

i 浅い窪み（火床が窪みの底に見られるものを含む）になる。

ii 深い土坑になる。

分類の組合せでは、SF 1がA a ii、SF 3・4がA b i、SF 5がB a i、SF 2・6がB b iとなる。A類の遺構は、遺構検出時に堆積土が盛り上がった状態で確認でき、上部構造が存在する可

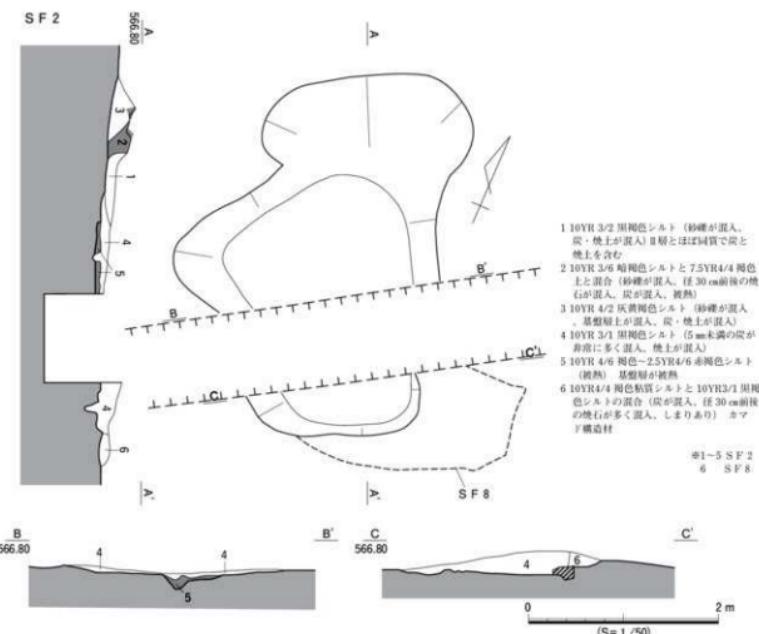
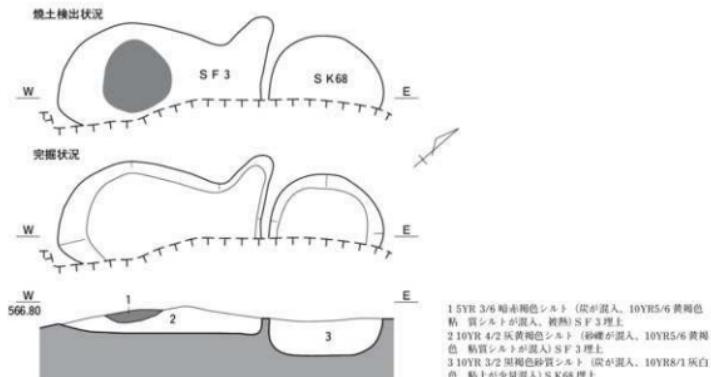


図117 被熱・焼土堆積遺構（錫冶炉跡）遺構図（2）

能性がある。SF 1は一辺が2mを超える大型の掘形を持つ遺構である。明確な被熱は埋土上面のみだが、埋土上面や中層の黄褐色土（敷土）や炭（クリ材、第4章第7節参照）堆積層の存在などは、他遺構と異なる。B類の遺構は上層に炭と焼土が多く混入する土が堆積し、火床はその土を除去すると確認できる。火床は強く被熱しており、より強い被熱部分はドーナツ状に変色している。SF 2は、埋土全体に炭・焼土・被熱跡が混入しており、その堆積の除去後に火床を検出したが、本来は埋土が堆積していた範囲全体が鋳造関連遺構の可能性があるが、SF 5・6は炉本体と思われる。なお、ここで挙げた遺構は、SF 3を除くすべての遺構が鋳造関連遺構と隣接しており、前述したような「作業場」である可能性もある。遺構の所属時期は、いずれも古代3～5期と考えられる。

SF 3



SF 4

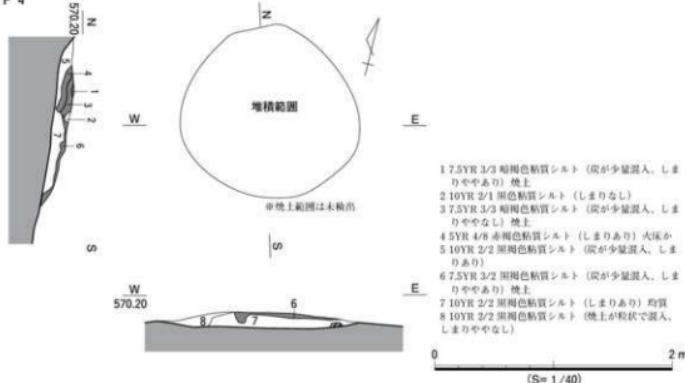


図118 被熱・焼土堆積遺構（鋳造跡）遺構図（3）

(2) 焼土(遺構:図119・120)

焼土とした遺構は、以下の3種類に分けることができる。

- A 浅い掘り込みに充填土を敷き、その土が被熱するもの
- B 深い掘形を持ち、その埋土上面の一部が被熱するもの
- C 焼土・炭混じりの堆積土

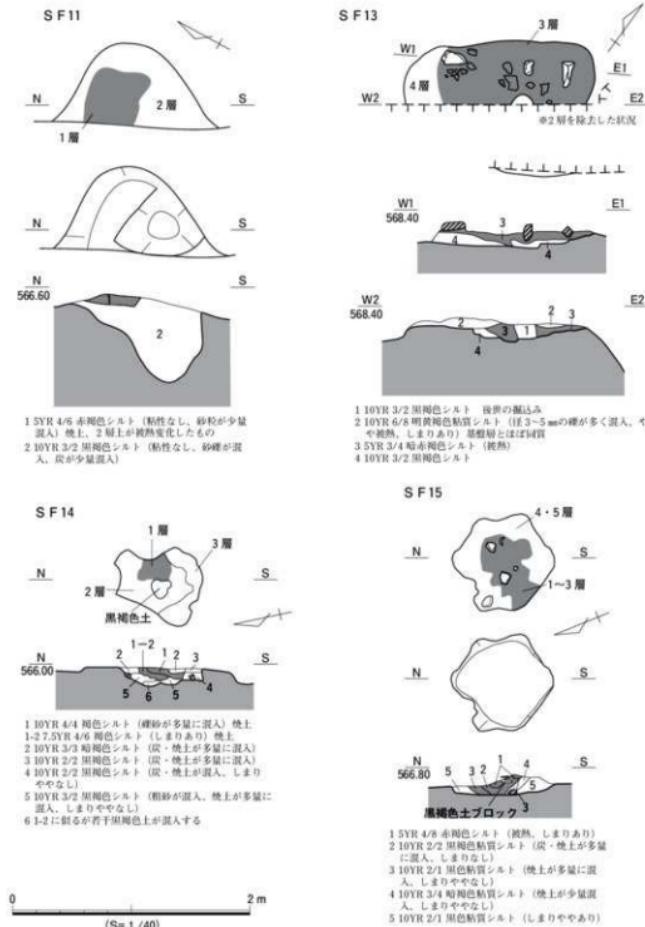


図119 被熱遺構(焼土)遺構図(1)

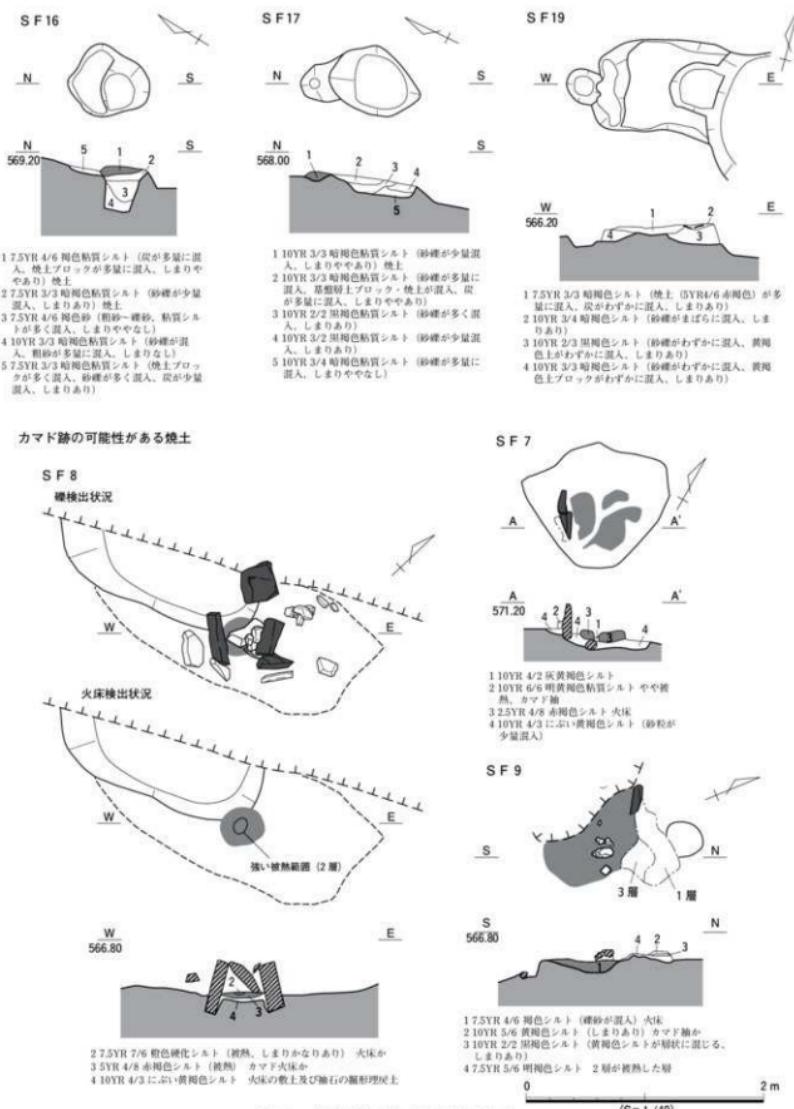


図120 被熱構造(焼土) 遺構図(2)

このうち、S F10・13～15がA、S F11・16がB、S F17～19がCに属する。Aは検出面からやや盛り上がった状態で検出されることが多く、構造的にも鍛冶炉跡とした遺構に似ている。鍛冶炉跡遺物が出土していないことなどから鍛冶炉としなかったが、その可能性は十分考えられる。BはAの下部遺構が深くなっただけの可能性もある。S F11の下層からは縄文土器が出土しており、S F16は上面の焼土と下層のピット状の掘形の位置がわずかにずれているため、下部遺構と焼土が別遺構の可能性もある。Cは被熱面が確認できなかったため、二次堆積の可能性もある。

S F7～9は、袖部の基底と考えられる黄褐色土や袖石と焼土の位置関係からカマド跡と考えた遺構である。これらは本来、竪穴住居跡に設置されていた可能性があるが、その周辺で主柱穴や周壁溝などを確認できなかった。なお、これらの遺構の所属時期は、出土遺物が少ないとおり判断が難しいが、古代3～4期と考えられる。

(3) 出土遺物 (図165・166)

焼土・被熱遺構からは、合計749点が出土し、そのうち38点を図示した。635は須恵器有台盤である。高台は体部外面下端に貼り付けられ、口縁部は直截、端部はわずかに上方につまみ上げられる。636は灰釉陶器碗であり、底部内面中央に灰釉が刷毛塗りされている。644は須恵器甕である。器面は黒色、断面はセピア色を呈し、口縁端部は下方に垂下する。646は弥生土器甕としたが、周辺地域で類例を確認できなかった。口縁端部には棒状工具により刻み、体部外面には櫛状工具により列点文を施し、口縁部から体部内面にかけて煤が付着している。648は灰釉陶器皿の転用甕である。652は土師器甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁端部は外側に肥厚する。体部外面下方に煤が付着している。653は須恵器鉄鉢である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内傾面を有し、端部は鋭く斜め上方に延びている。667は須恵器盤である。体部が内反り気味に立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に面取りされる。焼成不良で灰白色を呈する。

6 土器埋設遺構 (遺構:図121、遺構全体図分割図②、遺物:図172)

土器埋設遺構とした遺構はP23のみであり、コ15グリッドでSB21に近接して検出した。掘形平面の長径は約40cmであり、掘形の北側で土師器甕(掲載番号791)が口縁部を上にして埋設されており、土器の底面付近には角礫が入っていた。甕はかなり破損しており完存していない。また、口縁部破片が遺構埋土中から出土したが接合しなかった。遺構の堀形は、甕が設置されていた部分が深くなっている。土師器甕の他には出土遺物ではなく、その性格は不明である。

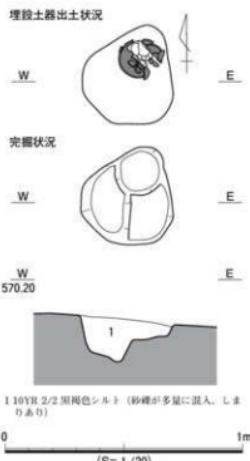


図121 土器埋設遺構 (P23)

7 溝状遺構（遺構：図122～124、遺物：図167）

溝状遺構は、以下の2種類に分けることができる。

- A 等高線に対して直交する溝状遺構。遺跡全体が緩斜面である野内遺跡B地区では、原則北から南へ向かって低くなる。
- B 等高線に対して平行する溝状遺構。

Aの溝状遺構は、遺跡の北側に当たる山裾から湧き出す伏流水を流すために掘られたと考えられる。現在も豊富な湧水が遺跡内を通る取水路によって南側の水田に供給されており、當時も同様な利用が行われていた可能性がある。また、この地に居住するためには、伏流水の制御が不可欠であったと考えられる。遺構面が削平を受けているため大半の溝状遺構の北端は確認できないが、本来は山裾から斜面下まで続いていると思われる。Aの中では規模の大小があり、SD 7・9・15・17は前者にある。SD 7・9・15では砂の水平堆積を確認できなかったが、その理由として、これらの遺構付近は傾斜が強く、流水速度が速いために、そのような堆積が起こりにくい環境であったためと思われる。一方、SD 17は、この3条から西へ離れた位置にある溝状遺構で、傾斜が緩いためか流水による砂層の堆積を確認した。なお、SD 7は、推定里線の延長ラインにほぼ該当する（図8）。

規模が小さいとした溝状遺構の大半は、SD 17周辺に集中している。特にSD 17から西側に、同方向に伸びる細い溝状遺構を複数確認した。これらの遺構の北側は、宅地造成によって大きく削平されている。大半の遺構が、後述するBの溝状遺構より新しく、近接する遺構との切り合い関係は複雑である。

Bの溝状遺構も規模によって分けることができる。幅が細く浅い溝状遺構は、比較的傾斜が強い場所で確認した。今回の調査地点では、近代以降に斜面の切り盛りにより人為的な段を設けて畠が造成されており、Bの溝状遺構はその段に伴う溝の残骸の可能性もある。したがって、近年の耕作痕である可能性もあるが、出土遺物による証明ができないため、本項で記載した。規模の大きな溝状遺構は、先述したSD 17付近に見られるSD 16・35・53の3条である。SD 53を除いて東側の標高が高く西側が低くなっている、最下層に砂の堆積を確認した。遺跡の南側を流れる三枝用水は西から東へ向かって流れしており、この用水に平行しているにも関わらず逆方向に流れていることになるが、東側が高い当時の地形に即して掘られた可能性がある。

溝状遺構が設置された時期は、先述したように新しいと考えられるものも含め判然としない。SD 7やSD 9などは比較的多く古代の遺物が出土したが、竪穴住居跡などを削平していることや、周辺の土で埋められていることによるものであり、弥生～古墳時代の遺構が密集するSD 16やSD 35周辺では弥生土器や土師器の出土量が古代の遺物の出土量を上回る。これらの事情を踏まえると、実際に弥生～古墳時代の溝状遺構があり、当時の遺物が含まれていても時期を断定することは困難である。したがって、中世の掘立柱建物跡に隣接するものや中世の遺物が多く含まれているもの以外は、弥生土器・土師器の破片のみが出土している場合でも、本項で時期不明遺構として掲載している。なお、弥生～古墳時代の遺構に切られた溝状遺構は存在しない。

溝状遺構からは、合計1,418点が出土し、そのうち16点を図示した。675は灰釉陶器皿であり、体部内面に刷毛状工具によるナデの痕跡と抜き取り痕が明瞭に残る。685は繩文土器深鉢であり、口縁端部は内傾する。686は弥生土器甕であり、頸部外面に横羽状文が施される。

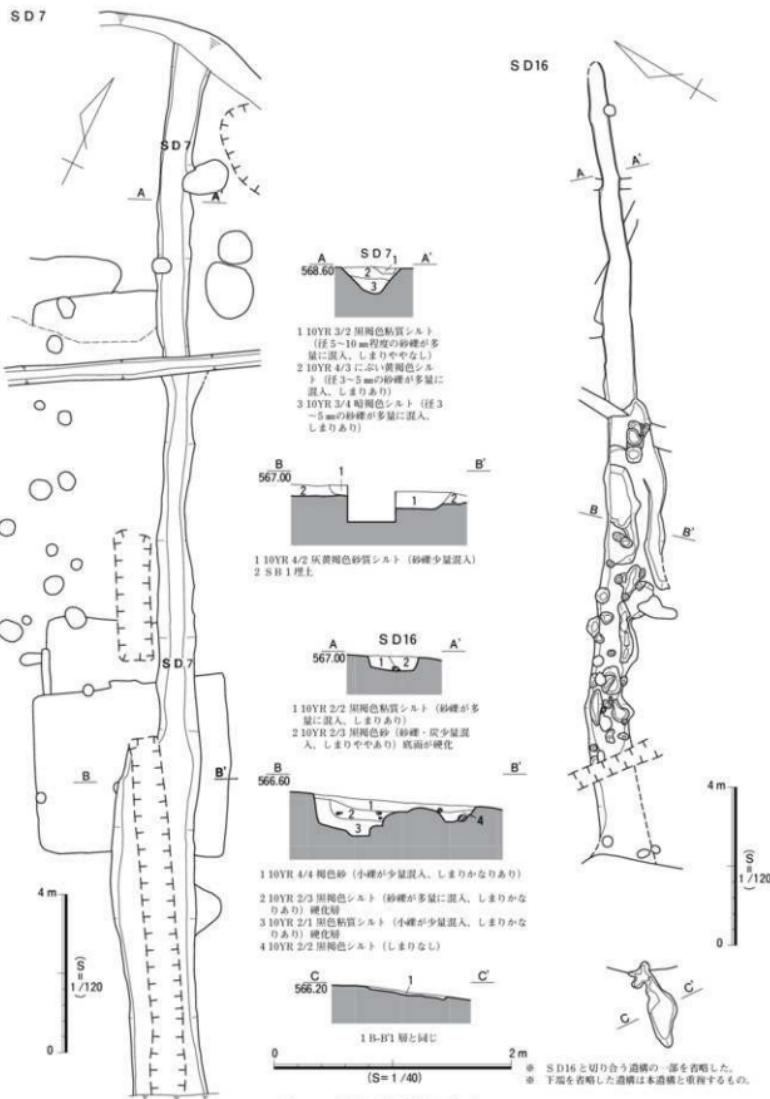


図122 溝状遺構遺構図(1)

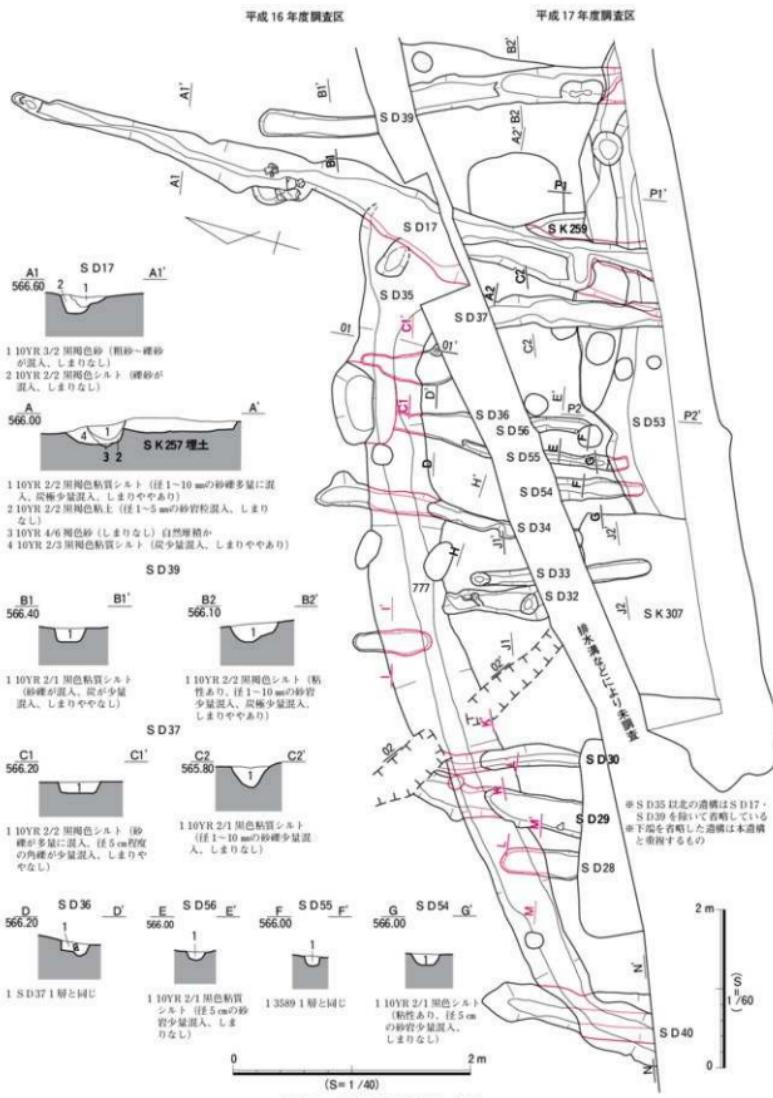


図123 満状遺構構造図（2）

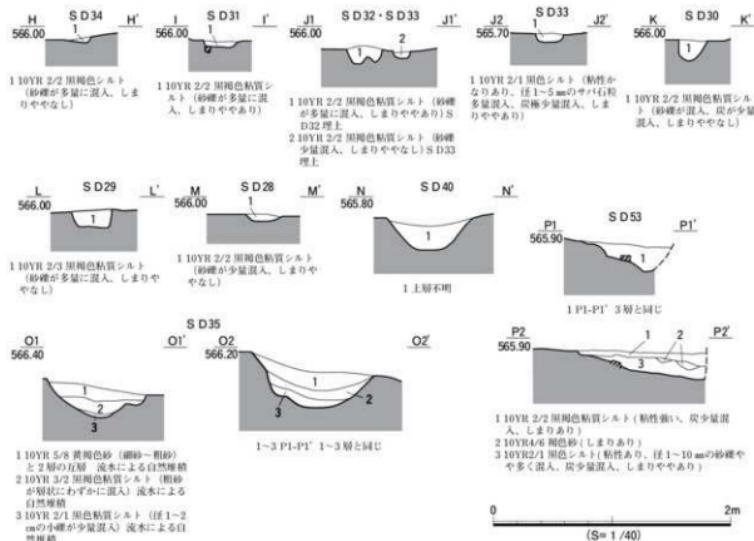


図124 溝状遺構遺構図(3)

8 土坑

古代に属する土坑は、規模が大きな土坑、鍛冶関連特殊土坑、集石土坑、配石土坑などがある。また、時期不明の土坑についても古代の遺物を含むことが多いため、本項で記載する。

(1) 大型の土坑

S K289 (遺構: 図27・28、遺構全体図分割図⑩、遺物: 図169)

検出状況 ケ11~12グリッドの、やや傾斜の強い斜面上で検出した。北側はS B 2と切り合っており、本遺構の方が新しい。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 斜面に沿うように若干南側に向かって傾斜している。

付属遺構 S F12と切り合う位置に土坑状に一段深くなった部分があり、内部から砾がまとまって出土した。また、この砾とともに灰釉陶器が出土した。この土坑状のくぼみは、断面観察からS F12より新しく、S K289とは別の遺構である可能性が高い。

出土遺物 合計32点が出土し、そのうち灰釉陶器碗2点を図示した。なお、S K289に近接した位置から「A」の形を呈する鉄製品が出土した。非常に残存状況が悪く、取り上げ時に崩壊してしまったため、実測図は掲載していない。非常に薄い板状の細い鉄を組み合わせた製品であるが、その性格は不明である。

所属時期 遺構の切り合い関係と出土遺物(724・725)から、古代4期と考えられる。

S K290（遺構：図37・38、遺構全体図分割図⑩、遺物：図170）

検出状況 キ13グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。切り合う4基の遺構（S B10・11、S K290・291）の中では最も新しい。

堆積状況 他の遺構とは全く異なり、砂質土の堆積によって埋没している。埋土は5層に分けることができ、1層を除いて中央が窪む薄い堆積であり、自然に埋没した可能性がある。このような堆積状況は、今回の調査区では他にS K294があり、いずれも複数に切り合う遺構の中で最も新しい。

付属遺構 確認できなかった。

出土遺物 合計68点が出土し、そのうち3点を図示した。735は灰釉陶器碗であり、体部下方を意図的に割っている可能性がある。

所属時期 下層出土遺物（734・735）から、古代6期と考えられる。

S K291（遺構：図37・38、遺構全体図分割図⑩、遺物：図170）

検出状況 キ12～13グリッドの、傾斜の強い斜面上で検出した。切り合う4基の遺構の内、S K290に切られる。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

付属遺構 確認できなかった。

出土遺物 合計36点が出土し、そのうち3点を図示した。731は小型の灰釉陶器碗であり、体部の立ち上がりが強い。732は灰釉陶器碗であり、底部を突出して作り出し、その側面に高台を貼り付けている。

所属時期 底面直上から出土した遺物（732）から、古代6期と考えられる。

S K294（遺構：図125、遺構全体図分割図⑩）

検出状況 S17グリッドの、緩い斜面上で検出した。本遺構は多くの他の遺構を切っており、埋土が他の遺構とは全く異なるため、検出が容易であった。埋土中から比較的多くの鍛冶関連細遺物を検出したが、鍛冶炉跡と考えられる焼土は確認できなかった。

堆積状況 壁際に崩落土を示す三角堆積がある。また、南北方向の土層の堆積状況から、北から南へ向かって埋戻しが行われた可能性がある。最終的には2層によって埋没しているが、2層と埋戻土との間に流水の痕跡と思われる砂層を確認した。

付属遺構 床面でピットを1基検出したが、その性格は不明である。

出土遺物 合計346点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

S K297（遺構：図126、遺構全体図分割図⑦、遺物：図171）

検出状況 エ6～オ7グリッドの、緩い斜面上で検出した。竪穴状遺構が密集している区域であり、その中に唯一被熱・焼土堆積を有しない遺構である。遺構の東側でS B34、S C16に切られ、西側でS B44・53を切る。

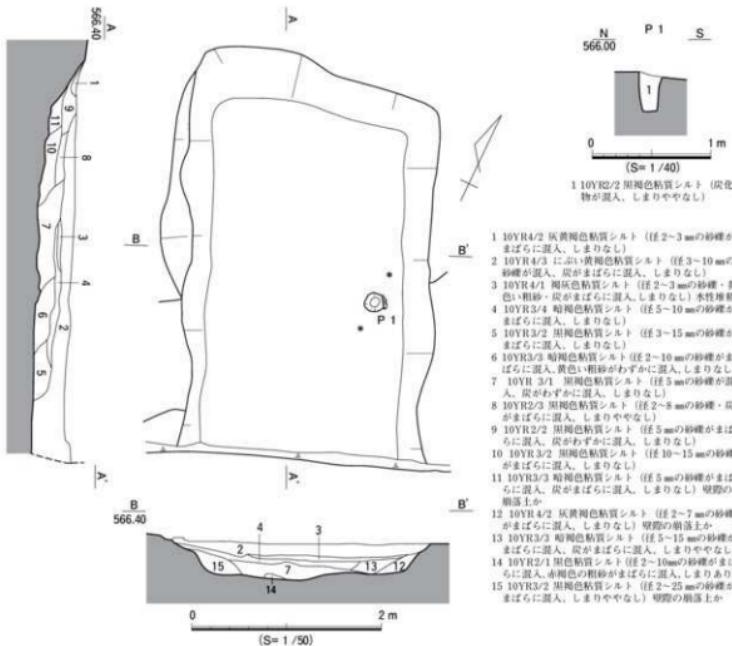


図125 SK 294遺構図

付属遺構 底面直上からピットを3基検出したが、その性格は不明である。

出土遺物 合計106点が出土し、そのうち10点を図示した。756は須恵器环身であり、底部外面にヘラ記号が残る。

所属時期 遺物の中には古墳時代に遡るものがあるが、これは本来S B 53の遺物の可能性がある。出土遺物の全体的な様相から、古代3期と考えられる。

S K 298 (遺構: 図127・128、遺構全体図分割図③、遺物: 図171)

検出状況 ウ3グリッドの、緩い斜面上で検出した。この遺構より東側は竪穴状遺構が密集しており、本遺構はS B 56を切っている。平面形は不定形で、掘形の北壁が近現代の井戸跡によって削平されており、この部分にカマドがあったとすれば竪穴住居跡であった可能性もある。

堆積状況 遺構中央やや東寄りの埋土上面で、焼土の広がりを確認した。S C 5のように埋土上面に鍛冶跡とを考えられる焼土が検出される場合があるが、この焼土については鍛冶関連微細遺物等の検証を行っていないため、その性格を判断できない。

付属遺構 床面上からピットを11基、土坑7基を検出した。ただし、P 58・SK 207のように、本遺

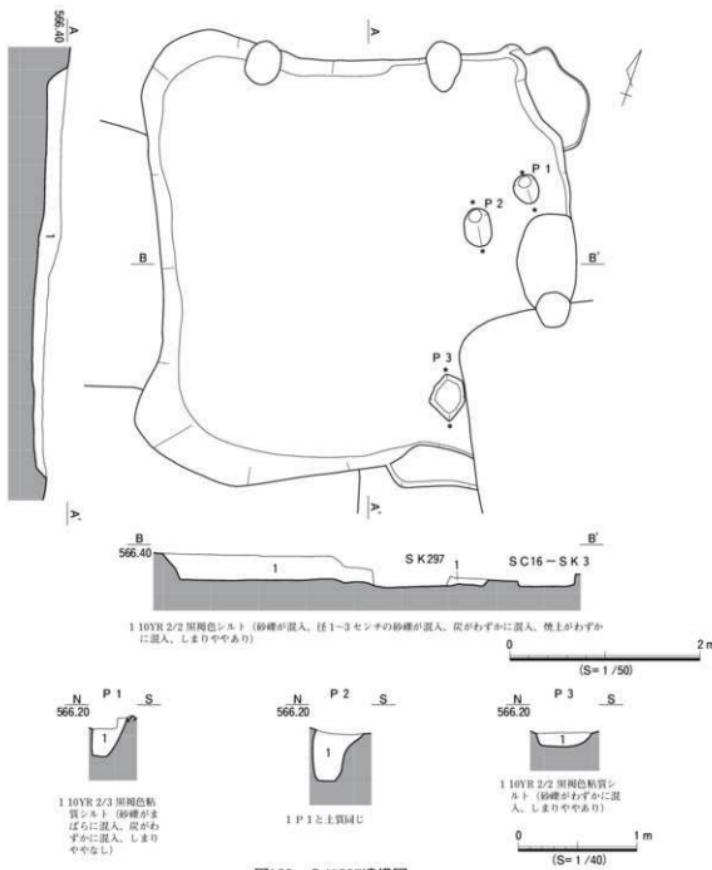


図126 SK 297遺構図

構の埋土上面で検出できなかった新しい遺構が含まれている可能性がある。SK 2は、人為的な埋め戻しや掘り返しが見られる袋状の土坑であり、埋土内には焼土や炭、黄褐色～褐色土ブロックが多く見られる。この他、SK 1・4・5・7は、掘形の形状と規模、埋土の状態が類似している。

出土遺物 合計152点が出土し、そのうち9点を図示した。763は須恵器摘み蓋であり、焼成時の焼け歪みが顕著である。765は須恵器紡錘車であり、上面は降灰した自然釉が厚く、下面是回転系切り後に手持ちヘラケズリ調整がなされている。766は平底の土師器甕であり、体部内面

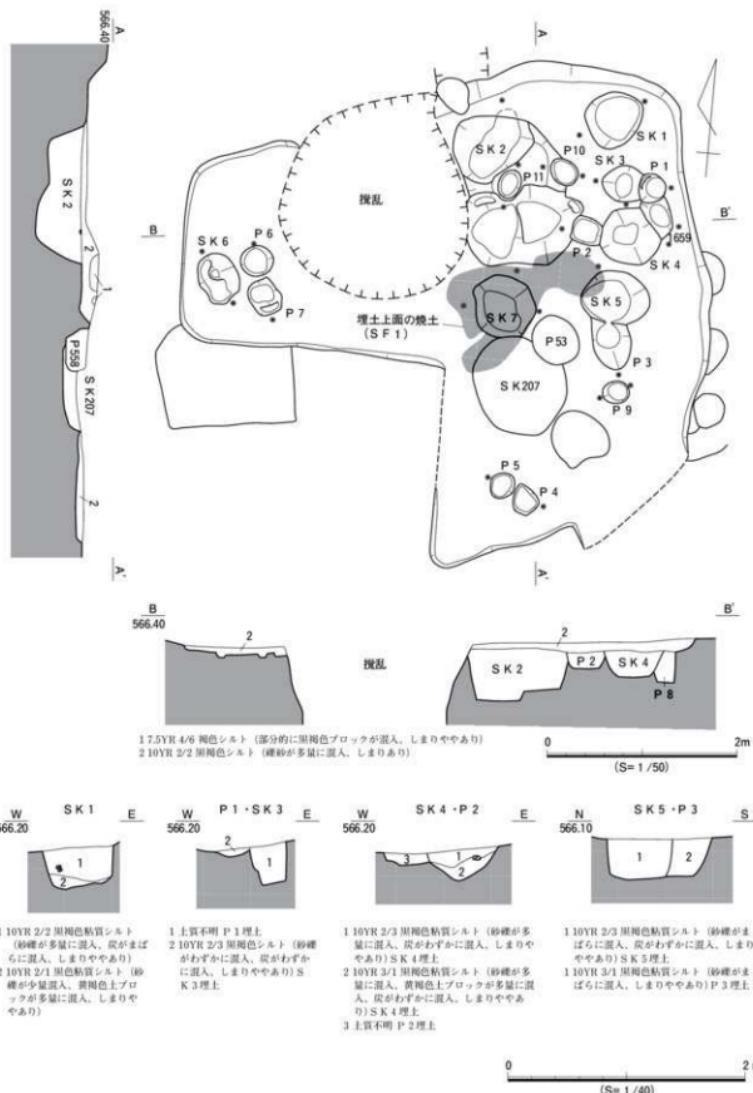


図127 SK 298遺構図（1）

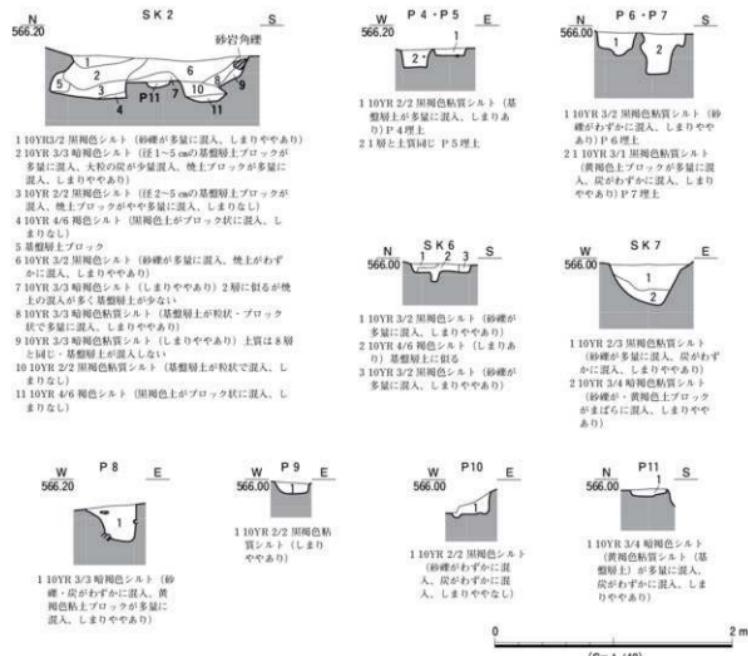


図128 SK 298遺構図(2)

上方に煤が付着している。768は滑石製の紡錘車であり、側面と底面に格子入りの鋸歯文を施す。768は隣接する S B 56からの混入の可能性がある。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古代2期と考えられる。

S K 302・303 (遺構: 図129、遺構全体図分割図①・②、遺物: 図172)

検出状況 イ2グリッドの、緩い斜面上で検出した。この遺構の北側は、宅地造成により削平されている。また、南側は複数の竪穴状遺構が密集しており、両遺構とも原形を留めていない。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。

付属遺構 S K 302の底面のはば全域にわたり黄褐色土を検出した。この堆積は、粘土のみで構成される部分と暗褐色土と粘土が混在する部分がある。この粘土層の南端にて焼土の堆積を確認したが、明確な被熱面はなかった。その他、両遺構の底面でピットや土坑を検出しているが、遺構自体の残存状況が悪いため、その性格を判断できなかった。

出土遺物 S K 302から合計155点が出土し、そのうち7点を図示した。S K 303から合計5点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。783は須恵器壺であり、口縁端部下端は

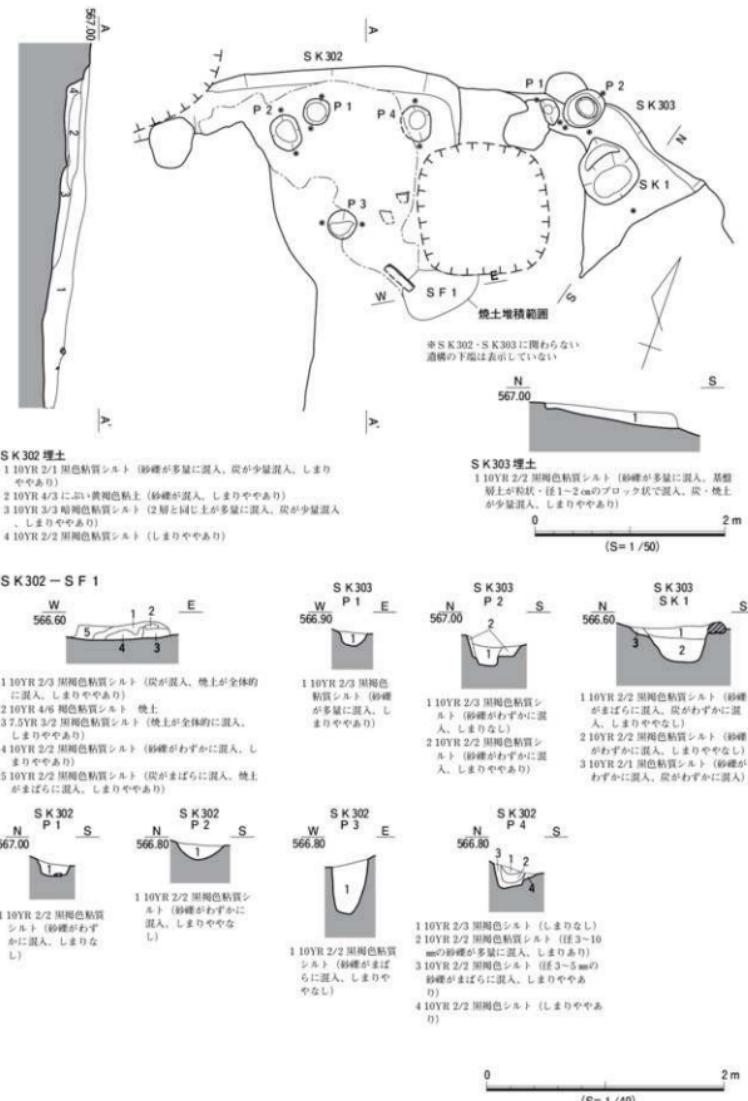


図129 SK 302・303遺構図

丸く仕上げられている。

所属時期 出土遺物から古代と考えられるが、時期の細分はできない。

(2) 錫冶関連特殊土坑（遺構：図130、遺構全体図分割図⑩、遺物：図168）

錫冶関連特殊土坑としたのはSK14のみである。SK14は、SC1・3といった錫冶関連遺構が集中するク11グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、完掘後は深さ約50cmの土坑となった。埋土は16層に分層できた。土坑底面は鉄分の沈着により赤変しており（16層）、基盤層の上面には非常にしまりの良い粘質シルト（14層）や粘土（15層）がある。さらにその上には、イネの初穀（第5章第5節参照）を主体とする灰と砂が交互に堆積している（2～11層）。なお、10層は被熱しており、その上面で火が焚かれた可能性が高い。最上層の細砂（1層）はしまりが良く、人為的に充填して固めたものと考えられる。なお、本遺構に使用されている砂はすべて粒の角が丸くなっていることから、川砂と考えられる。また、砂や灰を交互に敷くことにより地面からの湿気を防ぐ防湿効果が得られると考えられる。

大規模な製鉄炉を築く場合、一般的には防湿効果を意図する下部土坑を設け、その上面に炉を築き、原材料を抽出した後、周囲の遺構で錫冶作業を行うとされている。しかし、本遺構から製錬錫冶の鉄滓・炉壁が出土していないため、本遺構を錫冶炉の下部土坑と確定することはできない。なお、本遺構は出土遺物から古代4～5期と考えられる。

出土遺物は合計911点で、そのうち22点を図示した。694は灰釉陶器皿の転用窯であり、口縁部外側下方の稜が明瞭である。703・705は灰釉陶器碗であり、703は底部内面の摩滅が顕著である。705は底部が円形に割れているが、孔のような人為的な打ち欠き痕は見られない。底部内面に赤色有機物が付着している。707は灰釉陶器鉢であり、口縁端部に内側面を有する。709は灰釉陶器小壺である。体部外面に灰釉が漬け掛けされ、体部上端で直截されている。無頭壺として図化したが、体部外面上端に自然釉の釉溜まりがあるため、頭部が剥落し擬似口縁となっている可能性もある。712は須恵器壺であり、口縁端部下端に垂下した粘土帯の貼り付け痕が明瞭に残る。

(3) 集石・配石土坑（遺構：図131～133、遺物：図167・169）

集石・配石土坑とした遺構は、全部で12基ある。検出した石の大半は、基盤層中などに存在する砂岩の角礫であり、遺構によってはわずかに円礫が混じる。

SK16は南北に細長い平面形の土坑である。中央付近の埋土上面に礫が集中しており、一部の礫は被熱していた。また、遺構内から鉄滓が出土した。SK17の平面形は不定形を呈する。遺構の北側はSD9により削平されており、礫の大半は遺物とともに埋土上面で検出し、その多くが被熱していた。SK18はSB21、SF4などに隣接し、今回の調査で最も多くの礫が出土した遺構である。砂岩の角礫の他、数個の円礫があり、角礫の大半は被熱している。礫は掘形が一段浅くなっている部分までの高さに集中しており、遺構中央の深くなる部分からは古墳時代の土師器甕が出土した。礫を除去した下層から出土した炭化材の年代を分析したところ（第4章第4節参照）、5～6世紀の年代が推定されたことから、この深い部分は別遺構の可能性もある。SK20は礫の大半が埋土上面で検出でき、下部土坑上端から外れた位置まで広がっている。なお、礫の一部は被熱している。SK22は、SC11の

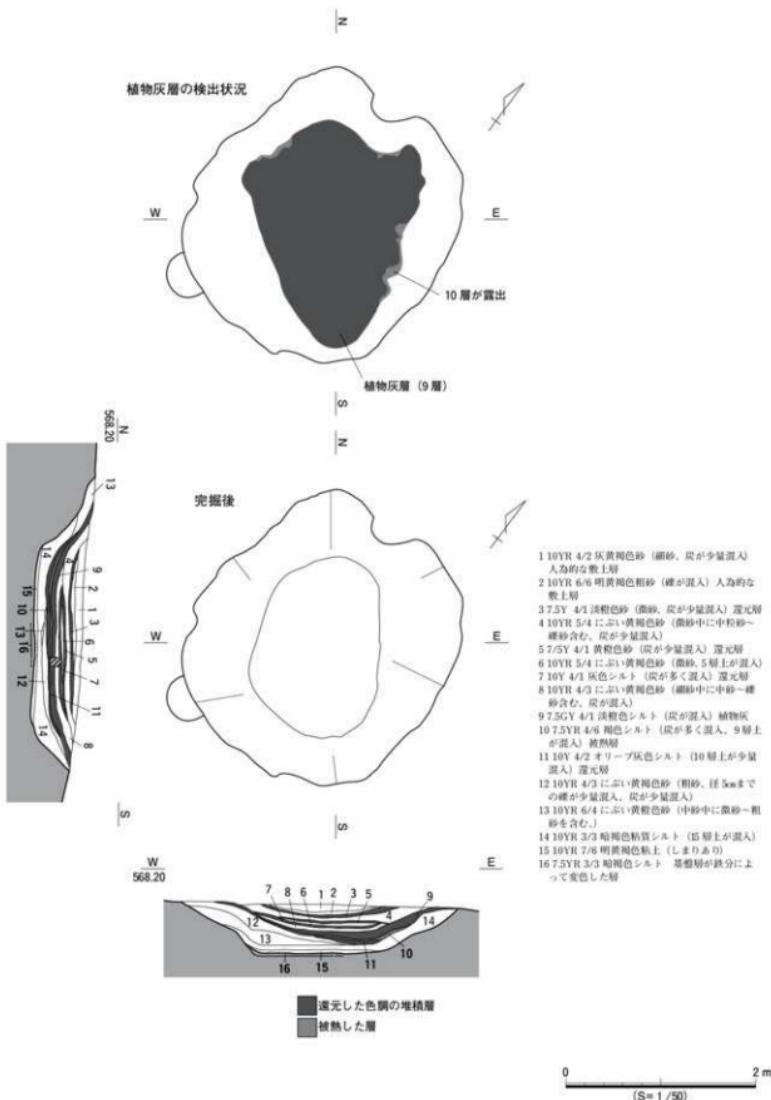
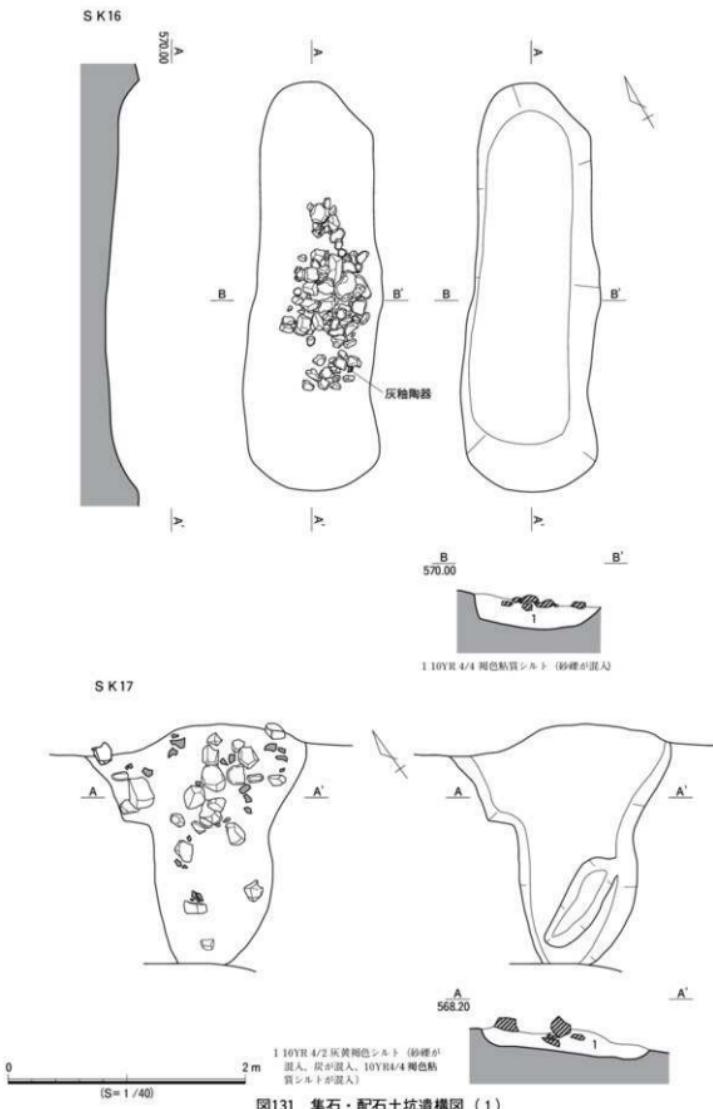
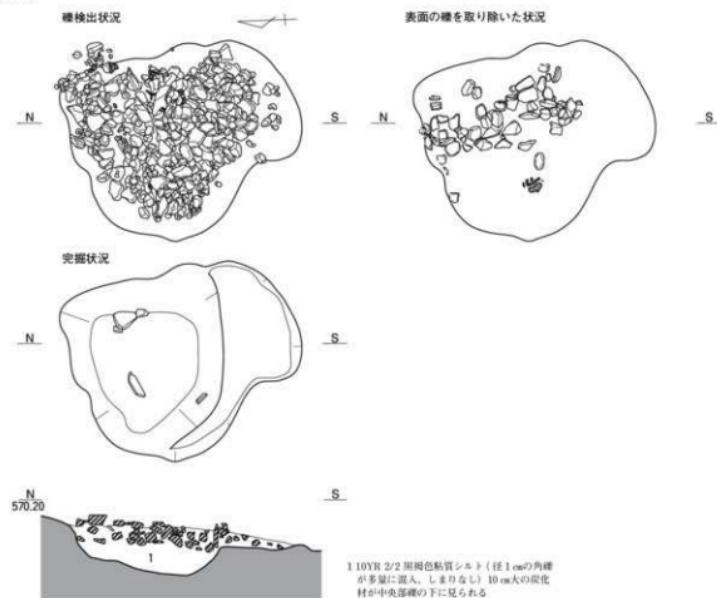


図130 S K14遺構図



SK 18



SK 20

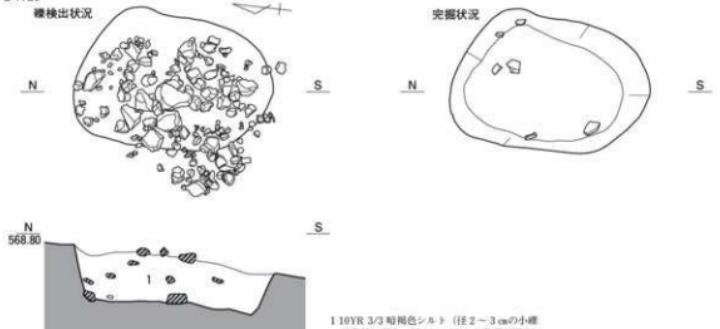


図132 集石・配石土坑遺構図（2）

0
2 m
(S = 1 / 40)

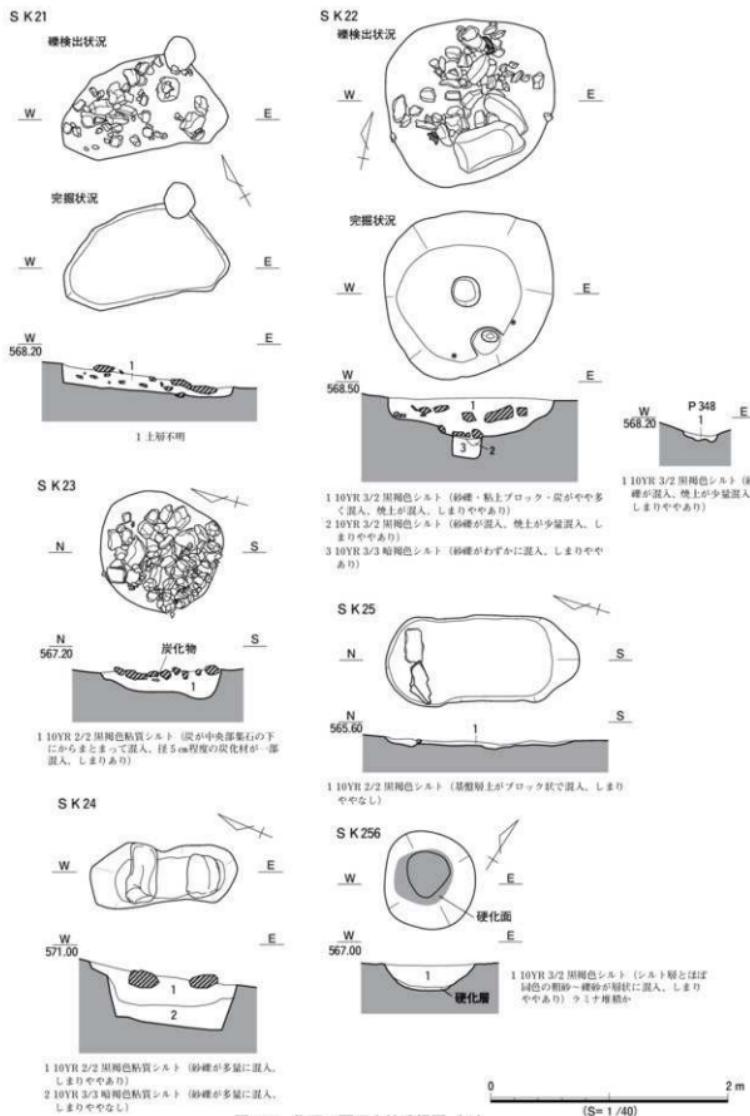


図133 集石・配石土坑遺構図(3)

埋土上面から掘り込まれた土坑である。集石は、遺構埋土の中程から底面付近に堆積しており、その多くは角礫であるが、中には人頭大の大型礫や円礫もある。角礫の多くは被熱しており、全面が赤変するほど強く被熱したものもあった。また、礫とともに灰釉陶器が出土しており、礫と同時に入れられた可能性が高い。遺構底面でP348を検出したが、SK22との関係は不明である。SK23はSB43の北側で検出した。礫は遺構検出面に広がっており、すべて被熱していた。また、礫の下から炭化材が出土した点は、SK18と様相が似ている。SK24はSC9の南側に接しており、埋土上面で2個の円礫が出土した。SK25は遺構の北側に角礫が2個並んでおり、遺構内から鉄滓が出土した。

出土遺物のうち、図示したものはSK17が2点、SK22が6点である。689は須恵器鉢であり、口縁部は屈曲し、端部を丸く收める。713は灰釉陶器皿であり、体部外面に透明感のある緑白色の灰釉が漬け掛けされている。

(4) その他の土坑（遺構：図133・134、遺物：図167・169～172）

SK139の平面形は不整形で、埋土中には炭化物や角礫が多量に混入していた。埋土上層では、平面形がドーナツ状を呈する硬く縮まった砂層（2層）を確認した。SK140は、平面形が圓丸長方形を呈する土坑で、底面に長さ約10cmの角礫が散在していた。また、遺構の西側には焼土が混入する砂層が堆積していた。埋土中には鉄滓や鍛冶関連微細遺物が含まれており、鍛冶関連遺構の可能性もある。SK256はSV1埋土上面で検出した。埋土がラミナ状の自然堆積を呈し、底面は硬化していた。

その他の土坑出土遺物として37点を図示した。680は灰釉陶器碗であり、底部内部が円形に突出する。681は灰釉陶器小壺であり、内面に褐色有機物（ベンガラの可能性が高い）が付着している。722は須恵器無台碗であり、口縁部内面に明瞭な稜がある。726は須恵器壺蓋であり、返り部は内傾する。728

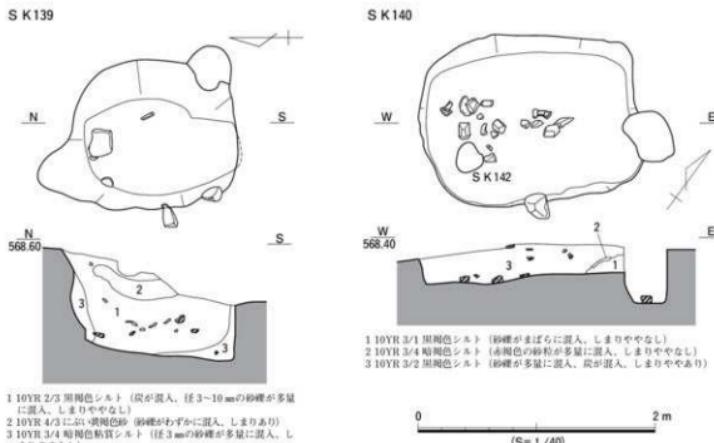


図134 その他の土坑遺構図

は金属器写しの須恵器蓋であり、天井部は扁平である。729は須恵器無台坏であり、底部内面が平滑で、体部内面に「冊」と記された刻書がある。740と741はセット関係の可能性があり、740は天井部の器壁が厚い須恵器蓋、741は金属器写しの須恵器碗である。743・744は弥生時代終末期・古墳時代初頭の土師器高坏であり、脚柱部と脚裾部の境は突出し、脚裾部は外反する。745は須恵器無台坏であり、底部外面は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整がなされ、「等」の墨書がある。749は須恵器盤であり、焼成時の焼け歪みが顕著である。773・774は須恵器有台坏であり、いずれも小型品である。780は須恵器壺である。平底の底部から、体部が直線的に立ち上がる。また、体部外面には指圧痕、内面にはロクロ目が顕著に残る。

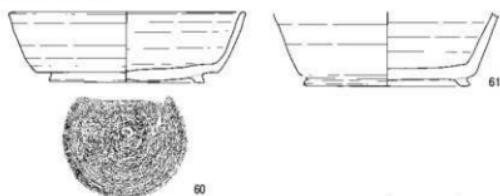
9 その他の遺構・包含層出土遺物（図173～188）

ここでは、ピット及び包含層出土遺物について、特徴的な事項のみ記載する。

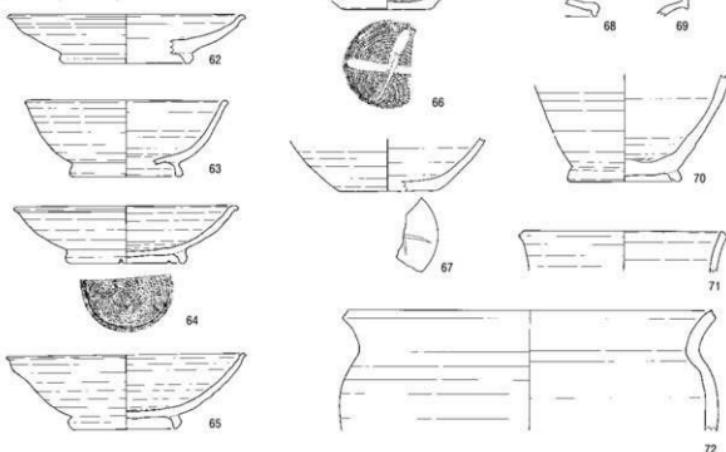
796は砥石である。大型の荒砥であり、砥面は1面である。798は角高台を有する灰釉陶器皿であり、内面全面に灰釉が刷毛塗りされている。800は製塙土器とした。器壁は極めて薄く、胎土中に雲母を多く含む。803は須恵器壺であり、口縁部内面に幅約5mmの粘土紐を梢円形状に貼り付けている。807は須恵器無台坏である。内面に漆が付着している。820・821は須恵器無台坏である。820は口縁部から体部内面にかけて暗文状の縱沈線を描く。821は底部外面は回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整がなされている。823は須恵器無台碗であり、体部内外面に漆が付着している。824・832は須恵器碗であり、口縁部の一箇所に煤が付着しているため、灯明具としての使用が想定できる。843は須恵器碗形碗であり、高台接地面は外側で、口縁端部には内傾面を有する。849は須恵器有台坏である。底部外面の「海」の墨書の字形はかなりくずれている。859～866は須恵器双耳壺である。いずれも耳部側面はへラ状工具により面取りされるが、863の先端は摩滅により丸くなっている。なお、859のみ耳部の幅が狭い。871は須恵器蓋の転用硯である。872は須恵器摘み蓋の転用硯である。879は須恵器無台盤である。底部内面は平滑で、転用硯の可能性もある。881・884は須恵器有台盤の転用硯である。889・892・902は灰釉陶器皿の転用硯である。897・910は灰釉陶器皿である。897は底部外面に朱が付着している。910は無高台の皿であり、入子の可能性もある。909は灰釉陶器耳皿であり、底部が突出する。912～990は灰釉陶器碗である。916は口縁部の2箇所に煤が付着しており、灯明具としての用途が想定できる。932・935は口縁部に煤が付着しており、916と同様に灯明具としての用途が想定できる。なお、935の底部内面は暗灰色に変色し平滑である。956は転用硯であり、底部内面が平滑で黒色有機物がしみ込んでいる。959は胎土中の礫が外れたためか、体部下方に穴が開いている。979は底部内面にへラ状工具により文様が描かれている。981・976は底部内面にへラ状工具により沈線状の窪みが確認できる。985は底部内外面に「定」の墨書がある。991は須恵器の壺のミニチュアである。体部は直線的で、口縁部は屈曲する。997は小型の平瓶であり、水滴としての用途が想定される。1005は須恵器壺である。最大径を体部中程に有し、口縁端部は外傾して面取りされる。体部上方と底部外面に焼成時のひび割れがあり、口縁部は歪んでいる。1007は須恵器壺であり、底部を外面から円形に打ち欠いている。1008は須恵器有耳壺である。肩部下端に粘土紐による隆帶を1条貼り付け、その直下に縱穿孔のある縦耳を貼り付けている。1012は灰釉陶器壺である。体部外面に灰釉が刷毛塗りされているが、塗り方が粗雑である。1021～1031は須恵器甕である。1023・1025・1029は口縁部から頸部外面に、1031

は体部内面に施釉が認められる。1032・1033は須恵器火舎である。1032の体部と口縁部内面の境には、沈線状の窪みが巡る。1034～1044は須恵器円面鏡である。1037～1039・1044は脚部外面に縱沈線、1040・1041は斜格子がヘラで描かれる。1034の陸部は平滑で黒色有機物がしみ込んでおり、堤端部は面取りされている。一方、1035の陸部は摩滅が顯著でなく、堤端部は断面三角形を呈する。1045は須恵器平瓶の転用鏡であり、鏡の堤に該当する面は丁寧に研磨してある。1050は須恵器陶錘であり、表面は指圧による調整後、先端の細い櫛状工具により回転ナデ調整が施されている。1055は器種不明である。陶製で楕円形を呈し、表裏面に初殻痕が付着している。1056は灰釉陶器入子とした。体部中程が屈曲し、口縁部はほぼ直立する。1058は器種不明としたが、風字鏡の可能性もある。1059・1060も器種不明とした。いずれも板状の粘土の表面を装飾し、裏面は剥離したような痕跡が残る。1059の表面は階帶状の盛り上がりと沈線状の窪みが交互に配置され、端部に小指の腹で窪みをつくり、窪みの周縁には爪の跡が残る。なお、1060は1059より粗雑である。1061・1062は灰釉陶器の加工円盤である。1061は底部に近い打点が4箇所にあり、その後さらに体部を削っている。また、剥離後に部分的に研磨している。なお、底部外面に「千万」の墨書がある。1063は凸面に繩叩き痕の残る平瓦である。1064は巡方の破片であり、潜り穴の部分で削れている。1065は用途不明であるが、調整や石材の質感が巡方に類似する。1067は仕上砥であり、表裏面ともによく使い込まれており、中央部分の厚みは約1mmである。1076は中砥であり、上面に裁断形成時の工具痕が残る。1079は鉸具で、刺金と軸金が別造りであり、刺金は可動式である。1080は銅丸柄の表金具である。楕円形の下辺を直截した形で、垂孔は縦0.7cm、横1.4cmである。断面は台形状を呈し、裏面には頂部と下辺の両端の3箇所に鉢足を鋳出している。

S B 1 (60・61)



S B 2 (62～72)



S B 3 (73～76)

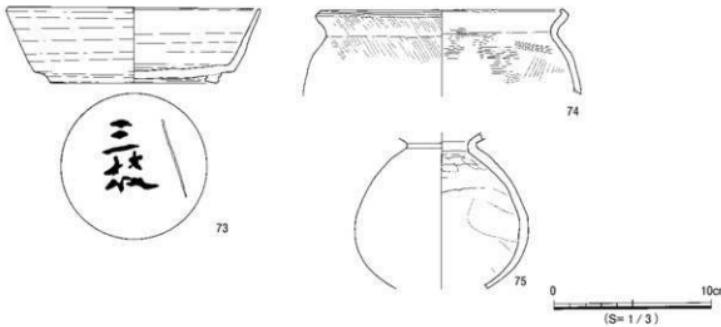
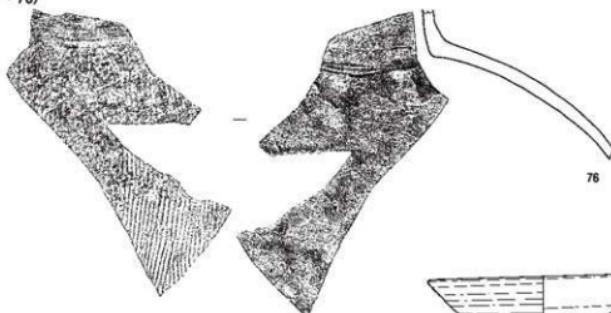


図135 出土遺物実測図（古代：造構1）

SB 3 (73 ~ 76)



SB 4 (77 ~ 90)

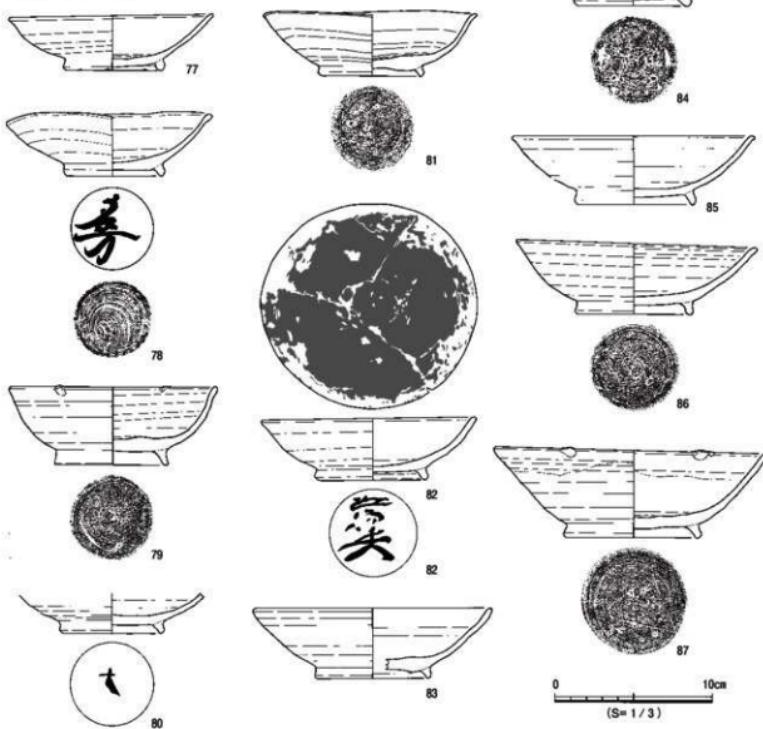


図136 出土遺物実測図（古代：遺構 2）

SB 4 (77 ~ 90)



88



89

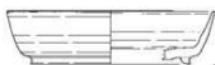


90

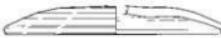
SB 6 (91 ~ 93)



91



92



93

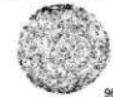
SB 7 (94 ~ 100)



94



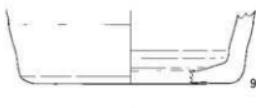
95



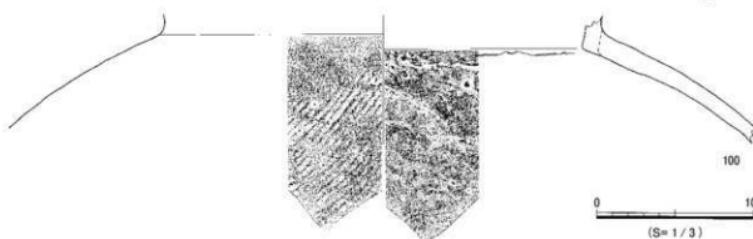
97



98



99

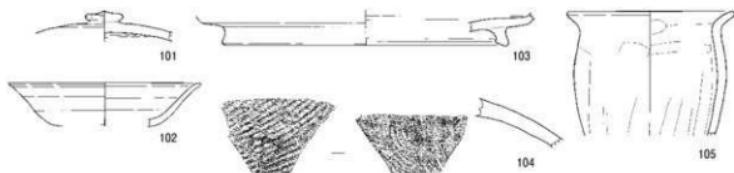


100

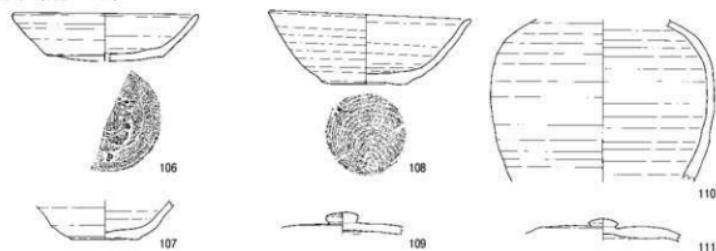
0
10cm
(S=1/3)

図137 出土遺物実測図（古代：遺構3）

S B 8 (101 ~ 105)



S B 9 (106 ~ 111)



S B 10 (112 ~ 118)

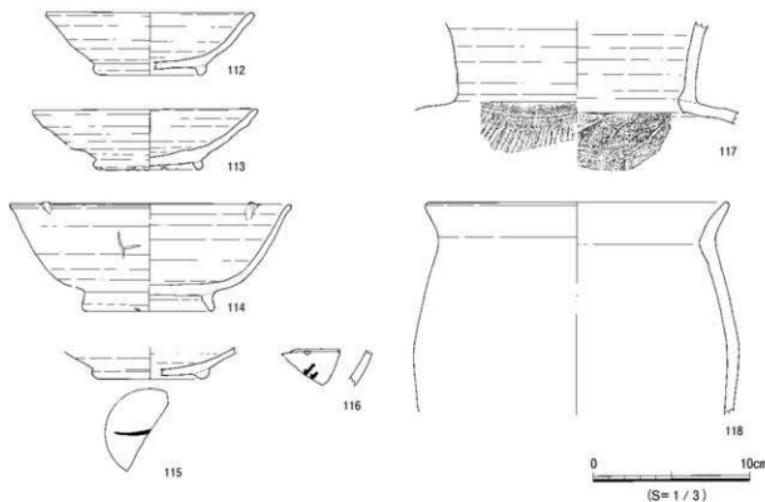
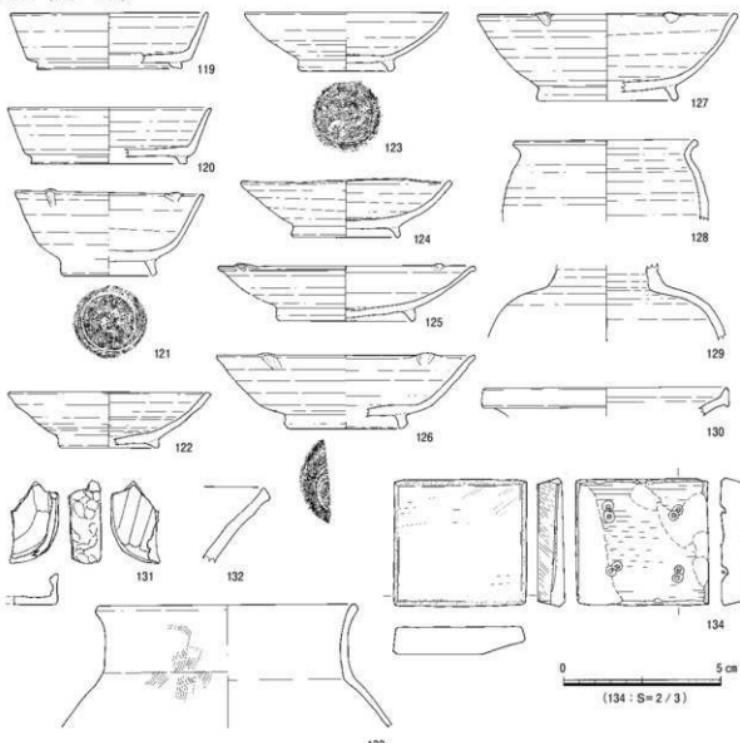


図138 出土遺物実測図（古代：遺構 4）

S B11 (119 ~ 134)



S B12 (135 ~ 138)

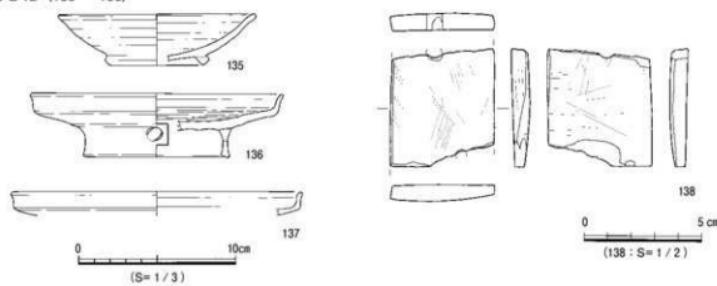
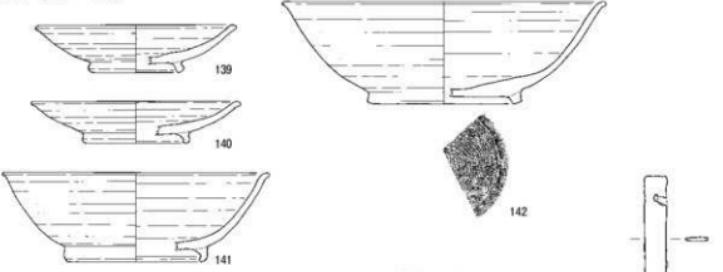
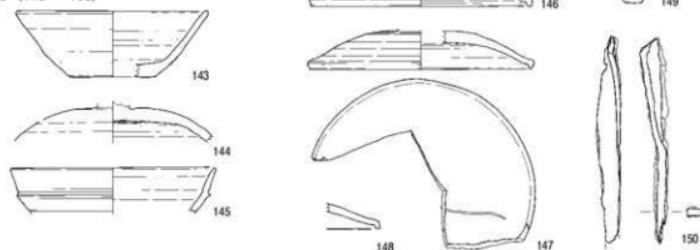


図139 出土遺物実測図（古代：遺構 5）

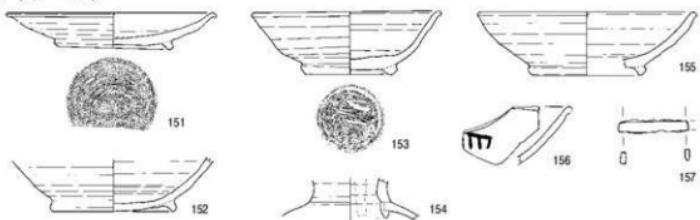
S B 13 (139 ~ 142)



S B 15 (143 ~ 150)



S B 17 (151 ~ 157)



S B 18 (158 ~ 162)

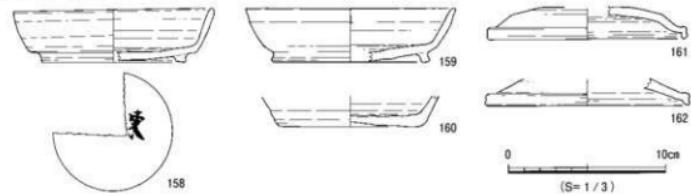


図140 出土遺物実測図（古代：遺構 6）

SB 19 (163 ~ 189)

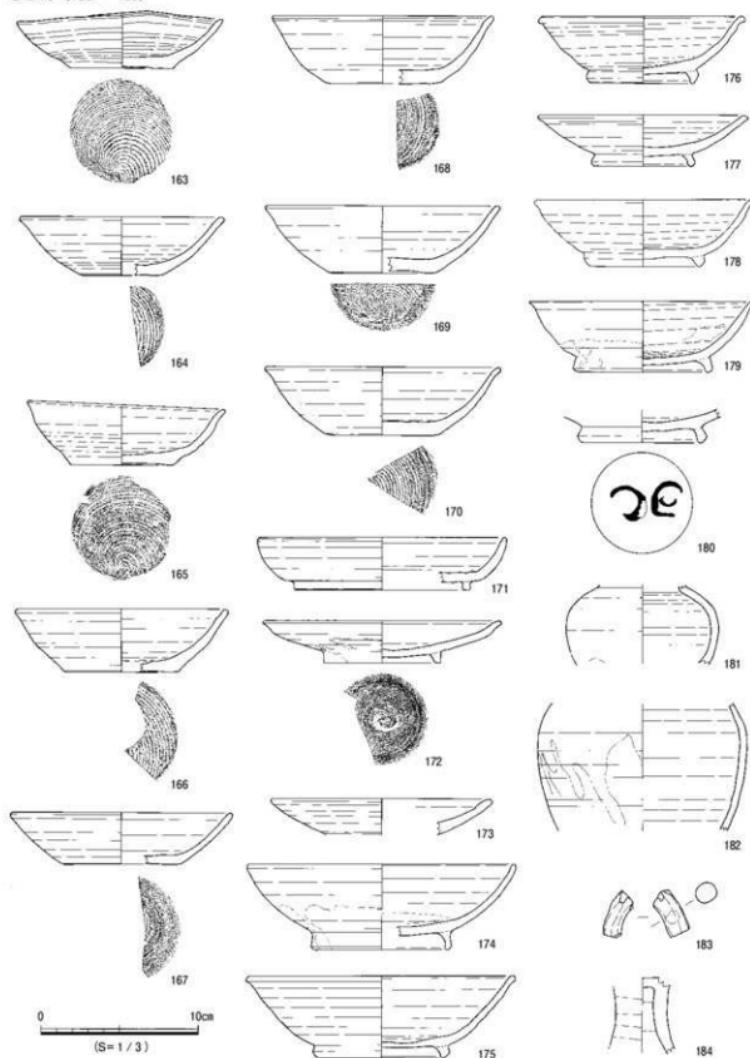
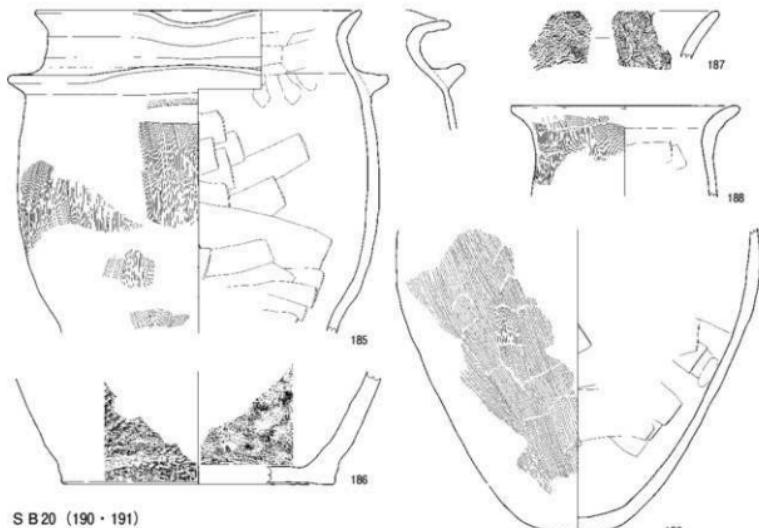
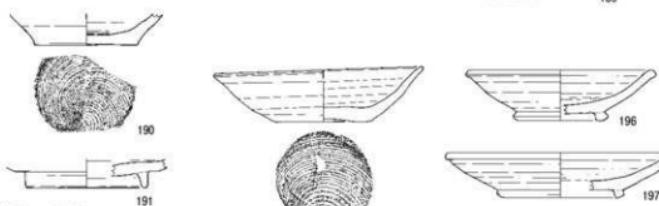


図141 出土遺物実測図（古代：遺構7）

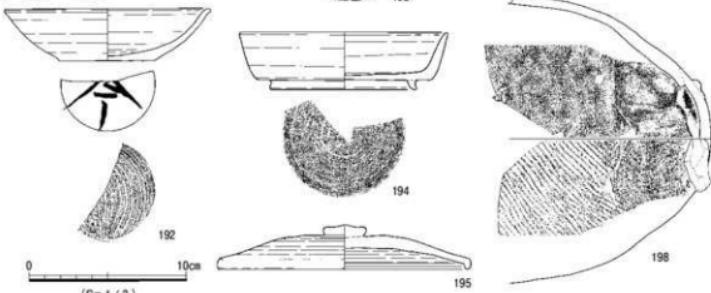
S B 19 (163 ~ 189)



S B 20 (190・191)



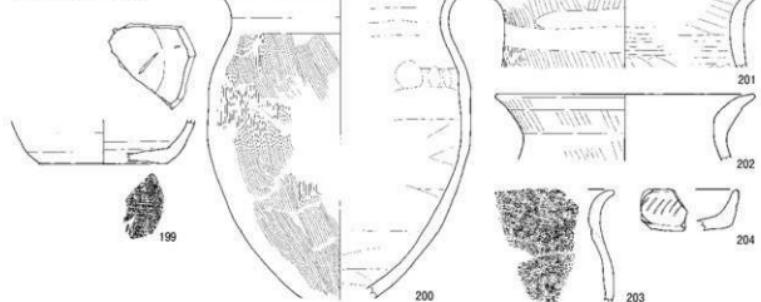
S B 21 (192 ~ 204)



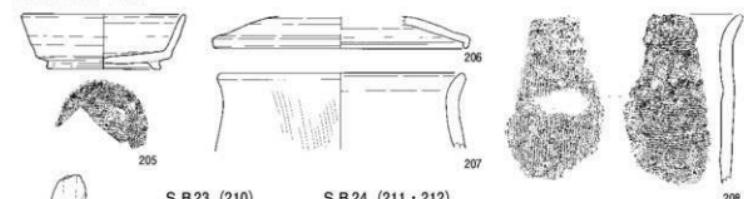
0
(S= 1/3)
10cm

図142 出土遺物実測図（古代：遺構 8）

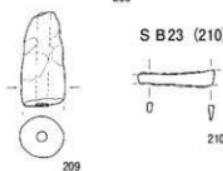
S B21 (192 ~ 204)



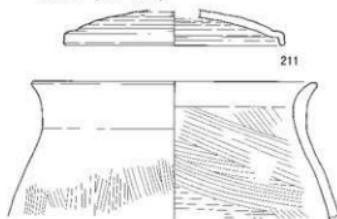
S B22 (205 ~ 209)



S B23 (210)



S B24 (211・212)



S B25 (213 ~ 217)

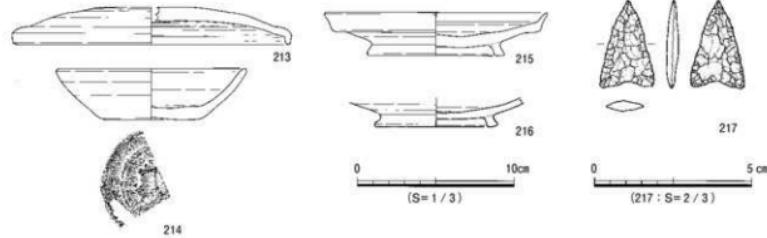
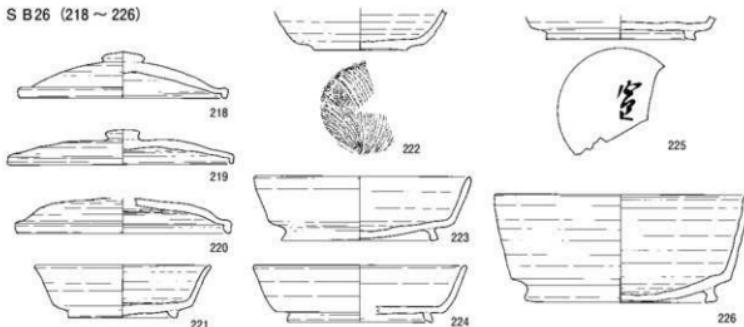


図143 出土遺物実測図（古代：遺構9）

S B26 (218 ~ 226)



S B27 (227 ~ 240)

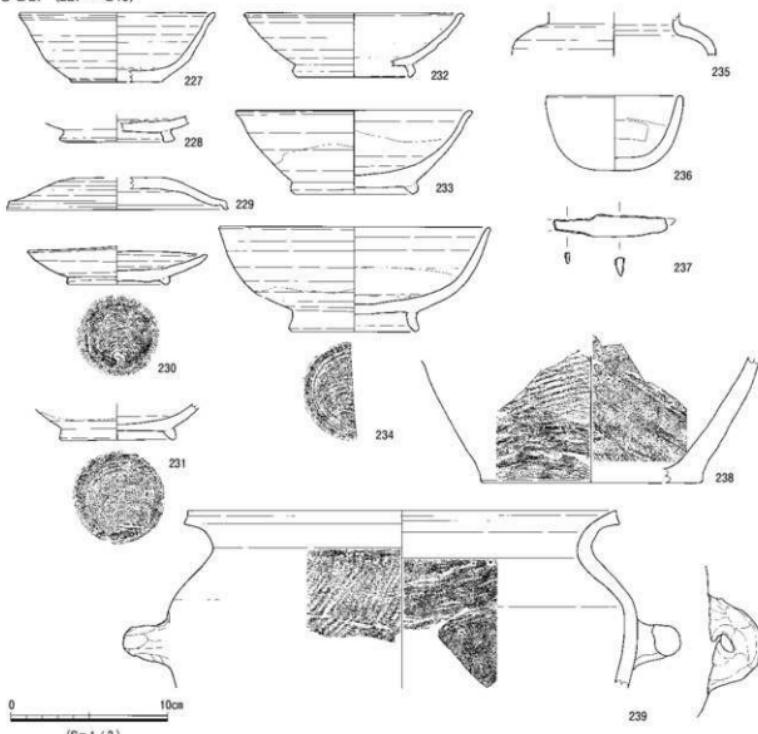
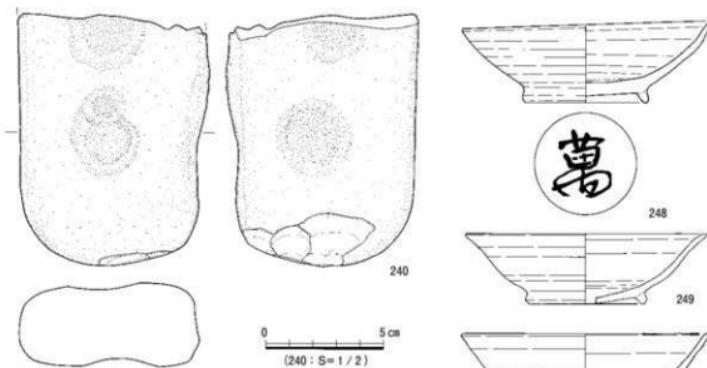


図144 出土遺物実測図（古代：遺構10）

S B 27 (227 ~ 240)



S B 28 (241 ~ 260)

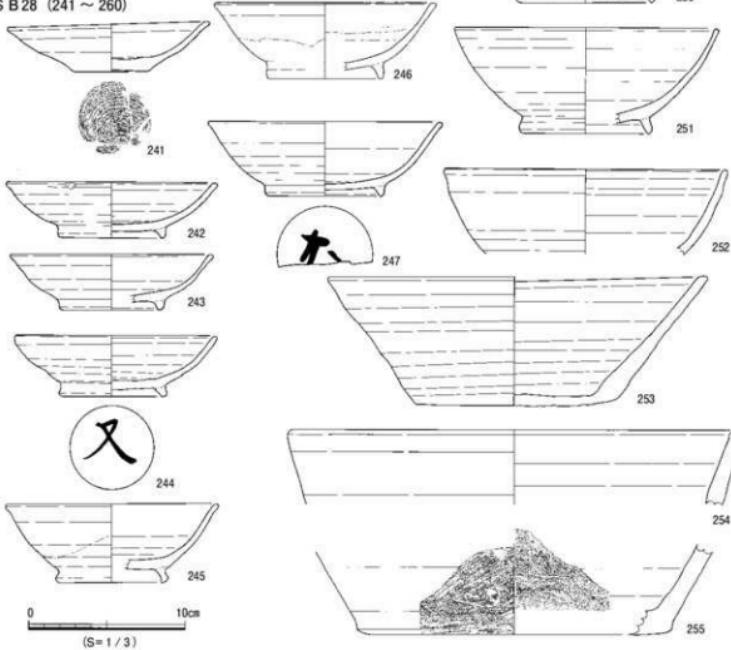
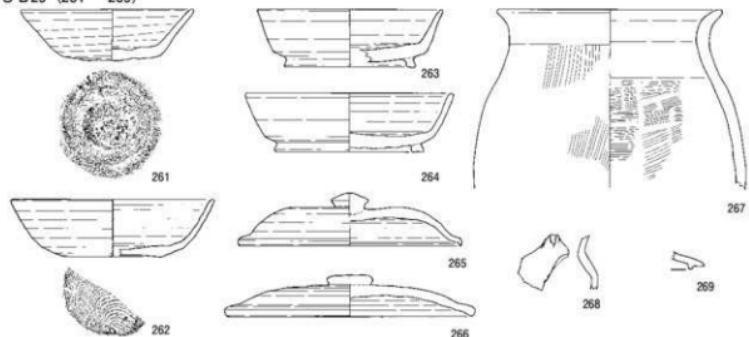


図145 出土遺物実測図（古代：遺構11）

S B28 (241 ~ 260)



S B29 (261 ~ 269)



S B30 (270 ~ 292)

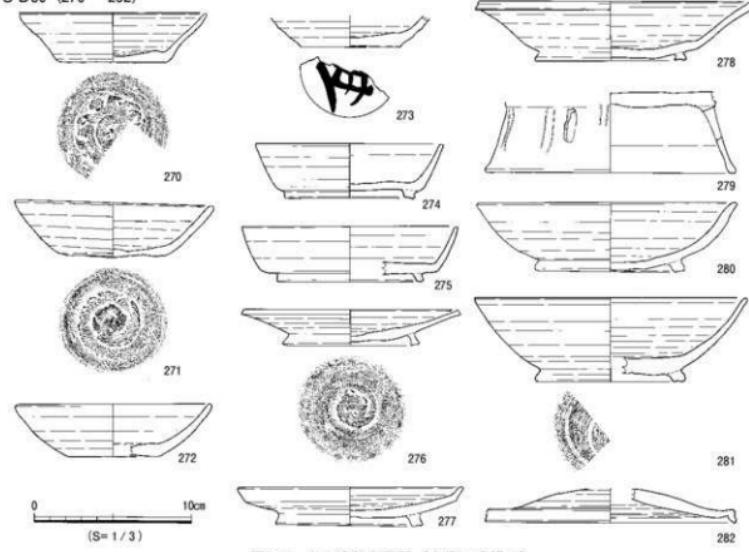


図146 出土遺物実測図（古代：遺構12）

0
(S=1/3) 10cm

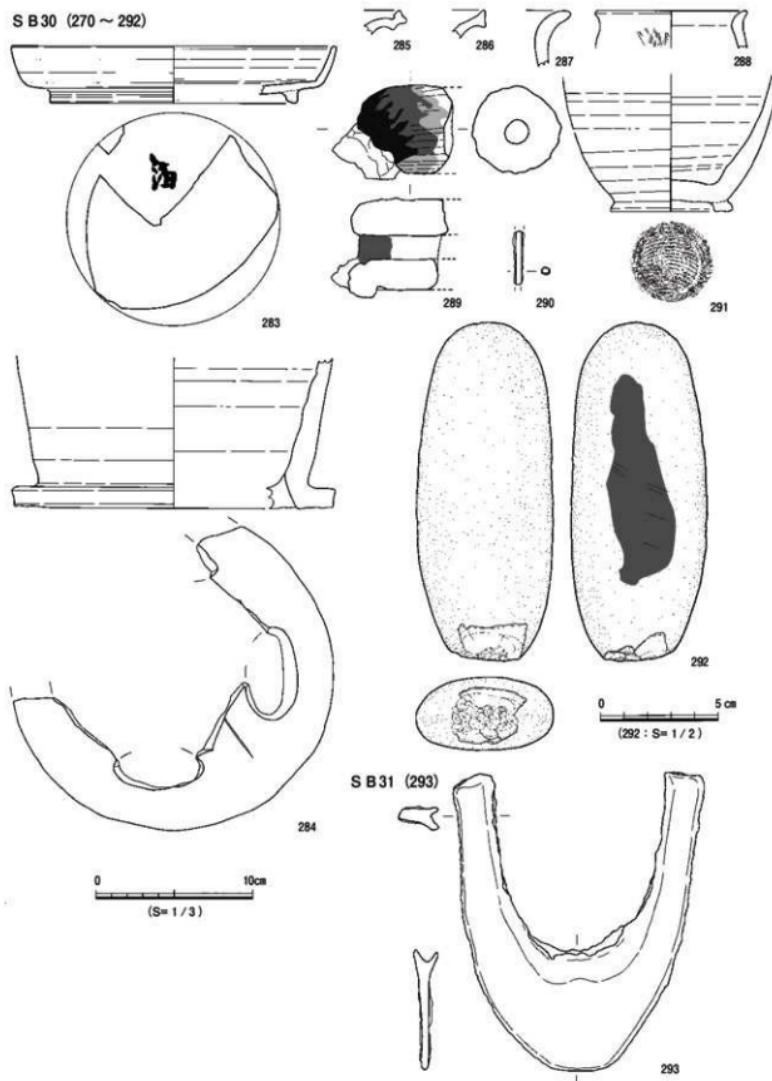
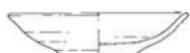
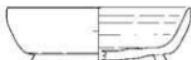


図147 出土遺物実測図（古代：造構13）

S B32 (294 ~ 309)



294



300



305



295

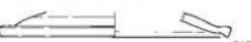


301



307

S B33 (310 ~ 315)



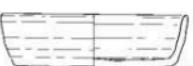
310



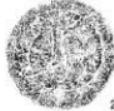
296



303



311



297



304



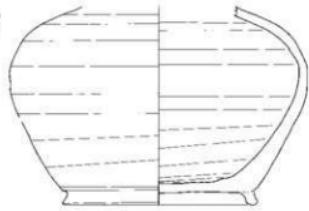
312



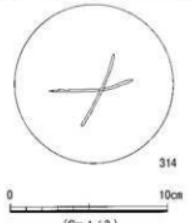
299



308



313



314

0
(S= 1/3)
10cm

図148 出土遺物実測図（古代：遺構14）

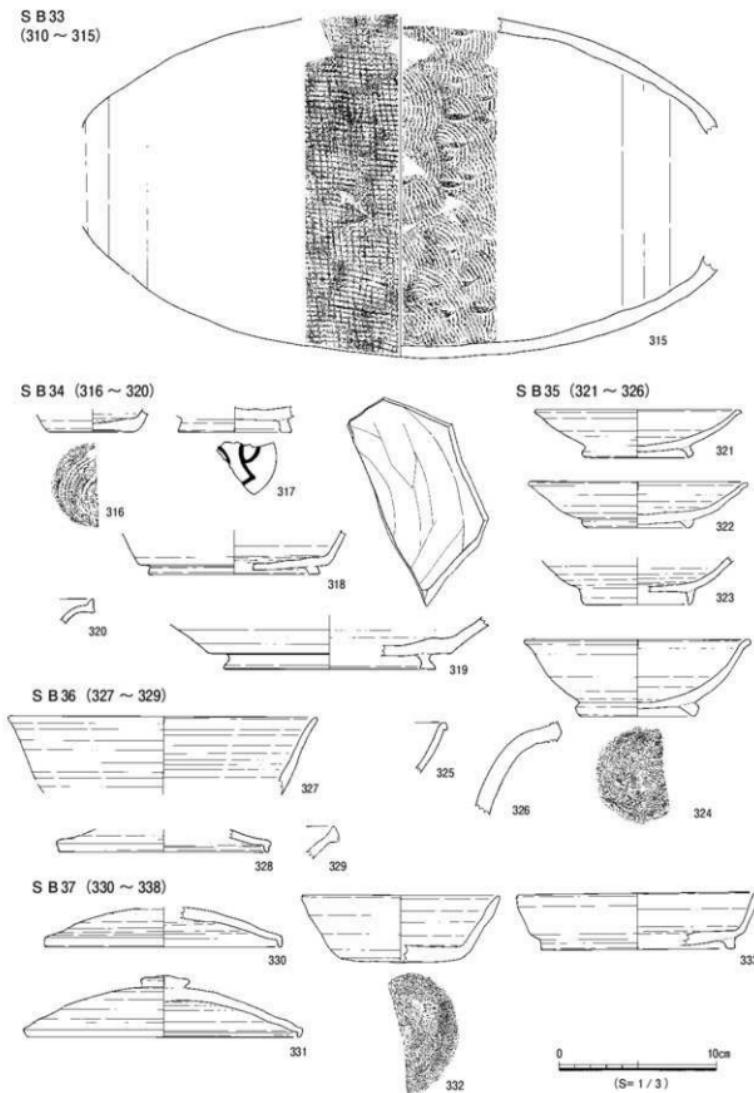


図149 出土遺物実測図（古代：遺構15）

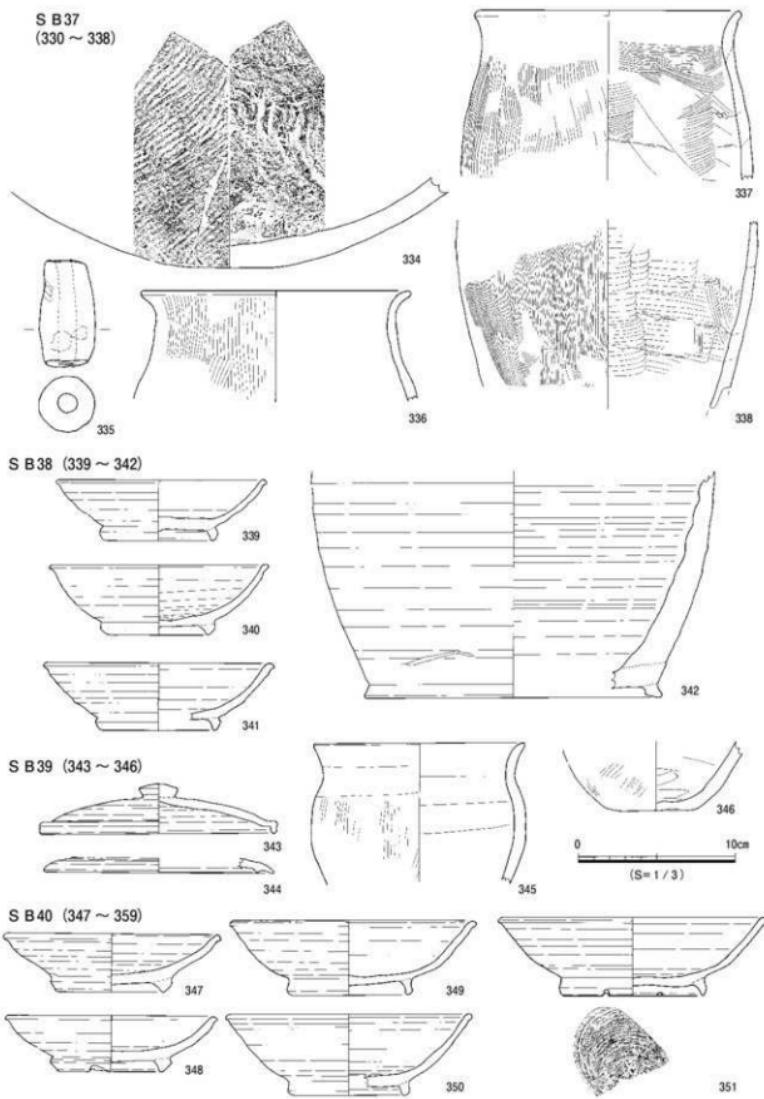


図150 出土遺物実測図（古代：遺構16）

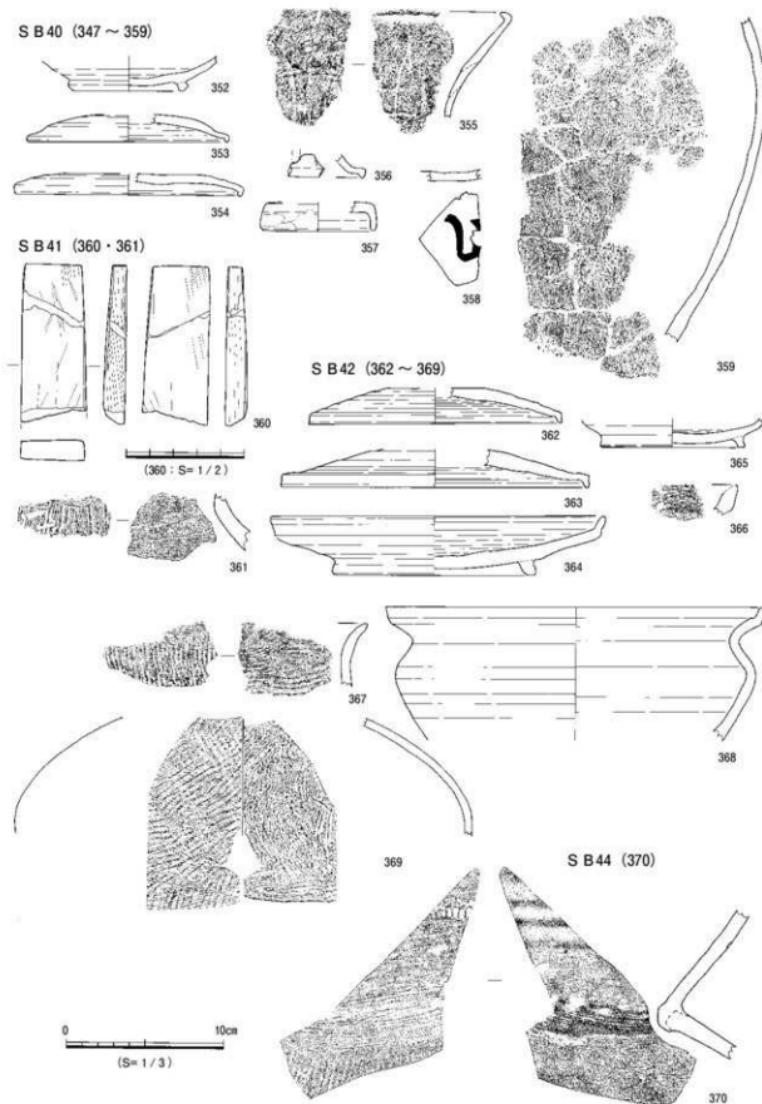
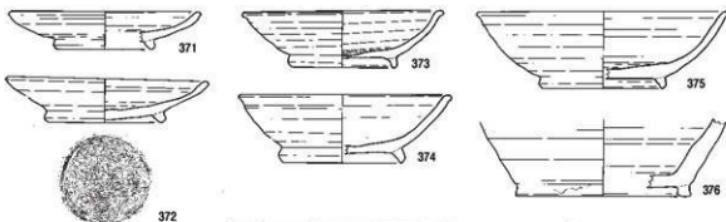
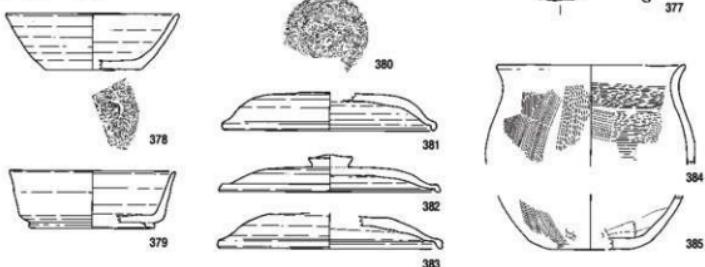


図151 出土遺物実測図（古代：遺構17）

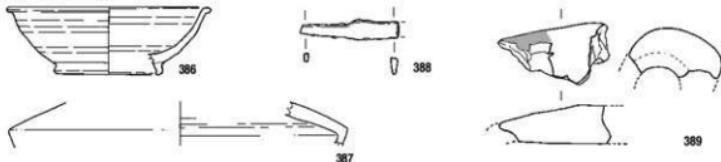
S B 45 (371 ~ 377)



S C 1 (378 ~ 385)



S C 2 (386 ~ 389)



S C 3 (390 ~ 432)

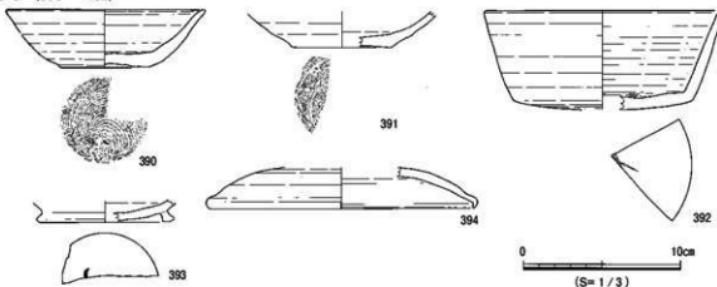


図152 出土遺物実測図（古代：遺構18）

S C 3 (390 ~ 432)

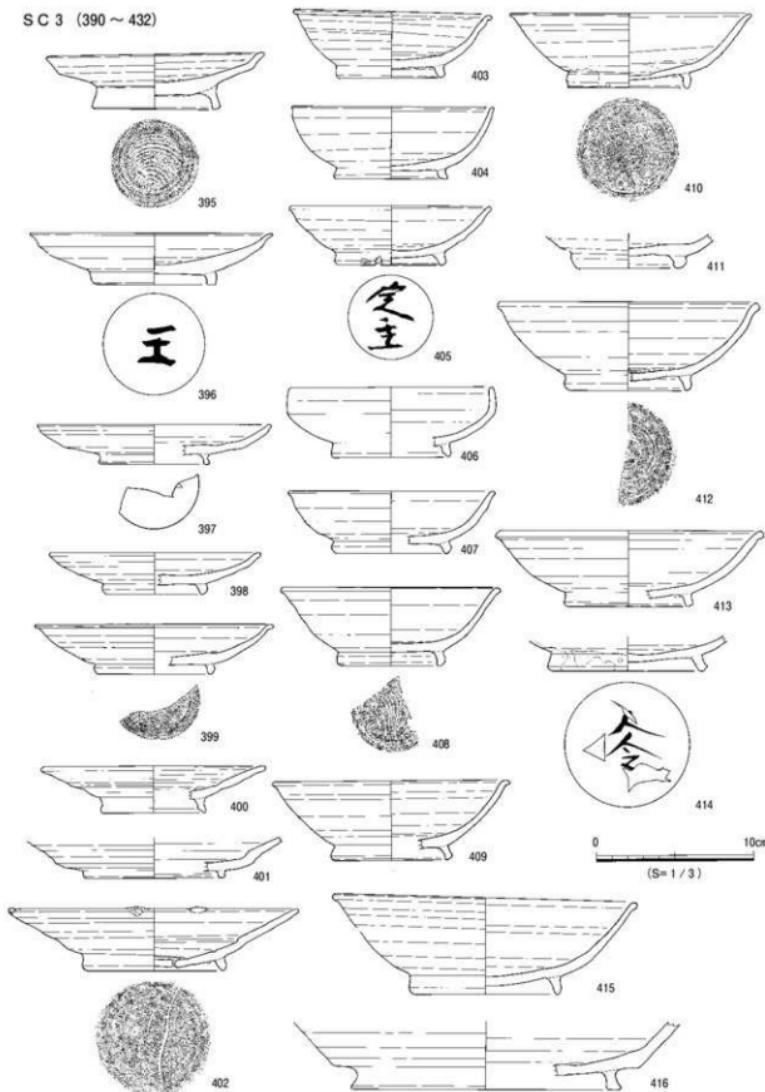


図153 出土遺物実測図（古代：構造19）

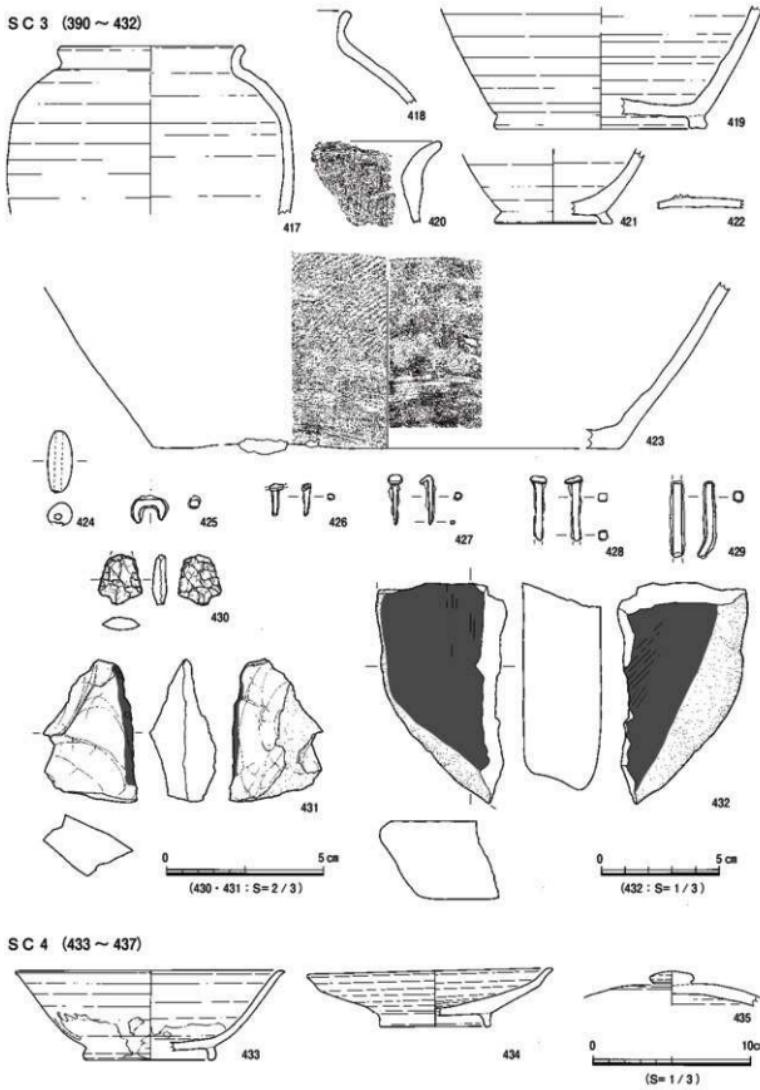
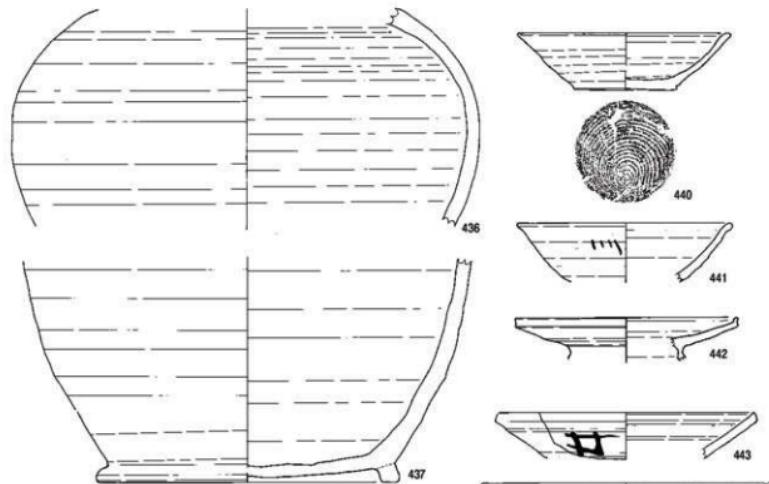


図154 出土遺物実測図（古代：遺構20）

S C 4 (433 ~ 437)



S C 5 (438 ~ 485)

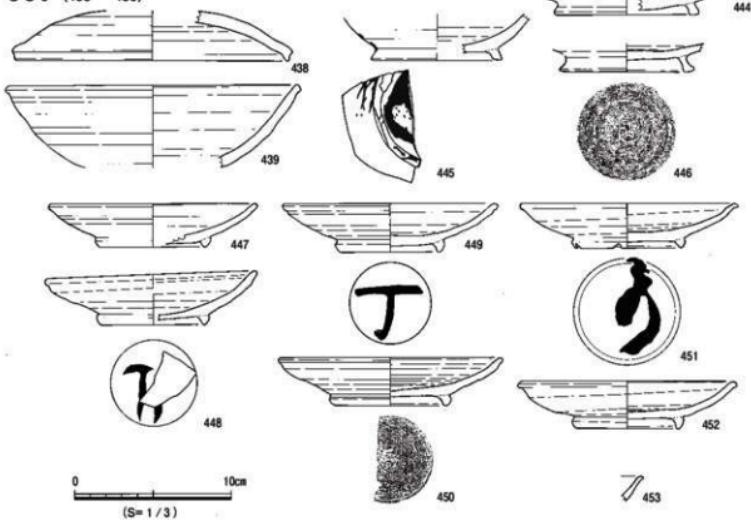


図155 出土遺物実測図（古代：遺構21）

S C 5 (438 ~ 485)

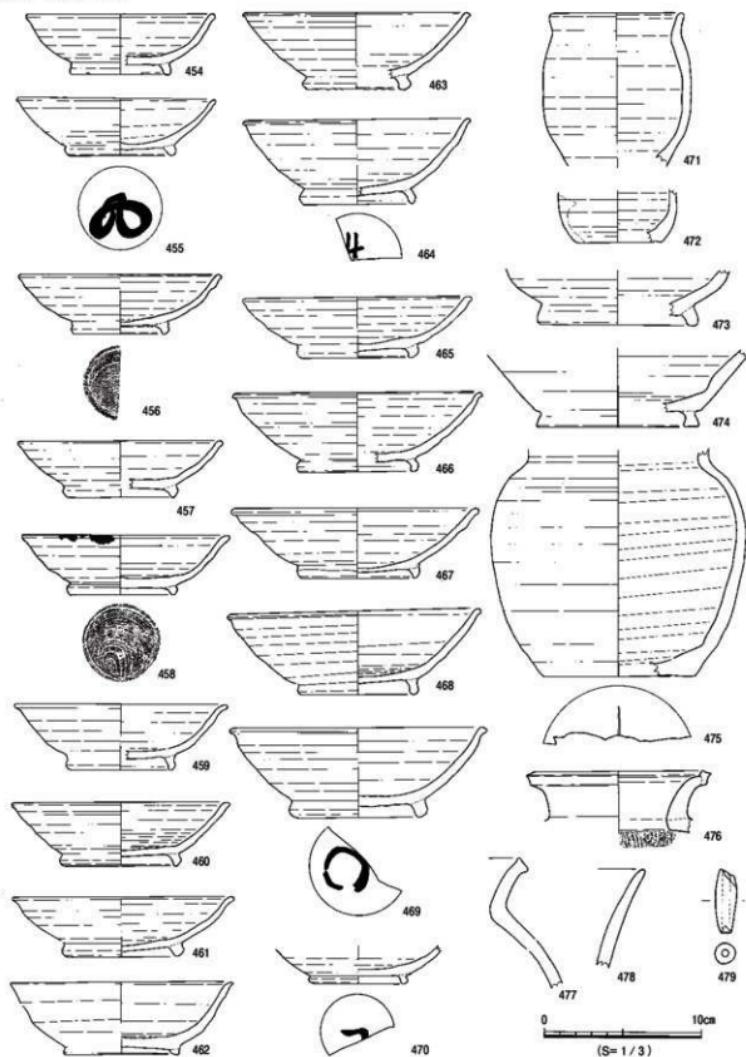
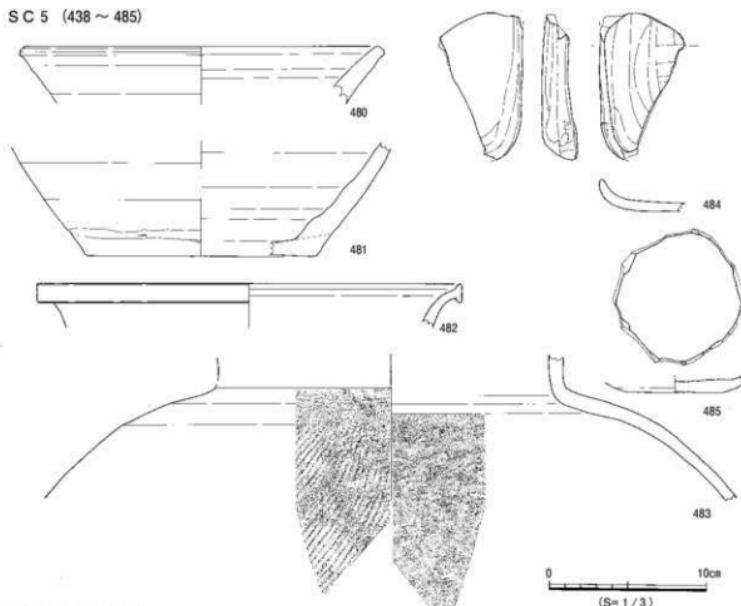


図156 出土遺物実測図（古代：遺構22）

SC 5 (438 ~ 485)



SC 6 (486 ~ 503)

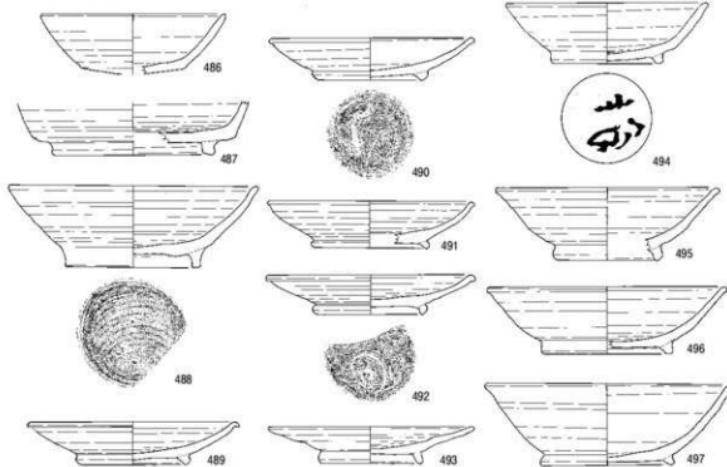
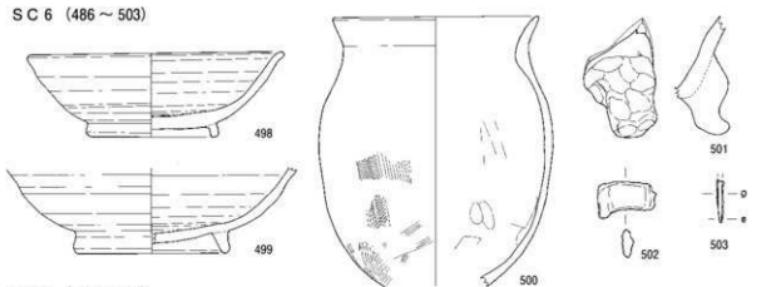
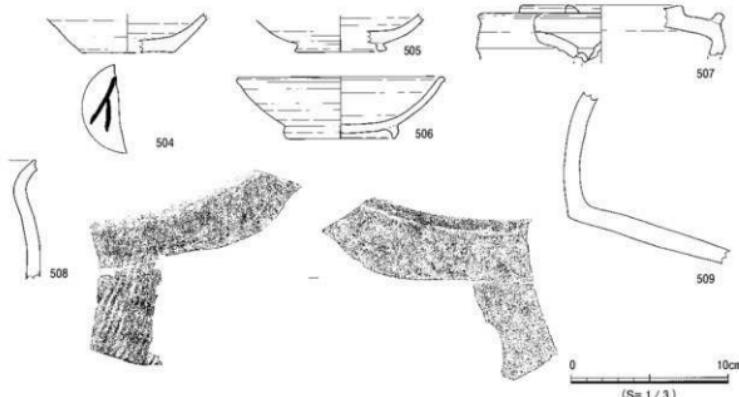


図157 出土遺物実測図（古代：造構23）

S C 6 (486 ~ 503)



S C 7 (504 ~ 509)



S C 8 (510 ~ 526)

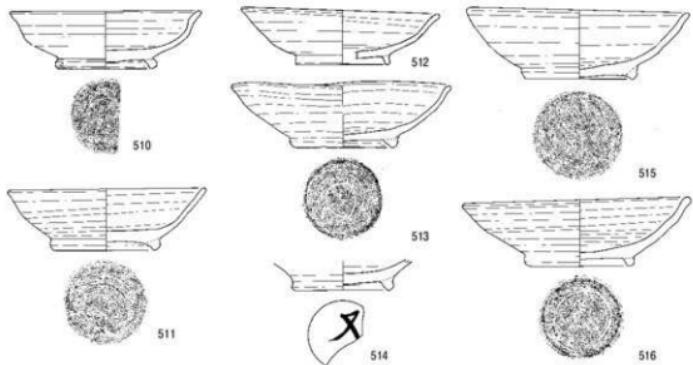
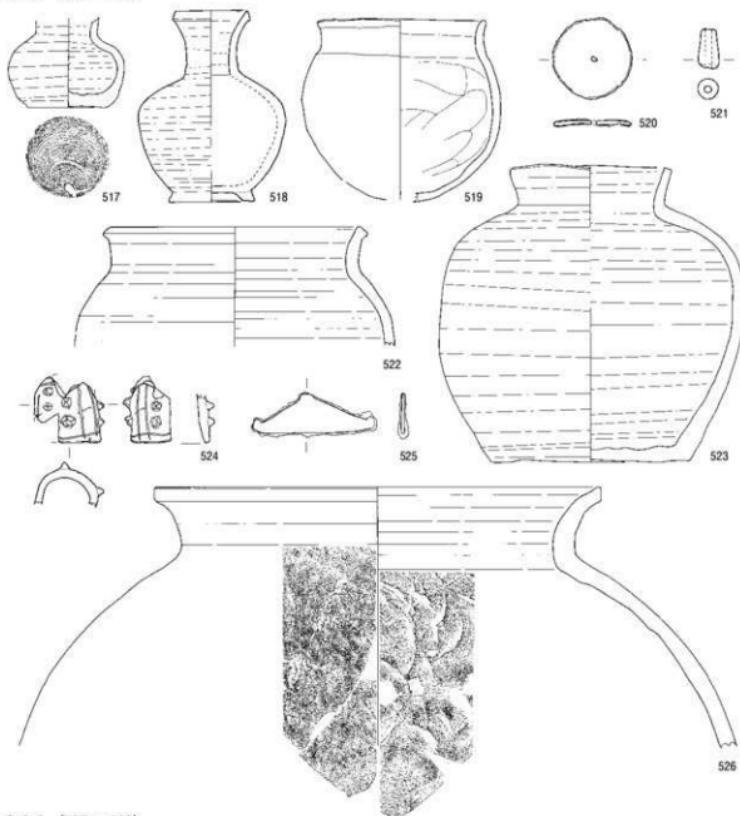


図158 出土遺物実測図（古代：遺構24）

S C 8 (510 ~ 526)



S C 9 (527 ~ 532)

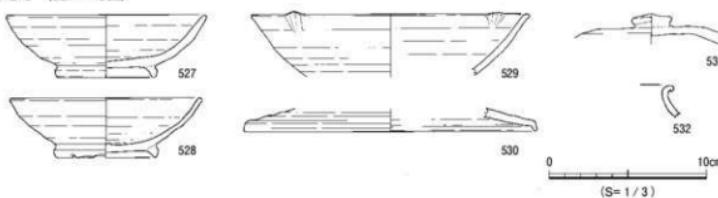
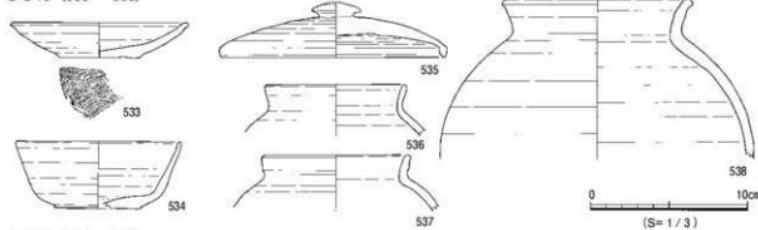


図159 出土遺物実測図（古代：遺構25）

S C 10 (533 ~ 538)



S C 11 (359 ~ 574)

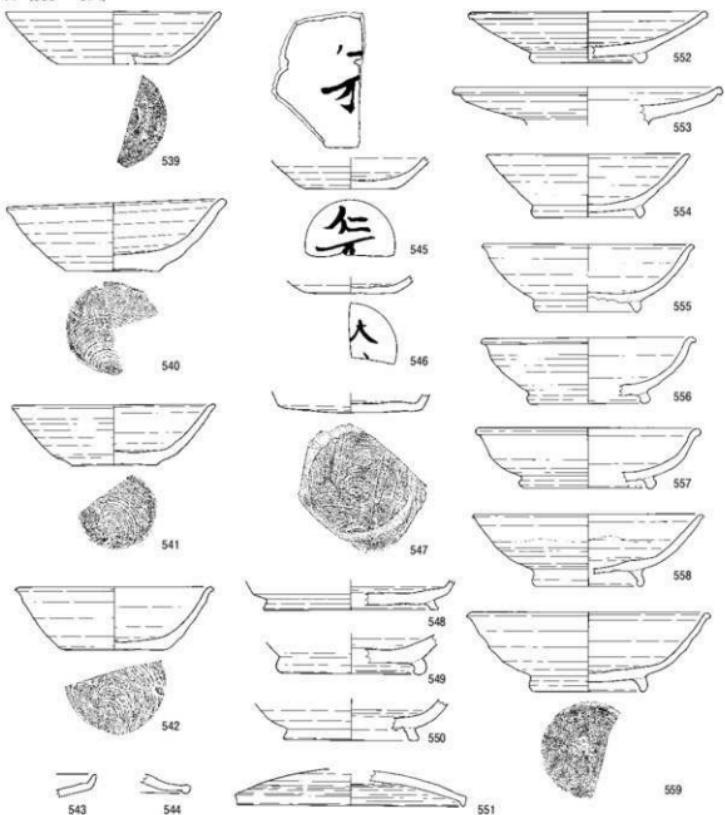
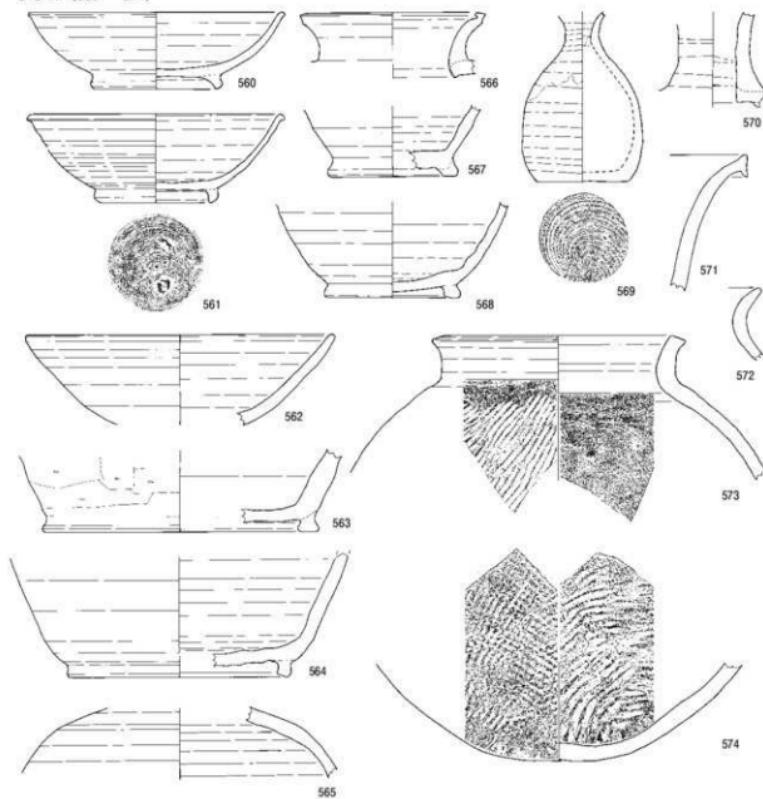


図160 出土遺物実測図（古代：遺構26）

S C 11 (539 ~ 574)



S C 13 (575 ~ 577)

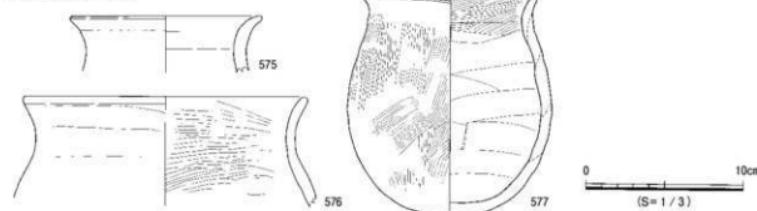
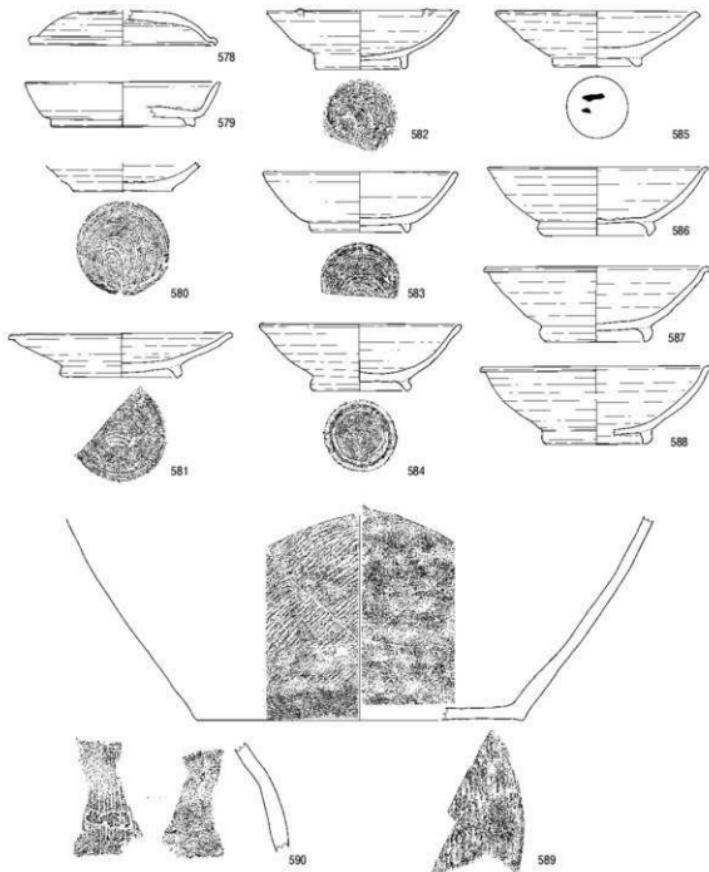


図161 出土遺物実測図（古代：遺構27）

S C12 (578 ~ 590)



S C14 (591 ~ 594)

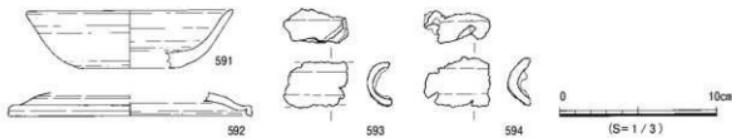
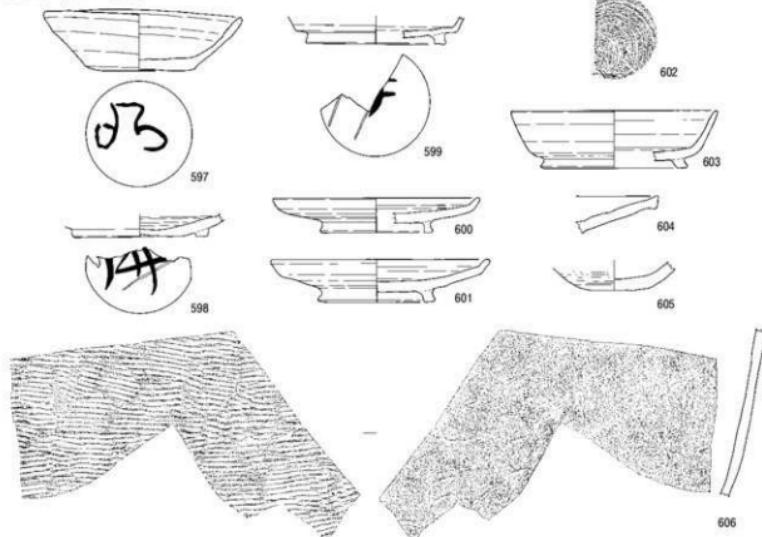


図162 出土遺物実測図（古代：遺構28）

S C15 (595・596)



S C16 (597 ~ 607)



S C18 (608 ~ 612)

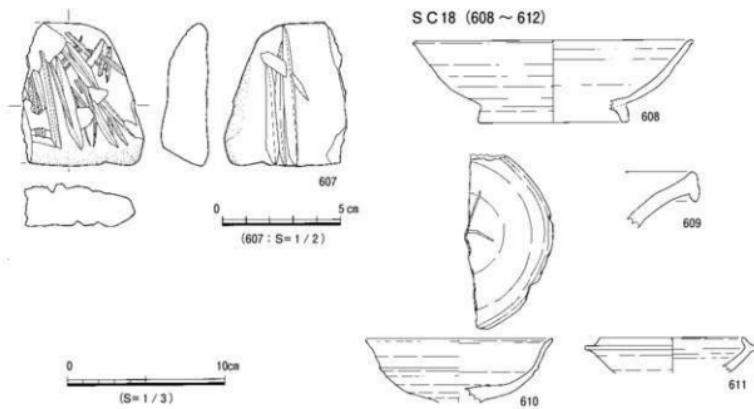
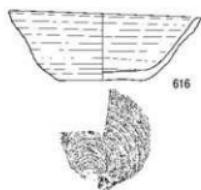
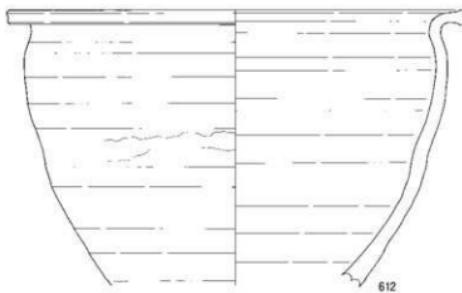
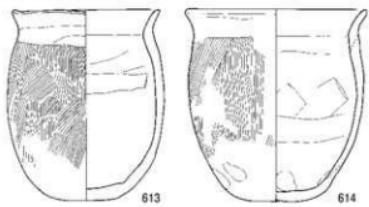


図163 出土遺物実測図（古代：遺構29）

S C 18 (608 ~ 612)



S C 19 (613 ~ 619)



S V 1 (620 ~ 631)

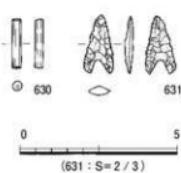
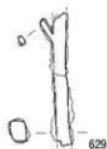
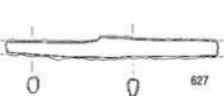
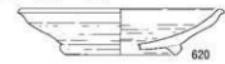
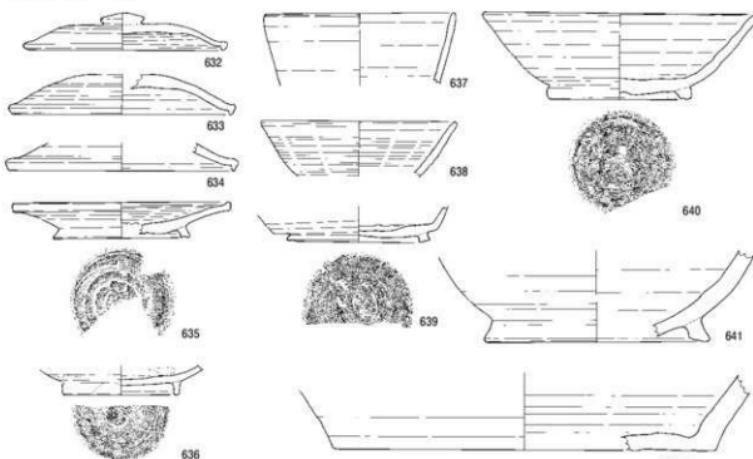
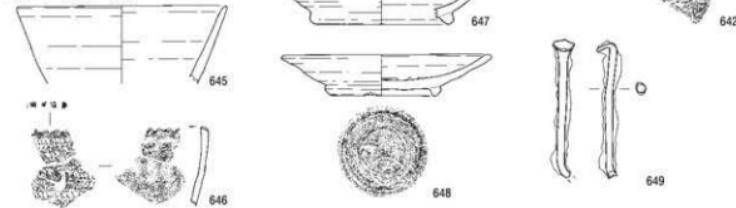


図164 出土遺物実測図（古代：遺構30）

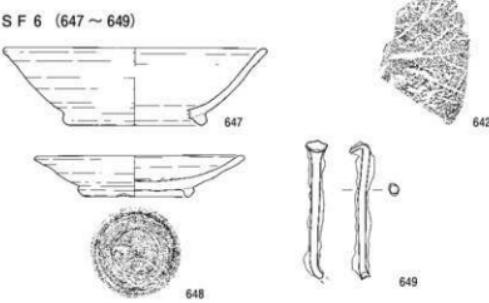
S F 1 (632 ~ 644)



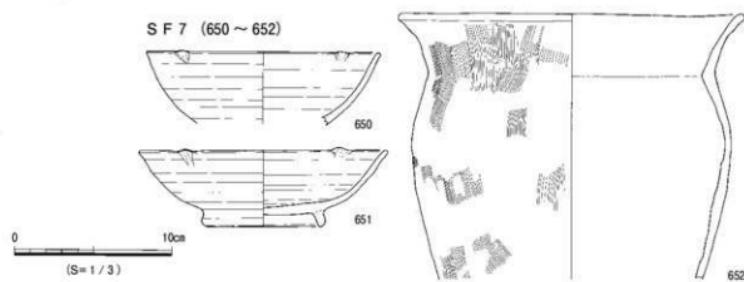
S F 4 (645・646)



S F 6 (647 ~ 649)



S F 7 (650 ~ 652)



0
10cm
(S = 1 / 3)

図165 出土遺物実測図（古代：遺構31）

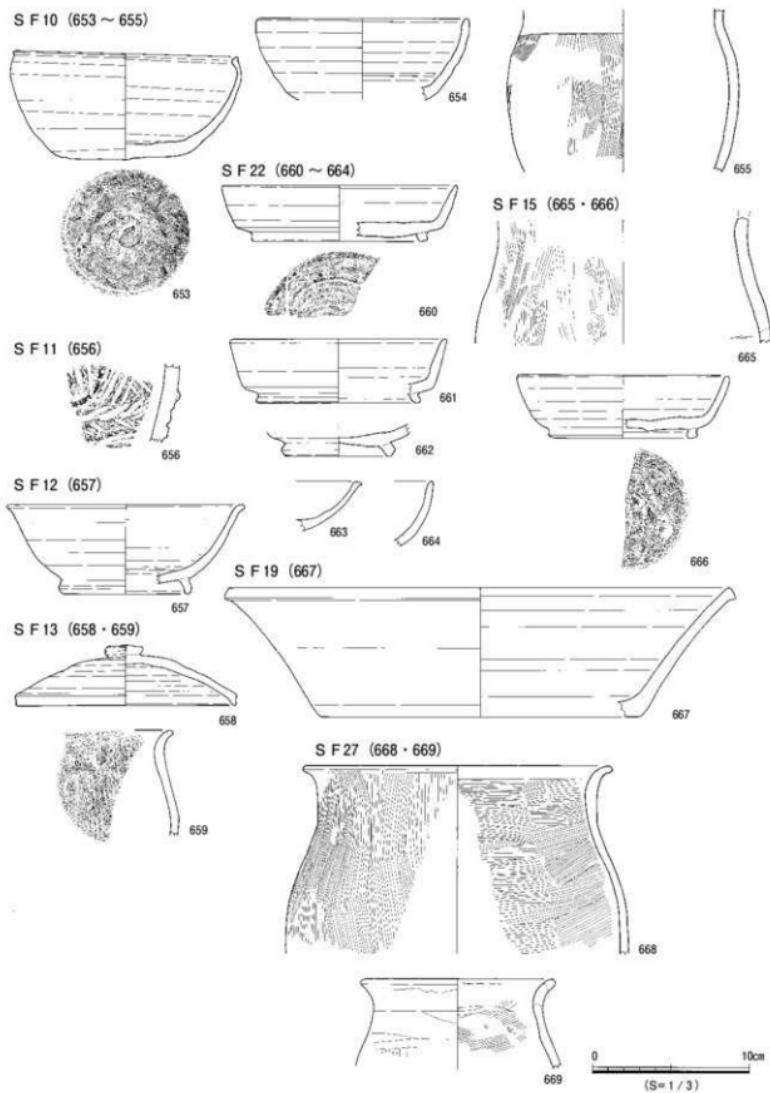


図166 出土遺物実測図（古代：遺構32）

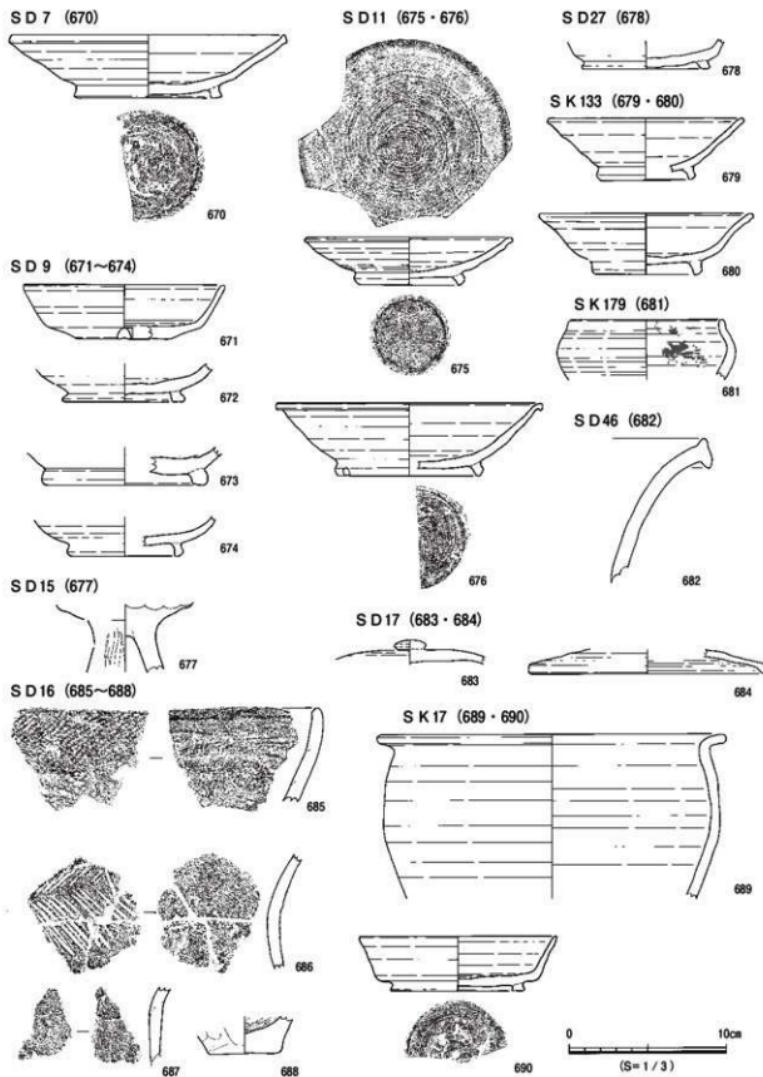


図167 出土遺物実測図（古代：造構33）

SK 14 (691 ~ 712)

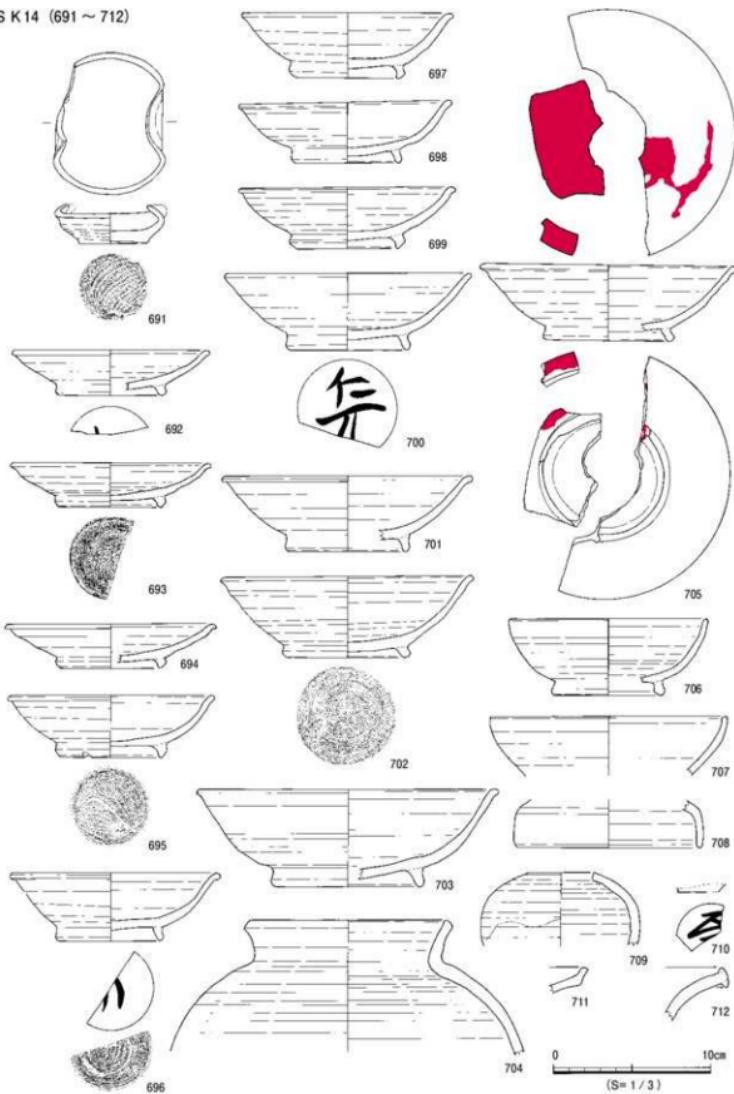
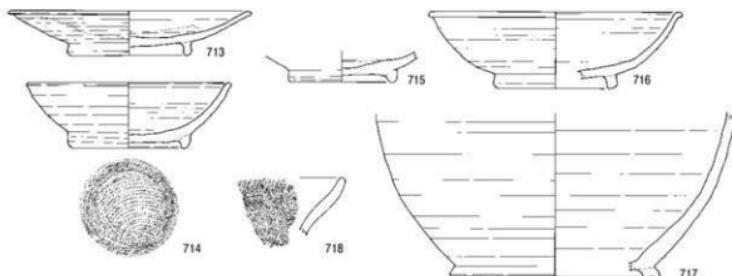
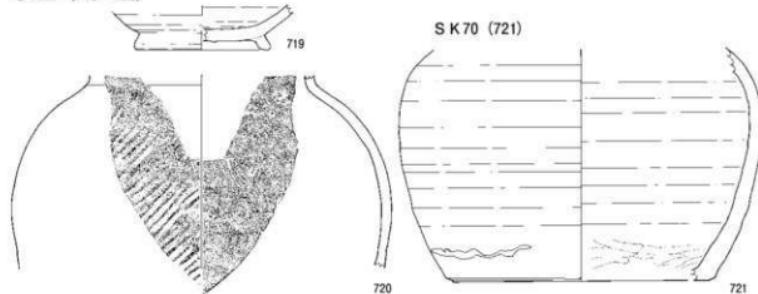


図168 出土遺物実測図（古代：遺構34）

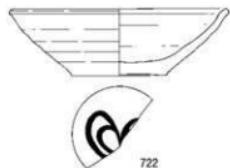
SK 22 (713 ~ 718)



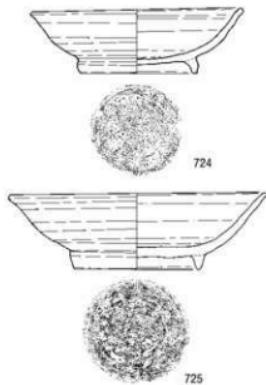
SK 27 (719 ~ 720)



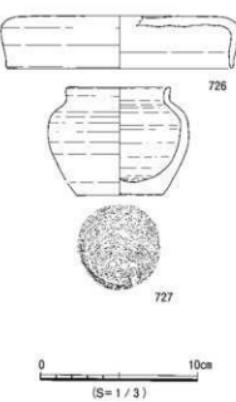
SK 197 (722)



SK 289 (724 ~ 725)



SK 207 (726 ~ 727)



0 10cm
(S = 1 / 3)

図169 出土遺物実測図（古代：遺構35）

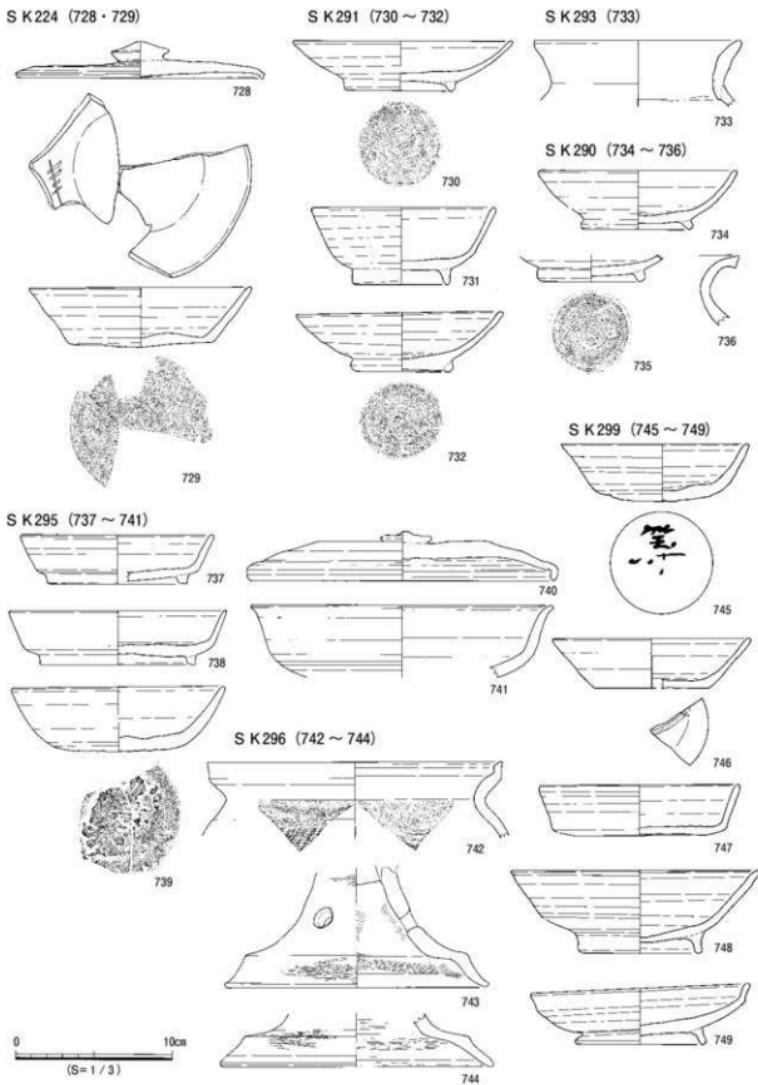
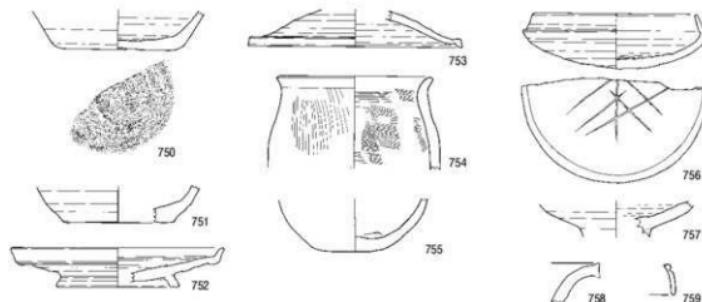
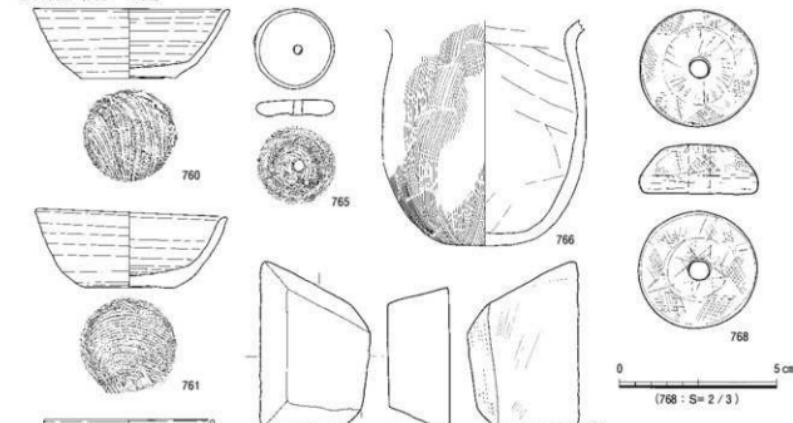


図170 出土遺物実測図（古代：遺構36）

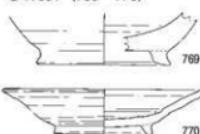
S K 297 (750 ~ 759)



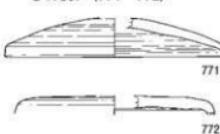
S K 298 (760 ~ 768)



S K 301 (769 ~ 770)



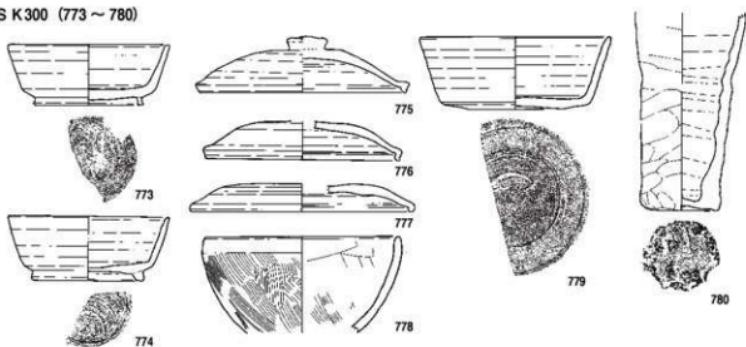
S K 307 (771 ~ 772)



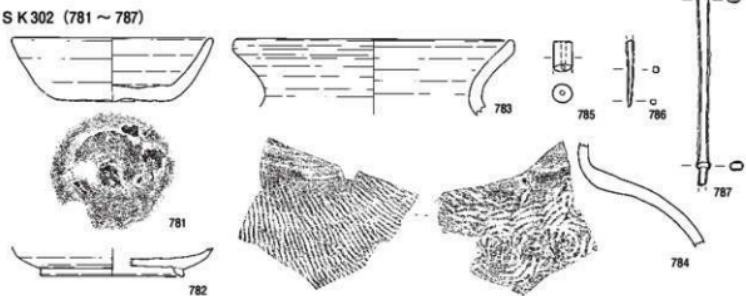
0
(S=1/3) 10cm

図171 出土遺物実測図（古代：遺構37）

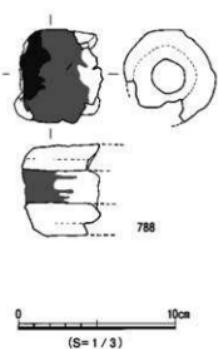
S K300 (773 ~ 780)



S K302 (781 ~ 787)



S U1 (788 ~ 790)



P23 (791)

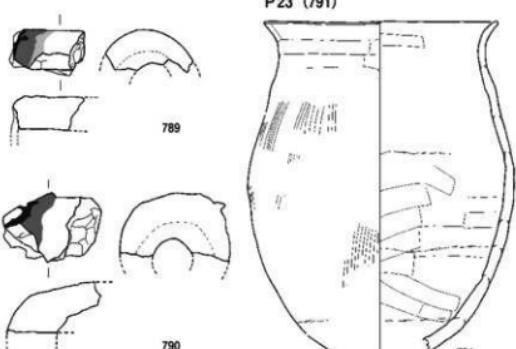
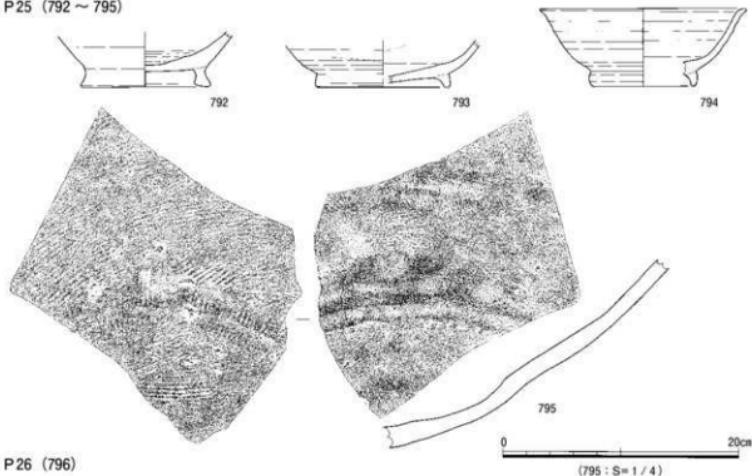
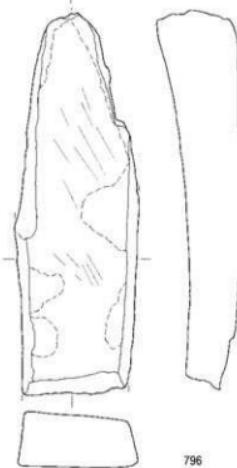


図172 出土遺物実測図（古代：遺構38）

P 25 (792 ~ 795)



P 26 (796)



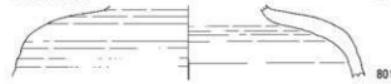
P 40 (797)



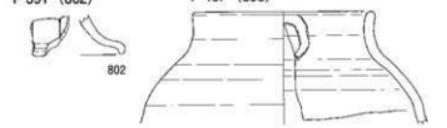
P 95 (798)



P 607 (801)



P 391 (802)



P 467 (803)

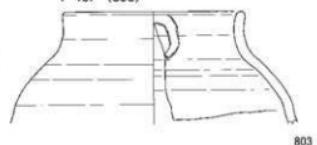


図173 出土遺物実測図（古代：遺構39）

包含層 (804 ~ 1085)

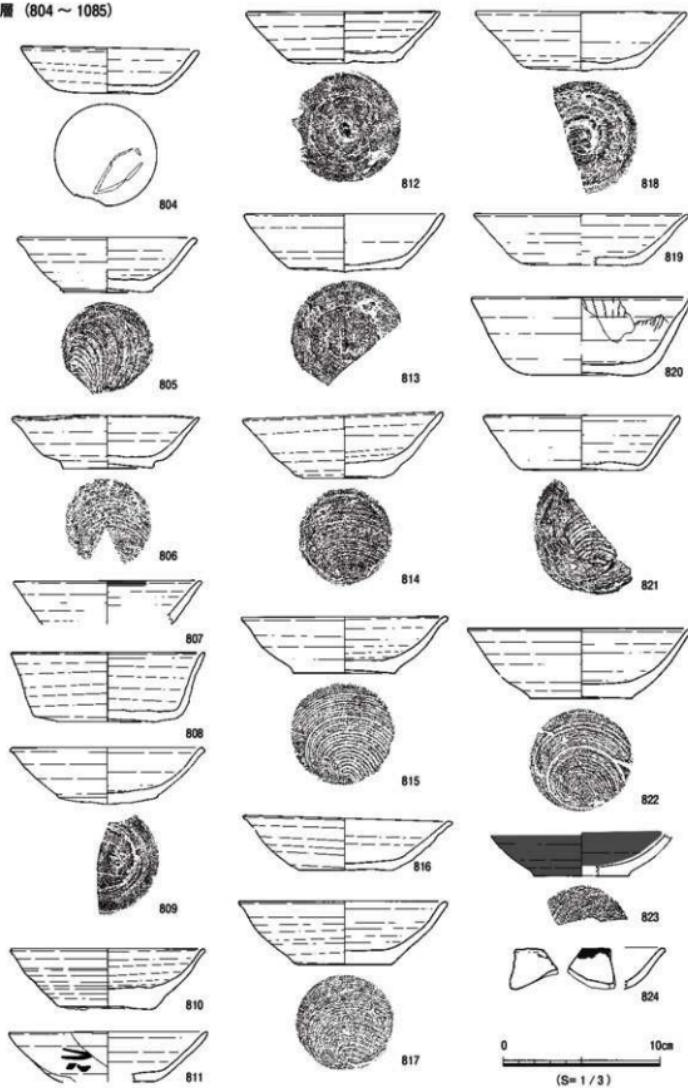


図174 出土遺物実測図（古代：包含層 1）

包含層 (804 ~ 1085)

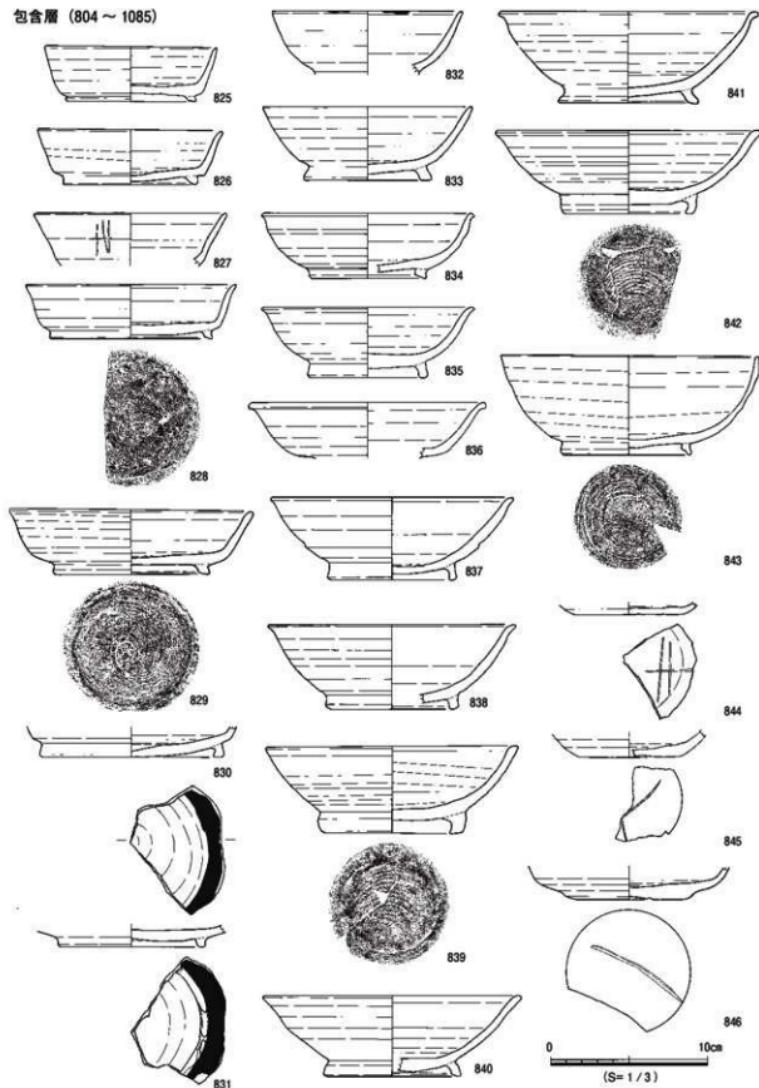


図175 出土遺物実測図（古代：包含層 2）

包含層 (804 ~ 1085)

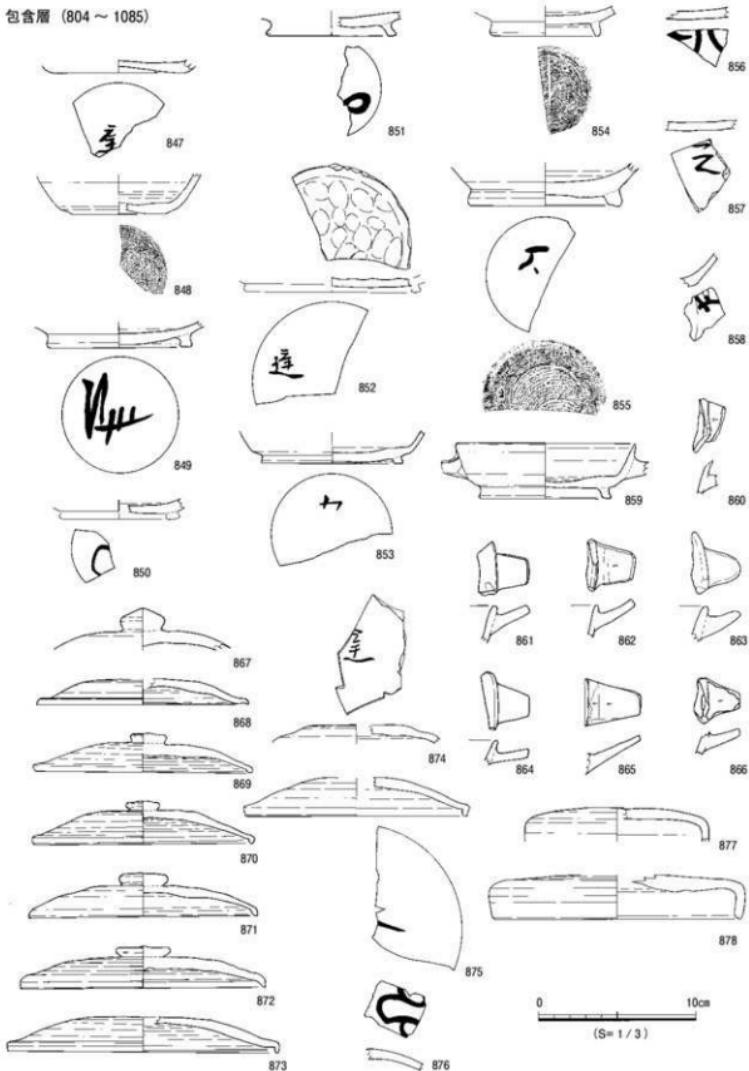


図176 出土遺物実測図（古代：包含層 3）

包含層 (804 ~ 1085)

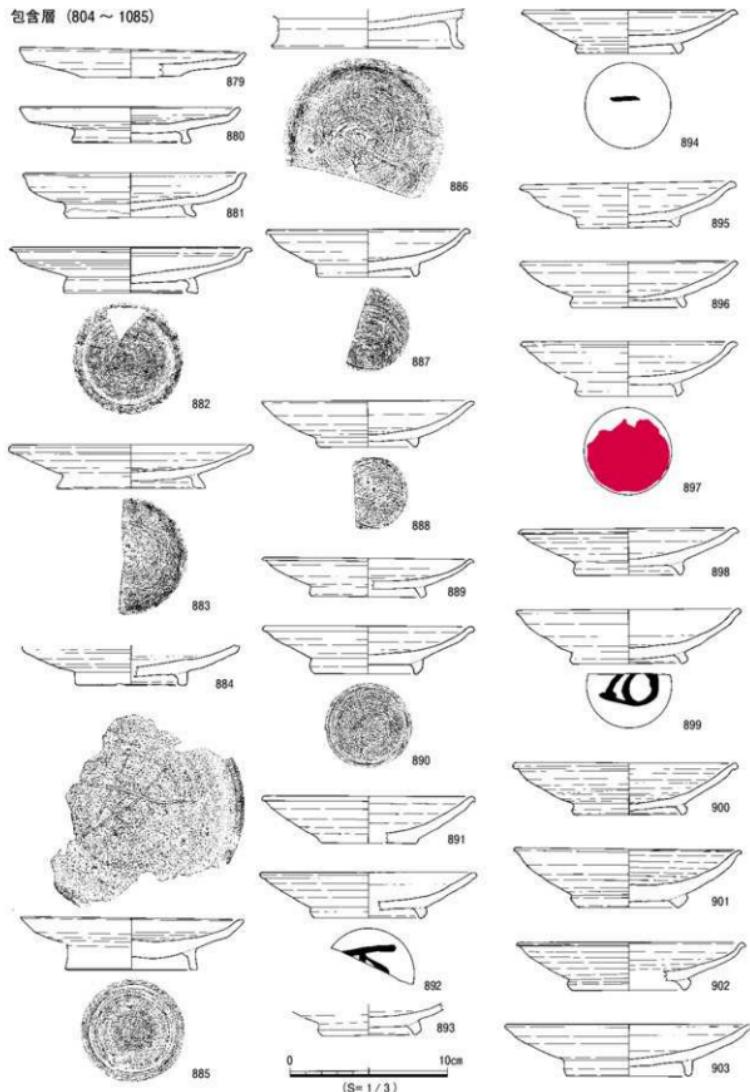


図177 出土遺物実測図（古代：包含層4）

包含層 (804 ~ 1085)

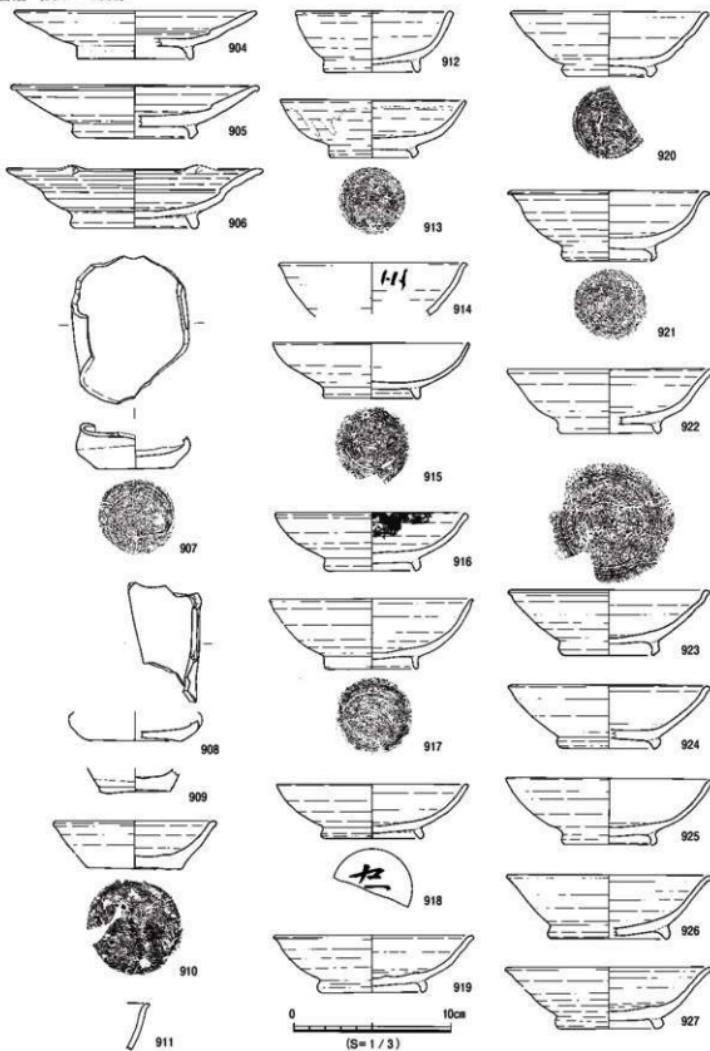


図178 出土遺物実測図（古代：包含層 5）

包含層 (804 ~ 1085)

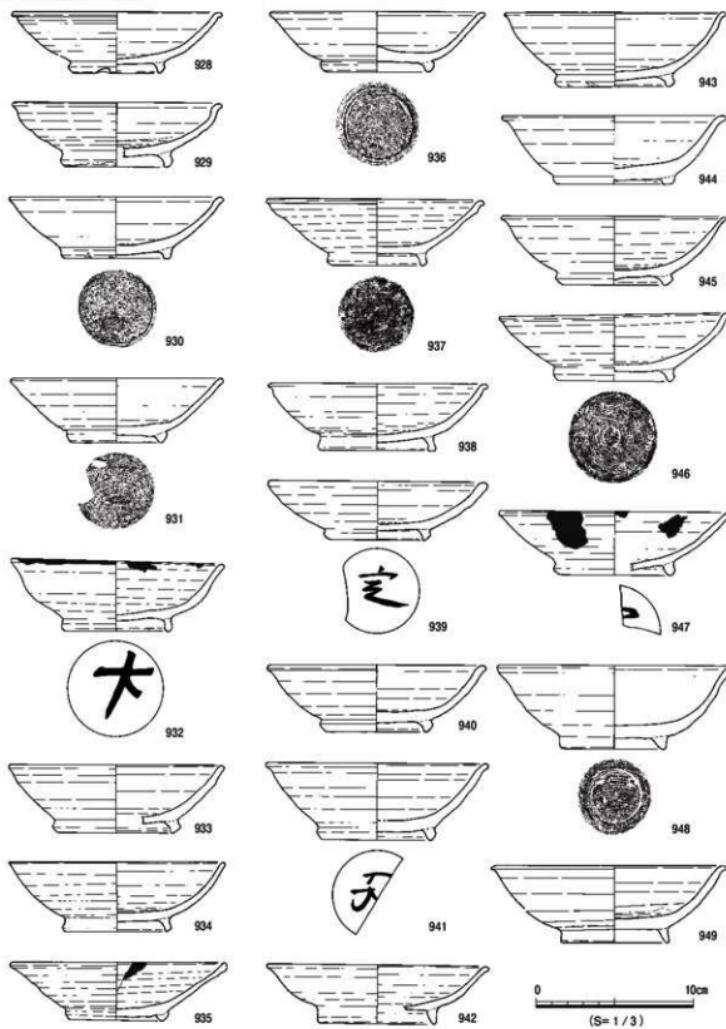


図179 出土遺物実測図（古代：包含層 6）

包含層 (804 ~ 1085)

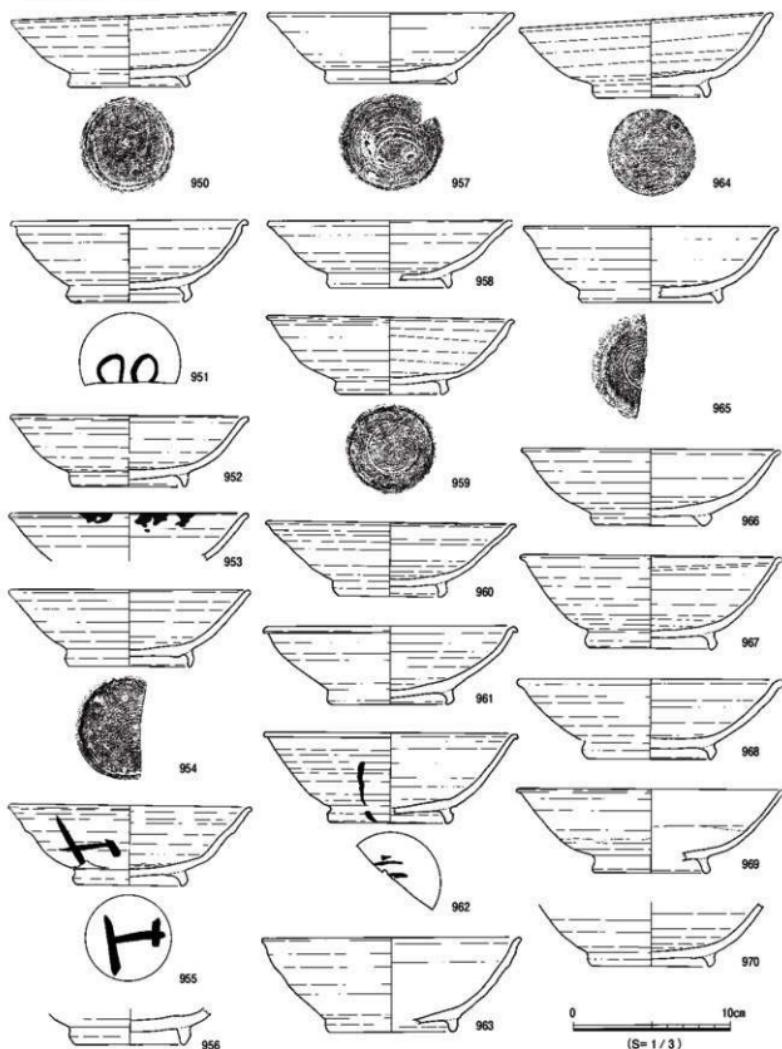


図180 出土遺物実測図（古代：包含層7）

包含層 (804 ~ 1085)

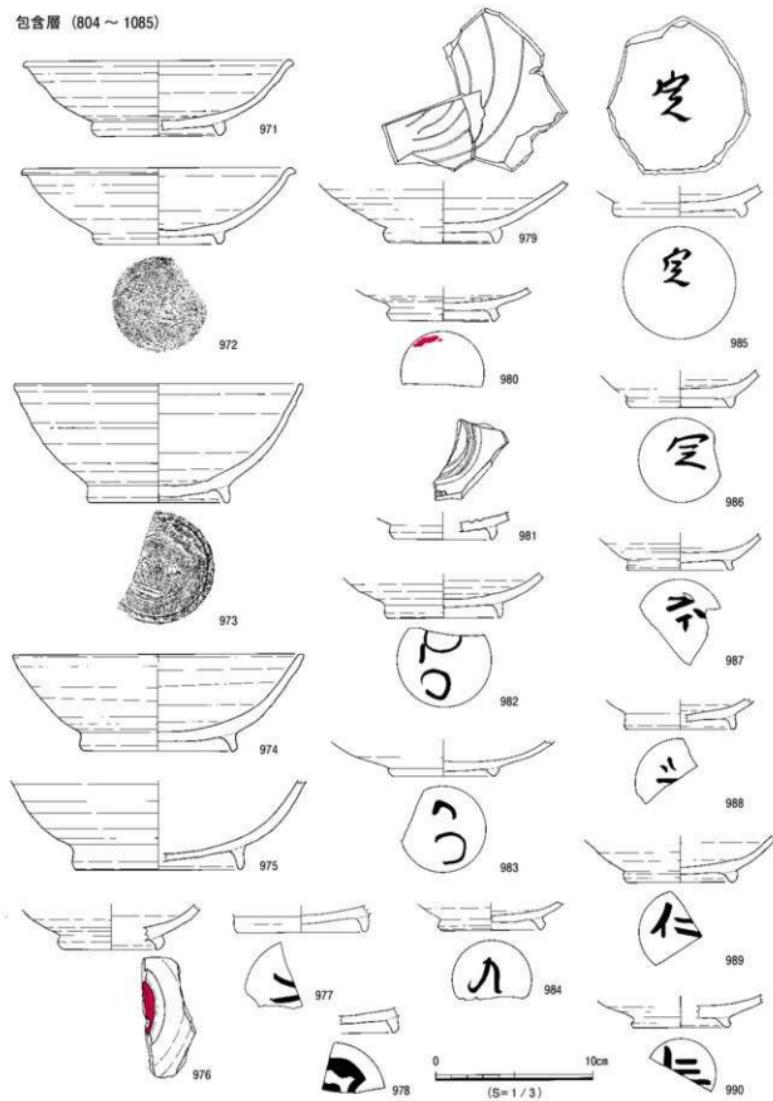


図181 出土遺物実測図（古代：包含層 8）

包含層 (804 ~ 1085)

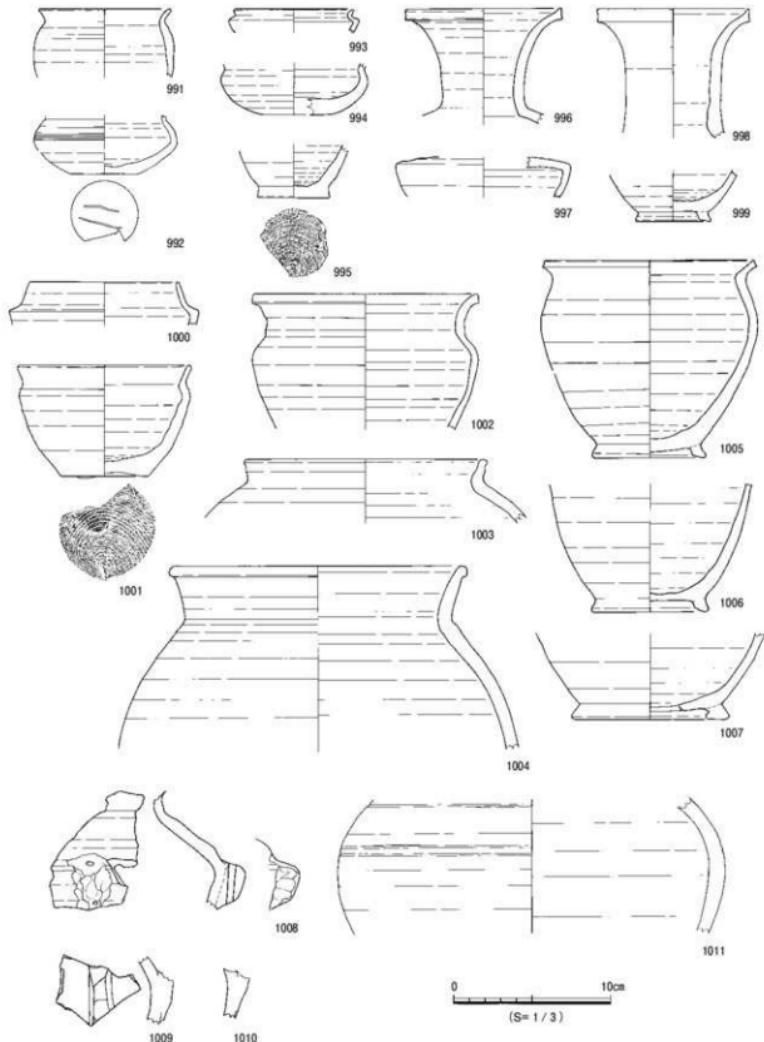


図182 出土遺物実測図（古代：包含層 9）

包含層 (804 ~ 1085)

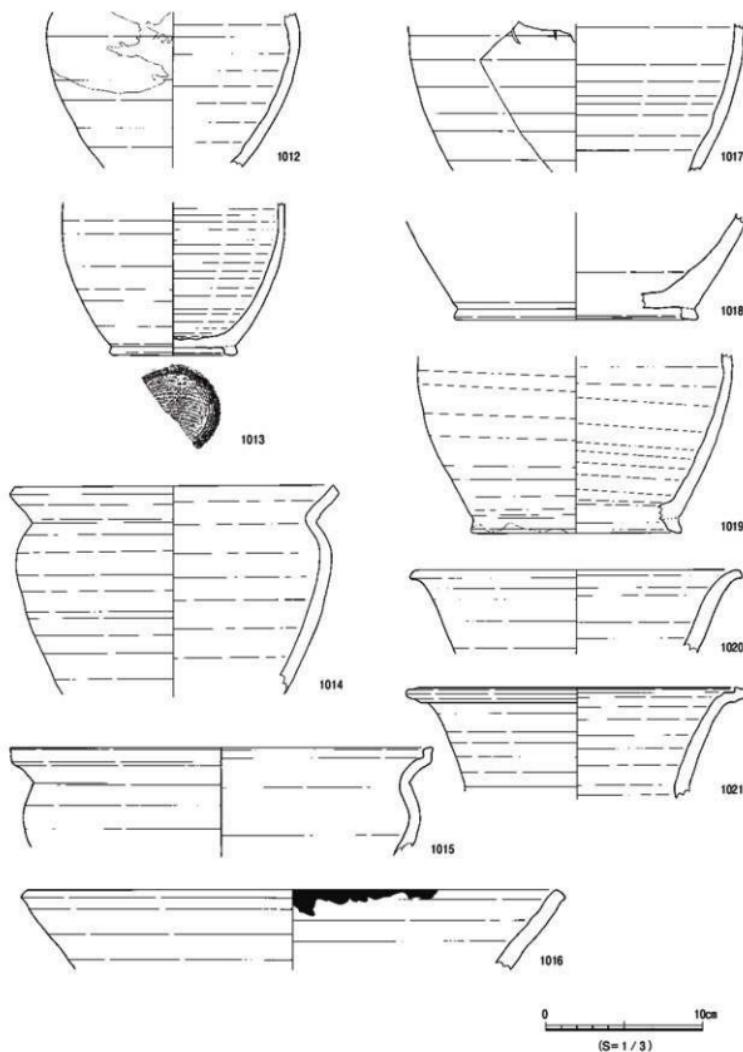


図183 出土遺物実測図（古代：包含層10）

包含層 (804 ~ 1085)

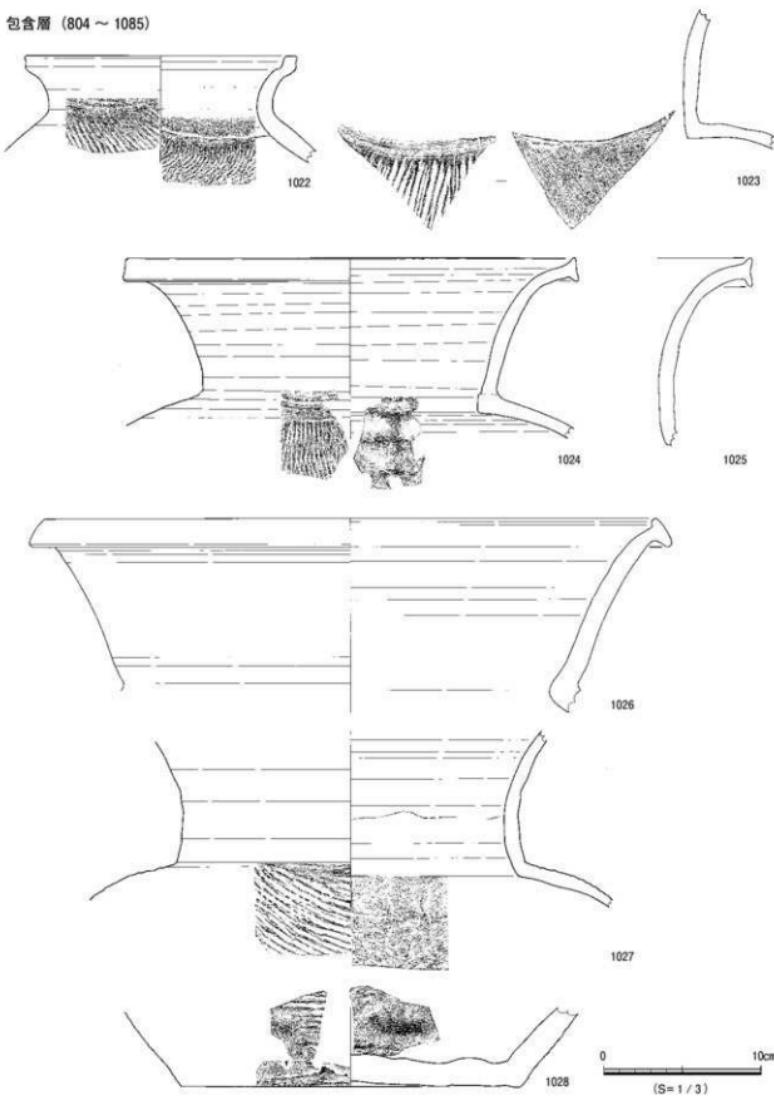


図184 出土遺物実測図（古代：包含層11）

包含層 (804 ~ 1085)

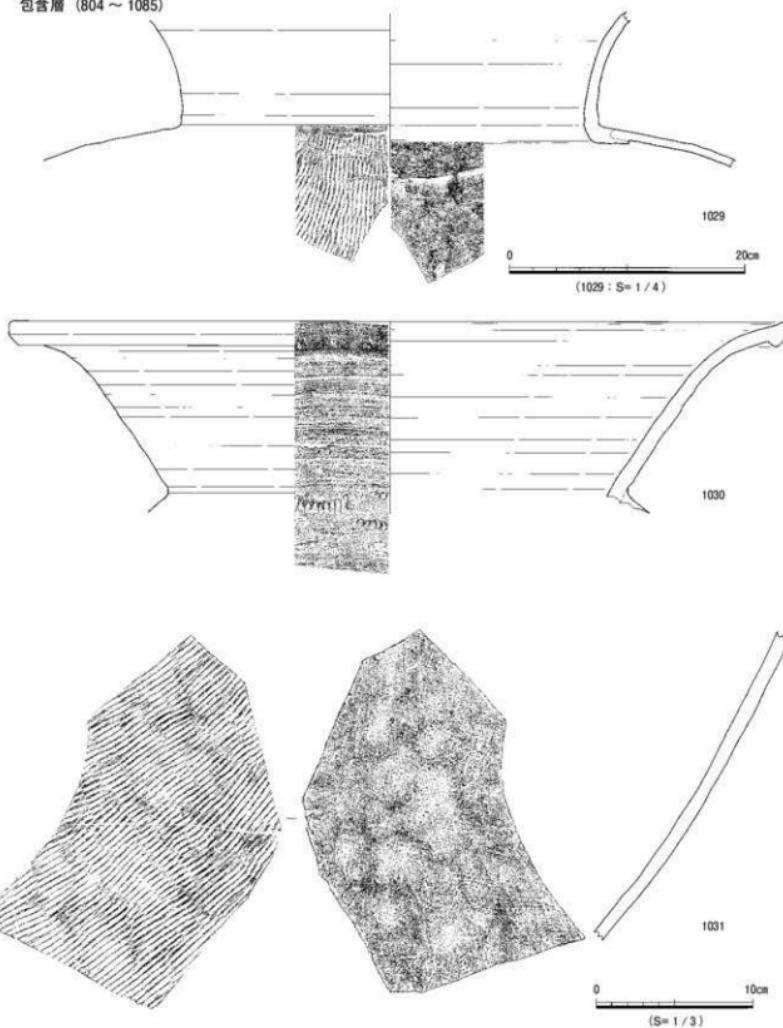


図185 出土遺物実測図（古代：包含層12）

包含層 (804～1085)

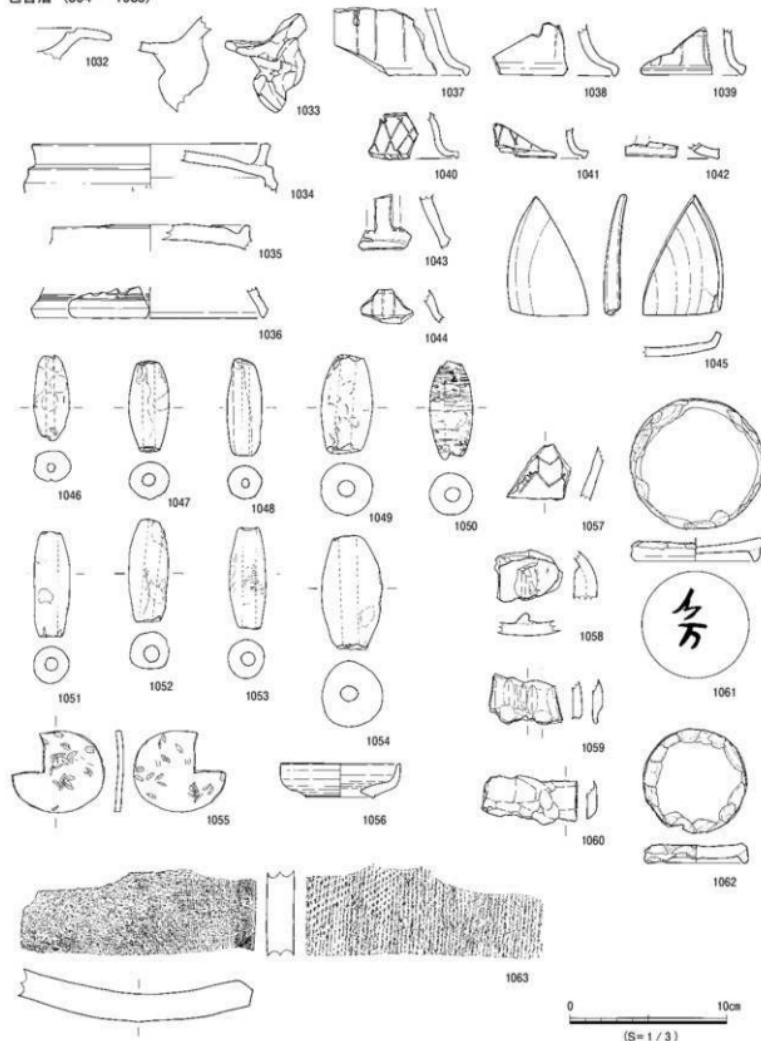


図186 出土遺物実測図（古代：包含層13）

包含層 (804 ~ 1085)

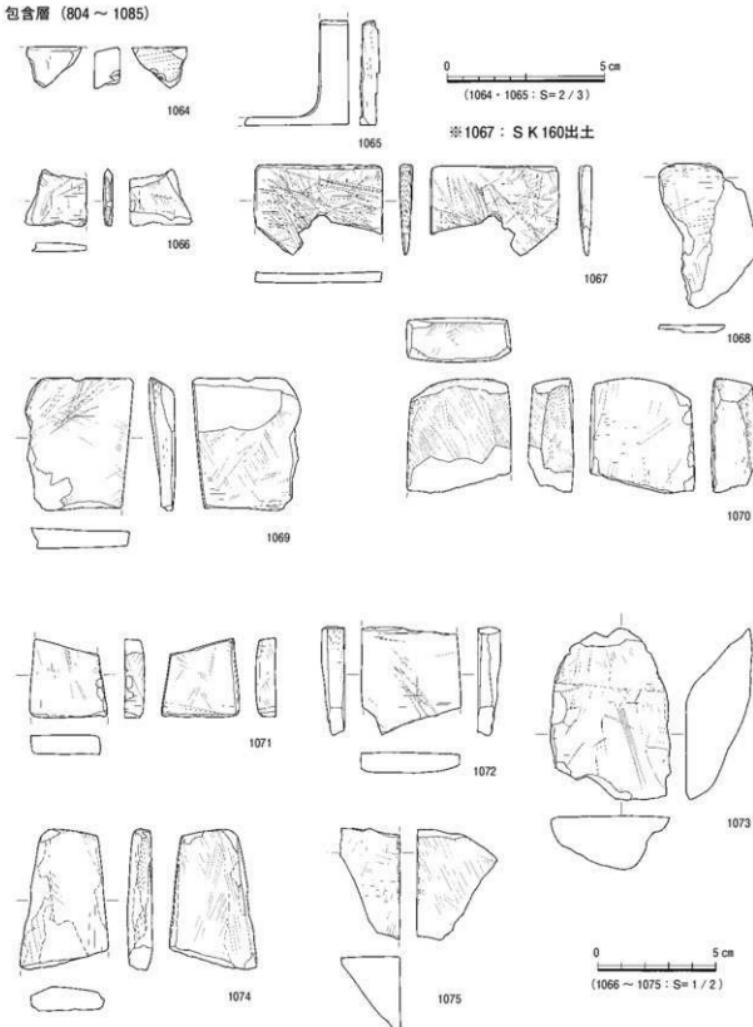


図187 出土遺物実測図（古代：包含層14）

包含層 (804 ~ 1085) ※1081: S F 26 • 1082: P 440出土

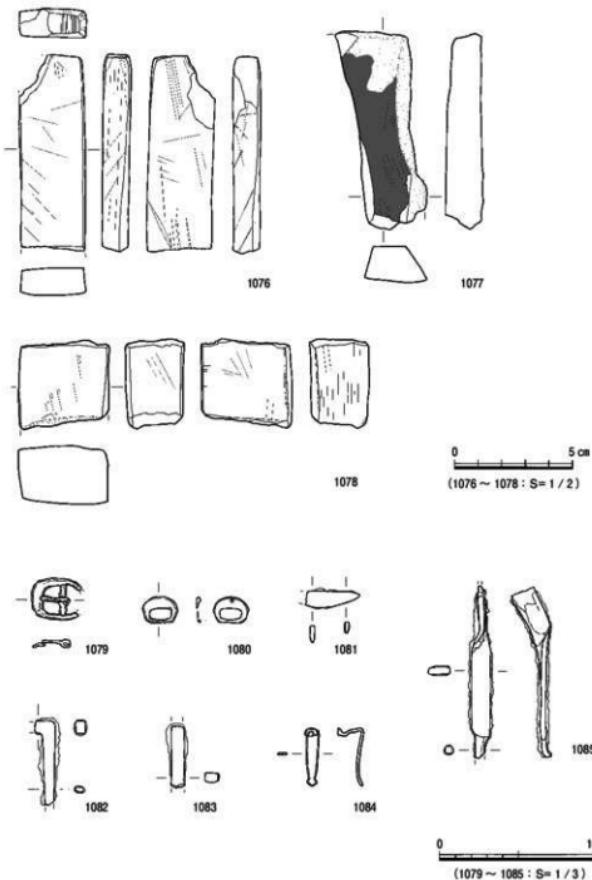


図188 出土遺物実測図（古代：包含層15）

第6節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として竪穴住居跡12軒、土坑3基を検出した。大半の遺構は第1調査面で確認したが、第2調査面まで掘削した後に確認できた遺構もある。本節では、第2調査面で確認した遺構については、各遺構の「検出状況」にて明記し、それ以外は第1調査面の調査を行った際にIV層あるいはV層上面で検出した遺構を示す。

古墳時代の主な遺構の分布は図189のとおりである。調査区中央付近の分布は希薄で、東西の調査地点において竪穴住居跡などを確認した。以下、遺構種別毎に、検出した遺構と出土遺物について記載する。

1 竪穴住居跡

S B46（遺構：図190、遺構全体図分割図28、遺物：図213）

検出状況 ス17グリッドの、山裾から続く平坦面上で検出した。第1調査面の段階から、古代遺構の床面などでその存在を確認していたが、プランを確定したのはⅢ層を取り除いた第2調査面である。遺構の西側でS B47に切られている。平面形は方形である。

堆積状況 水平堆積であり、特に目立った特徴は見られない。

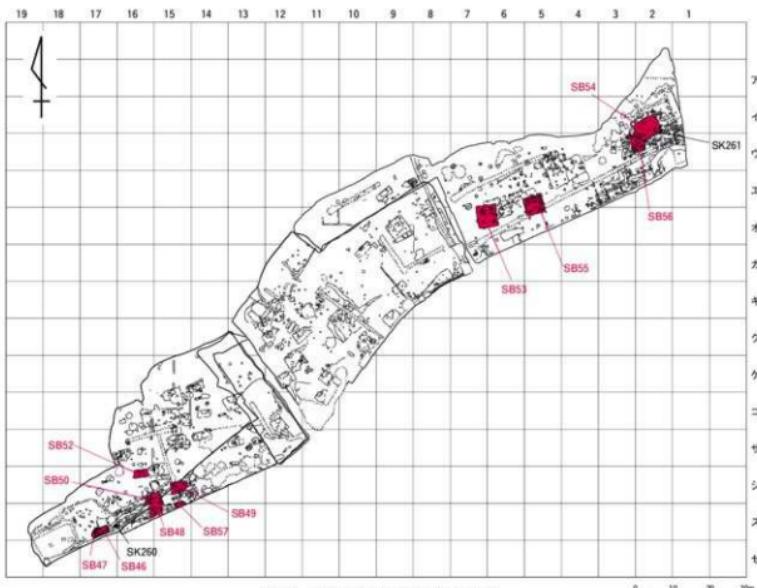


図189 古墳時代の主要遺構分布図

床面状況 残存する部分はほぼ水平である。床面には硬化面や粘床は確認できなかった。

炉跡 残存する床面上では検出できなかった。

主柱穴 残存する床面上で5基のピットを検出した。ピットの規模からP3・4は主柱穴の可能性

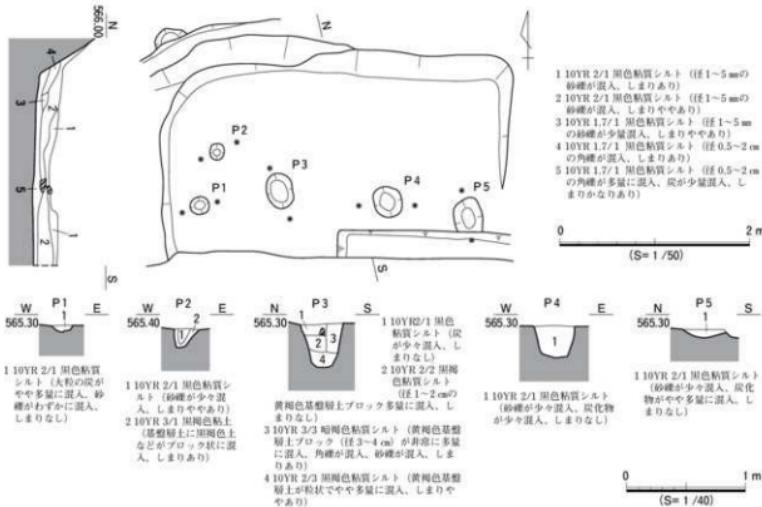


図190 S B46構造図

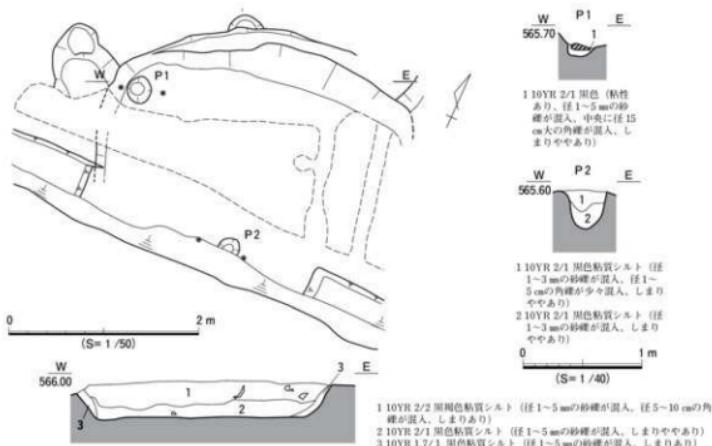


図191 S B47構造図

が高い。

出土遺物 合計458点が出土し、そのうち13点を図示した。1086は土師器楕形高環であり、口縁部は外反し、端部は尖る。器面には極めて細かい横方向のミガキが施されている。1088は土師器有段高環であり、脚柱部の残り具合から、脚裾部は大きく開く器形になると思われる。1089は屈折脚を有する高環であり、脚裾部は内湾する。1091は土師器二重口縁壺としたが、胎土は1086などと同様に赤褐色を呈する。1096は土師器甕であり、体部外面の調整はタタキとして図示したが、粗いハケの可能性もある。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古墳3期と考えられる。

S B47 (造構: 図191、造構全体図分割図28、遺物: 図213)

検出状況 S17グリッドの、山裾から続く平坦面上で検出した。方形の平面形と考えられるが、豊穴住居跡内の埋土や床面の一部は、重複した古代の造構や排水溝の掘削、検出の誤認による掘りすぎなどで、ほとんど記録を残すことができなかった。

堆積状況 壁面付近にて三角堆積を確認したが、それ以外は基本的に水平堆積である。なお、埋土中の1層には長さ5~10cmの角礫があったが、複雑な堆積や目立った特徴も見られないので、自然による埋没と考えられる。

床面状況 残存する部分はほぼ水平であり、貼床は確認できなかった。

炉跡 残存する床面上では検出できなかった。

主柱穴 残存する床面上で2基のピットを検出した。その配置から、主柱穴ではないと考えられる。

出土遺物 合計115点が出土し、そのうち4点を図示した。1102は屈折脚を有する土師器高環であり、脚部の低さから、環部が楕形を呈すると思われる。1099・1101は土師器甕であり、1099は体部から口縁部外面にのみ煤が付着し、外面のハケの始まりは緩やかな弧状を呈する。1101の底部内面はわずかに盛り上がり、体部に比べて底部の胎土には砂礫が多く含まれる。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古墳3期と考えられる。

S B48 (造構: 図192・193、造構全体図分割図28、遺物: 図214・215)

検出状況 S15~S16グリッドの、山側から続く傾斜が緩やかに変換した斜面上で検出した。S B 50・52を切る。

堆積状況 床面までの埋土はほぼ単層であり、特に目立った特徴はない。テラス状の部分は別の豊穴造構を誤認した可能性があり、断面観察において分層することができた。なお、埋土中に長さ20~30cmの角礫が複数出土したが、これは豊穴住居跡廃絶後に混入したものと考える。

床面状況 床面には硬化した貼床と思われる層があり、ピットや土坑、地床炉はその上面で検出した。その下層には掘形の充填土があり、他造構と比べるとかなり深い掘形が作られている。

炉跡 床面中央のやや東寄りで、地床炉跡を検出した。基盤層自体には被熱痕はないが、焼礫や多量の炭が見られ、この範囲内の上面で被熱した柱状の角礫が出土したため、石圓炉であった可能性がある。また、この炉跡の南側には同じく柱状の円礫が2個据えられていたが、その礫にはそれほど顕著な被熱は確認できなかった。

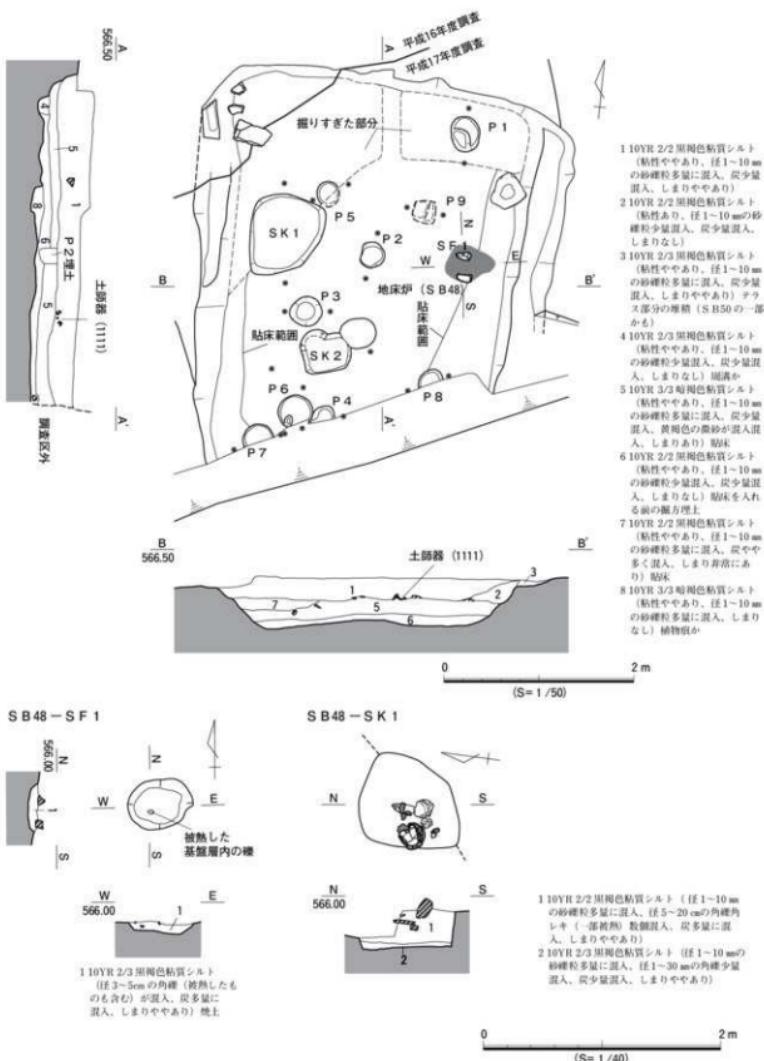


図192 S B 48遺構図 (1)

床面直上遺物・壕出土状況図

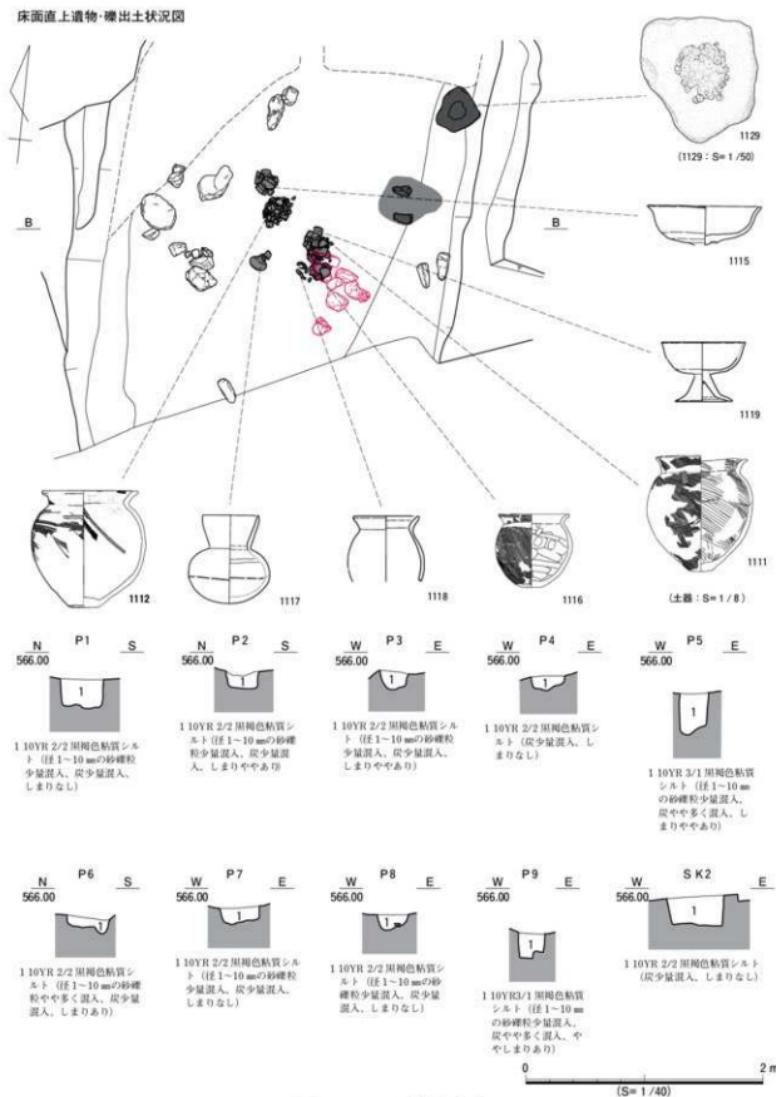


図193 S B48構造図 (2)

主柱穴 床面上から9基のピットを検出した。このうちP1・7が主柱穴になる可能性がある。P1は掘形の底面で検出したが、最初の掘削で下げすぎた部分で検出しており、本来は貼床上面の遺構と考える。北西隅は掘形底面を下げてしまったため、主柱穴を検出することができなかった。

付属遺構 床面の中央西寄りにて、直径約1mの土坑(SK1)を検出した。この土坑からは、ほぼ完形の土師器甕(1113・1114)が角礫とともに出土した。土師器甕・角礫とともに土坑底面から浮いており、甕の上の角礫の重みによって甕の一部が押し潰されていた。この他、地床卯跡の北側で、中央に敲打痕のある扁平な台石(1129)が据えられていた。

遺物出土状況 本遺構の床面直上から、土師器甕4個体、土師器高环2個体、土師器壺1個体、合計7個体が中央付近でまとまって出土した。それらは、北側に高环(1115)と甕(1112)、その南側に直口壺(1117)、その東側に高环(1119)と甕3個体(1111・1116・1118)が位置する。いずれも土圧で潰れたような状態であったことから、何らかの祭祀行為に伴う可能性がある。なお、埋土中の出土遺物には古墳1期の遺物が目立つ。

出土遺物 合計1009点が出土し、そのうち21点を図示した。1111～1119・1129は床面直上及びSK1からの出土である。1111～1114・1116・1118は土師器甕である。1111は1112とほぼ同じ器形を呈し、体部外面下方までハケ調整が施されている。1112は体部外面上方にのみハケ調整が施され、頸部は直立から外反気味で、口縁部は屈曲する。底部は平底で、その器壁は厚い。1116は平底の小型甕であり、口縁端部が面取りされている。1115・1119は土師器高环である。1115は環底面の面積が広く、環部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。1119は環部が楕円形を呈し、口縁部は外反する。環部と脚部の接合方法は、脚部上端側面に環部を作り足している。1117は土師器直口壺であり、底部の器壁が厚く、口縁部はわずかに内湾する。1129は石皿である。敲打面は一面で、その範囲は長さ約16cm、幅約14cm、深さ約5mmである。敲打部以外で顕著な磨面は確認できない。

1120～1128・1130・1131は埋土上層からの出土である。1120～1124・1127・1128は甕である。1124は口縁部外面に擬凹線があるものの、頸部内面の屈曲はみられない。一方、1120、1121のように口縁部外面の擬凹線と頸部内面の屈曲が見られない個体もある。1122・1127はS字甕であり、1122はS字甕B類の形態を残すC類、1127はB類である。1126は器台の口縁部として図示したが、脚部片である可能性もある。

所属時期 床面直上の出土遺物から、古墳3期と考えられる。

S B 49 (遺構: 図194・195、遺構全体図分割図番、遺物: 図213)

検出状況 シ15グリッドの、山側から続く傾斜が緩やかに変換した斜面上で検出した。掘形の南側はSV1に削平されて残存していない。

堆積状況 平成16年度の調査では、埋土中に多くの炭・焼土を確認したが、平成17年度の調査では埋土がほとんど残存していなかったためか、それほど炭・焼土は確認できなかった。炭化材も見られたことから本遺構は焼失家屋である可能性が高く、炭や炭化材直下で土師器がまとまって出土した。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。

炉跡 残存部分では確認できなかった。

主柱穴 床面上から複数のピットを検出したが、遺構の切り合い関係が複雑であるため、S B49の

床面で検出したもの（P 1・2・6）、S B37のカマド跡下で検出したもの（P 5・7・8）、

S B38に切られたもの（P 4）を図示した。このうちP 2が主柱穴の位置として適当である。

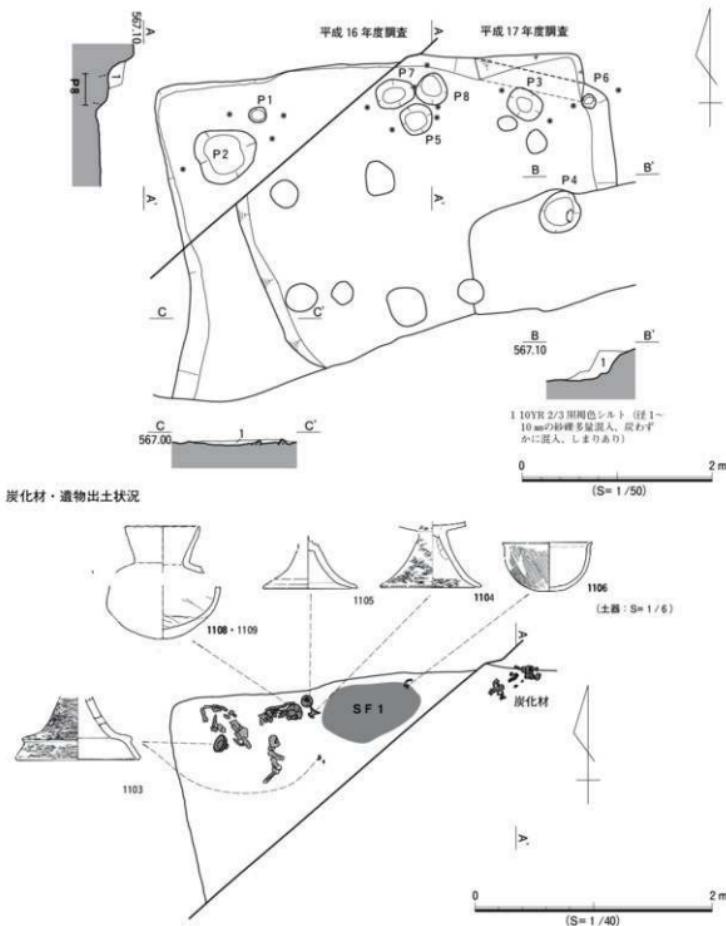


図194 S B49遺構図（1）

出土遺物 合計417点が出土し、そのうち8点を図示した。1103～1105は土師器高坏である。1103は1孔1組3穿孔の脚を有し、裾部と柱部の境に段を設ける。1104・1105の脚部はハの字状に開くが、穿孔がない。1106は土師器鉢であり、体部外面はハケ調整が施され、口縁部は外反する。1110は土師器甕である。口縁部外面に擬四線がわずかに残り、頸部外面は屈曲するものの、内面はなだらかである。

所属時期 床面直上の出土遺物から、古墳1期と考えられる。

S B 50 (遺構: 図196・197、遺構全体図分割図番、遺物: 図215)

検出状況 シ15～16グリッドの、山側から続く傾斜が緩やかに変換した斜面上で検出した。この遺構の周辺は南西方向に向かって地形が傾斜する。平成17年度にその南側を検出したが、S B 48によって遺構の南側が削平されており、掘形は残存していないかった。

床面状況 南北方向はほぼ水平であるが、東西方向は地形に合わせて緩やかに傾斜する。

堆積状況 遺構西側の埋土中にて炭化材や焼土を検出しており、その堆積状況は複雑であった。一方、東側ではほぼ水平堆積であったため、別遺構が存在した可能性もある。

炉跡 検出できなかった。

主柱穴 床面上から7基のピットを検出した。このうちP 1・3（あるいはP 4）が主柱穴の可能性がある。柱の据え直しがあったのかもしれない。

所属遺構 遺構掘形の西壁に沿って周壁溝を確認した。また西壁に接して底面の凹凸が顕著な土坑（SK 1）を検出した。

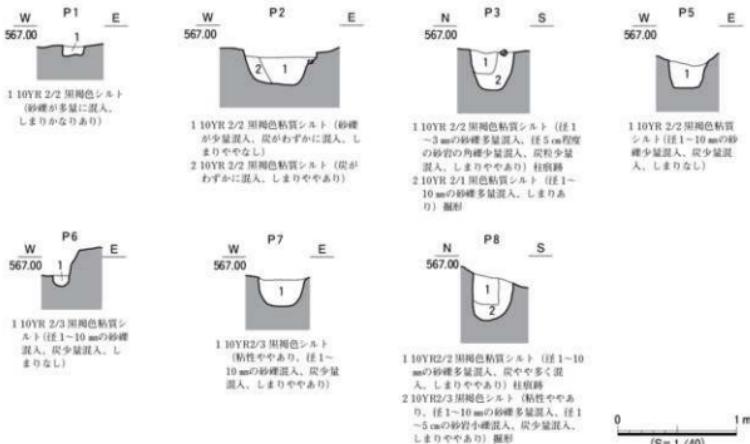
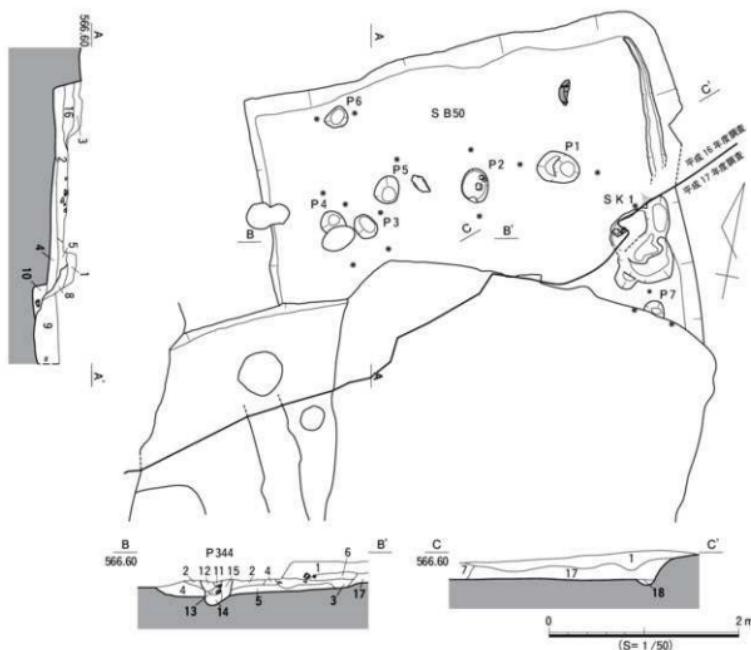


図195 S B 49遺構図（2）



1. 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト (砂礫・成が少量混入。しまりなし) 道路包含層土
2. 10YR 2/1 黑褐色粘質シルト (砂礫・成が多量に混入。しまりややあり)
3. 10YR 2/2 黑褐色シルト (砂礫が多量に混入。成が少量混入。しまりあり)
4. 10YR 2/1 黑褐色シルト (礫礫が多量に混入。成が少量混入。しまりあり) 崩床か
5. 10YR 1.7/1 黑褐色粘質シルト (砂礫がわずかに混入。しまりなし)
6. 10YR 1.7/1 黑褐色粘質シルト (成が少量混入。砂礫が少量混入。しまりなし)
7. 5・6 層に割離する層
8. 10YR 2/2 黑褐色シルト (砂礫が少量混入。しまりややなし) SB48 理上
9. 10YR 2/1 黑褐色粘質シルト (砂礫が多量に混入。成が少量混入。しまりややあり)
- S B48 理上
10. 10YR 2/1 黑褐色粘質シルト (砂礫・成が少量混入。しまりややあり) SB51 理上
11. 10YR 2/2 黑褐色シルト (しまりなし)
12. 10YR 2/2 黑褐色シルト (砂礫・成が少量混入。しまりややあり)
13. 10YR 2/2 黑褐色シルト (砂礫・成が少量混入。黄褐色ブロックが混入。しまりなし)
14. 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト (砂礫が少量混入。しまりややあり)
15. 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト (しまりなし)
16. 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト (60%砂・小礫が混入。燒土が混入。しまりややあり)
17. 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト (60%砂・成が少量混入。しまりややあり)
18. 10YR 2/3 黑褐色シルト (径1 cm程度の砂礫がまばらに混入。しまりややなし) 崩壊層 (SD 1 理上)

※11~15 P344 理上 (11~15 柱痕跡, 15 斷面)

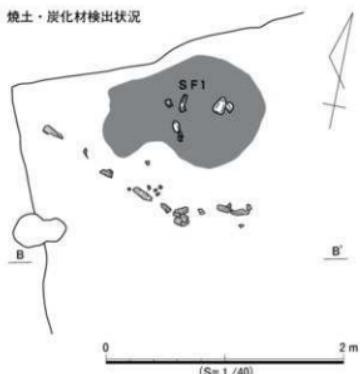


図196 S B 50造構図 (1)

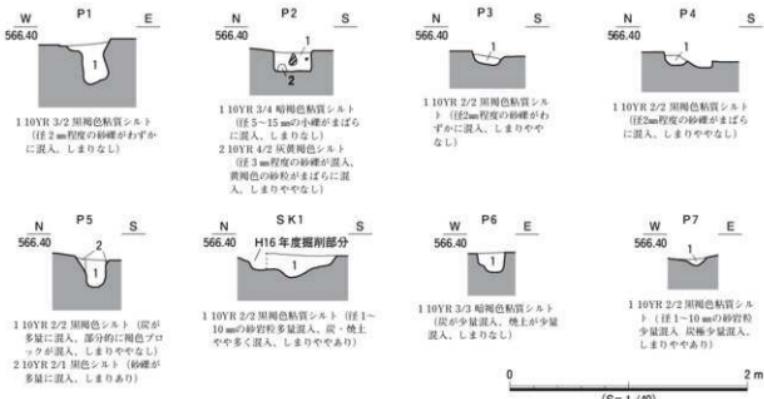


図197 S B50遺構図（2）

出土遺物 合計185点が出土し、そのうち3点を図示した。1134は土師器高壺であり、遺構の北東隅に近い床面から出土した。全面赤彩され、壺部外面の一部に黒斑が残る。また、口縁端部は面取りされ、その中央はわずかに窪む。1135は土師器甕であり、口縁部外面に掘凹線が施され、頸部内外面ともに屈曲する。1136は土師器壺であり、口縁部下面下方に掘凹線がわずかに残る。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古墳1期と考えられる。

S B52（遺構：図198、遺構全体図分割図㊾）

検出状況 シ16グリッドの、山側からの急傾斜が緩斜面に変わる変換点付近で検出した。遺構の上面はS K126に切られており、南側は掘形の段がわずかに残存していたが、本来の竪穴住居跡の壁ではない。

堆積状況 S K126に切られているため、埋土は非常に薄い。ほぼ単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 傾斜に合わせるように、南西に向かって傾斜する。

炉跡 掘形北壁に近い床面上で検出した。被熱した痕跡はなかったが、コの字型に配置された長楕円の円錐と被熱変色した砂粒などから炉跡と判断した。コの字の開口部は、竪穴住居の奥に当たると思われる北側を向いている。また炉石は埋土上に載っており、その掘形は確認できなかった。

主柱穴 床面で検出した4基のビットのいずれかが主柱穴となると思われるが、規模や位置が不規則であるため、推定しがたい。

出土遺物 合計5点が出土したが、いずれも細片であるため図示していない。

所属時期 出土遺物から古墳時代と考えられるが、時期の細分はできない。

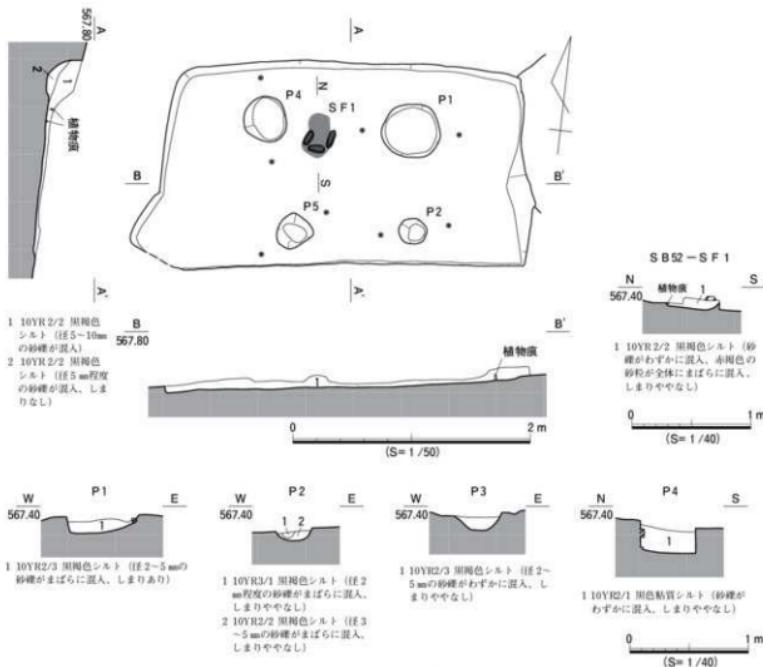


図198 SB 52造構図

S B 53 (造構: 図199・200、造構全体図分割図⑧、遺物: 図215)

検出状況 エ6～オ7グリッドの緩斜面上で検出した。周辺に存在する造構のすべてに切られているが、掘形が深いため東側の一部を除いて壁面が残存している。今回の調査で検出した竪穴住跡の中で、最も規模が大きい掘形をもつ。

堆積状況 単層であり、特に目立った特徴はない。

床面状況 床面のほぼ中央において、南北方向に細長い硬化面を検出した。断面では床面からやや盛り上がった状況が観察され、部分的に黄褐色粘土が混入することから貼床と判断した。

カマド跡 造構掘形の北壁に接して検出した。上面がSK297によって削平されていたため残存状況が悪く、火床・袖部など明確な構造は観察できなかった。焼土が混入した堆積層の除去後は浅い土坑状になったが、袖石の掘形は検出できなかった。煙道部は、掘形外へ若干の張り出しが見られる。

主柱穴 床面上からは11基のピットを検出した。このうちP5・6・9・10（若しくはP11）が主柱穴と考えられる。いずれも2段の掘り込みがあり、柱痕跡を確認した。

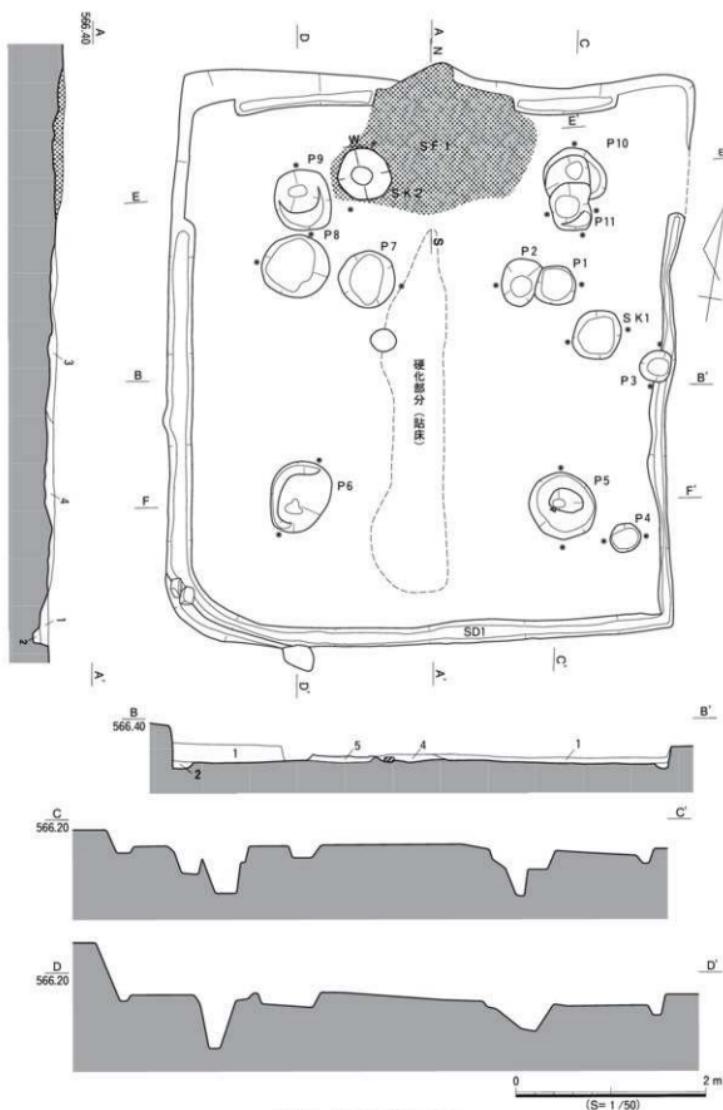
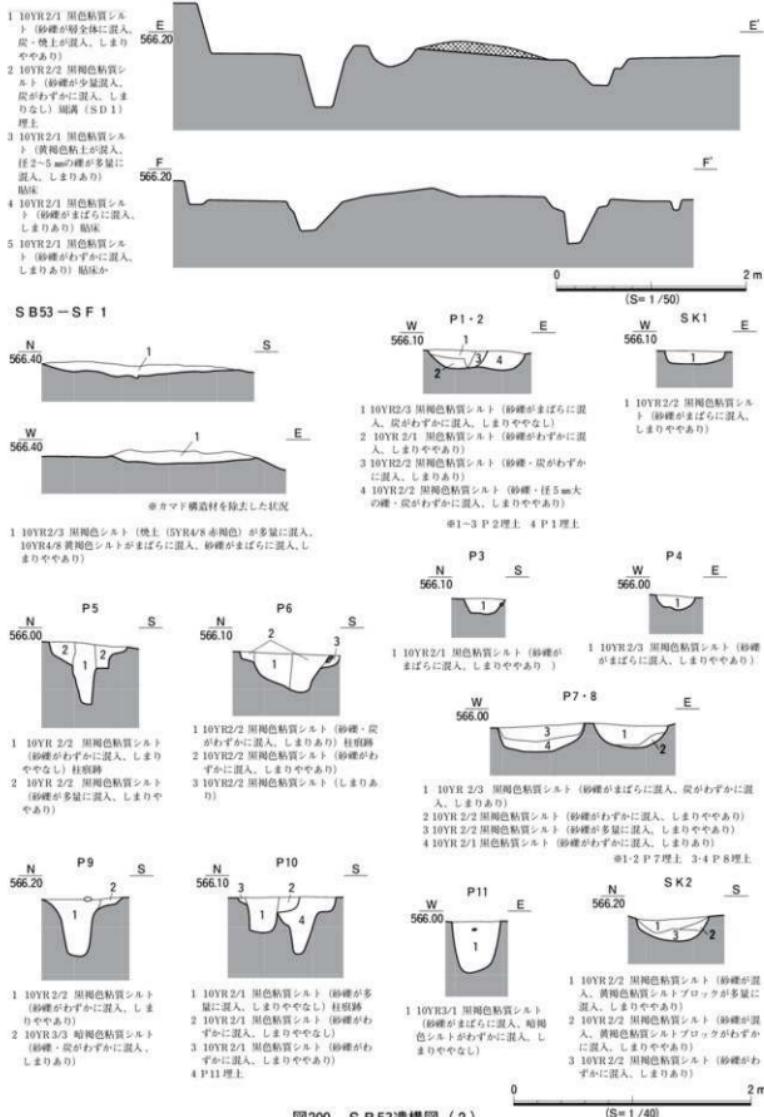


図199 S B 53遺構図 (1)



付属遺構 挖形の北東・北西隅を除いて周壁溝がめぐる。

出土遺物 合計76点が出土し、そのうち12点を図示した。1140は須恵器高环であり、脚部には三方間に長方形の透かし穴がある。环部外面中程には、一条の浅い窪みがあり、接合痕のように見える。1142は須恵器壺である。肩部の段はシャープで、頸部は内湾し、口縁部は丸く仕上げられている。1147・1148は土師器高环である。1147は脚部外面に縱方向のハケ調整が施され、环部との接合部までハケが確認できる。1148は胎土中の長石・石英の含有率が高い。

所属時期 埋土出土の須恵器から、古墳4期と考えられる。

S B 54 (遺構: 図201～204、遺構全体図分割図②、遺物: 図216・217)

検出状況 イ2～ウ3グリッドの緩斜面上で検出した。この遺構がある周辺は宅地があったため、多くの遺構が削平や搅乱による影響を受けていたが、本遺構は掘形が非常に深いため、ほとんど原形を留めていた。

堆積状況 壁際に自然堆積層があるが、その他の層は人為的な埋め戻し土の可能性が高い。なお、2・3層、5・6層は別の竪穴状遺構である可能性もある。

床面状況 床面はほぼ水平である。遺構の掘形は、その周縁を一段深く溝状に掘削しており、明黄褐色シルト（基盤層となる土）に黒褐色土ブロックが混入する土で埋め戻されていた。なお、カマド跡の下にはこのような充填土は見られず、充填土上面は若干硬化していた（20層）。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド構造材の広がりはほとんど無く、カマドに関する堆積は原位置を留めていると思われる。カマド跡内の埋土中には被熱した長楕円礫が見られ、焚き口の手前には柱状の角礫が見られた。これらはカマドの横架材として使われた可能性がある。焚き口付近の袖石は露出しており、その上に長楕円礫を置いた可能性がある。火床はこの袖石付近にあり、その上に焼土が堆積していた（8層）。燃焼室内は一部袖石が露出しており、袖石が燃焼室の壁を兼ねていた可能性がある。煙道部は天井部が一部残存しており、その内側の掘形表面に被熱が見られた。この煙出しは掘形の上端に達しておらず、掘形外への煙道部の張り出しあらわさない。この状況でカマドを使用すれば、室内に煙が充満すると思われ、煙の排出がどのように行われていたか疑問が残る。上屋の構造を考える上で重要な資料と思われる。袖部の被覆粘土下には袖石が完存しており、溝状の袖石の掘形から、S B 30とほぼ同じ工法でカマドを構築したと思われる。なお、カマド跡の焚き口手前には、浅い土坑がある。

主柱穴 床面上から13基のピットを確認した。このうちP 3・5・9・10が主柱穴と考えられる。P 5はやや掘形が大きく、P 10は柱の据え直しが行われた可能性がある。

付属遺構 本遺構からは、鉄滓や繩の羽口がまとまって出土している。出土位置も遺構の南半分に限定されており、意図的に投棄された可能性が高い。S B 54の埋土掘削中に2箇所で焼土を確認した。

S F 27はS B 54のほぼ中央を掘削中に確認したもので、黄褐色粘土の敷土と焼土を2箇所検出した。粘土敷きの中央には立柱石のように立てられた角礫があり、その周間に土師器甕（1164）が散乱していた。S F 26はS F 27よりわずかに深い位置で検出した。平面的な位置

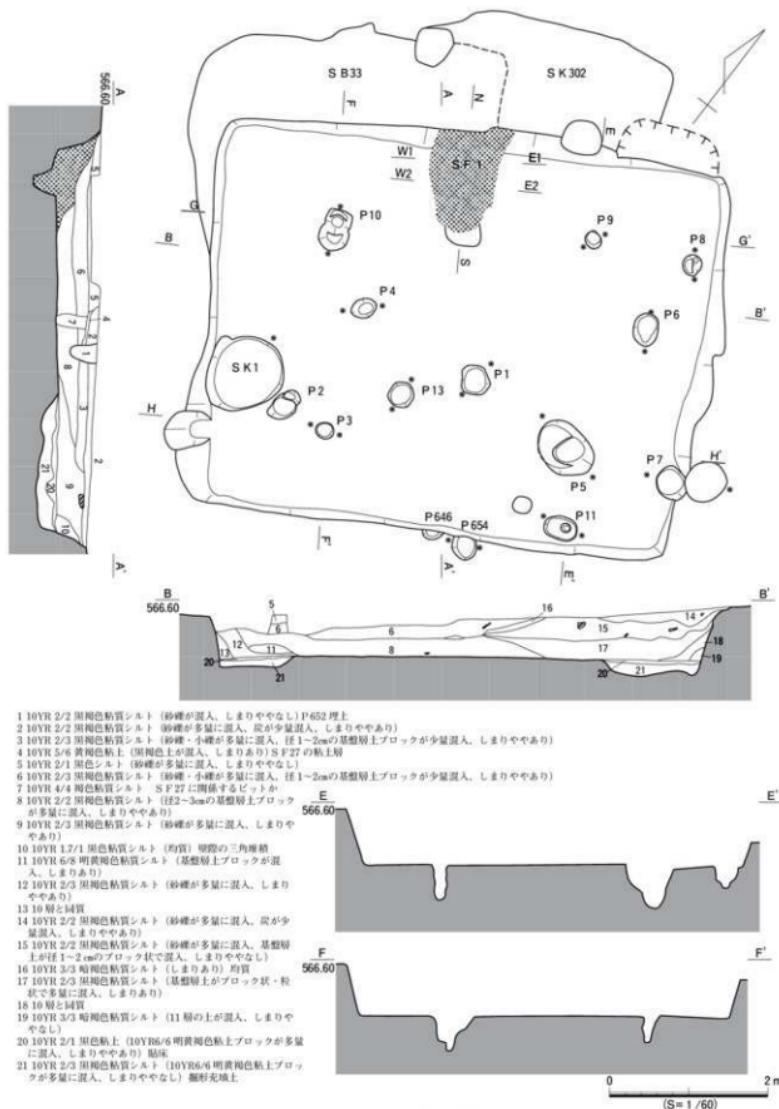
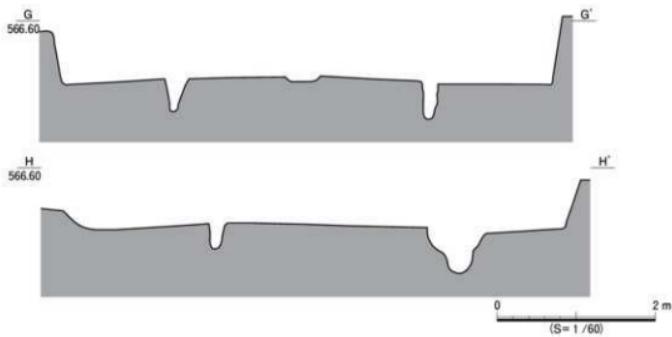


図201 S B54造構図(1)



S B54 - S F 1

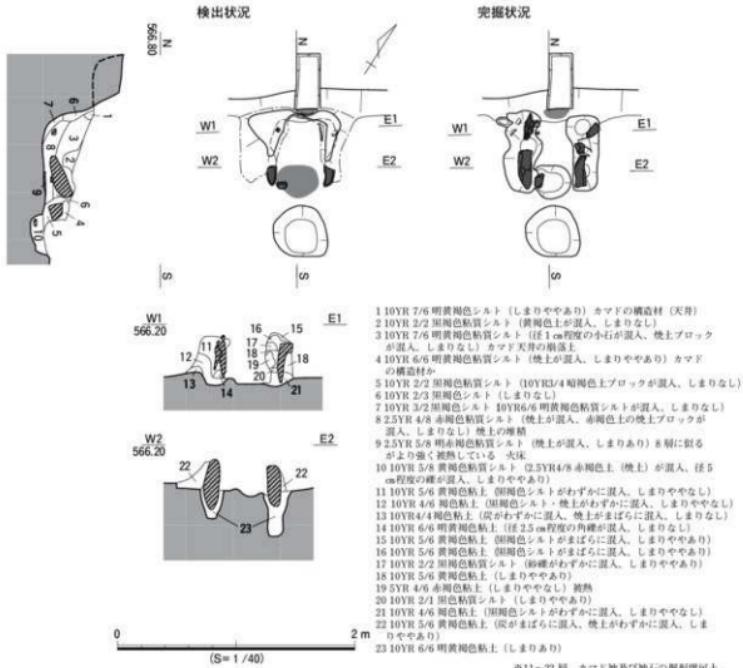
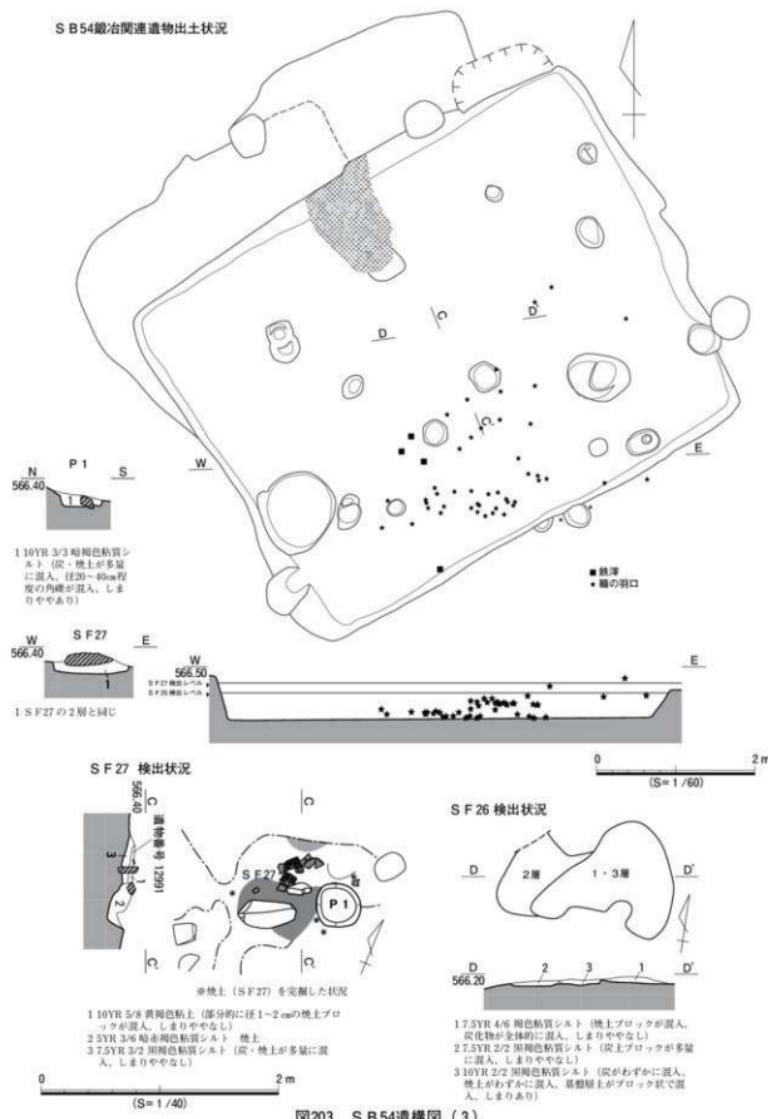


図202 S B54遺構図（2）



はほぼ同じである。強い被熱は見られなかったが、明らかに周囲の埋土と異なり、炭と焼土が多く堆積していた。検出レベルと土層の関係を見ると、S F 27を検出した場所・高さには土層断面図A-A'の2・3層があり、この堆積の北端に接していることが分かる。立てられた角礫を立柱石とすれば、焼土はちょうど火床の位置にあたり、2・3層の堆積が上面で検出できなかった竪穴住居跡に伴う遺構と考えができる。

一方、S F 26は土層断面図A-A'の8層上面あるいは8層中に当たる。鍛冶関連遺物の大半は、S F 26より低い標高から出土しているが、土層断面図B-B'の17層に見られるように8層が先行して埋没した埋土であり、その周辺が埋まっていた可能性も考えられる。つまり、埋没途中のS B 54内にS F 26が築かれ、その南側に鉄滓が廃棄されたとすれば、鍛冶関連遺物が集積した説明が可能となる。S B 54の層位的調査が十分でないことや、S F 26が鍛冶炉跡である証明ができないため憶測の域を出ないが、これほど多量な鉄滓が出土した遺構は他になく、鍛冶と無関係とは考えにくい。

出土遺物 合計405点が出土し、そのうち27点を図示した。1149は須恵器返り蓋であり、焼成時の歪みがある。1154は須恵器無台杯である。底部は丸く、体部は内湾して立ち上がり、底部と体部の境に明確な稜を有する。1157は須恵器双耳杯である。耳部は幅が広く、ヘラ状工具で丁寧に整形されている。1161は土師器鉢であり、ほぼ完存している。1165は製塙土器とした。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内湾する。体部外面には吹きこぼれの痕跡があり、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。体部内面は器表面のみ剥落している。1164・1167～1169はいずれも土師器甕である。1164は体部から口縁部にかけての平面形が梢円形を呈する。また、体部外面には煤が付着しているが、内面には見られない。1167～1169は頸部の器壁が厚く、1167・1168は頸部と体部の境に明確な段を有する。

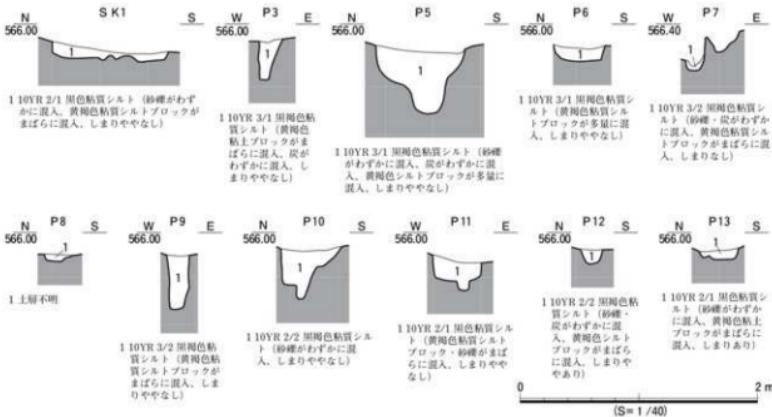


図204 S B 54遺構図(4)

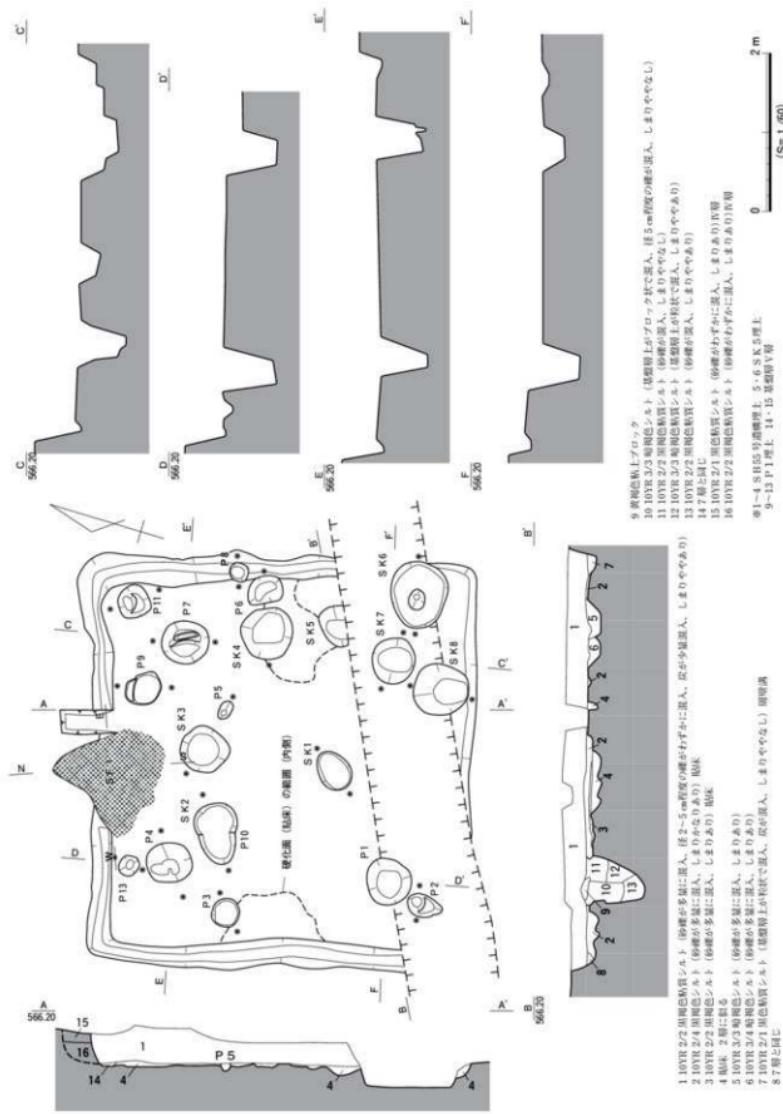


図205 S B55遺構図 (1)

所属時期 カマド跡の出土遺物は土師器甕（1163）のみであった。遺構埋土から出土した遺物は古墳5期と古代3期のものに二分され、S B54の時期は前者、S F26・27の時期が後者と考えられる。

S B55（遺構：図205～207、遺構全体図分割図⑥、遺物：図217）

検出状況 エ5～オ5グリッドの緩斜面上で検出した。今回の調査で検出した竪穴住居跡の中で最も正方形に近い平面形をもつ。掘形はほぼ完存しているが、平成13年度の試掘トレンチによつて南側が切られている。また、このトレンチの南側は、現代に近い時期の削平を受けており、すでに貼床が露出した状態であった。

堆積状況 黒色土で埋没していた。この土は基本層序のV-1層に類似しており検出は困難を極めた。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。床面ではほぼ全面で硬化面を確認し、断面で貼床を確認した。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。カマド内部には天井部が崩落したと思われる黄褐色粘土があり、その下で火床を検出した。火床は露出した袖石で囲まれた被熱部分（5層）であるが、焼きしまるような状況は見られなかった。しかし、5・6層除去後の遺構底面が黄褐色に変色し硬化していた。焚き口底面の両脇には袖石が一部露出しており、その間の火床の直上から被熱した長楕円窓を検出した。露出した袖石部分に、この長楕円窓が横枠材として置かれていた可能性がある。立柱石は燃焼室のほぼ中央に設置されており、扁平な板状の角礫が使用されていた。煙道部は掘形の外へ大きく張り出しておらず、煙出し手前の横架部分が

S B55-S F1 検出・完掘・層位

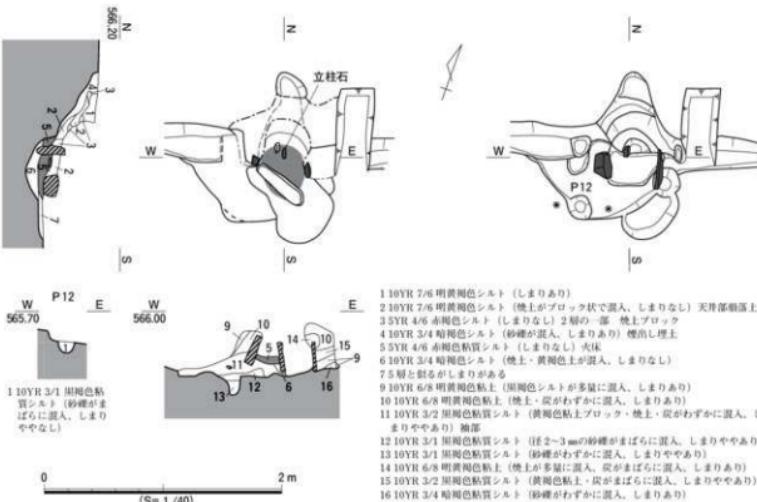


図206 S B55遺構図（2）

残存していた。袖石は扁平な角礫を用いて東西1個ずつ設置されており、燃焼部内壁を兼ねていた。袖石や立柱石はカマド跡の下部土坑に土を充填する際に立てられたと考えられる。

主柱穴 床面上から14基のピット・土坑を検出した。このうち、P 1・4・7及びSK 7が主柱穴と考えられる。SK 7以外で柱痕跡を確認した。

付属遺構 床面上で7基の土坑と周壁溝を検出した。周壁溝はカマド跡付近と南壁際を除いて確認できた。カマド下部土坑と周壁溝との関係から、カマド設置後に周壁溝が掘削されている。

出土遺物 合計73点が出土し、そのうち11点を図示した。1179は須恵器高环であり、口縁部は外反気味で、端部は尖る。1182～1185は土師器甕である。いずれも体部外面のハケ調整が細かく、頸部と体部外面の境に板状工具による強いナデを施す。なお、菅玉は埋土中から出土した。

所属時期 P 4出土遺物(1180)や埋土中の出土遺物から、古墳4期と考える。

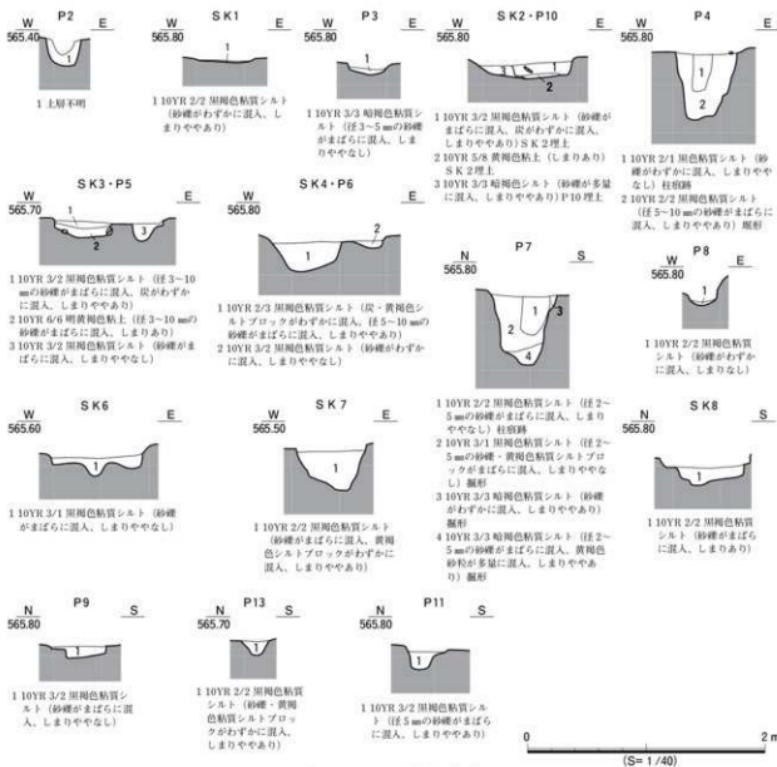


図207 S B 55構造図(3)

S B 56 (遺構: 図208～210、遺構全体図分割図②～③、遺物: 図218)

検出状況 ウ2～3グリッドの緩斜面上で検出した。この付近に密集する遺構では最も古く、掘形は北壁及び東壁の一部を除いてほとんど残存していなかった。ただし周壁溝がめぐるため、掘

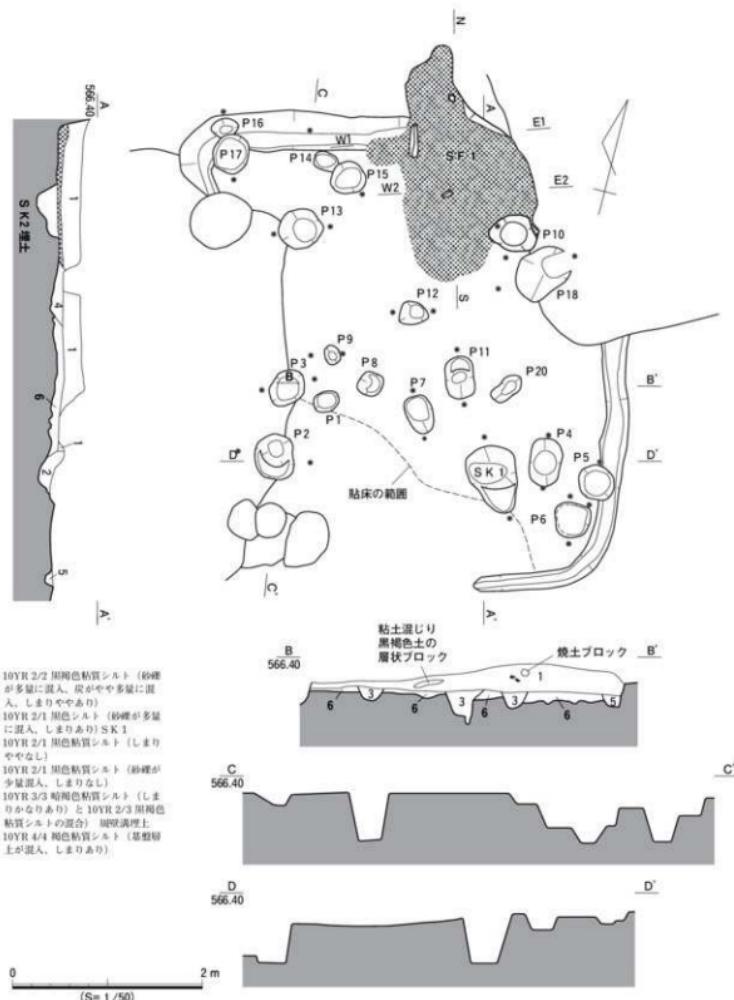


図208 S B 56遺構図 (1)

S B56-S F 1 完掘状況・層位

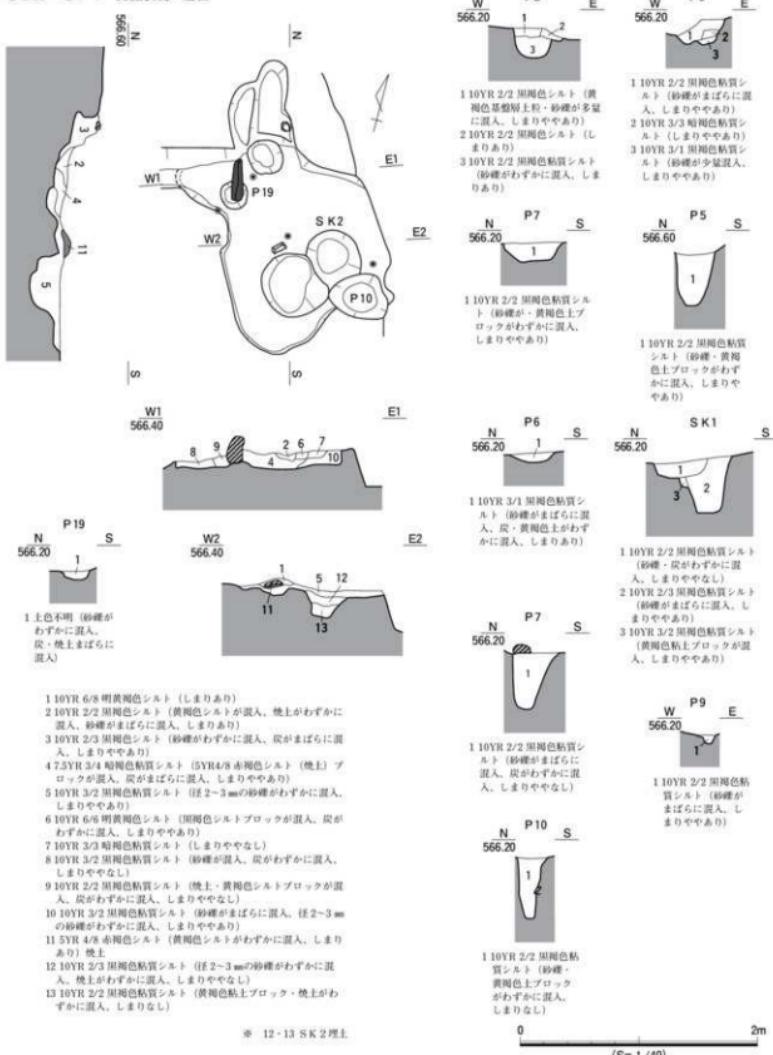


図209 S B56造構図(2)

形の規模は推測することができた。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。

床面状況 残存部分はほぼ水平である。ほぼ全面で硬化面を検出し、断面で貼床であることを確認した。南側の床面に貼床がないのは、古代の竪穴住居跡であるS B25によって削平されたためと考えられる。

カマド跡 遺構掘形の北壁に接して検出した。中心からやや東側に寄っている。カマド構造材の広がりはほとんどなく、カマドに関する堆積は原位置を留めていると思われるが、構造が分からぬほど破壊されていた。ただし、人為的に立てられたカマドの袖石と思われる扁平な円礫を検出した。煙道部は掘形の外に大きく張り出しており、S B55に類似している。また、下部土坑やカマド手前の土坑の存在もS B55と同様に存在する。なお、カマド手前の土坑には下部土坑と同じ土が堆積しており、カマドが使用されていた当時に開口していなかった可能性がある。

主柱穴 床面上から20基のピットを検出した。このうちP 2・10・13及びSK 1が主柱穴と考えられる。

付属遺構 床面上から2基の土坑と周壁溝を検出した。カマド跡の掘形（下部土坑）と周壁溝の先後関係は不明である。

出土遺物 合計58点が出土し、そのうち5点を図示した。1187は須恵器無台坏であり、口縁部内外面にタールが付着していることから、灯明具としての用途が想定できる。1188は須恵器脚付碗とした。胎土中に白色粒を多く含み、脚柱部と脚端部の境に明確な段を有する。

所属時期 多くの遺構によって削平されているため、多時期の遺物が混在するが、埋土中の須恵器から、古墳5期と考えられる。

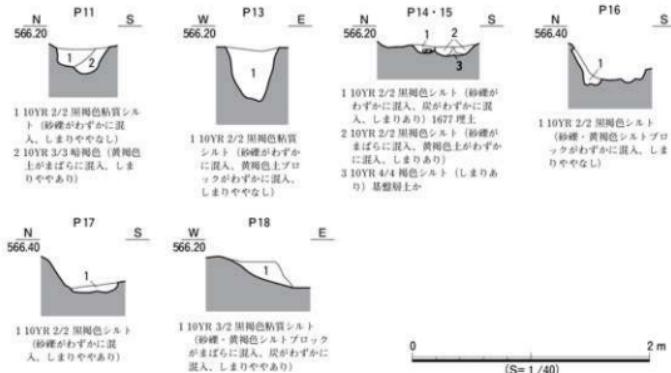


図210 S B56遺構図（3）

S B57 (遺構: 図211、遺構全体図分割図26、遺物: 図218)

検出状況 シース15グリッドにて、S V1の底面で検出した。

堆積状況 単層であり、目立った特徴はない。

床面状況 部分的に凹凸が見られ、水平ではない。断面観察の結果、やや硬化した堆積層が埋土下層で確認でき、この層が底面の整地土及び貼床と考えられる。

炉跡 整地土層の上面で床面の精査を行っていないため、検出できなかった可能性がある。

主柱穴 床面上で6基のビットを検出した。しかし、適当な位置に配置されるビットが存在しないため、主柱穴は判断できなかった。

出土遺物 合計103点が出土し、そのうち3点を図示した。1192は土師器高環であり、脚部がハの字状に開き、穿孔を有しない。1194は土師器甕であり、口縁部外面に擬凹線を有する。

所属時期 出土遺物全体の様相から、古墳1期と考えられる。

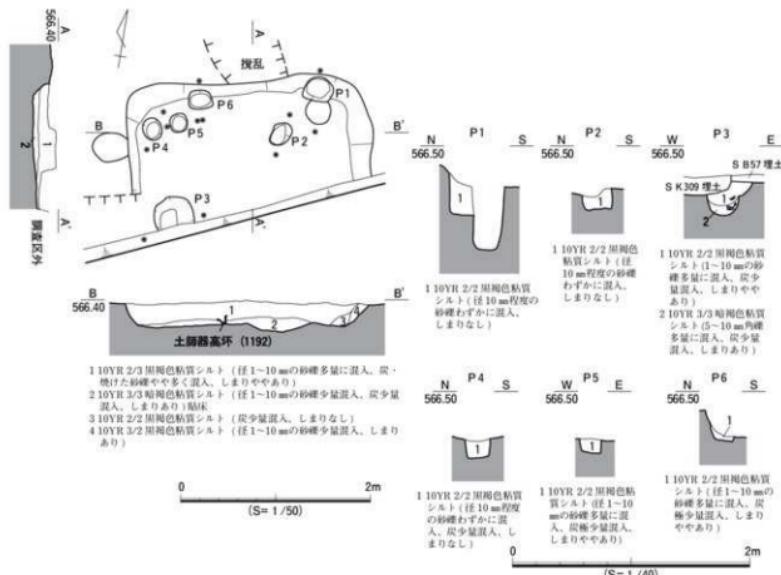


図211 S B57遺構図

2 土坑 (遺構: 図212、遺物: 図218)

今回の調査で検出した遺構の大半は古代に属し、それ以外の時期の遺構は遺物が出土しない限り時期の限定が困難である。今回の調査で出土遺物から弥生・古墳時代と判断できる遺構は、竪穴住居跡床面上で検出した遺構を除けば、S K18・260・261の3基のみである。

S K18からは合計79点の土器が出土し、そのうち5点を図示した。1201は土師器高環であり、脚部

はハの字状に開き、脚柱部と脚裾部の境には緩やかな稜がある。1205は土師器壺であり、体部内外面に条痕が施されている。1204は尖底気味の土師器壺である。本遺構の時期は、出土遺物から古墳1期と考えられる。SK260からは合計47点の土器が出土し、そのうち土師器高坏1点を図示した。SK261は北側半分をSB54に切られ、埋土中程に焼土ブロックが多量に混入する堆積を確認した。出土遺物は合計26点の土器が出土し、そのうち2点を図示した。いずれも土師器壺であり、1206は器壁が厚く、体部外面に煤が付着している。1207は頸部と体部外面の境に板状工具による強いナデを施されている。SK260・261の時期は出土遺物から古墳時代と考えられるが、時期の細分はできない。

3 その他の遺構、包含層出土遺物（図219）

1216・1217は須恵器長頸壺で、同一個体の可能性が高い。体部と頸部外面にそれぞれ沈線が2条施されている。1218は須恵器壺である。体部内面及び土器の削れた面に漆が付着しているが、注口部には漆が見られないことから、腹を割るまで注口部に栓があったと思われる。なお、削れた面が研磨されており、研磨面にも漆がわずかに付着している。1225は土師器壺であり、口縁部外面に擬回線があり、頸部は外面とともに屈曲する。また、体部内面はケズリ調整が施されている。1226は土師器高坏である。穿孔は1孔1組3穿孔と思われ、脚柱部と脚裾部外面の境に段を有する。1227は弥生土器壺であり、底部が突出し、体部内面に煤が付着している。1230は石包丁であり、表裏面に粗い線状痕が残る。

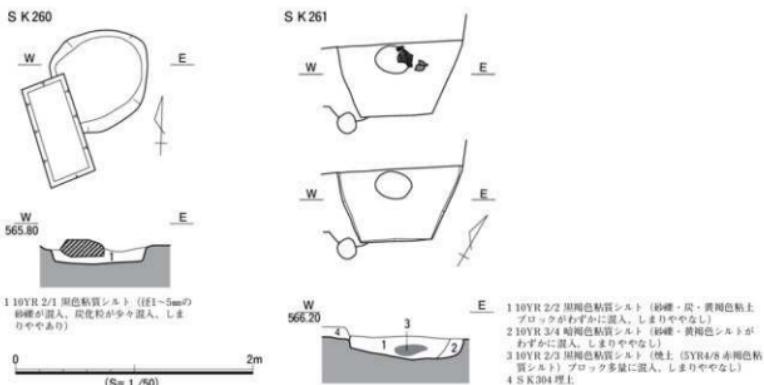
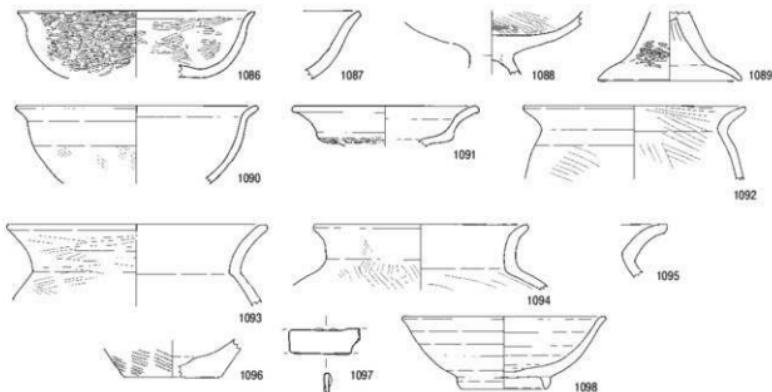
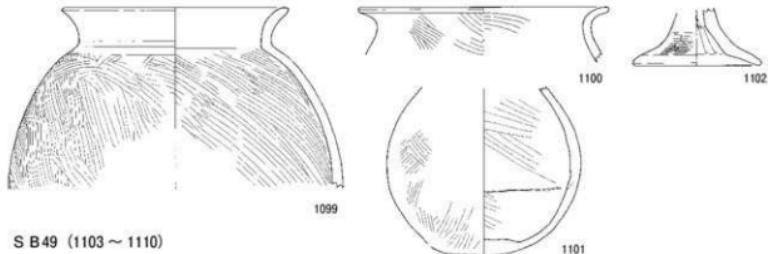


図212 土坑遺構図

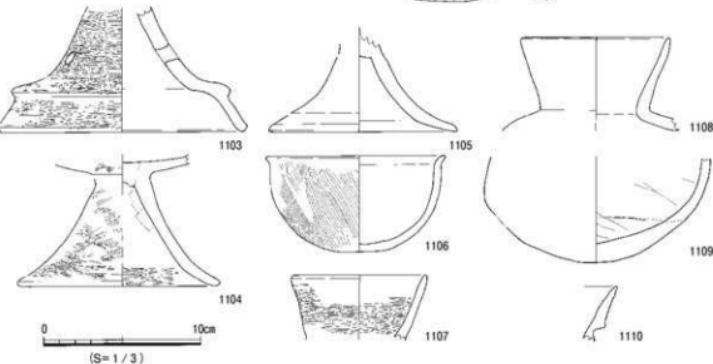
S B46 (1086 ~ 1098)



S B47 (1099 ~ 1102)



S B49 (1103 ~ 1110)



0
10cm
(S = 1 / 3)

図213 出土遺物実測図（古墳：造構1）

S B48 (1111 ~ 1131)

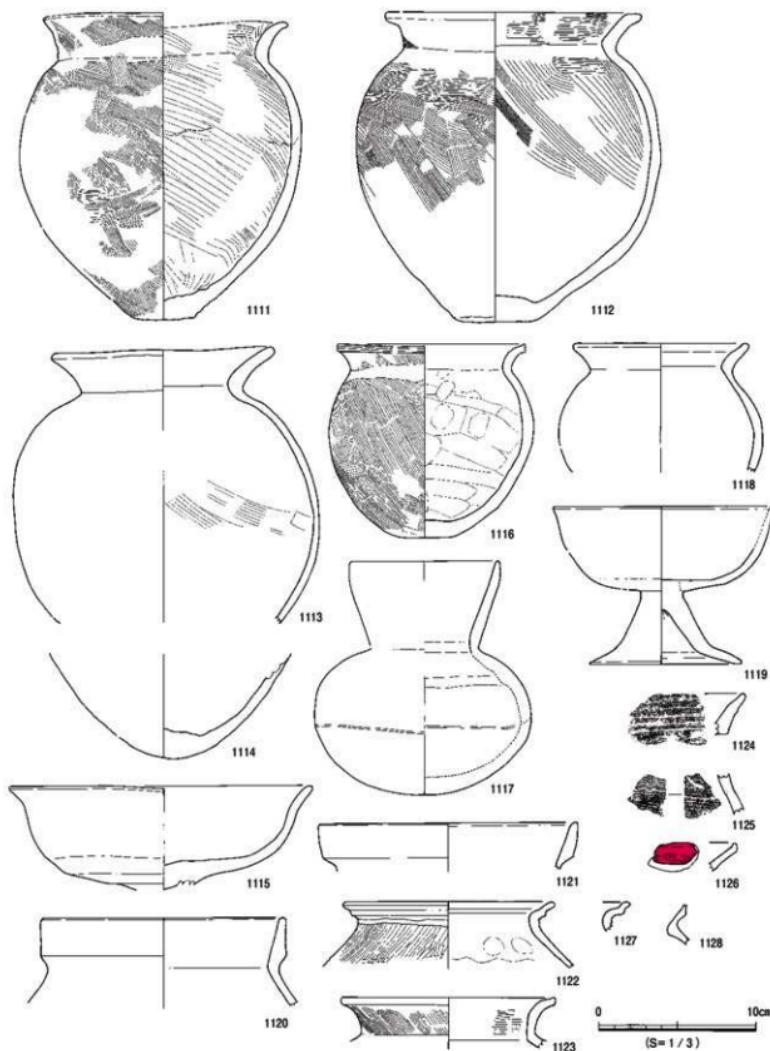
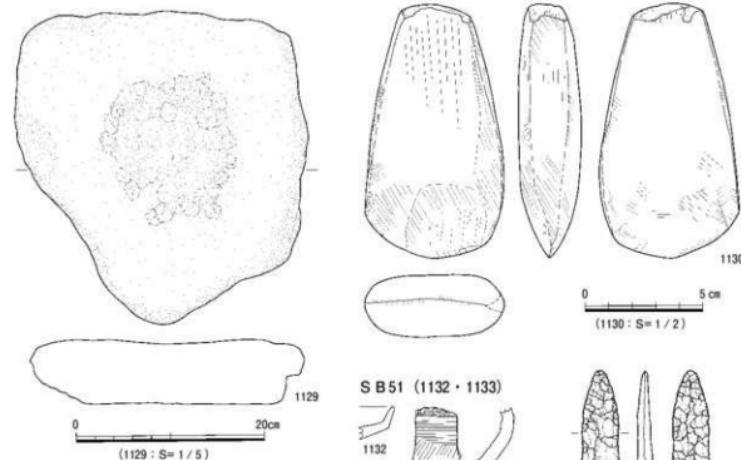


図214 出土遺物実測図（古墳：遺構2）

S B48 (1111 ~ 1131)



S B50 (1134 ~ 1136)



S B53 (1137 ~ 1148)

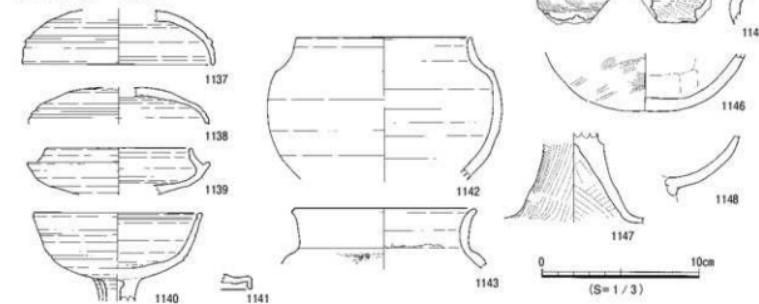


図215 出土遺物実測図（古墳：造構3）

S B 54 (1149 ~ 1175)

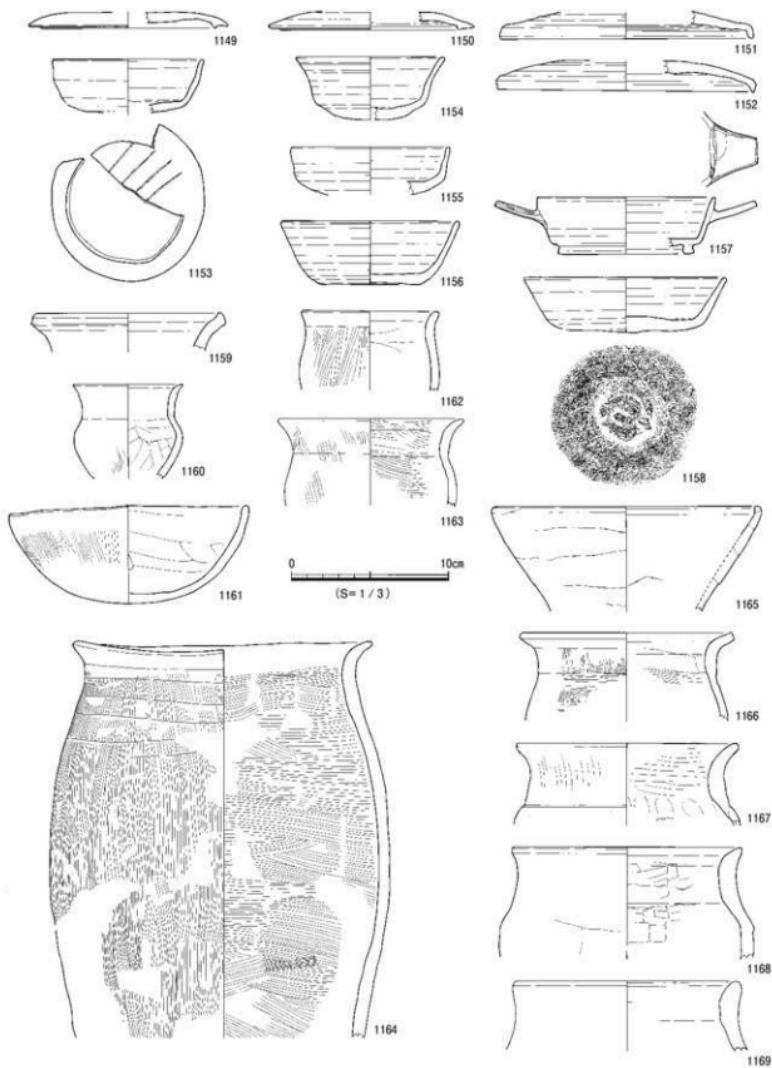
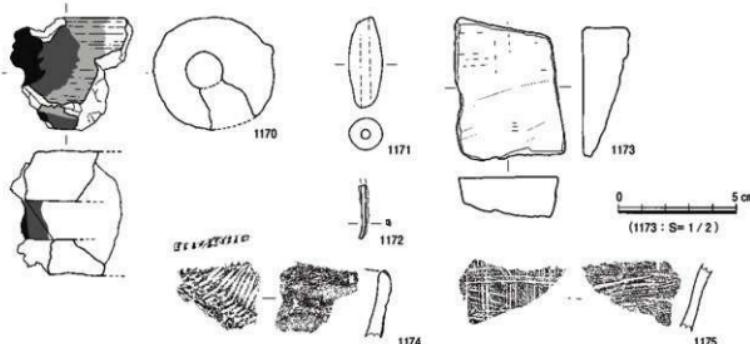


図216 出土遺物実測図（古墳：遺構 4）

S B54 (1149 ~ 1175)



S B55 (1176 ~ 1186)

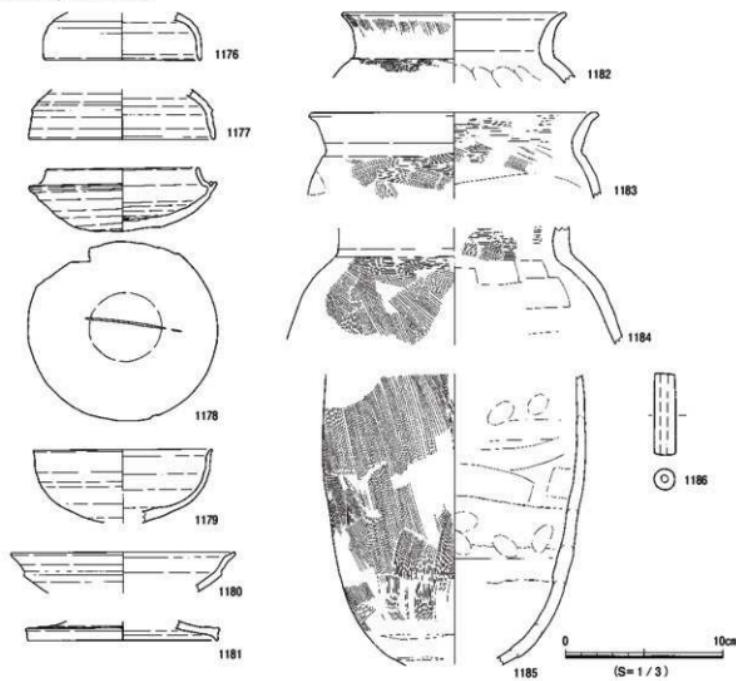


図217 出土遺物実測図（古墳：造構5）

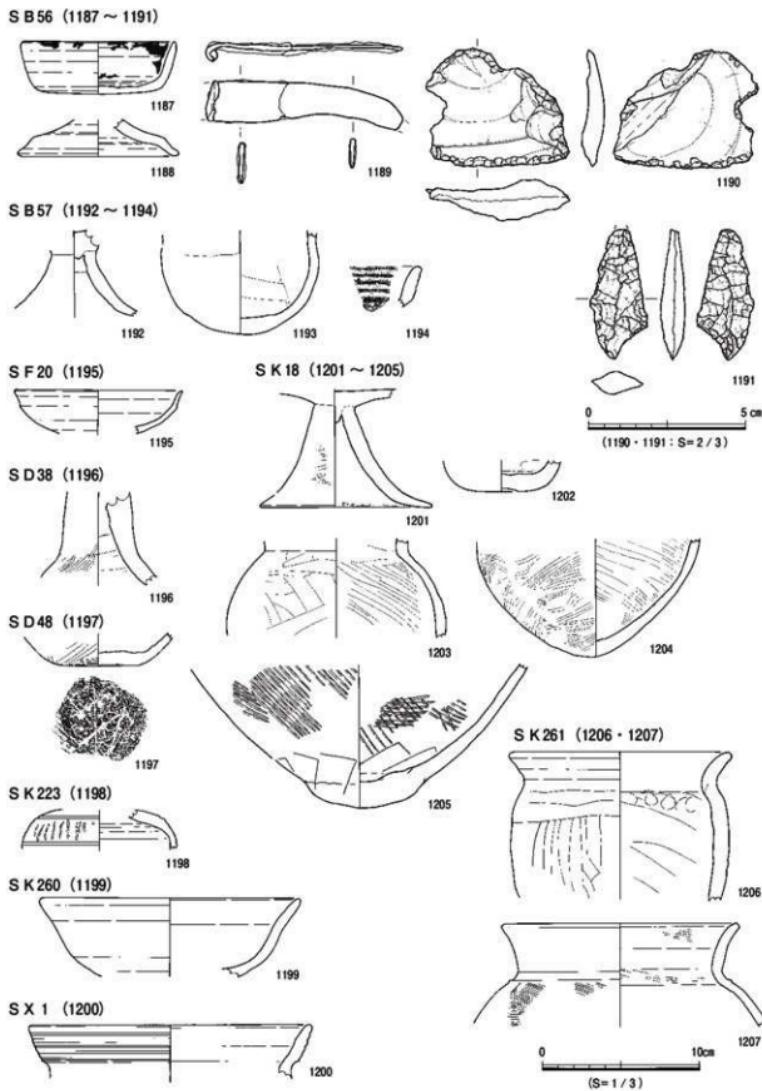


図218 出土遺物実測図（古墳：遺構 6）

包含層 (1208 ~ 1231)

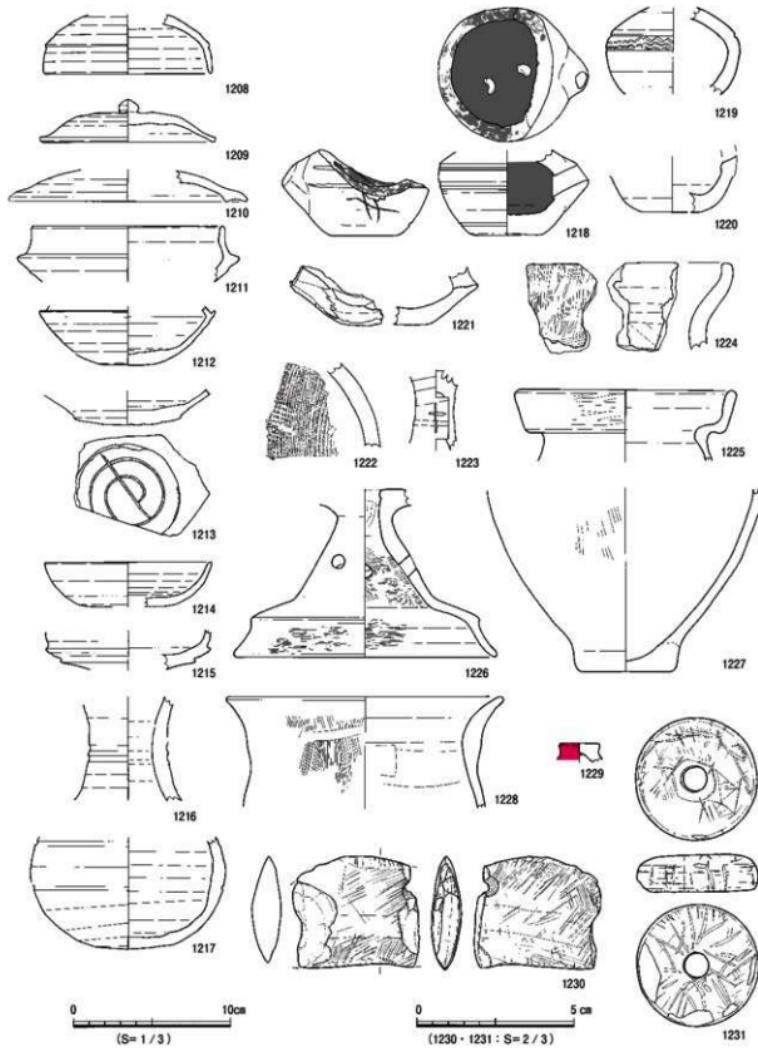


図219 出土遺物実測図（古墳：包含層）

第7節 繩文時代の遺構と遺物

1 検出した遺構（遺構：図220～223、遺物：図224・225）

縄文時代の遺構を明確に検出したのは、第2調査面の調査であった。本章第2節で述べたように、平成14年度はIV層中の比較的安定した黄褐色土層上面で、16年度はV-2・3層上面で第2調査面の調査を行ったが、両者に隣接する場所の第1調査面でも縄文時代と考えられる土坑を検出しており、上面での検出漏れであった可能性があることは否めない。IV層自体が場所によって異なる扇状地性堆積層であり、縄文時代の包含層であるIV層と遺構面となっているIV層を明確にできなかった点が、この混乱を招いたものと思われる。また、縄文時代とした遺構埋土が、土の縮まり具合や炭化物の混入などを除けばIV層に極めて近いものであることも検出が困難であった要因の一つである。極めて均質な黒色土であるV-1層の上面でも縄文時代土坑の検出は容易ではなかった。これは、周囲の土で自然埋没したためか、長い年月により土壤化が進んだ結果と思われる。裏をかえせば、第一調査面でこのような特徴を持つ埋土の土坑は、縄文時代の遺構であった可能性が高いといえる。そこで、残存状態が良好で、縄文土器が出土したSK279・280を基準とし、以下の観点から縄文時代と考えられる土坑を抽出した。

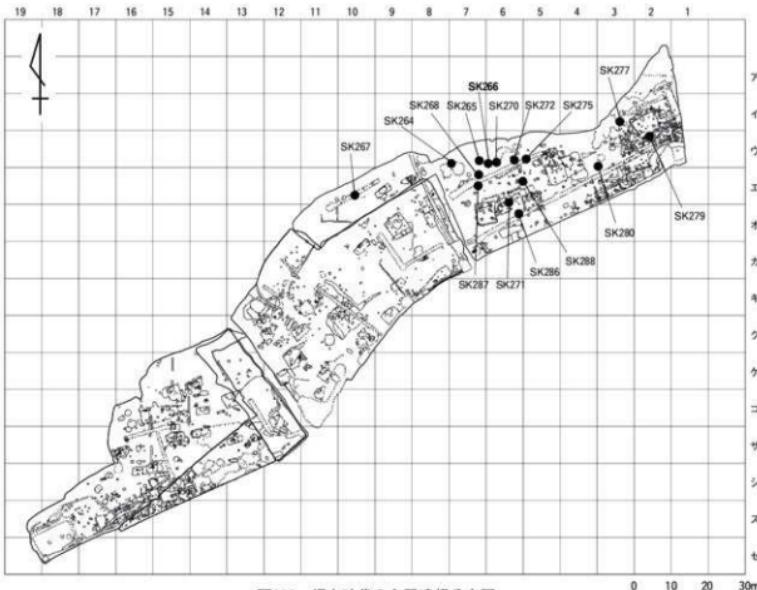


図220 縄文時代の主要遺構分布図

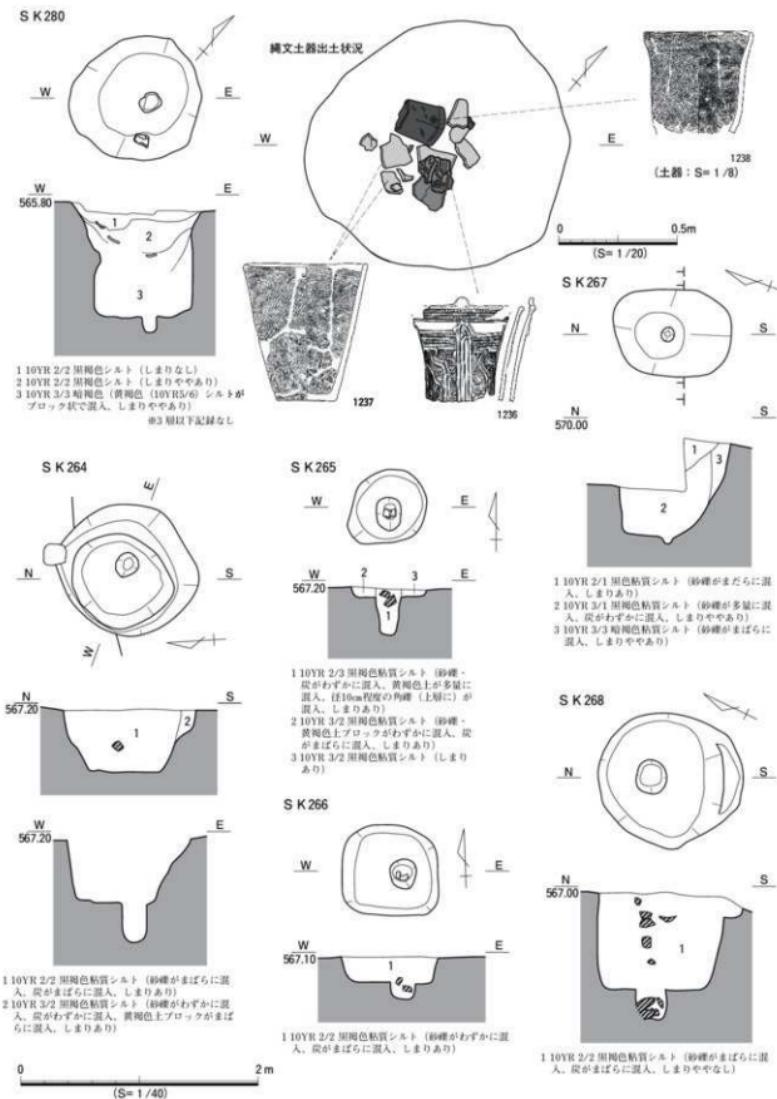


図221 土坑遺構図(1)

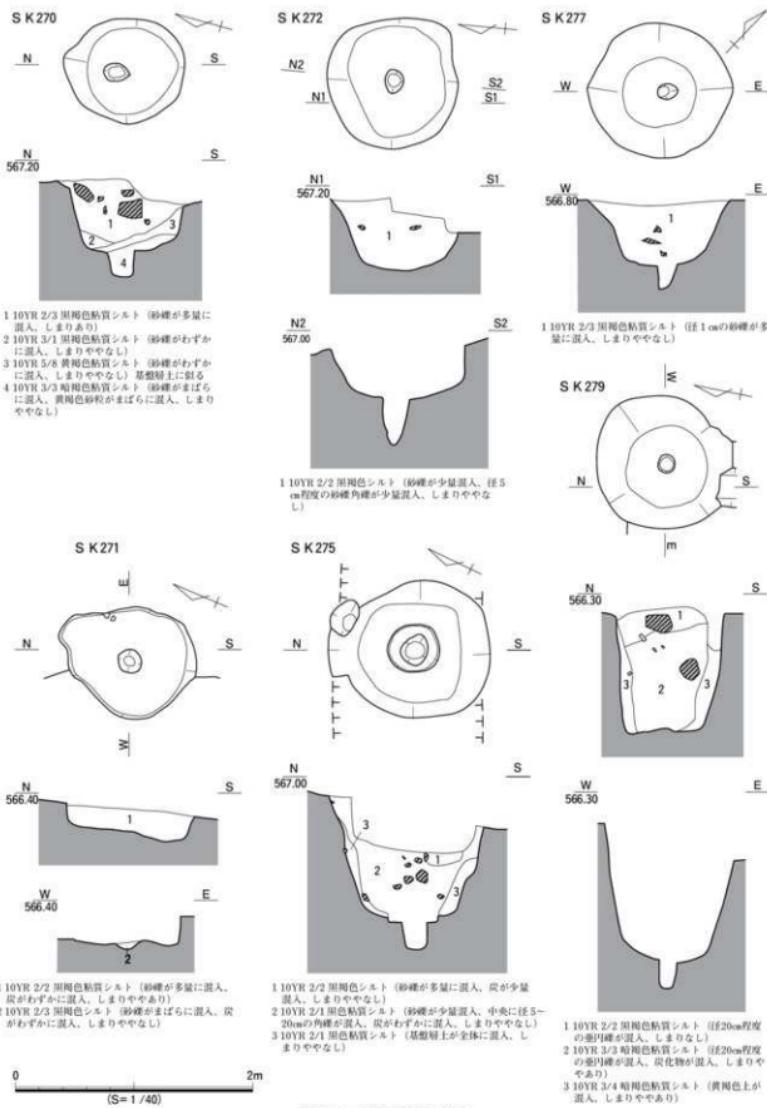


図222 土坑遺構図(2)

- ①縄文土器が出土している。
- ②IV層に類似する埋土である。
- ③径1m程度の直径を持ち、底面に小穴を有する。
- ④古代等の土坑と比較して掘形が深い。

この結果、21基が②・③の条件に該当した。③の特徴は縄文時代において「落とし穴状遺構」と分類される遺構の一特徴である。④については、浅い遺構の場合でも近年の造成によって削平されたものや第2調査面の調査で上面を下げすぎたものはここに含めた。また、③を満たさないが、古代の遺構とは様相が異なるSK287・288のような土坑も存在する。平成14年度・16年度の第2調査面で検出した遺構の一部も②の条件を基準に抽出し、全部で6基見られた。以下に、これらの土坑について記載する。

遺構分布 平成16年度北地点において分布する。SK264～266・270・272・275は等高線に沿って直線的に並んでいるが、他の土坑は散在している(図220)。

堆積状況 多くの土坑が、底面の小穴を含めて同じ土で埋没しているが、一部複雑な堆積状況を呈するものがある。SK280は調査時の誤認により2層以下の分層が不明であるが、内部から出土した完形に近い土器はこの2層の底面から出土した。土坑の中程まで埋まつた段階で土器を投入したか、埋没した土を掘り返した可能性がある。SK270は2～4層まで埋まつた段

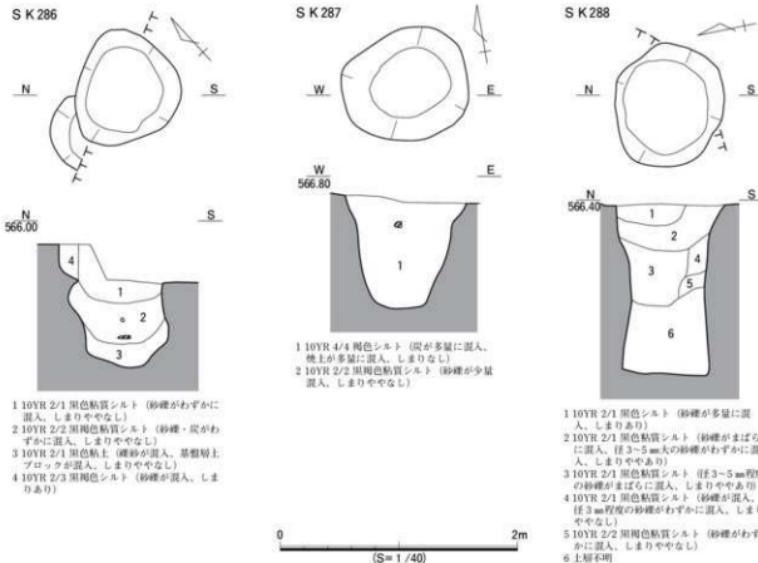


図223 土坑遺構図(3)

階で人為的に埋め戻している。SK275・279・288は、明らかに掘り返した痕跡がある。

出土遺物 繩文時代の遺構からは合計97点が出土し、そのうち8点を図示した。1232と1233は同一個体と思われる粗製の深鉢である。体部にはL-R縄文を施し、口縁端部に粘土帯を貼り付け、外側に引き出している。また口縁部の一箇所に突起を有し、口縁部内面に一条の沈線が巡る。1234は磨石である。扁平な梢円形の円礫を素材とし、擦痕は短軸に平行する。1235は短圓形の打製石斧であり、礫から剥出した横長剥片を素材とする。1236～1239はSK280出土の深鉢である。1236は精製土器であり、施文は半截竹管による半隆起線を主体とする。4単位の縦の平行半隆起線により区画し、その内部は半隆起線と格子状の沈線を充填する。なお、口縁部に突起が一つ残り、土器の削れた箇所から炭化物が吹き出している。1237～1239は粗製土器で、1238と1239は同一個体と思われる。1237は口縁部付近に補修孔がある。1238は体部にL-R縄文を施し、口縁部に無文帯と押圧縄文2条が見られる。

所属時期 時期が判断できる土器が出土したのはSK279・280のみであり、いずれも中期前葉に比定される。

2 包含層出土遺物（図226～228）

1241は微隆起線を有する飛驒の在地系土器であり、後期前半に比定される。1243～1245は石錐であり、いずれも側縁の細部調整は表裏を数回回転させて実施している。側縁の形状は、1243が外湾し、1244・1245が直線的である。また、1243は表面基部右側縁の剥離がとても細かい。1246・1247は石錐であるが、刃部の摩滅はほとんど見られない。1247は基部側縁がわずかに膨らむ形状で、裏面に自然面が残る。1248は石匙である。縦長剥片を素材としており、右刃部は裏面からの作出が顕著である。1249はスクレイバーであり、縦長剥片を素材とし、左側縁は裏面から表面へと剥離を施している。1250はRFであり、一次剥離の際に生じた鋭い縁辺部を表面のみから成形している。1251は敲石であり、一側縁に敲打痕が広がる。1252～1257は打製石斧である。1252～1254・1256・1257は円礫から剥出した横長剥片を使用しているが、1255のみ細長い円礫をそのまま使用しており、刃部の調整は確認できない。1253の刃部左側は磨滅が顕著であり、刃縁に対してほぼ垂直に擦痕が延びている。1255は側縁のみ成形し、刃部の調整は見られない。また、刃部には、刃縁に対してほぼ垂直に使用痕が伸びている。

S K279 (1232 ~ 1234)

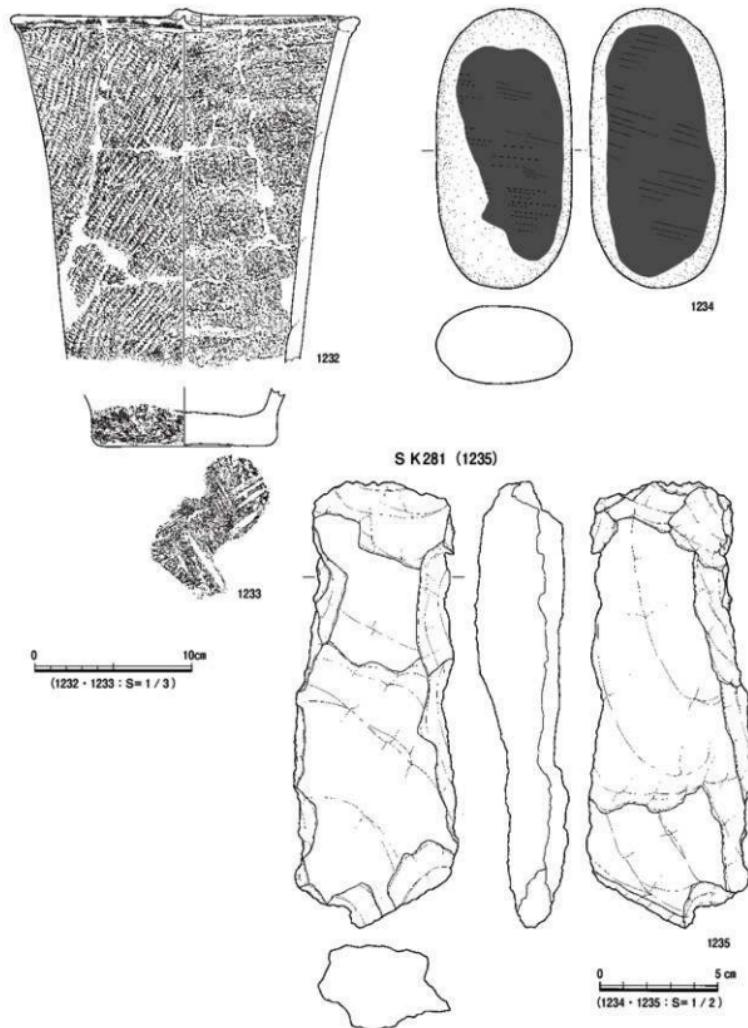


図224 出土遺物実測図（縄文：遺構1）

S K 280 (1236 ~ 1239)

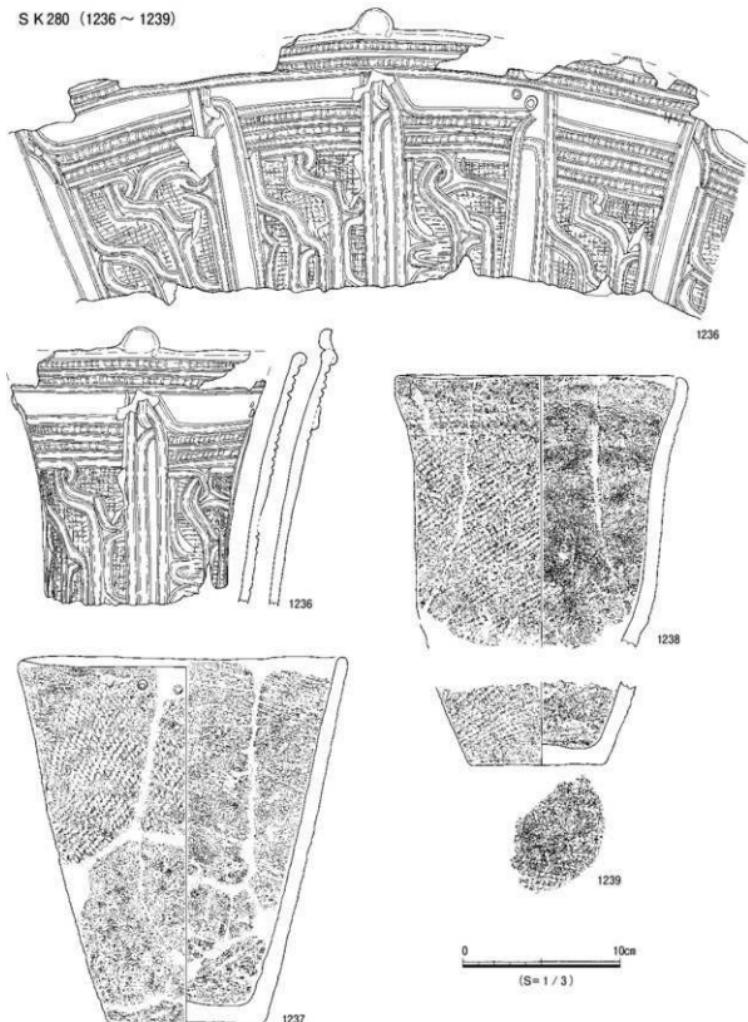


図225 出土遺物実測図（縄文：遺構 2）

包含層 (1240 ~ 1260)

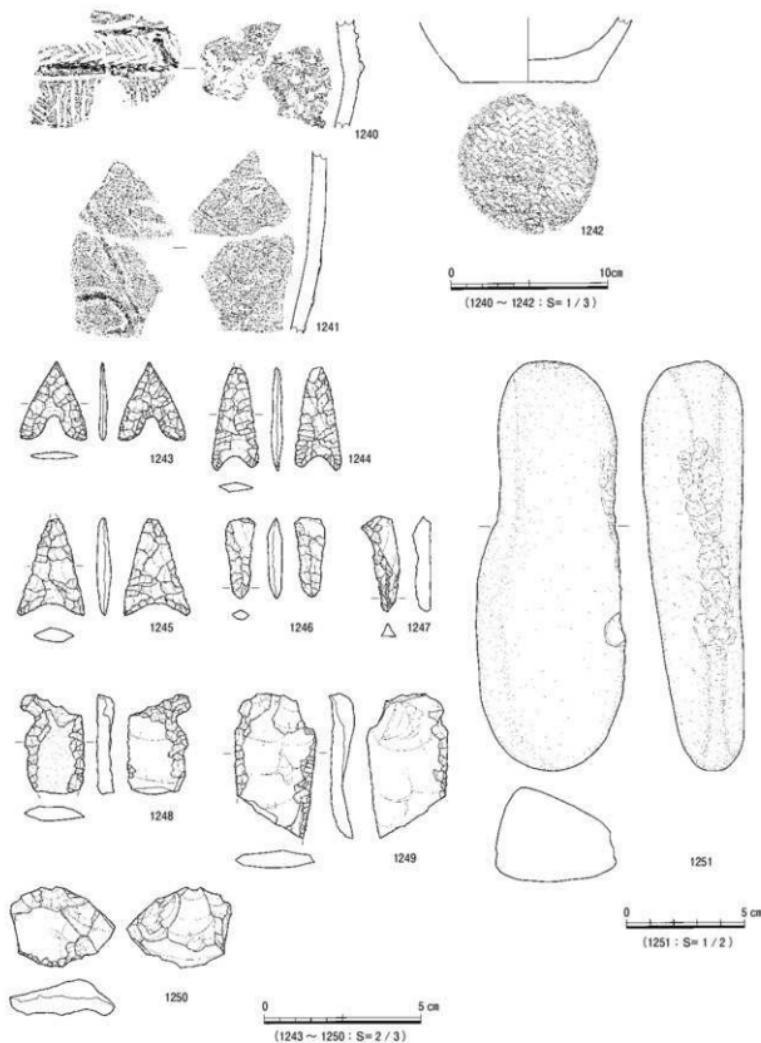


図226 出土遺物実測図 (縄文：包含層 1)

包含層 (1240 ~ 1260)

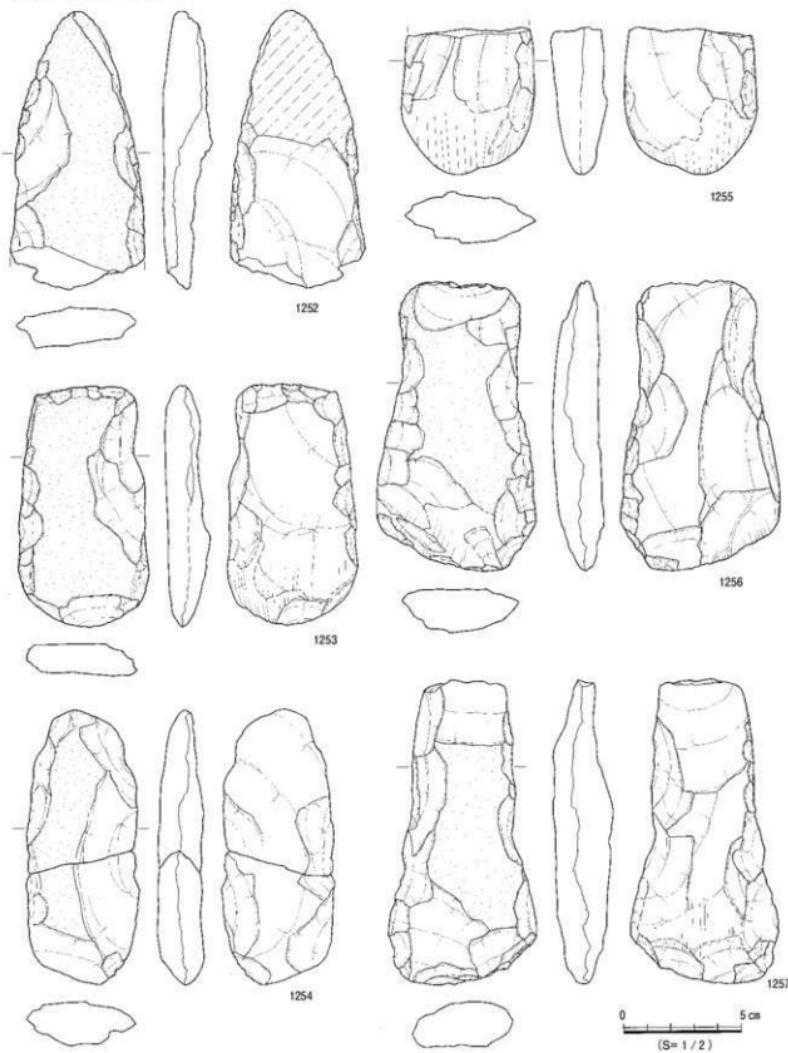


図227 出土遺物実測図（縄文：包含層2）

包含層 (1240 ~ 1260)

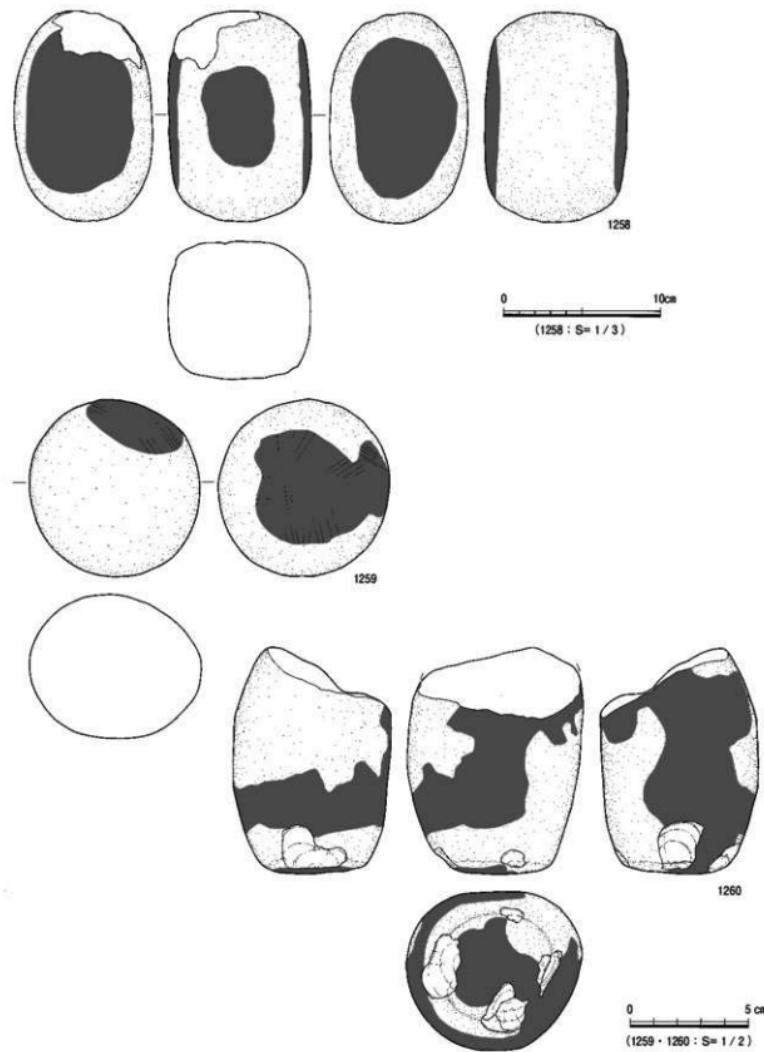


図228 出土遺物実測図 (縦文: 包含層 3)

報告書抄録

ふりがな	のうちいせきびいちく					
書名	野内遺跡B地区					
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第111集					
編著者名	小野木学、長谷川幸志					
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel.058-237-8550					
発行年月日	西暦2009年3月1日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 調査面積	調査原因
のうちいせきびいちく 野内遺跡B地区	岐阜県 高山市 上切町	21203	09624	36°09'57" 13°13'44"	20020510 ~ 20021206 20040511 ~ 20041217 20050506 ~ 20050808	中部縦貫自動 車道建設事業 に伴う
6,600m ²						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野内遺跡B地区	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代 室町時代 江戸時代	竪穴居跡 鍛冶関連遺構 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑	57軒 20基 4棟 56条 350基	縄文土器 弥生土器・土師器 須恵器 灰釉陶器 石器・石製品 金属製品	縄文時代中期前葉から平安時代前半までの竪穴居跡と平安時代の竪穴居跡と平安時代前半の鍛冶関連遺構などを検出。
要約	野内遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡である。今回の調査における特筆すべき点は、平安時代前半における村落の一様相が推定できたことである。この時期の出土遺物として縁碌陶器、双耳环、耳皿、火舎などの特殊品、定型鏡、転用鏡、刀子、腰帶具などの文官事務や官人に関わる遺物がある。さらに、「定主」、「定」という人名を示す墨書き器の存在、官営鍛冶工房の特徴を有する鍛冶関連遺構の出現、条里地割による強い規制を受けた居住域の存在などから、平安時代前半における村落の開発は、官衙（公的施設）などの支配下において実施された可能性がある。また、当遺跡における鉄製品の生産開始や、当遺跡から約1km圏内に展開する灰釉陶器窯の操業開始、周辺の条里地割の施工などは、いずれも9世紀代における一連の新規開発事業である。その時期には、尾張や美濃地方からの搬入土器量が多く、窯業や鍛冶などの手工業生産を含めた地域開発のために、官衙（公的施設）などが主体となって工人を勧誘し、村落形成が広域に展開した可能性がある。					

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第111集

野内遺跡B地区

(第1分冊)

2009年3月1日

編集・発行 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社 太洋社